

特 116

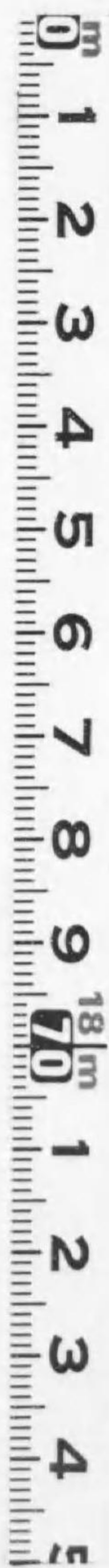
739

正十五年三月發行

校友會誌

第拾壹號

日本大學中學校々友會



始



持116
739

校友會誌 第拾壹號

本校職員
第八回卒業生
第五學年修學旅行隊
第四學年修學旅行隊

講話
學習と體得
慎思篤行
訓養の必要
思ひ出づるまゝに

學校記事
第八回卒業證書授與式
陸上大運動會

修學旅行記事
伊香保・榛名地方修學旅行
日光・中禪寺地方修學旅行
甲信地方修學旅行
東北地方修學旅行
西地方修學旅行

第一學年
第二學年
第三學年
第四學年
第五學年

荒川五郎
平沼一助
山岡萬之助
伊豆凡夫
陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

陸軍少將
伊田信雄

露光量違いの為重複撮影



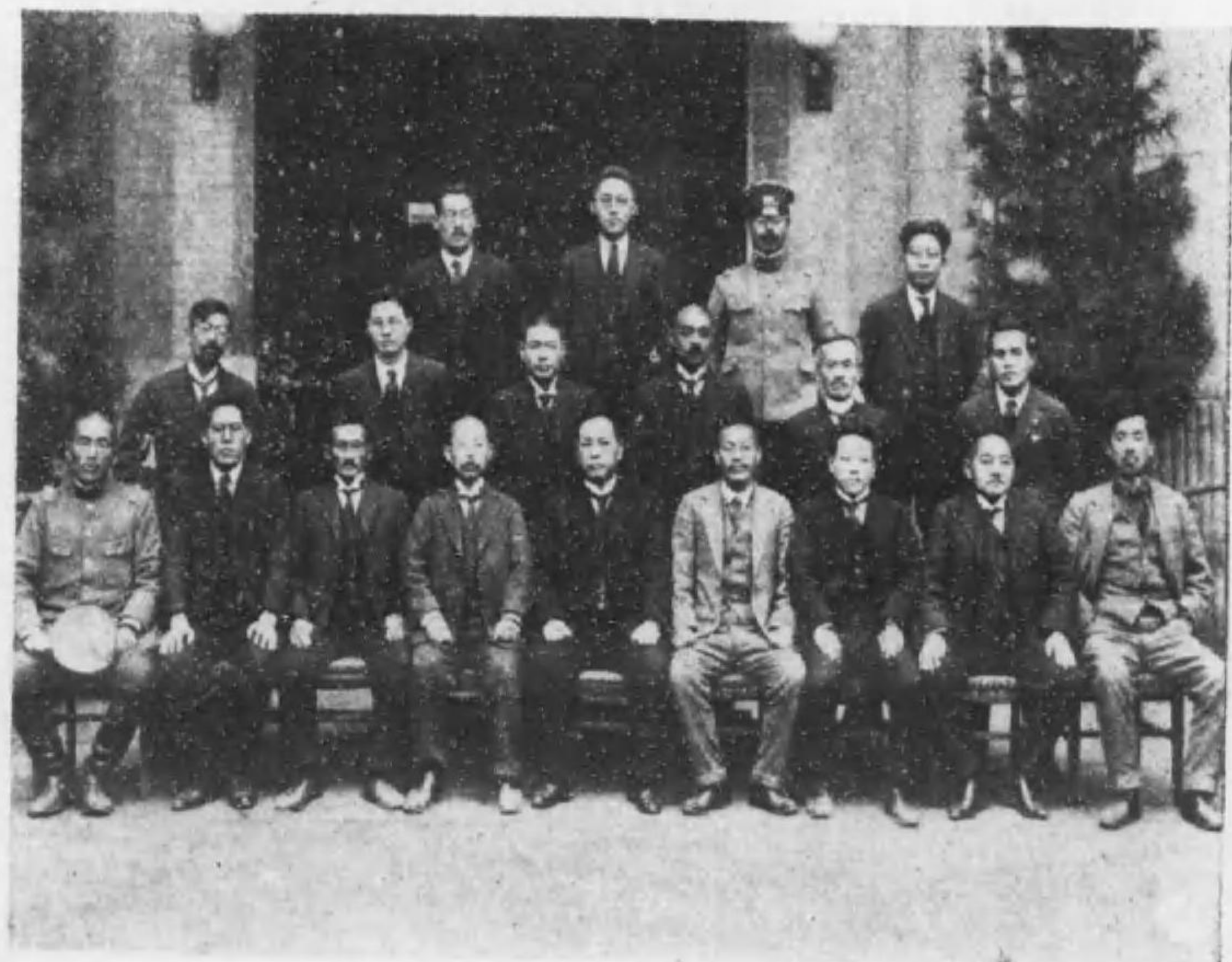
長校川荒



長總沼平



長學岡山



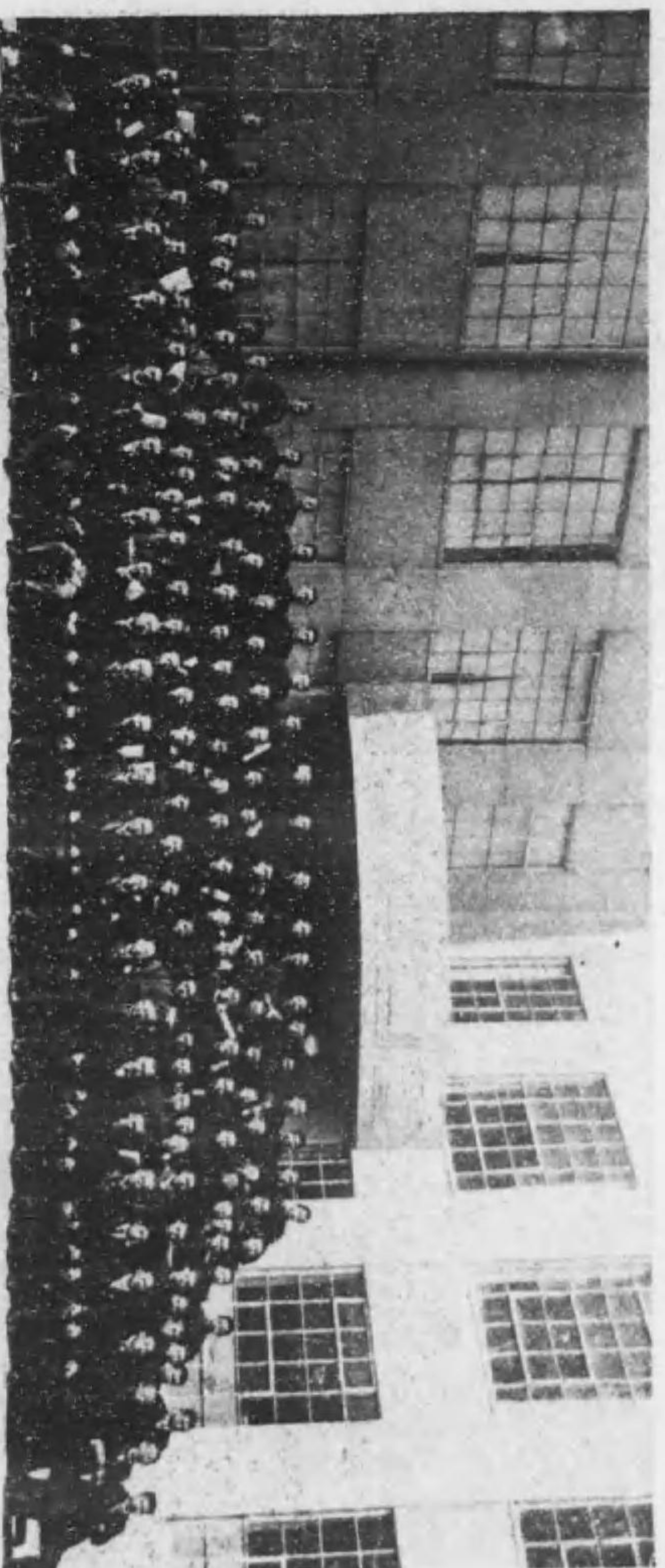
(月一年五十正大) 員職校本

校友會記事

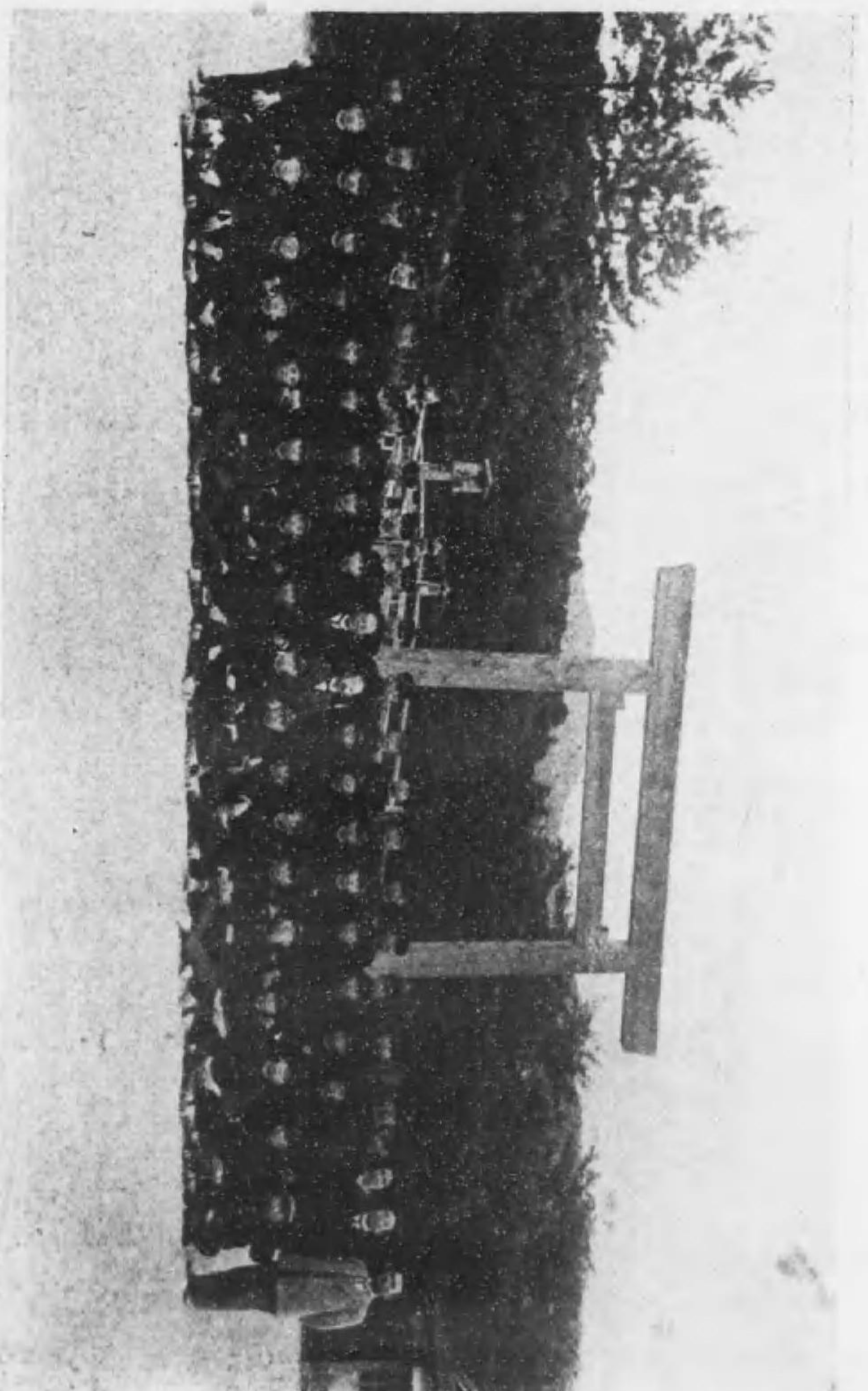
西武大進學部
 一、學部
 二、辯論部
 三、演劇部
 四、音樂部
 五、美術部
 六、劍道部
 七、柔道部
 八、射撃部
 九、水泳部
 十、スキー部
 十一、野球部
 十二、足球部
 十三、水球部
 十四、水泳部
 十五、會社部

九、野球部
 十、足球部
 十一、野球部
 十二、足球部
 十三、水球部
 十四、水泳部
 十五、會社部

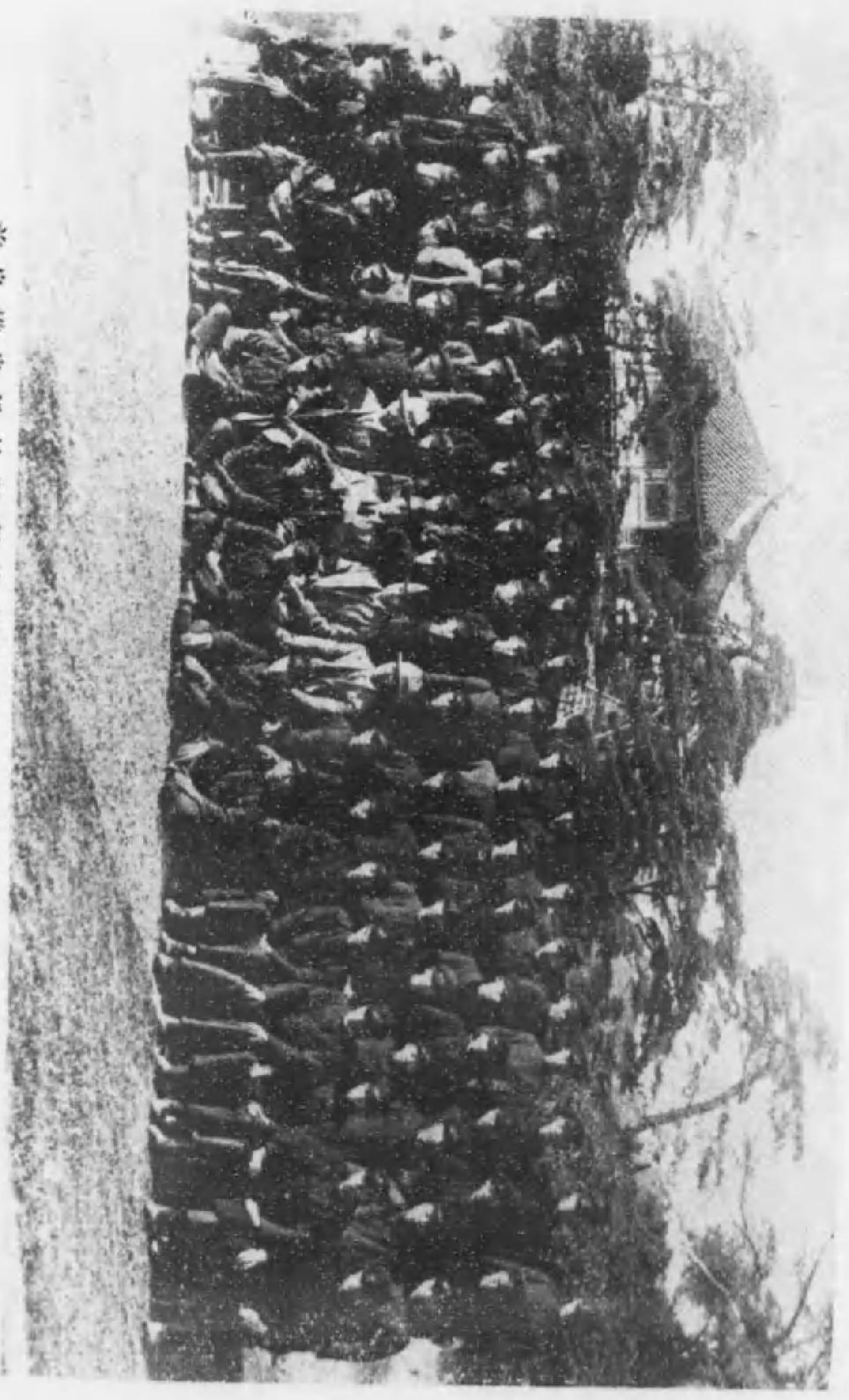
同窓生たより
 日本大學進學部
 第一回卒業生 櫻山門五子
 第二回卒業生 中田秀治郎
 第三回卒業生 竹家進
 第四回卒業生 富岡博
 第五回卒業生 長尾六郎
 第六回卒業生 松本高工だより
 第七回卒業生 桐生高工だより
 第八回卒業生 現職員一覽
 第九回卒業生 第五學年生徒氏名
 編輯部



第 八 回 卒 業 生 (大正十四年三月)



大正十四年四月十日 第五年 修學旅行 於伊勢大前



前島準島松於隊行旅學修年學四第月十年四十二大

講

話

學習と心得
 慎思篤行
 訓辭
 修養の必要
 思ひ出づるまゝに

校友會長 荒川五郎
 日本大學總長 平沼麟一郎
 日本大學學長 山岡萬之助
 陸軍少將 伊豆凡夫
 競技部 導 奥田信雄

學習と心得

前島準島松

學習と體得

會長 荒川 五郎

凡そ學習とは、其の事を知り、其の理を解せば、それで可なるが如く思ふものもあるが、それは皮想の見である、之を善く己の精神を透して諒得することが必要で、それには屢次之を腦裡に反覆せなくてはならない。

修養とは之を解知するのみでは、決して役に立たない、理解し諒得したる上に、尙も己の身體を徹して之を心に收め容るゝの心掛が大切である、即ち體驗し體得することを要する。

隨て之を指導する者も、自らの行ひを以て彼の行を導き、自らの人格を以て彼の人格を作るの心掛あるを要すると共に、指導せらるゝ者も常に之を實踐し體得することを旨とせなくてはならない。

然るに今日の所謂學問修養なるものは、只教壇の説明を理解すれば足るものゝやうに心得、甚しきは之を耳より聞き能く理解もせずして、只之を口に述べれば可なるやうに思ふて居る者もある。

五尺の身を通して體驗し體得しなくてはならぬものを、只之を耳に聴き口に述べる、即ち耳と口、僅か三寸の間に止める、何ぞ淺薄では無いか、輕薄の人とは實に此口耳三寸の徒を指すのであらう。

五尺の全身を徹してこそ漸く厚くなり重くなるので、そこで初めて重厚な精神を修養し得るのである。然るに口耳三寸の學是れ即ち眞に顔面の一部のうわすべりである、表面半面の素通りである、斯やうな有様では大成し得ないのが寧ろ當然ではあるまいか。

習の字は親鳥が羽ばたきして飛ぶを見て、雛鳥が之に倣ひ飛べんと頻りに羽を動かす息のきれるまでもやまぬ義である、即ちしはく、練りかえして漸次に肆ひ熟れることである、善く慣れ熟れば滯りすらくと出来るに至る、習ひ得て自然にもち前の性質のやうにもなり得る、これが即ち「習ひ性と成る」と書經の中にも説かれてある所以で、此文の中にも口耳三寸で無く、十分に身に體得すべき意は籠れるのである。

尙學と云ふ字も、教を拜受すると云ふ意から拜と教の二字を合せて出来たもので、古文では學扁に文、即ち教の字であつたのを後世文を略して學としたので、學の字の上の白は、形はウスの如く見ゆれど、これは手を二つ並べた即ち拜の字で、兩手を合せて

拜受する形である、古は文字其のものより既に恭敬の精神を含み、人の一生を支配する大切な學問は敬虔の態度に基くべきことを旨としたものである。

隨て師を敬するは勿論、書物でも之を推し戴いて繕いたものであるが、今は書物は勿論、學問を輕んじ、師を輕んじ、延ては自己をも輕んじ、大切な一生を支配すべき前途に就ても輕々に打ち過ぐるやうな有様である。

世間とかく重厚な大成した人を得がたく、輕薄人の多いのも此に原因すとも謂ふべきか。切に我が校友諸子の注意、猛省、奮勵努力、以て之を體驗し之を體得し、自勵息まずして、重厚有爲の人たる心掛あらんことを、衷心切望に堪へないのである。

慎思篤行

日本大學總長 平 沼 駢 一 郎

本日此の席に於て何か御話するやうにと荒川校長の御依頼がありましたので、茲に諸君の平生坐臥の中心になる事を極く大體申上げたと思ふ。

人は萬物の靈長である。萬物の靈長としての人間の生きて行く道、働いてゆく道は必ず無くてはならぬ。それは即ち人道であつて、天地間の總べて之によらぬものは無い。此の道は天地自然のもので敢へて人の造つたものでなく、昔より今日に至る迄哲人學者悉く此の道を説いてゐる。特に今日は科學の進歩著しく、今迄知られなかつた事が數多證明せられ研究せられて居るが、之とも製造したものではない。その基は嚴然と天地間に存在してゐるが如く、人の道も嚴然と存してゐるのである。古書に「述而不作」とあるが、述べるとは理にある事を説明する事で、新たに作るの不可である。

人の行くべき道即ち人道は、極めて平々坦々たる大道で決して六けしい道ではない。これには行くべき目標がある。此の目標に向つて進むのは容易である。然るに此の平坦なる道を行かずに外道にそれる者が多い。此の困難なる茨の道にも比すべき邪道に稍々もすると踏入るのは色々原因があるが、其の一は新しい事を好むの情が然らしめる。新しい事珍しい事は必ずしも悪くはないが虚偽がある、こしらへ物がある。大いに警むべき事である。眞理は從來より不變であり今後も不變であるが、虚偽の事は面白く聞えるから誘惑され易いのである。例へば「眼は横、鼻は直」と言ふと、總ての人は當然であると云ふに違ひない。然し之は眞理

であつて虚偽ではないのである。それ故に面白く聞えないが、所謂こしらへ物は面白く聞えるからつい誘惑され易い、即ち異端邪説を強いたり新奇の説を唱へて、世の中の新奇を好むの情に投ずるのは害が有るのである。之に惑はされぬやうにする事が大切である。

次に迷はされ易いのは皆の持つ不平である。人は自己の境遇により生活に困難を感じると不平を抱くやうに成り、特に甚しきに至つては世を呪ふやうになる。又人には慾いふものがある。此の慾も殊に正しからざる慾が次第に高まれば不平不満となり、結局世を呪ふの情となるのである。今日無政府主義又は共產主義を唱ふる輩は悉く現在の社會状態に不満なる人々で、之等の人々の説に以上舉けたるが如き人々は共鳴するに至るのである。

扱て人の行くべき道即ち人の歩むべき立派な本筋あるにも關らず他道に外れる者があるが、之を避くるには如何にすべきか。それは修養にある。修養は詮じつめれば吾人の本來有する自然の本筋に入ることである。吾人の本來有する心は玲瓏玉の如く一點の曇さへ無いものであり、之に従つて行動すれば平坦なる大道を行き得るが、横道にそれるのは此の玉の如き心に曇が生じたのであるから、此の曇を拭ひ去る必要がある。修養の大切な點はこゝにある。諸君が學校に於て修業せらるゝの本意即ち學問せらるゝ事の大切な點は、實に玉の曇を取る事にあるのである。心は之を鏡に例へることが出来る。ものの正確な觀念は曇なき明鏡によつて始めて明らかに分るのである。之が曇つて居ればものを見誤る恐れがある。尙我々の注意すべきは、吾人はものが分つたのみを止めて置いてはならぬ。進んで勉むべきことがある。それは古の學者の申した「慎思篤行」の篤く行ふ事である。「諸の善を行ひ、諸の惡を行はず」之を完全に理解するには言葉の上で分つたのみでは足りぬ、更に之を實行しなければならぬのである。慎思篤行、之は人間行動の標準である。

所謂この道は天然自然のものなるによつて之を天徳と云ふ。徳は修養によつて磨かれねばならぬ。徳にも種々の方面があるが、結局は仁愛に歸する。仁愛の基は己を愛することである。己を愛するに云つても之は私利私慾を計る事ではない。本當に自己を愛する事即ち精神的にも肉體的にも自己を愛することであつて、斯くすれば人は立派な人格者である。此の働きを親に及ぼし兄弟姉妹に行へば一家は平和を保つやうになる。之を學校で行へば師弟の關係は一家のそれと同じである。更に之を以て長上に對し、他人に對し、尙進んで他國人にも之を以て對しなければならぬ。

日本帝國は他國と異つて建國の精神が眞に明白にして立派である。之を理解せねば帝國臣民としての本質を誤る。長多い事であ

るが我が帝國憲法には「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とある。此の詔書に依れば、我國は一君萬民の國であつて、此の基礎の上に國が建設されて居るのである。然して皇室の國民に對する關係は道德の關係即ち徳を以て四海に君臨せらるゝのである。此の精神は建國以來今日に至る迄變らず、又未來永劫變らないのである。憲法と同じく皇室典範には「皇嗣即ち踐祚ノ祖宗ノ神器ヲ受ク」と書かれてある。三種の神器は未來永劫に傳ふべきもの、皇祖の皇孫に賜りましたもので、之は我が皇室の變ることなき御徳を宗したものに外ならない。此の如く我が國は徳によつて建ち、徳によつて治めらるゝ一君萬民の國である。

我々の祖先は皇祖皇室に對し奉り至誠以て輔翼の責を盡して來た。之は我が臣民たるものの義務であつて、昔も今も變りはない。現在吾々の職業は種々異つてある、然し等しく之を陛下の忠良なる臣民であり、又階級異ると雖も皇室よりみれば等しく之直接の臣民であつて、何等の隔てあるものではない。殊に大正十七年より普選も施行されるが、之にても建國の始めより嚴然と存したる精神によるものである。吾々の能力が認められて普選がしかれるので權利ではない。西洋では要求して得たから之を權利と云ふのである。何れにせよ本筋は輔翼の誠を盡す義務責任によるのである。要するに國民としての行動は輔翼の責を盡すの一言に盡きる。即ち之を家に例ふれば子や孫が仲良く祖父や父に仕へるのと同じである。大和居族は換言すれば一の大なる家族であつて、外國の如く力に依つて征服せられたのではない。吾々は此の事をよく腹に入れて國民としての義務を盡さねばならない。すべて我々の日常行ふ事は本筋より出なければならぬものである。本日申した事は極めて大體ではあるが、人が人としての心得即ち日本國民としての第一義を述べたのであつて、短時間には徹底したお話しも出来ないが、要するに先刻の「慎んで思ひ篤く行ふ」を實行の上に現せばよいのである。

(文責在筆者。五A 福島宣三。五〇 島崎重樹)

訓 辭

日本大學學長 山岡萬之助

本日は第八回卒業式が舉行され、唯今校長より諸君の終生服膺すべき大切な告辭があつたが、諸君は良く之を記憶し立派な人とならねばならぬ。

我が中學が創設以來急速の進歩發展をなして、只今九百人の人員を收容し得る大なる中學校となり得たことは、聽て諸君が社會

に立つて誇るに足ることと思ふ。

さて諸君は茲に五ヶ年の永い星霜を終へて漸く卒業の榮冠を得られたことは、眞に喜びに堪へない次第である。余は此事を諸君のために深く記念したいと思います。

今日に於ては教育が非常に進化して全國津々浦々にまで中等學校が澤山あるけれども、三十年前は至つて少なかつたので、中等學校に入學し得るものは一郡に何人か數へる外なかつたのである。そして此等の人々は皆中學だけを終へて世の中に立つて居るのである。今日では有ゆる方面に亘つて研究されて世界的の知識を一通りは終へて居る、諸君はこの資を活用して以てこの活社會に巢立ちして行くべきである。今日では中等學校卒業者が非常に澤山であるが昔の卒業生と變らぬ。中等學校を卒業するさいふことは眞に諸君の誇りである。

諸君の進むべき道は其の個人に依つて相違するが、或は高等の學校に進むもの或は直に實業に就くもの等千差萬別であると思ふ。そして何れにしても諸君のその資を以てせば必ず立派に活動出来ると思ふ。諸君は有爲の士として堅實なる意志を以て不斷の努力を續けて行かねばならぬ。

大隈公の如きは其幼時生涯筆を採らぬと云つて八十歳に至るまで筆を採らなかつた。それは如何にも意志堅固である事が解る。精神一到せば何事も爲し得る。元來仕事といふ物は決して直ちに出来上るものではない。一步一步進んで行くべきである。即ち不斷の努力がなければ決して成功するものではない。そして始めて、如何なる人でも世の中に立つて行く事が出来るといふ事を申しあげたいのである。どうか諸君は今日のそのよい氣分を持つて狂瀾怒濤の中にあつても常に愉快な氣持で善き方面に進まなければならぬ。私は今一言費したい。諸君は校門を出て直に職に就き或は高等の學校に入つたりするが、どちらに進むにしても道を誤らない様にしなければならぬ。又上の學校へ行く人に申し上げたい事は第一には自分の精神力、第二には身體、第三家庭の事情、この三つを考慮して行かなければならぬと思ふ。即ち第一には自分の精神力に省み、第二には自分の健康状態が何處迄やつて行けるかといふ事、例へば第一高等學校の入學試験に應ずるとして千人以上の受験者があるから誰も無理な學問をしなければならぬ。そんな無理を通すよりは各自が努力し得る適當の學校を選ぶべきが先決問題である。

第三にはたゞ自分勝手に學校を選定せずには必ず父兄の考に従はなければならぬ。學力があり身體が健全であるのに家庭の事情如何に因つて中止せんとするが如き俗にいふ意氣地無しを云ふのではない。即ち學資問題に拘泥してはならぬ。頭腦がよく身體が強

ければ如何なる事があつても大臣大將となる事も出来るから諸君はこの三つの事に對して最善の方法を考へなさい。若しこの事を考へなければ却つて諸君の一生を誤るやうな結果を來すのである。現今の父兄や學生中には動もすると官私の區別を云ひたがるが學問に於ては、官立私立は決して何等の差別がないのである。今日の高等官驗試などでも全く一般的なのである。けれどもこの三つがよく調つて居るとせば帝國大學へ行くのもよい。學校に於ける五ヶ年間の父兄の恩、國家の諸恩を忘れず、各自自身の自重自謙の深き氣分を常に持つて今日以後中等學校を終られた誇を失はず進む事を願ふ次第である。

修養の必要

陸軍少將 伊豆 凡夫

國家の中心人物である諸君に本日(十二月二十三日)私は精神修養の講話を致します。演題は修養の必要と云ふ事にして主に乃木將軍と山岡鐵舟に就いて講演を始めます。

我國が近來大分廢頹に傾いてきたのは一般に修養が足りなくなつたからである。人間といふものは天資清淨無垢であるが自然周圍の塵滓に纏まつていくのである。諸君は頭髮が伸びた時バリカンで刈り着物が汚れた時直ぐ洗濯をする、此れと同様に心にも手入れを仰ち精神の修養をしなければならぬ。修養は吾人の必要物である。修養をする事は即ち神を信する事である。なぜなら敬神の念の薄らいだ時は屹度不良なる人を産み出すからである。

長くも先帝陛下には此の點を深く御配慮遊ばされ神についての御製も一二では止まらず深く吾々庶民へ此の敬神思想の養成を垂れさせ給ふたのである。吾國は神國である而して陛下は生きた神である。先年我が皇太子殿下が歐洲より御歸朝になつた時、當時の大臣諸君に申された一節に「國運發展の道は國民の修養に待つ」と云ふ事がある。昔蒙古より外寇があつた時は神風がふいて遂に其れを挫いて了つたのである。此れは龜山上皇が一心を捧げて國難に代られ伊勢の大神宮にお祈りになつたからである。日露戰役に旅順を占領し續いて奉天に關つた時私は聯隊長となつたが三月十日には此れを全滅さすことが出来た。今日陸軍記念日として此日を祝ふ様になつたのであるが、斯様になつたのは我軍人の奮闘にも依るのであるが、實は神風がお助けになつたこと云つて宜しい。九日から急に強風が吹き始めて翌十日の終りまでふき通したのである。それが砂石を含んで日本軍より露軍に向つて吹き遂に

我國は神風の加護に頼つて戦勝した所以である。我々日本軍は其時歡喜の叫びを以て日本領土を遍拜したのであつた。神は自ら努力する者をお助け下さる。努力するのは即ち神を信ずる所以である。眞心をてらすは實に神である。無論此れは戦争の時のみではない。私が本年八月に登米郡登米川村で講演をした時其土地の郡視學が既に土地は敬神思想が盛になつて居ると次の様な話をした。此の村の小學校の先生の首藤清吉と云ふ人が重い眼病に罹つたが家は貧乏で癒したく思つても金がない。益々其病は重くなるばかりだつた。そこで此れを見た牛徒達は等しく心配して何かして助けてあげねばならぬと相談し遂に村中に寄附金を募つたのであるが固より評判のよい先生の事であるから餘程の金が集つた。此の御蔭で先生は仙臺の大學病院に入る事が出来た。然し不運にも三月居ても癒えず醫者からも匙を投げられて了つた。仕方がないので其儘退院したが牛徒は大變残念がつて人力で到底及ばぬものなら神の助を仰ぐ事にしやうと皆で夜となく盡となく祈願を籠めたのである。先生も勿論の事毎朝早く氏神の前に額づいたのである。それから丁度二十一日目の朝だつた。何時もの如く祈願を捧げて後石段を下り様とした時何分目のよきかぬ事であるから足を踏みはづしてバタリと倒れた。と同時に兩の眼はパツチリと開いたのだつた。神様は眞心の籠つた願望をお聞き下さつたのである。敬神思想の無い人間は世間の思しい事件を惹起するのである。萬引女などは警視廳の統計によると殆んどは此の敬神思想が缺けてゐる人だと云ふ。昔は盛に敬神思想が廣く行き渡つてゐたので従つて人格の修養なども云ふ事は殊に習となつてゐたのである。昔の人は何かしら己が好いと考へる事柄を以て専ら此の修養を練つたのである。仍て乃木將軍が斯く全國より神と仰がれる様に至つたのは一に精神的の修養をしたからである。乃木さんの幼時は或方面から見ても意志、身體等に於て寧ろ他より虚弱だつたのであるが夫等を抑へて自ら發奮し神を信仰し又讀書によつて専ら修養を積んだのである。お賽錢も一々洗ひ淨めて捧げたのである。讀書の力は青年よりも中年、中年よりも老年と云ふ風に愈増したのである。

汽車、電車、人力車と如何なる場合、場所に至つても屹度書籍を手にしてゐたのである。私が嘗て閣下のお宅を訪問して雑談の上一寸失禮して便所を借りた時、其一隅に堆く書物が積んであつた。不審に思つて尋るに「わしは長らく痔疾をやんで便所に長い時間を費すので惜しいから其間書物を読んでゐるのだ」と云ふ事だつた。書物は出版が可成自由であるので書物の撰擇と云ふ事が必要となる。彼の難波大助の如きも書物によつたのである。世間にある書物の十中の七八は悪い書物である。修養の成つた者はいづれを讀むも宜しいが吾々には殊に其種類の撰擇と云ふ事が大切である。もし政治的方面の讀むならば、現今の吾々大和民族は支那、印度等の現状を鑑みて黄色人種の代表的意志を鞏固にして白色人種に斷然拮抗して立たねばならぬと云つた様な慷慨心を發

揚せしめて大いに未來に立つべき考を起さしめる。然るに下らぬ小説の如きものは斷じて避けるべきである。乃木閣下の書籍を拜見すると兵書は勿論、其他道德、國體に關したものが殆んどである。兵書は山鹿素行の著したものや吉田松陰の説かれたものを主として古來の實行的武士道と云ふものをよく研究された。亦、此等のものを印刷されて度々自ら友に配布されたのである。閣下は山鹿素行を先師と敬び、吉田松陰を我師と稱へ専ら此の兩傑士を敬慕したのである。又大日本史等は博く見られた。常に士氣七則などと云ふものを懐にせられた。將軍は讀方にもよく意を拂ひ、讀書の時には必らず朱筆を手になされ、自ら氣に入つた處などには點々や丸々をつけ、亦欄外には自らの意見を書き込まれ本はすつかり赤く染められる位である。讀み終つた年月日なども詳しく書かれ稀に洒落た文學的な事も共に書かれる事がある。斯く反覆、丁寧に讀まれると同時に陽明學なる知行合一と云ふ事も深く信仰されたのである。斯くの如きに至つて始めて人格品性が進展向上するのである。

次に幕末の志士山岡鐵舟の修養法の話であるが鐵舟は山岡家の養嗣子となつて其れを繼いだのである。幼より觀世音菩薩を信仰して天資人に勝れた處があつた。殊に鐵舟が十五歳の時作つた座右の銘は名高く始終此れを具へて教訓とし且つ此れを自ら信仰の神に一心を誓ふ箇條書としたのである。今日吾々が此れを其儘用ひても宜敷いものであるから此處に其座右の銘を掲げる。

- 一、偽リヲ云フベカラズ 一、君恩ヲ忘ルベカラズ 一、父母ノ恩ヲ忘ルベカラズ 一、師恩ヲ忘ルベカラズ 一、世間ノ恩ヲ忘ルベカラズ 一、神佛並ニ長者ヲ粗末ニスベカラズ 一、幼者ヲ侮ルベカラズ 一、己レノ快カラザルコトヲ他人ニ求ムルベカラズ 一、腹ヲ立ツルハ道ニ非ズ 一、何事モ不幸ヲ喜ブベカラズ 一、カノ及ブ限リ善キ方ニ就クベシ 一、他ヲ顧ミズシテ自分ノ好キ事計リスベカラズ 一、辰ヌル毎ニ稼穡ノ艱難ヲ思フベシ 一、凡テ草木土石ニテモ粗末ニスベカラズ 一、殊更ニ着物ヲ飾リ或ハ表面ヲ飾ルモノハ心ニ濁リアルモノト心得ベシ 一、禮儀ヲ亂ルベカラズ 一、己レノ知ラザルコトハ何人ニモ習フベシ 一、名利ノ爲ニ學問ヲ藝スベカラズ 一、人ニハ總テ能不能アリ一概ニ人ヲ棄テ或ハ失フベカラズ 一、何時何人ニ接スルモ客人ニ接スル様心掛クベシ 一、己レノ善行ヲ誇リ顔ニ人ニ知ラシムベカラズ凡テ心ニ恥ヂザルニ努ムベシ。

僅か十五歳の少年は身の爲、國の爲に云ふ意志のもとに此の修養の觀念を忘失しなかつたのである。諸君も何卒自らが自らの境遇に従つて座右の銘を作り其れを先生方に直して頂くか、此の鐵舟の銘を用ふるかして修養の一助とされたい。惜、丁度官軍が幕府に江戸城明渡し以下五ヶ條の條約を以て迫りつゝ、東海道を其參謀長西郷が率ゐて進んで来た時、幕府に於ては勝は山岡をして静岡にて西郷と談判をさせた。そして第五ヶ條目の慶喜公幽閉撤退を申込んだが、西郷は頑として聞かなかつた。山岡は日頃より讀

上げた修養と沈着とを以て向つた。試に貴下と私共との位置をおき代へて御覽なさい。「わかつた。」と膝をボンと叩いた西郷は成程と納得して其談判は直ちに纏つて了つたのである。明治四年鐵舟は明治天皇の侍従となつた。天皇は當年二十歳であらせられ諸君の如く元氣旺盛であらせられたので日々大勢の侍従の方々を角力をおとり遊ばされたが大抵の者は御遠慮申上げてお負致すのである。一日「山岡どうだ」と山岡と共に角力をなさつたが山岡は長くもさしりと陛下を土俵にお倒し申上げたのである。山岡は畏い事をしたと謹慎の意を表して居たが翌日呼び出しに恐る／＼参内すると陛下は愈々お元氣に、此れより一段の鍛錬を遊ばすと云ふ事をおほせになつた。山岡鐵舟が愈々亡くなる時、坐禪をし、白扇を手にし、「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛」と唱へて「アツハツハ」と笑つて死んだのである。此の斷末魔に際して笑つて死ぬ事は餘程の修養が積まなくては出来ぬ事である。即ち修養の極致である。敬神思想を養成し乃木將軍の様に讀書を反覆丁寧にし而も其書物の探擇をし且山岡鐵舟の様に坐右の銘を自ら作成して人道上重要な精神的修養を専ら積まれん事を切望する次第である。(終)(相島排彦記)

思ひ出つるまゝに

奥田信雄

自分が昨年の夏競技の合宿に居つた時、一葉の新聞が配達された。自分はこれを手につけて讀んで居る中に涙が自然ににじみ出て来た。それを合宿の他の者に示した時も皆同様に感激の涙にくれた。自分はその原文をそのまゝごまごまに提げて大正十四年度に起つた一美談として永久に傳へたいと思ふ。その新聞の上段に三段ぬき

初號活字で

腦貧血で倒れた

一號活字で

日大中十六歳の少年

校名を汚すとして決勝點に觀衆涙をふるつて迎へた。

駒ヶ嶽マラソン決勝の日の光景　　さありその文中に登山マラソンの競技中の花形であり萬餘の觀衆の人氣を一身に集め、紅顔の美少年日本大學附屬中學星名新吉君は昨報の如く決勝點より約二・三丁手前なる赤穂村字北町丸屋店前に至るや遂に腦貧血を起し無慘にも打ち倒れんとしたので當日應援のため來赤された人々及び附近の人々が手當を加へ休ませたが、勝氣な星名君はいか

にもして決勝點まで行かねばならぬと起き上り先輩大學生其他の制止も聞かばこそ途中で落伍したでは學校の名にかゝると泣いて再起を叫ぶに至つたので強いて止む事も出来ず同君の意志に任せ付添の人々はラインの左右より見守りつゝ決勝點に入つたが之を見た公園内の觀衆の眼は一人として涙なき者はなく當日一着を占めた人より以上熱狂せる歡呼と拍手に暫し鳴りも静まらず應援團の叫ぶフレーフレー日大中萬歳の聲に觀衆又和して悲壯な叫びが幾度か繰返された、と記されてあつた。星名君はこの時は身長四尺五寸位一見一年生位でこのマラソンの距離は二十二哩程であつた。星名は今元氣で毎日練習をして居る。其他に大正十四年度に澤山の事があつたが中にも二つの涙ぐましい物語りがあつた。

一つは十一月の高等師範運動會の全國中等學校壹萬米競走の時であつた。本年こそ萬人が萬人全國にその名赫々たる本校の渡邊が優勝旗を握り今迄先輩がなさんとしてあたはざりし敗殘の恨を雪ぐかと思はれた。然しその結果は天未だその時を與へざるか残念ながら胸痛のため長蛇を逸してしまつた。スタートを切るや案の狀渡邊は先頭になり二三千米をすぎたがその頃より腹痛を起し次第々々に遅れて優勝する事は困難になつた。その時渡邊は自轉車で應援してゐた星名に苦しい呼吸の下から校歌を歌つてくれ頼んだ。星名は校友のために聲をかぎりに校歌を歌ひ、あはや落伍せんとする渡邊を應援し渡邊は片手に横腹をおさへ、たへがたき苦痛をしのんで参加選手三十餘名中五着で決勝點に到着した。たゞこう書いては普通の事の様ではあるが、然し然しその時の渡邊の胸中はどうであつたらう。今歌はれてゐる校歌は江東一千の健兒の應援の聲ではないか、自分はどうして落伍する事が出来よう、自分は一千の健兒の代表者ではないか、その名譽のためあくまで戦はねばならぬと言ふ責任觀念からたへがたき苦痛をしのび走つた渡邊の心中を察したならば一鞠同情の涙なきものはないであらう。その二つは四月京濱間で行はれた全國中等學校驛傳競走の時であつた。第一區永島は十八校中三番で第二區の三木と先頭との差僅に一分四秒でかわつた。

三木は永島が病氣であつたので補缺であつたがかわつたのではあるが三木の練習の時のタイムで行けば決してぬかれる事はなかつたが、其の日は體の調子が悪かつたのか、豊師、青師豊山名古屋英横一中にぬかれて蒲田あたりに来た時疲れと責任のためか右左にひよろ／＼とだしそれが段々激しくなつて正に倒れんとした。其時應援のものが聲をからして學校のためだぞ一千の健兒のためだ代表者ではないか叫んだ。其の聲が意識を失ひかけた三木の頭に強い刺戟を與へたものか段々元氣を回復して第三區の岡田に八番で禰を渡した、それより岡田、早瀬のめざましい奮闘星名の涙ぐましい健闘渡邊の超人的駿足によつて次第に順位を回復し關西、小田原、木更津、成田、鎌倉、埼玉より集り來つた全國の猛者を破つて十八校中第二着中學校としては第一着で決勝

點を突破した。この時四方から二着になつてお目出度うと喜びの言葉を受けたが自分は決して喜ばしい心持ちになつてこの言葉を受ける事が出来なかつた。自分はこの驛傳のために四年の長い間あらゆる犠牲を払ひあらゆる事に注意をして今年優勝する事が出来なかつたならばもう自分の在學中に優勝する事は出来ないの、だ今年こそかならず優勝させるぞと思つてゐた、併し其の結果は二番まで漕ぎつけながらもう一步と言ふ所で優勝する事が出来なかつた。

自分が報知の食堂に下りて行つた時選手は皆橋下に腰を下してゐた自分は選手顔を見てたへられない様な心持ちがした、人は寒さのために炬燵の中にうづまつてゐる、筑波風の吹きすさぶ日にも雪のチラ／＼降る日にも休みなく練習したにもかゝらず優勝する事の出来なかつた事を思ふと氣の毒でならなかつた。其の時三木はあの様に愉快な涙など知らぬと言ふ様な三木が自分の顔を見ると突然奥田さんすみませんと聲を立て、泣き出した。

自分はたゞしかたがない泣いてくれるなと言つて共に、他人の前もはばからず泣いてしまつた、他の選手も皆暗涙にむせんだ。自分はどうして三木をせめる事が出来よう。それは三木の體が普通のコンデションにあつたなら或は優勝する事が出来たかも知れぬ然し調子の悪かつた三木としては倒れんとする所を一千の健兒のため母校の名のために自分の最善を盡して戦つたのではないかそれをどうして／＼せめる事が出来よう。然し言ふても及ばぬ事ながら自分の四年間の苦心は自分の在学中には、其の實を結ばずして終つた事を思ふと悲憤の涙は止めどもなく流れ出で止める事が出来なかつた。

以上大正十四年度に起つた三つの物語りを擧げたが、我が校の生徒は誰れでも斯様な場合に會つたならばかならず斃れて後やむと言ふ事があるがそれより以上、斃れて後やまずと言ふ決心を持つてゐるであらう。我々が競技を練習するにあつては決してそのレコードを向上せしむ可きばかりではない。決して身體を健全ならしむるばかりではない。この堅忍不拔不屈不撓の精神を併せ養ふにあるのである。

いかなる困難に會ふとも決して屈せず、自分のやらうとした事はなしとけ自分のやらなければならぬ事はなしとげるこの精神が將來社會と言ふ大なる競技場に出て成功と言ふ最後の勝利なる榮冠を占むるに致させるであらう。(完)

學校記事

教務より
第八回卒業證書授與式
陸上大運動會

三十四日中、信濃のしん入等々...
二日二十一日、...
二日十九日、...
二日十八日、...
二日十七日、...
二日十六日、...
二日十五日、...
二日十四日、...
二日十三日、...
二日十二日、...
二日十一日、...
二日十日、...
二日九日、...
二日八日、...
二日七日、...
二日六日、...
二日五日、...
二日四日、...
二日三日、...
二日二日、...
二日一日、...
大正十三年

陸上大運動會

陸上大運動會

教務より

大正十三年

一月元旦 午前十時拜賀式を行ふ、各學年を通じて缺席者の數比較的僅少なりき。

一月八日 午前八時三十分始業式を學ぐ、本日は級長選舉及び席次整頓姓名札貼附等の準備にて授業を取止む。本學期より教室内に於ける席次は從來の制度を改めて身長順にする事にせり。

一月十四日 職員會議を開き左の項を決定す。

一、本年三月執行の高等學校及び各種専門學校入學試驗應募者の便宜を計り、本年度も四五學年の試験を繰上げ二月十九日より執行する事にせり。

一、十四年度一學年入學許可人員を二百名とす、試験科目左の如し。

一、國語 一、算術 一、口頭試驗 一、體格
右試験の方法に關しては、從來の一回制度を改め、本學年度は應募者の申込順により數回にちて行ふ事にせり

二月十九日 本日より四、五學年試験を開始す。

二月二十二日 本日執行したる十四年度入學志願者員數四百三十四名中、詮衡の上入學を許可したる者左の如し、

入學許可 三百〇五名
補充許可 二十六名

二月二十七日 本日より十日間、四學年補習授業を開始す。學科種目左の如し、

一、英語 一、國漢 一、數學 一、物理、化學
一、地歴 一、博物

三月二日 五學年成績審査並に及落判定會を開く、審議の結果左の如し。

總員 百三十三名中
及第者 百二十八名
原級 五名

三月十二日 本日より一、二、三學年の試験を執行す。

三月二十四日 午前九時終業式を舉行し、並に成績を發表す

三月二十五日 本日より二十六日に渡り二、三、四學年編入試験を執行し、詮衡の上入學を許可したるもの左の如し。

一、四學年 受驗人員二百四十八名中
入學許可 三十名

一、三學年 受驗人員百五十名中
入學許可 七十五名

一、二學年 受驗人員五十名中
入學許可 三十五名

三月三十一日 本日第二回入學試験を執行す、受驗者三百二十

十三名中詮衡の上入學を許可したる者左の如し。

入學許可 九十名
補充 十五名

四月十八日 本日全校生徒國府臺へ遠足を舉行す

午前八時半校門を出て午後十二時三十分國府臺砲兵隊に着し、小川聯隊長の好意により砲車操縦(タンクニテ)の實習を見學し、午後二時三十分兵營前の練兵場に集合し同所に於て解散し自由歸宅を許可す。

四月二十日 本日より體格検査を始む

本日明治神宮境内に於て全國運動競技團體の下に舉行せらるべき秩父宮殿下御外遊奉送式に、全校生徒代表者として五年級及び四年級の正副組長を參列せしむ。

四月二十二日 十三年度四學年以下各學年進級者賞狀授與式を行ふ式後校長 訓辭ありたり。

放課後校友會委員を招集し、各部豫算會議を開き、十四年度豫算額を決定す。

四月二十七日 校庭に紀念樹を植ゆ、校庭更に美觀を呈す校長より樹木愛護の心得を訓示す。

五月二日 大清潔法施行の爲め、本日は二校時を終り以下授業を取止む。

五月十一日 聖上陛下銀婚奉祝式を行ふ、本日祝意を表し臨時休業。

五月二十日 嬰傑豪健壯者を凌ぐ七十二歳の老翁一本義三郎氏來校し、體育に關する講演をなす。

五月二十七日 本日目黒、玉川間の全校マラソン競走を執行す、朝來雨模様なりしも幸ハ降雨なく各學年障害なく豫定の競走を終り、一同玉川原に整列し加納先生の訓辭後優勝者に賞狀を授與す。

六月三日 本日職員會議を開き、山陰地方震災罹災者に對して寄附金募集の件を議す。

六月十日 第一校時授業を取止め、校庭に於て校旗披露式を行ふ。

六月二十九日 日本大學總長平沼閣下の御講演ありたり、講演終り來賓並に職員一同活動寫眞中の人となる勇壯なる生徒の教練をも撮影せり。

教練教官陸軍配屬將校富田騎兵大尉就任す。

七月十三日 一學期試験を開始す。

七月廿二日 終業式を行ひ成績を發表す、荒川校長の訓辭ありたり。

七月二十三日 我々年中行事の一として例年行ひ來りたる興津夏季寮開始、水泳部は本日出發す。

八月三日 本日より二週間三年級以下の夏季温習會を開き午

前七時三十分より授業を始む。

九月五日 午前七時四十分二學期始業式を行ふ。

九月九日 全校コレラ豫防注射を行ふ。

九月二十二日 會つて山陰地方震災の際本校及び商工學校職員生徒一同贈金し新聞社を経て寄附金を送附せしが本日兵庫縣知事より感謝狀到來したるを以て其旨揭示す。

九月三十日 東京府廻附の國勢調査並に失業者調査申告を生徒に配附し、各主任より當局の趣旨を講話す。

十月十五日 本日府下平井埋立地に於て大運動會を舉行す、前日來懸念の天候も絶好の運動會日和と變じ、歡呼の裏に豫定の競技を終り、校長の挨拶後校歌を合唱し萬歳を三唱して閉會す。

十月二十日 本日島海先生の告別式を行ふ。

十月二十四日 本日より各學年順次修學旅行の途につく、方面左の如し。

五年 二見、奈良、京都

四年 中尊寺、松島、仙臺、鹽原

三年 長野、諏訪、甲府、御嶽

二年 日光、中禪寺

一年 伊香保、榛名湖

十月三十一日 天長節祝日 午前九時祝賀式を行ふ。

十一月二十二日 本日午前九時より學藝會を開催し、午後二時より父兄會を開く。

十二月十二日 皇孫殿下命名式奉祝の爲め臨時休業す。

十二月十五日 本日より二學期試験を始む。

第八回卒業證書授與式概要

本部員

大正十四年三月八日(日曜)本校大講堂に於て第八回卒業證書授與式を舉行す。來賓として日本、學學長山岡先生、同理事石渡先生、本所區長、先輩諸氏及び父兄等數十名あり。

先づ第一鈴に依り生徒、職員、父兄、來賓一同着席、第二鈴を以て式は君が代の合唱に始まり、兼川校長の勸語捧讀、加納幹事の明快なる學事報告あり。次に校長より本年度卒業生百二十八名に對して卒業證書の授與ありたる後、懇篤なる告辭を述べられ、續いて山岡學長の訓辭(巻頭に掲ぐ)ありしに一同深く感激にうたれたり。

來賓代表本所區長、同窓生總代葛田子之三氏、生徒總代四年生道明敏雄の祝辭、卒業生總代長尾六郎の答辭あり、校歌の合唱をなし最後に校長の挨拶を以て式を閉ぢたり。(祝辭及び答辭は後に掲ぐ)

◎卒業生姓名(アイウエオ順) 安東 敬三 秋山 玉吉 青井松次郎 淺野元三郎

稻垣 規一	石川 鶴雄	入澤 和平	稻垣 範昌
伊藤 一彦	今關 三郎	石井 清	伊澤 博
伊藤喜代治	蛸子 原	衛藤 正孝	伊藤 進一
梅田 泰治	白井 不二	梅田 啓三	大谷 芳雄
奥谷 隼人	大塚 秀光	小野 洸	川副 義男
川村 尚	加藤 慶一	片岡 一雄	貝塚 策郎
勝畑 房治	門脇 良雄	神谷 浩	河村 直
河本暲太郎	川口 昌治	加藤 清治	片山 定衛
菊池 駿三	岸上 慎二	黒澤 長武	熊澤 通義
國松秀三郎	楠美 省吾	栗山 廣立	窪田龜太郎
栗田 三郎	小林富三郎	後藤都太郎	小島 忠矩
小林金太郎	小林 正文	櫻井 義正	佐々木俊一郎
佐藤 文雄	佐久間安雄	佐藤 誠一	境 健
柴田 三郎	篠田 慎吾	清水 隆	鈴木 義雄
砂山 保	杉田 敬三	菅野 勝也	末廣 虎一
關谷 善夫	關根 松夫	關 善次郎	依 安次
竹内多計司	田中 善博	谷口 益郎	田内 政春
瀧澤 博	竹澤 倫夫	谷藤 延雄	鶴 幸彦
坪井 勇	富岡 博	鳥井 章	永保 勝治
中田金太郎	中田 吉次	長崎 笙次	中井 保
中村 壽雄	長尾 六郎	中村 英雄	永峰 唯一
永井信次郎	中小原三男	西島 健	新部 動

學校記事

根岸修一郎	野田 爲範	野原 義治	花澤 房雄
渡邊 正郎	八田喜久雄	長谷川一男	廣瀬 一郎
檜山 義男	藤本 馨	不破 茂	深水 進
細野 彦男	堀田 勝一	本庄 俊彦	堀内 藤雄
的場 屯	前本 義之	間瀬 義信	益田 正一
宮田信三郎	宮城 章	間瀬 義信	益田 正一
村田 豊	森川 宗男	村松 義雄	村山儀三郎
谷中 貫一	山島 久彦	望月 洋平	山内 東樹
吉田 洋一	呂 煉石	岩村 義行	横田 衛門
	以上百二十八名	吳 昇煥	東 文雄

- ◎優等賞狀 長尾 六郎 中村 英雄 神谷 浩 瀧澤 博
- ◎優等褒狀 稻垣 規一 小林富三郎 梅田 泰治 西島 健
- ◎一ヶ年精勤褒狀 開瀬 義信 岩村 義行 大塚 秀光 河本暲太郎
- ◎善行賞狀 石川 鶴雄 神谷 浩 望月 洋平
- ◎體育並ニ學藝部功勞者 加藤 清治

雜誌部(賞狀) 加藤 清治 小野 洸
褒狀 谷口 益郎 佐久間安雄

辯論部 賞状	竹澤 倫夫	中田 吉次
櫻井 義正	加藤 策郎	貝塚 慶一
中里 金太郎	石川 鶴雄	境 健
永峰 唯一	栗山 廣立	川村 尙
富岡 忠雄	小島 忠雄	清水 隆
奥谷 隼人	門脇 良雄	鈴木 義雄
補美 省吾	根岸 修一	櫻井 義正
藤本 馨	間瀬 三郎	黒澤 長武
今關 三郎	今關 三郎	佐久間 安雄
小島 忠雄	小野 忠雄	関 善次郎
小野 忠雄	黒澤 長武	佐藤 文夫
大塚 房治	坪井 秀男	伊藤 進一
勝畑 房治	河本 曠太郎	谷口 益郎
奥谷 隼人	奥谷 隼人	
片山 定衛	片山 定衛	
谷口 益郎	谷口 益郎	
永井 信次郎	永井 信次郎	

角力部 賞状	補美 省吾	黒澤 長武
富岡 忠雄	加藤 策郎	
加藤 策郎	加藤 策郎	

志望調

日本大學	四二	高等商業學校	三
高等學校	三五	醫學專門學校	四
高等工業學校	三	明治大學豫科	一
高等工專學校	二	慶應大學豫科	二
早稻田大學高等學院	五	美術學校	一
齒科專門學校	一	商船學校	一
農業大學豫科	一	高等師範學校	一
國學院大學豫科	一	音樂學校	一
商科大學豫科	九	其他	五

父兄職業別

農業	一七	辯護士	四	神職	二
商業	一三	官公吏	二	無職	一八
工業	八	軍人	二	其他	五
會社員	二〇	教員	六	合計	百二十八名
醫師	一〇	僧侶	一	以上	

祝辭

輝しき希望と榮ある歡喜に包まれて將に母校を去らんとする諸君よ。余は曾に諸君と順序的の輩なる。みにて何等實質的先輩にあらず。而も本日此席に侍して諸君に祝辭を呈する光榮を如何せむ。

諸君よ。時は金なりの時代は既に過ぎたり。時は即ち吾人にとりてその纏てならざるべからず。少年も老ひ易く一日再び且成り難きが人生ならずや。

思へ諸君、各自が社會への抱負人生への期待を、正に寸蔭も之を悠々放擲するを得べきか。今日學ぶも明日之を行はざれば、學ぶは何等功なきことなり。諸君分ち中等教育を修めて將に雄飛するところあらんとす。時は即ち諸君の爲に活殺自在なる岐點にあり。願はくは洋々たる前途をして恨あること無からしめ、時に生き時を支配し、以て理想の人生を實現せんことを。余不肖にして未だ爲すところなし。高言以て諸君に教へんことには非ず。只々親愛なる兄弟として諸君の自覺に待つのみなり。兼辭以て祝辭に代ふ。

大正十四年三月八日

日本大學中學校同窓會總代

葛田子之三

送辭

今日茲に生等が敬愛する諸兄の爲にかくも盛大な卒業證書授與式が舉行せられたことは誠に同慶に堪へぬ所であります。雪の窓に五歳のいそしみを踏んで今將に校門を辭せんとせらるる諸兄の其の胸底に湧きかへる喜の情は如何ばかりでせう。

思へば今日は實に兄等が世に出らるる第一歩の日目出度い門出の日であります。兄等の前途は實に多望であります。或は進んで高等の學を修めんとせらるる方或は實業に従つて直ちに社會の人となりんと志される方其の向ふ所は異れども等しく兄等の前途は光明に輝いてゐます。兄等の行路は決して坦途ではない崎嶇峻峭其の間幾多の障壁は山に横つてゐる事です。されど兄等には五年の久しき星霜を盡して涵養せられた豊富な知識堅實な思想堅忍不拔の氣概が備つてゐるいや深き學海の彼方なる明光荒波の世の彼岸なる火の光夫等は唯だ兄等を迎へて兄等の爲にのみ照り輝いて居るのです。

「應せず怯せず唯勇ましく理想の船に棹して進まれよ。ああ思へば今日は目出度い門出の日であります。前途多望の兄等を乗せた理想の船は國家社會の爲に今や徐ろに帆を切らんまじつつあります。」

かたみに交せし多年の情誼を偲び兄等が残せし事業の数々を思ふては一向追慕の心抑へがたく措別の涙禁じがたしと雖も潔私情を去つて唯兄等の輝く前途を今日の門出に當つて心から祝願致します。

在校生一同に代り一言述べて送辭と致します。

大正十四年三月八日

在校生總代 第四學年 道明 敏雄

答 辭

本日我日本大學中學校は生等の爲特に貴顯併に先輩諸賢御臨席の下に光榮ある第八回卒業證書授與式を舉行せられ剩へ諄々として懇篤なる訓辭を賜ふ生等の榮譽又何にか譬へん。

惟ふに生等素より庸劣不敏何等爲す所なく而も幸にして今日あるを得たる是れ偏に校長先生始め諸先生の夙夜辛酸以て愛撫薫陶せられたる賜物にして鴻恩の大なる筆舌の能く盡す所にあらず。生等既往を顧み衷心感激の情に堪へず。

生等進んで高等の學府に志すもの將た又直に實務に就かんこ

陸上運動會狀況

(於府下南葛飾郡平井村舉行)

十月十五日——高らかなどよめきが高い高い秋の空に起る。我等の陸上運動會の日である。

新装を凝らしたグラウンドは、希望の目に輝いた觀集の列で取圍まれてゐる。きれいに印された白いラインが「立てよ若人、飛べよ若人」と囁いてゐる。

大正十四年三月八日 第八回卒業生總代 長尾 六郎

今や、小さな戰士等はこのグラウンドをじつと見つめて、何を思つてゐるのだらうか、——彼等は「今日こそは」と叫ぶ。

彼等の筋肉には燃ゆる血汐が躍動してゐる。

見あげれば、萬國旗は色とりどりに翻がへり、應援旗は長い長い尾を風になじかせてゐる。

午前八時——校長先生の開會の辭があつて、急々運動會の幕は切つて落された。

林先生の號令は高く高く秋の空にひびき、一千の若人は軽い體操をやる。

「ズドン——」なつかしい銃聲が聞えた。百米突競走だ。

「駈けろ、駈けろ、死ぬ迄駈けろ。」喜びではち切れさうな小さな一年生がすらすらとスタートに並んだ其の姿は、熾爽たる昔の若武者を思はせる。

長い百米突競走も終つて、フィールドでは圓盤投や走巾跳が下始まる。仲よく肩に手をかけながら二人三脚競走が始まる。千は五百米競走では四年の渡邊君が斷然他を抜きんでて飛ぶ様にゴールに入る其の物凄さ。

「はやいもんだなあ」と觀衆の誰れも彼れもが話合ふ。もうこの頃は、音楽隊がブカブカドンドンやり始め、その中にズドンズドンと銃聲がして、大運動會の氣分が場内の隅から隅まで滲つてゐる。

五年の應援團が「關の五木松」をやると、下級生も觀衆の小

さい子供迄も、みんな負けずに一緒になつて應援する。商工の應援團は向ふの土手の下に陣取つてゐる。

五年の松野團長が異様ないでたあと、得意の手つき足どりで皆んなを笑はせてゐる。「一拍子拍子」と拍子が起る。その中を辯論部の人達が絶えず雄辯タイムスを配つてまはつてゐる。

あつちこつちの係員の目のまはる様な忙しさ——

「タイム一着、何秒」ミ〇君がタイムウオッチをひねくつて大聲で云ふ。K君が大急ぎでノートする。「只今の砲丸投は「等誰々何米」と聲をからして、ガホンをふりたててR君がどなる。

「輪廻みに出る人は集まつて下さい。」とY君がどなりに來て向ふへ行つてしまふ。接待の係は係で又忙しい。

平井驛からは、あの長い一本道を近所の人達がぞろ／＼と續いてやつて來る。遅れて來て見えない人達は小高い土手の上にあがつて、暖い秋の陽を浴びながら、いゝ心持で見下ろしてゐる。

丘の上をゴトゴト／＼と走る汽車の中の人も、一齊に窓から首を出して、我等のグラウンドを元氣な我等の姿と見えなくなるまで眺めて行く。

「汽車の中の人達よ、萬歳を叫んで呉れ、我等の今日の運動會の爲めに。」

「しつかり、もう一息だ、頑張れ。」と友を勵ます聲が雑音の中からはつきりと聞えて來る。

別に腹もへらないのに、いつの間にか晝食の時間になる。奥へられた二十分間——土手へ登つて食べる者。賣店へ飛び込む者。飯をばらばりながら今日の戦況を語り合ふ若い友達の群。母の握ぎつて呉れた赤い梅干の入つた握飯のうまさ。午後の部が始まる。

腹の出来た應援團が又活躍し始める。復活した様な太鼓の音が聞える。先輩松井應援團長が來られて、一緒になつて應援して下さる。

どつと拍手が起つて去年の小學校優勝校第三吾嬭の本校の名譽ある優勝旗返還式がある。

「吾嬭又勝てよ、優勝旗とられるな。唯かゞとなつてゐる。中學校の八百米リレーが終つてから期待された對部リレーが行はれる。其の應援の物凄さ。

「辯論部しつかり。」「だまれ、今年や柔道部だ。」「どうも今年や繪畫部が早いよ。」こんな噂はしてゐても、いざ選手がスタートを切るさもう應援團も夢中で手に汗握つてゐる。

障碍物競走は人氣のある事、選手も面白いが又見てゐる者も面白い。商工の抽籤競走が終つてから、愈々今日の大呼物、五年生の中隊教練が始まる。

「ズドン」と一發平原の彼方に銃聲が起る。觀衆は其の音のした方を凝つと見つめて、何が起るんだらうか息をこらしてゐる。

平原の彼方からは一軍が一步一步進んで來る。それが段々大きくなつて來る。彼等は黒い服を着て、銃剣を腰にさけ、長い歩兵銃を持つた小さな兵士等である。彼等のねらふ銃口からは白い煙がばつと出て、氣持よい音がほとばしり出る。「ズドン」さては銃中にも一軍のたりしか。こゝに平原の一軍と銃中の一軍との應援が始まる。

「突こめ！ わあ！ 一平原の一軍から一喊が轟く。攻撃が終つて分列式になる。劇々たる喇叭の音が聞えて中村富田兩先生の引卒された小さい兵士等の其の熟練さには觀衆の誰れも彼れもがすつかりよはされてしまふ。これで中隊教練も無事、大成功の裡に終る。

「よかつたね。」「やつぱり、五年生だね。」まだ學校で銃を持つ事を許されない一年生等が話合つてゐる。

次は又呼物の小學校リレー競走の決勝である。母校を代表した小さい選手達の堂々とした戦ふ其の様はいぢらしくもあるが、又勇ましいものである。

去年の優勝第三吾嬭は敗れ瀧の川校が優勝した。彼等の再び戻らんと夢見たあの燦爛たる優勝旗は、竟に瀧の川校の手に渡つてしまつたのである。

「敗れたる小さい戦士よ、歎くこと勿れ。諸君はベストを盡くして最後まで戦つたヒーローである。」

期待した三、四、五年の對抗リレーは四年が竟に一番なる。

もうこの頃は夕闇はグラウンドを包み、淡い寒氣が身にみみて來た。

「集まれ！」疲れ切つた身體をようやく起して集まる。「我等の校歌を歌ふ聲は、夕闇をぬつて遠く遠く廣い武蔵野に流れて行く。」

校長先生の閉會の辭が終つてから萬歳を三唱して、「我が大運動會は目出度く大成功に終了した。」

「楽しみが尽きた土の上に、消え消えになつた白いラインの名残があの楽しかつた朝から今迄の事を囁いてゐる。」

一、百米競走決勝

A 佐野一A	一四秒	D 原田三〇	一三秒
二 田中一A	一四秒	二 鈴木一	一三秒
三 北澤一D	一四秒	三 樋口一〇	一三秒
B 一松井一A	一四秒	E 一速藤四B	一三秒
二 留場一E	一四秒	二 三木四A	一三秒
三 石坂一D	一四秒	三 永妻四B	一三秒
C 一森田二A	一三秒	F 一澁谷五C	一三秒
二 江口二B	一三秒	二 齋藤五B	一三秒
三 大塚二C	一三秒	三 池田五B	一三秒
二、二百米競走			

A 一上方一E	三二秒	A 一原田三〇	二九秒
B 一奥木一A	三二秒	B 一花本三B	二九秒
O 一松本一C	三二秒	C 一吉原三A	三〇秒
D 一澁谷一B	三二秒	A 一福岡四B	二七秒
A 一播磨二B	二八秒	A 一池田五B	二八秒
B 一岩本二B	二九秒	B 一小川五C	二八秒
O 一森田二A	二八秒		

A 一佐野一A	一分五秒	B 一樋口三B	一分七秒
B 一石坂一B	一分五秒	A 一速藤四B	一分五秒
C 一澁谷一B	一分三秒	B 一青木四A	一分五秒
D 一留場一E	一分三秒	A 一増田五C	一分四秒
A 一權三B	一分三秒	B 一菅五A	一分四秒

A 一佐野一A	二分四秒	E 一上東野三B	二分元秒
B 一石坂一B	二分三秒	F 一早瀬四C	二分三秒
C 一熊谷二A	二分三秒	G 一長島五C	二分七秒
D 一小澤三C	二分三秒		
五、千五百米競走			
三、四、五年			
一、渡邊四B		一、三、吉野四B	三米一〇
二、早瀬四C		四、長島五C	

一、二年

- 一、熊谷二A
- 二、林
- 三、早瀬二C
- 四、小川二C
- 五、武田

六、五哩マラソン競走

一、二年

- 一、留場一E 五分六秒 六、早瀬二B 五分六秒
- 二、熊谷一A 五分二秒 七、齋藤一C 五分六秒
- 三、杉浦一B 五分三秒 八、細野一E 五分一秒
- 四、體上一E 五分四秒 九、松井一A 五分二秒
- 五、小川二C 五分五秒 一〇、藤田一A 五分三秒

三、四、五年

- 一、波邊四B 五分三秒 三、百瀬四B 五分三秒
- 二、長南三A 五分三秒 四、小澤三C 四分五秒

七、走高跳決勝

- 一等 滋谷五C 一米五五 二等 杉浦一B 一米三〇
- 二等 門脇五C 一米五〇 三等 藤田一D 一米二五
- 一等 留場一E 一米三五

八、棒高跳決勝

- 一等 辻元四A 二米四〇 一等 峯二A 二米三〇
- 二等 門脇五C 二米三五 二等 森田二A 二米二五
- 三等 齋藤五A 二米二〇 三等 松本一C 二米二二

九、圓盤投決勝

- 一等 齋藤五A 一等 播磨二B 三米一〇
- 二等 門脇五C 二等 伊藤二A 一九米四一
- 三等 齋藤五B 三等 北澤一D 一七米九六

十、走巾跳決勝

(但川一、二年ハ小ノ圓盤)

- 一等 滋谷五C 五米三五 一等 佐野一A 四米三三
- 二等 門脇五C 五米一〇 二等 藤田一D 四米一〇
- 三等 武藤四B 五米〇八 三等 君島二C 三米九七

十一、砲丸投決勝

- 一等 齋藤五A 二米九〇 一等 菊地二C 九米四五
- 二等 仲田四C 九米〇七 二等 伊藤二A 九米二七
- 三等 長内 八米六二 三等 河合二A 九米〇二

十二、ホ、ス、ジャムプ決勝

- 一等 三木四A 一〇米九七 一等 播磨二B 一〇米三五
- 二等 門脇五C 一〇米八五 二等 宮城一A 九米〇二
- 三等 鹿島 一〇米六九 三等 北澤一D 八米五七

修學旅行記事

- 伊香保・棒名地方修學旅行 一學年
- 日光・中禪寺地方修學旅行 二學年
- 甲信 地方修學旅行 三學年
- 東北 地方修學旅行 四學年
- 關西 地方修學旅行 五學年

修學旅行記事

伊香保・榛名湖方面

修學旅行記

一〇 大林 茂

十月二十九日起き出で、見れば空には暗いうちにも青空が見えて晴れのように思はれた。午前七時四十分、元氣旺盛なる吾等を乗せた汽車は上野驛のプラットフォームを後にして走り出した。皆席を得ることが出来た。皆汽車が走らぬ内から食料品を食べてゐる。車内はざはめき渡つてゐる。窓外を見るものは殆どない。大宮についた頃もう辨當を食べ始めたものがある。汽車中には無邪氣な聲が満々と漂ふてゐる。窓外には青々たる田畑、茫々なる野原、峨々たる高山が遠く近く走馬燈の如く展開しつゝある。

野に山に秋の氣分は満ち／＼してゐる。一目車内を見渡せば紀行を書くもの笑ひこける者様々なる光景を呈してゐる。茫々たる平原を元氣瀟灑たる吾等を乗せた沼田行の汽車は走りつゝある。驛々驛々だん／＼目的地へと近づいてゆく。

いよいよ澁川に近くなつて皆所持品の整理を始めた。十二時頃待ちに待った澁川についた。長路の汽車旅行であき／＼した吾々は急に元氣が出た。隊伍を組んで行つた。四方は山で圍まれてゐる。そろ／＼坂道になるに皆くたびれたような顔をしてゐる。歩いてゐる中に列を組んだ大勢の學生にあつた。それを以て未だ見ぬ伊香保の町の立派であらうことを想像した。約四分の三位進んだ頃に旅館の迎の者が來てゐたので大いに元氣づいた。途中三回休みへと／＼になつて旅館についた。

前に高いと思つた山も此の町と併行してゐる、三里位登つたのである。さつそく湯に入つたが炭酸泉とはまるで泥水みたやうなものである。それより五時半すぎ腹にうまく夕食を食した。皆元氣よく遊んでゐる。

六時より八時まで自由行動でいろ／＼な土産物なごを買つた。いよいよ寝る段になつた。床をのべて皆寝て居る。皆寝られないらしく話聲が絶えない。その中にぐ／＼いびきをかいて居る豪傑も居る。朝は五時頃起きてしまつた。食事の後榛名湖に向つた。廻り廻つて一生懸命登り、水清冷なる湖畔に出で御茶屋にむすびの素食をした。いふいふな樹木の葉が紅葉して實に美しい。榛名富士に「キネン」を假名で松か何かの木でつくつてある。歸りは坂でどん／＼降つた。伊香保より電車で澁川に向つた。此の電車興味をそゝること甚だしかつた。森林の中を大ゆれにゆれて始終曲りくねつてゆく。

とても東京の電車なごでは見ること出来ない。いよいよ樂しかりし町と別れて列車は走り出した。

高崎で辨當を分配した。皆つかれたらしく元氣がない。

午後八時十五分、父母のおわします地の關門たる上野へついた。驛前で萬歳を三唱の後歸途についた。あゝ家路は近い樂しき二日の旅行よ。眼前に榛名富士が浮んで來る。

日光・中禪寺湖方面

修學旅行記

一一B 柳田修治郎

第一日 時は大正十四年十月二十九日午前七時。「ポーツ」と汽笛一聲、澄みきつた朝の大氣を振動させつゝ、一筋の煙に名残りを止めて、なつかしい東都の空より一刻々々と遠ざかる。空は曇つてゐる、お見送り下さつた先生方のお顔が段々小さくなり遂にその朝霧の中に隠されてしまつた。「雨!」。この様な不安もあつたが、併しそこにあの男體の雄姿を想像し、あの華嚴の瀧を思ふ時、そして又あの幸の湖を聯想するとき、忽ちにそんな不安は一掃されて僕等の胸には或一種の強い興奮と緊縮とを覺えたのであつた。

列車は益々其の速度をはやめてぐん／＼走つてゆく。町から村へ、林から森へ、田から畑へと……。その内に車内は急に活氣を呈する。雑談にふけるもの、歌を歌ふもの、カルタ、トランプに興ずるもの、菓子をはうばる者それぞれ各自の本能を情しけもなく發揮する。

「山が見えた、山が!!山が!!。」T君の絶叫に驚かされて皆の視線は期せずしてその方に轉ぜられた。

「あら、あれは富士山だ。」なんてとんでもない答へをして一同を哄笑させるものがある。

修學旅行記事

「やあ、ことによるご筑波かも知れないぜ!!」五君が横槍を入れる。しばらくはこの山が話題に止る。今迄はその姿をひそめてみた山も今は何の憚り気もなくその姿を眼前にはつきりと現出する。山は續く、話は續く、時々楽しさうな笑聲が車外にまで洩れる。その内に

「あれが男體だな。」

誰かゞ獨言を云ふ。今度は誰も異議を唱へるものがない「うん!嬉しいな、あんな高い山に登るんだな!だが頂上はどんなに寒いかなあ。」窓によりかゝつたY君が相槌を打ちながら感心してゐる。

宇都宮からはだん／＼登りになるらしい。

汽車は萎々たる喬木林の中を眞黒な煙を吐きながら喘ぎ／＼縫ふ様に走つて行く。車がカタコト、カタコトと單調な音調を作る。時々ま淵走つたやうな汽笛の音が喬木林の木の隙間を通して周圍の山の方に吸ひこまれる。これ等が私をして山國へといふ感を十分に味はしめたのであつた。

日光驛より又電車に乗りうつつた。

ほん／＼にきたない電車だ。まるでマツチ箱の様に釣革は眞黒、天井が低くて頭がつかへさう。こんな電車なら速く御免を被りた

と思つた。

神橋で下りた時、諸君其處で吾々が下車した時先づ第一に吾々の眼界に展開されたものはそも何物? 即ち、其れは大谷川の壯觀そのものである。

激流岩を噛み石を砕き、或は岩に越え飛躍して下る。碧流奔潭眞に名狀の語なしだ。朱塗の神橋と相映するの又一奇。

それから整列して愈々參道を辿る。

三佛堂を第一番に拜觀した。迂廻して東照宮に至る。これは日光三社の一で家康公の廟である。案内者が餘り速く説明するのには弱つた。何だかさつぱり分らない。御水尾天皇の御宸筆にかゝる石の鳥居。十二子を彫刻した五重の塔。唐銅鳥居。境内唯一の白木造りの御厩を見て石段を登らうとする時右の方に見えるのが有名な伊達公の寄進にかゝれる南燈籠である。その外朝鮮・臺灣等からの寄進せられた燈籠等が澤山ある。藥師堂にはあの有名な泣龍が描かれてある。頭の下で手をたたくと鳴いた。不思議だ

しばらく龍とにらめっこをして首を傾けた。長さ八間だといふ、一寸見るまごころが頭だか尾だか分からない。何の仕掛も無ささうだ。愈々以て不思議だ。

有名な陽明門は一に日暮門と云ふ。その妙、その奇、その美、所謂、そのデリケートなる構造と色彩とには思はず感嘆の辭を發せずには居られなかつた。一日中見ても見盡くせぬといふのがこの名のある所以である。

奥の院にある眠猫は豫期したよりもあまり小さいので驚いた。

次には二荒神社、祭神は大己貴命で日光三社の一である。境内には化燈籠がある。金網がかぶせてあつて刀痕らしいものがある。次いで三代將軍家光公の大猷廟の拜觀を終り寶物殿の傍を通つて日光ホテル前に出てこれから電車で馬返まで行くのである。又あゝな電車に二時間も乗るのだといはれてうんざりしてしまつた。然し否が應でも乗らないわけにはいかぬ、仕方なく汚ない釣革にぶらさがつて外の景色に見とれてゐた。田母澤の御用邸を探したがそれらしい物も見當らなかつた。四邊の景色は愈々壯に益々大にせして秋の美を添へつゝ、だん／＼と展開されてきた。

總べての山々は皆紅と黄とによつて色ざられてその間を縁で點綴してゐる。或ひはうすく或は濃く、清冽なる大谷川の水と相對して又一段の風趣を添えた。

おゝその絶景よ!!

馬返より徒歩、愈々御山だ僕等一行の元氣は相變らず激濁としてゐる。そして吾々の意氣は既にこの男體全山を呑んでゐた。僕はなるべく舊道を走つた。木の根にとびつき、草の根をとらへ、石崖を攀じ上り、岩に噛りつき、滑つては起き、起きては走る。僕等三四人の同志は猛進又猛進を續けた。

「吾々はプレイザ・ボーイだ。」

なごゝ氣勢を上げつゝ、既登る。遙か下方に當つて丸島先生のお妻が見える。それにつゞく若武者五六人。

途中磐若方等の瀧を賞しつゝ、尙も坂道を通る。

僕がどん／＼細い道をば進んでいつて、今正に新道に出やうとした時だ。

右は千仞の谷底、左はやはり崖、道さういふも僅に入一人をやつと通すことが出来る程の小徑、その上にもう數歩で行づまりである。前には大岩石が控へても居るし、なかば腐つた木の根が危くさしかゝつてゐる。殆ど交通が妨害されてゐる。通つては實際死

に遭遇するに違ひない。途方にくれてしまつた、併し自分も男子だ。ブレイヴ・ボーイの手前引返すなんてそんな卑怯はいやだ。その内一人が登つた。と、がらん／＼石塊がT君を掠めて下の草の根で止つた。驚いた。石に嘔りついてゐた僕の膝に拳位の石がぶつかつた。「痛いっ。」洋傘が落ちて来る、砂が小砂利と一緒に崩れ落ちてくる。どうやらかうやら友達の手を借りて上り切つた時の嬉しさ。それは何とも名状することを許さぬ。期せずして歡喜の聲が湧上る僕がその岩に縋りついてゐた時は實に實に恐ろしかつたのだ。僕は極度の恐怖を懐かすには居られなかつた、實際あの時を思ひ出すと……あゝ怖ろしかつた。

暫くして五郎兵衛茶屋の先祖五郎兵衛が多大の財をなげうつて開拓したといふ尊い汗と血と涙の結晶たる小徑をひた下りに下つてあの華嚴の瀧壺へと急いだ。鬱然たる林を通り抜けると今度は急坂になつて木の根、石が階段になつてゐる。俯せば底も分らない様な深い谷、見上げる上には巖然たる大岩石が危く差出てる。その下に行くとも自然足の歩みも速くなる。

「やがて物凄い響がすると思つたらそれが即ち白雲の瀧である。」

お、其の偉大なる景よ！

お、偉大なる景よ！

その流れは何百年前否何千年前に起つたか、今後も又何百年否何千年後まで續くことか、それは知らぬが、その間受けては流し流しては受けるその大岩石、知らず、又何をか語る。唯々眞綿を引のしたやう、一度それを汚れなき雪をたぎらし、岩を走りては氷を飛ばす、その時吾人の心に俗氣は一掃され、身は仙郷にあるがごとく唯茫然たるの外はなかつた。

それより三四丁で華嚴の瀧壺に出る。

滔々たるその響きは耳を聳せんばかり、その景は一大掛圖をたらしめた様だ。皆々の感激の極岩上にたつて茫然としてゐる。下は

茫としてわからぬが飛沫はあの岩、この岩をぬらしてどす黒く見える。僕のたつてゐる所まで霧が飛んで来る。直下四十丈巾二十

餘尺瀧壺の深さ三十六尺、落つる水は雪か氷か。

「あれぢや一人はたまらないな」とS君獨言をいつてゐる。

「實際あれぢやたまらないね！」僕が相槌をうつ。傍の清水で口を漱ぎ頭を冷して、五郎兵衛茶屋の處に戻つて腰を下した。

やがてもと来た道を引返し、今日の宿泊處たる伊藤屋を目ざして一目散。向ひの山の中腹には發電所らしい小屋が見える。小屋の電燈がさびしげに灯つてゐる。あの谷、又その山々等がもう晩の仕度にいそしんでゐる。鬱蒼たる木立の隙間に電燈、光りが二つ三つ見え初めた頃十月二十九日、その樂しかつた日も將に暮れなんとしてゐるのだ。

湖畔の電燈、眞黒な林、眞黒な湖、月光に青白く光る舟二三艘がある。かくしてこの山國の歴史を物さびしく語つてゐるかの如くに見えた。

夜。夜は静かに／＼更けて行く……。

第一日終。

第二日

早川喜代司

曉の寒風に夢を破られて時計を見れば短針は正に四時を指してゐた。

窓を開いて外を見るとこはいかに晩秋の雨がしと／＼降つてゐた、一度びは不愉快を感じたが心を取りなほして彼方を見れば群峰は朝霧に包まれ紅葉の色も淡くその影を水面に落して美しい秋の錦を織つてゐる。湖水は鏡の如く静かで幾多の波紋を畫いてその美しい紅葉をちよらしてゐる。

遙か向ふ岸は雲か霞の如く漠然としてゐるで一幅の繪畫そのまゝの絶景である。

やがて五時起床喇叭の時には殆んど寝てゐる者はなく、座敷も廣々として皆何事かガヤ／＼話合つてゐた。雨はなか／＼止みそうもない。

午前八時豫定の如く伊藤旅館を後にして否此の雨奇晴好の中禪寺湖の景を後にして、しつとり濡れた落葉を踏みしめながら喇叭の音勇ま／＼馬返驛へ向つた。

畫尙小暗く生ひ茂つてゐる樹林の中を約二丁ばかり行くと、轟々と瀑音物凄く僕等の耳を破らんばかり、と同時に列は切れた、歩を早めて行くと其處に瀧見茶屋があり、華嚴の瀧の眞上に位して此處より俯瞰する山々の紅葉の美亦何とも彼とも言葉には言ひ盡せぬ。瀧は白布を晒せる如く飛沫は飛んで濛々白雲の如く流れて紅葉の之に映する様！

あゝ何ぞその雄壯なる姿！

向山を下りつゝ群峯の奇を眺め行くと華嚴の瀧の水はさながら白蛇の如く蜿蜒として溪谷を走り、遠く山谷の間を縫ひて紅葉樹の中に消えて行く!!

これがやがては大谷川の溪流になるとか。又紅葉の中に發電所が見える。

僕等は幾度か右折亦左折して下つて馬返に着いた。

馬返驛より霧降の瀧に向ふべく電車で行く者と、徒歩で行く者との二組に別れて神橋へと向つた。

僕は車中の人となり雨中の風光を賞しつゝ間もなく神橋に着いた。

直ちに有志が擧つて霧降の瀧へと向つた。

時正に午前十一時、今迄降つてゐた雨も全く霽れて日本晴の絶好日和となつた。

そして僕等が日光小學校を過ぎ稻荷川の釣橋を渡つて丘上に登つて行く時分には太陽は中天に輝き、ギラ／＼と強い光線を地上に投げた。

尙緩勾配の山坂を登つて行くと道側に子供達の取つた後さ見えて栗が二三個落ちてゐた、實にこれ都會に住む僕等にとつて、自ら秋の風情を思はしめた。

北へ北へと進み二三の爪先上りの坂道を過ぎやがて山頂に達した。

其處は望瀑臺と云つて傍に茶屋があつた、茶屋の傍側には薄、お園子等が供えてあつた、聞けば今晚は十三夜ミカ。

茶屋の屋根は藁葺屋根でその上には草が青々と茂つてゐて如何にも田園趣味をあぢは、された。

北方眼前に白布を懸けたる如く、轟々と百雷の一時に落下するが如き響を爲したる、それぞ即ち華嚴、裏見と共に古來日光三名瀑と數へられてゐる。霧降の瀧である僕等は此處で暫く四方の自然を一時に收めつゝ中食を喫した。

中食を済すやいなや紅葉樹の中を潜つて行くに斷崖絶壁に出た、見渡せば水流二派に分れ巖壁を奔り又數十の小流巖石を縫つて

走り恰も玉簾を懸けたるが如く流沫煙霧を散つて眞に霧降の名に背かず満山爛たる紅葉の偉觀に至つては又是れ天下に冠たるもので到底筆舌の盡す所にあらず實にこれ壯觀雄絶の極地である。

尙短路を下り瀧壺を見て、巖石の今にも落下するかと怪しまれる碧巖を幾度か攀ちてやがて望瀑臺に達した。

そして午後一時霧降の瀧を後にして約四十分にして神橋に着した。

神橋より徒歩にて日光驛に向ひ、午後三時八分僅れの日光を後にして歸途に就いた。

石橋驛を過ぎた頃には太陽は當に西の空に入る頃であつた。

橋を肩に担がら歸つて来る百姓達、彼方の林中や竹籬の中にある百姓家の淡き電燈のまたゝき!

又お月見の支度をしてゐる家々の野趣に富んだ夜景を車窓に眺めなどしつゝ雑談に耽つた。

月は間もなく東の空より盆の如く圓く皓々として夜の世界へと照り出した。

僕等はこの十三夜の月を車中賞しつゝ小山驛附近から夕食を頬張つた。

列車は幾多の停車場を過ぎて南へ南へと進行し、午後七時二十六分豫定の如く上野驛に着いた。

驛前で新井先生の恙なき此の旅行を祝するの辭を述べられ萬歳三唱と共に解散して土産話と土産物を澤山持つて上野の森の探照燈を眺めながら楽しき我が家へと急いだ。

甲信地方見學旅行記

第一日

三〇 佐々木多聞

秋らしい澄えた空に眞砂の様な星がきら／＼と瞬く透徹した夜であつた。中宵の喧騒から少しの静止も見せた大東京は寂として聲はなかつた。星のみが囁いて居た。疲れた十時過ぎの上野驛に、まだ見ぬ憧憬の眸をかゝやかしながら相語る身も心も浮き立つ様に軽やかな一團の學生があつた。それは言ふまでもなく我が三年生H學團である。驛内の總ての重苦しい中に我々若人の聲のみは鎌々の様に軽くもつれ合つた。信州へ!信州へ!この心こそ其夜吾々の味つた一様な心に流ひない。

やがて列を整へて他の乗客よりも一足先に、最前部の客車に這入り、一先づ席をとつて落着いた。汽笛は我等の門出を祝する序曲の如く高く鳴り響いた。發車すると車内は一種の旅行気分とも云ふべき景氣に包まれて軽い昂奮に浸る。皆んなは賑かだつた。硝子一重の外は唯冥々たる闇でイルミネーションの様だつた東京も彼方の後に残され、點々たる灯が時々螢の様にツィ／＼と後

に飛んで行つたが、それも杜絶えて悠々の闇へ強き反逆を試みつゝも汽車は、單調な千鳥一律の音響を奏でながら眞黒の虚空を押し分けて、平坦な關東平野を北に向つてひた走りに走つた。闇に向つて突進する汽車に自分を托して、明日の活動を想ふて眠る者。あまりの昂奮に眠れぬ者。そこには若人のみに與へられたる自由と血氣があつた。

かくして寢苦しかつた一夜は漸く東の空より白んで、霧が淡く立罩めて居る。窓を開ければ朝の冷々とした空氣が上氣した頬を心持よくなせて、寢不足な眼に痛くしみる。霧の切間より田甫や曲つた田舎道等が一層鮮かに見える。總てが北國の秋の朝である。碓氷峠二十六のトンネルも程なく過ぎて輕井澤に着く頃、赫々々輝き出した朝日に霧は見る間もなく晴れて、しつとりと朝露をふくんだ地上のものが露出する。窓近くに起伏する山々は黒々と晴れ上つた空に畫き出された。今日も良い天氣だ。安心する。輕井澤に着いた。皆ブラットフォームに下りて、澄んだ北國の空氣を胸一杯に心ゆくまで吸ひ込んでのびのびとなる。汽車は輕井澤を離れた吹きこむ山氣にぞく／＼して胸震ひする程だ。山間を縫ふて行進を續けた。慶長五年眞田三萬餘の兵を以て、徳川二十餘萬の大兵を喰ひ止めた稀代の名將、田幸村の城下、田市も後に、長野市に到着、正に豫定通り八時十六分。

驛前の廣場で整列、歩を揃へて善光寺に向ふ。比較的綺麗な軒なみ、道路も廣いが交通の繁雜でない故か、何處かゆつたりと落着いた佛都らしい町である。足は輕かつた。此市でも目抜ききの場所と思はれる道路を通つて行くさ、や、上り坂となり、兩側には名物等を賣る店がづらりと軒を連ね少女が盛に黄い聲で呼んで居る、坂を登りきるさ第一の山門で、山内の石疊には人懐っこい鳩の群が歩いて居る。這入つて行くさ屋根の上に飛んでクク……と鳴き平和な遊びを續けて居る。本殿の方は建築中でその宏壯な伽藍を見ることは出来ない。畔蒜先生の話を聞き、それから案内人に連れられて、建物の名前や石燈籠、曲つた柱、繪馬板等について傳説を聞く。そこには永久に人の知ることの許されない神祕が一ぱいに秘されてあるのだ。境内の園に沿ふて小高い丘に出た。此處からは甲信兩雄の古戰場川中島が見えるのだが、薄霧のあつたため見えなかつた。そこから善光寺の裏に出た。裏山は往時上杉謙信の陣地で、敵兵の首を埋めたと云ふ首塚があるそうだ。そとに昔が偲ばれる。眞直に走つた道を行くと善光寺の建立者であると傳へられる善光の墓がある。小さな御堂を背景に蒼蒼と茂つた木の下に卵型の石が置かれてある。そこから町をはなれて急勾配だ。青葉がくれに紅玉のニツ三ツ。

秋とは云へ眞晝に近い太陽は、頭上から直射してじく／＼と汗で氣持悪い。漸く苧堂に達した。こゝは苧堂道心の故事を以て有名な所、途々の家々には林檎と一緒に苧堂道心の人形が列べてあつた。石段を登るさそこに御堂があつた。見渡せば脈々と打續いた連山は紫に霞んで、長野市は足下に見える。自然は沈黙して居た。あまりにも静かであつた。少憩の上吾々は山を下つて本堂前で、信濃名物のそばを食ふべく解散した。

第二日

三B 石井 豊

諏訪温泉の一泊により英氣を養つた一行は八時二十八分諏訪驛を後にし車は馳せ景は變るけれど一行の元氣は更に變りなく十時四十分甲府府に到着しました。停車場、廣場で登山の準備をなしいよいよ御嶽登攀の途につきました。進む事半里餘りで登山口舊道山麓に達します。峻坂をひたおしに登ること數丁ばかりで山腹の茶店に達しました。

晝食をすまして輕装し、金峰山に向ふ。山にそこぞと見えて行くほどに路窮らず、漸く和田峠の頂上に立ちはじめ左手遙か雲煙の間に胸嶽の雄姿を望むを得ました。前方に聳えるのは我々の目指す金峰山御嶽であります。四圍の絶景は曰はん方なく疲れたる一行の元氣は頓に恢復しました。だら／＼坂を降ること數丁ばかりで天神平に到着しました。

眼下數匁深々たる水音に接します金峰山を貫流する荒川の溪流であります。これから御嶽の影は、はじめて奇妙であります。水極つて岩現れ岩のつきる處坦々たる淵があり、淵あれば必ず岩あり、岩あれば必ず砕けて奔馬の様な激流となり只々絶景を嘆稱の中に進みて、小坂を下りた所に人面に似たる奇岩があります。之を人面石と言ひ一行の興味満々として盡きない中に溪流の間に亦一奇岩ありその形駱駝に似て頗る妙であり名付けて駱駝石と言ひます。古松の間に點々として見える握丹の様な楓、紅葉した向岸の木々四圍の秋色今將に開であります。

切り立てた様な長壁その中程よりその姿を清流に望ませ、山風に快く緑の葉を揺せる古松之を天女足掛の松と云ひます。崎嶇として天を衝くばかりに聳えて居る岩があります。登龍の岩と言ひ龍が昇天せんとする様に似て居るのでその名があるのだらうとは友との笑ひぐさでありました。富士石傘松亦夫々見捨て難い路をとること十數丁左手に羅漢橋があり、沿道の奇勝に一異彩を添ふ夢の松島、圓翁碑など早くも過ぎ行けばいつしか左手高く幾百匁の巨巖巍然たる覺圓峰を仰ぎ見、稍しばし石門を潜り恍然たる中昇仙橋上に立つ山嶺の静寂を破つて輕輕たる音あり。音よ何處と足まず／＼進み崩れ落ちむばかりの岩のトンネルを潜り出でました利那時雨の様な雫めぶ瀑水の餘沫あたりに満ちて、日暗く、山厚く疊みて、嵐氣身をおふ、仰ぎ見れば數丈の水柱千雷の一時に落ちる様な激音をたて岩にあたりて玉と砕け雪を散りて數十匁の簾をたれた様な仙娥の瀑となり、岩また岩を重ねて瀧壺を目かけ

て岩よ砕けよ。さばかり狂ひ落ちる様である。

身はこの別境に入り来りましてかの途すがら峻しい巖と激しい流とに驚いた魂は一層その奇に驚くばかり、壯且快なる景我等の拙き言語にては能くつくすことは出来ません。

目的の行動は此處で終りましたけれど未だ時間の餘裕もありましたので各自思ひ思ひに歸途につく者更に進んで道を金櫻神社にとる者もありました。

神社は日本武尊並びに外四座を合祀致せしとのこと、今は藏王権規を祀り修験者の行場として有名であります。かくして歸途につきまして今は景色を稱する元氣も無く、疲れ果てた足を引摺りながら各自只管歸りを急ぐ。和田峠を越す頃より日は最早山の端に沈みかけてあたりは紅に染み始めた。

懐しい御嶽よ およさらば……

茶店に到着した頃は日はとつぷりと暮れ、山の端の嵐氣冷かにひしく、身に透む。

此處で一行は勢ぞろひなして疲れも軍歌に紛らしながら新道を降る。

得難の知れない鳥が山中より闇を過ぎ行き行商歸りらしい樵人の馬に驚いたりして漸く明い甲府の街に達しました。米倉旅館に投宿。

腹いばいにつめ込んで明日の旅を楽しみつ、晝の疲れにぐつぐつと眠りについた。

明くれば三十日。六時起床。八時出發の豫定なりしが夜中急病人の發生、宿屋の手違なきにより市中の見物などに時を過し、一時の列車でいよいよ歸京の途につきました。

第三日

三A 岩 本 喜 一

高山に浴るゝ紅葉の間、玲瓏たる清流のほとり、只々恍惚と足を運んで来た僕等は、未だ覺めない酔を感じながら靜かに石段を下つた。周圍に立ち並ぶ老杉の爲にあたりは薄暗く、僅かに木の間に漏れて光が差し込んで居るばかりだ。この様な中に在る金櫻神社は、一段と奥ゆかしく感じられた。

しばらく休息した後、再び元氣にて歸途に濱いた。暮れ易い山路の日は何時しか暮れ、夕は靜かに道ひよつて来た。夕霧の中を

すかして、別れ行く景色をば、あれこれと名指して名残りを惜んで居る間に、はや日はさつぷりと暮れ果て、しまつた。そして夜の帳は、美はしい御嶽の奇勝を全く包んでしまつて、只荒川の流のみが、深山を震はして響くばかりであつた。この響きは、何も見えない夜に、歩行を続ける僕等にとつては唯一の慰安であつた。尙又この響きは、晝間見たばかりのあの絶景をば、髣髴と目前に浮にしめた。

其の頃雨がシト／＼と降り出して来た。にぢみ出す汗と共に雨が上氣した頬を氣味悪く傳はる。する／＼とすべる足もとをふみしめて、U字形に曲折した道を、上つたり下つたりして、やうやく和田峠に辿り着いた。峠の茶屋には畔藤先生が居られた。又友の多くの類も僕等を迎えて居つた。新たに人数の増した僕等は、闇の中に轟々と直立して居る松の間を、下へ／＼と小石をふで下つた。いつしか雨はやんだ前方にチラ／＼と、懐かしい甲府市の灯が隣き出した。其の夜僕等は市の中央にある米倉旅館に寝られた。足をのばした。

翌日朝甲府市を見學する。市には昔の東京を偲ばせる鐵道馬車が通じて居た。甲府城又は小山城と言つた城址、舞鶴公園を見物して見た。丁度天主ともおほしき處に、山縣有明公の塔が高く立つて居た。此處からは市中が一眸の中に見渡された。眼を遙か右手の方に轉ずると、其處には懐かしの山々が、碧空に高く聳えて居つた。

其食後みやげの葡萄籠を手にして、一時七分發の汽車に乗る。

あの雑沓の雰圍氣から脱して、心ゆくまで僕等の心を和らけ、そしてある何物かを與へてくれた、あの御嶽の連山も、遙か後方になつてしまつた。汽車は名残りの煙りを長くひいて進む。

「勝沼や馬子も葡萄を食ひながら」

誰も知つて居る此の芭蕉の句で名高い、葡萄の産地勝沼も過ぎ去つて、汽車は笹子峠に差しかゝつた。やがて暗黒な隧道をくゞり出ると猿橋驛である。此處を離れると忽ち左側の窓に、幾つもの黒い頭が集まる。急いで窓からカメラを出して居る者もある。やがて汽車は日本三橋の一つである猿橋の前を、ガタゴトと走り過ぎた。橋は深い數匁の谷の上に架かつて居た。其の遙か下方の谷底には、白い泡が躍らしながら溪流が、音も無く流れて居た。之等はほんの一瞬間、チラリと姿を僕等の眼前に見せたゞけであつた。

いつしか八王も過ぎてしまつて、繁華な東京に近くなつた頃、談笑の内に日は西山に没して、一片の雲もない夕空には、九月

十三夜の月が、恰も長途の旅行を祝禮する様に、車窓を青白く仄かに照し始めた。(終)

東北地方修學旅行記

第一日。十月二十六日

上野驛——平泉——松島觀月樓

四A 松崎幸吉

惠まれた好日和に限りなく心の喜びを感じつゝ我等若人の群は軽き旅装に身を托し、灯點すころの上野驛へ急いだ。早驛前には御引率の諸先生方の姿が見えた。やがて豫定時刻迄には元氣溢るゝ連中ばかり歡喜の色に燃えてゐる。間もなく人員點呼も終り定められた箱へと驛員に導かれた。そして車中に一行おさまりはしたが、旅行の最初に誰れも經驗する様に少頃は沈着いた氣持になれない。で思ひ／＼にうら懐しく電燈の光映ゆる上野の街を旅立つ數日の名残を惜んだ。そして御見送りの加納先生に口々に厚く御禮を申し御別れしたが、其の時一行の顔には云ひ知らぬ感激が満ちた。午後六時三十分、一聲の汽笛と共に暮靄立ち込む上野の街を後に主任の武内先生、中村先生、生明先生及び富田先生方の御引率の下に八十餘名の健兒は旅行の途に就いた。汽車が驛を離れた頃、初めて沈着いて腰を下した。日暮里、田端を過ぐる頃汽車は暫しの間都の夜を照らす電燈の光と相平行した。そして間もなく地上の總ての物は秋の靜寂さに包まれてしまひ、車のさしる音のみそれを破つて進行した。軌道近く並ぶ田舎家が折り折り飛ぶ様にして闇の中に消えて行く。車中の一行は、早、議論、談話に花を咲かせ、至る所に愉快な笑ひ聲が起る。又一方には、りんど、ばな、菓子等をほゞばる連中も少くない。驛員さん屢々車内を掃除に来るが直ぐ散らかる、御苦勞千萬。それにハトモニカの音が絶えず聞えて實に賑やかな時が可成連續する。併し先生から明日疲れれるから早く休めといふ御注意があつて其の後はやゝ靜かになり、夜の更けるにつれて誰れも彼も次第に夢の境に入る。汽車の單調な音友の鼾それが自分の身に交はる／＼聞へて來る、尙も汽車は闇の武蔵野をひた走る。

第二日。十月二十七日。

朝霧に包まれ死んだかの様に寂寥な仙臺驛に停車したのは午前五時半、東北地方だけに水の如く澄んだ秋の朝の氣は身に沁みて寒い。昨晚遅くまで騒いだ連中も寢不足の様な顔をして起きる。急いで洗面所に行き、ネヂをひねると非常に熱い湯が迸り出した。に一行大喜び。やがて再び車内に沈着き辨當の箱を握る頃には霧も刻々に消え消せ、空も次第に澄んできて、投げられた黄金の征矢に宮城野一體の野も山も照り出され總ての事物が甦つたものゝ様に輝き出した。汽車は四十分の停車後仙臺驛を後に志す平泉へと向ふ。その途中風光の特に賞するものとならない。只單調な景のみ繰り返される。松島驛も過ぎて仙臺驛後二時間餘にして平泉の手前なる一の關を経た。一の關は岩手縣の南門として可成り大きい町だ。併し何處か暗い感じのする町である。午前九時半には豫定通り平泉驛に一行無事についた。下車後驛前で人員點呼が行はれたが何等變りない、先づ結構。直ぐに一行は中尊寺に向ふ事となつたが途々見る所、何處も同じ様に田と畑とで彼の利鎌寶刀も皆田園や土塊に埋れたらしく、此處に愛なく情なく只荒涼寂寥な光景に葦のそよぎのみ事問ふすが、彼の「三代の榮耀一炊の夢、大門の跡は一里此方であり」云々の二百餘年前の紀行文が今でも其のまゝ、役立つ淋びしさに物悲しくさへなつた。一行は驛から道を西北にとつたが斯くまで荒廢した状況とあの最後の悲惨極まる歴史とを思ひ起すと殊更胸に迫つて來る何物かあつた。村外れを出てから小半時淋しい路を行き、そして寂した杉並木の坂路に懸つた。此の坂の頂近い所が中尊寺の境内なのである。一行は急いで坂を上つたので皆豆粒稱の大汗を切りに流してゐる。一行先づ中尊寺を拜觀する。寺は慈覺大師の開基によるさうである。門を入れば右手に諸皇族方御手植の松が數々ある。寺は古雅な構である。次に寶物殿を拜觀す。寶物殿は外観はあまり見榮もないが内には國寶を名の付く物が數々ある。併し此處も彼處も流の跡わびしく燦然としてさしも光彩を放つた金色堂も春秋七百の星霜を重ねて當時の華美は大部失せて淋しげに杉木立の間に立て残る。是等は總て時といふものゝ爲めに破壊されて行くらしい。次に經堂へ行く、途中路傍に「五月雨の降り残してや光堂」と芭蕉翁の刻んだ句碑がある。辨慶堂を見たが例の七つ道具を背に負ひ、いかめしい裝飾をした辨慶の立像と失意轉軻の英雄源義經の像と並び立つを見ては主従最後の奮戦の狀景が眼前に浮んで暫し無量の感慨に打たれた。少頃して後境内の後に出来れば眺望絶佳。衣川其の他の古蹟が明らかに指點される。彼の朱欄玉樓の礎は何處へか姿をかくしてしまつたのに山川は依然として恰も人間無常と儚さを冷笑してをるかの様に見えた。一行は平泉見學後、時を豫定より早めて松島に行くためと來た道を通つて平泉驛に引き返へした。やがて驛前の茶店で晝食を使ひ、午後一時三十分の上り列車に各自乗し、松島に向ふ。車中昨夜の眠不足の爲かあちらこちらに睡魔に襲はれ船を漕いでをる者がある。午後三時二十分、汽車は松島驛についた、驛に本線では稀に見る綺麗な驛で真白い壁、青い柱等珍しく印象深い。驛前で人員點呼を行ひ、特に先生から以後の諸注意があつた。一行は此處に來て初めて懐しい光に接する事が出来るかと思へば心もおどる。驛前から直ぐに田舎風の電車二臺に乗り込み松島灣に向つふ。微風に吹か

れつ、生氣のこもつた様に青く澄み切つた入江傳へに走る事三十分餘、直接濱に行かず途中下車し、松島近海の眺望を一時に收め得る。云ふ見晴しに進んだ。其處で一行は好景を賞しつ少頃休憩した。此處から眺めると松島の明媚極まる風光が我等の氣分をいやが上にもそ、らせ我私らず感嘆の聲を洩した。海は渺々として極りなく只一線縋かに天と海との境界を定む。海上には島多く、名に負ふ如く島毎に松多くその翠りは濃くして實に青海原と對照の妙を得てをる。又遠く鹽釜迎ひの小汽船が白帆と入れ交つて浮ぶも趣深く、到底僕等の筆や言葉で盡くされぬ美観を呈してゐる。只此の眺め飽きない壯觀を造り出した造化神の力の偉大なるに驚異するのみ。カメラを持、ものは取りふに收めて微笑んでゐる。少憩の後坂下り四五丁して松島灣頭に着いた。そして宿の案内者に連れられ直ぐに五大堂を見物した、堂は彼の征夷大將軍とて有名な坂上田村麿の創建にかゝるやうで、物古しい床しい感じがある。此の他の見物は明日の楽しみとして一先海岸の觀月樓に靴の紐を解き二階の室にくつろぎ一行茶菓に興じた。夕飯を過してから散歩に出かけた、商店をあさる者が大部ある。が此の時は早何處も夕間に込められて暗く寂としてをる。殊に海上の暗くなるのは早く島々の影も見わけ難い、暗い海上の遙かなる彼方の底には寂しい哀しいものが秘められてゐる様な思ひがして淡い旅愁を感じた。五大堂附近迄行くと靜肅且つ壯嚴な夜の光景が力強く腦裡に染み込んで来た。それから宿に歸つて都の友に旅の便りをすべく手紙を認めた。そして後宿の風呂に入つて軽い旅の疲を癒したが、其の時の氣分は實に好い。床に就こうと室に来て見ると一行好機逸すべからずで盛んに枕ぶつけの戦鬪を續けて仲々に止みそうもなかつたが疲れたと見えてやがて皆床の中にもぐり込み夢路を辿つた。以上

第三日。十月二十八日。

松島渡——鹽釜見學——仙臺市見學同市宿泊

四B 相 島 捷 彦

「未だ早いぢやないか。」「靜かにしろい。」不意に僕の鼓膜を震動させて腦髓深く反響した。「あ、修學旅行の續きだな。」と僕は其の瞬間一人で頷いた。「なんだもう朝か。」否外は未だ眞暗闇。硝子戸の外には電燈が凍りさうな冷い朝露でにじんだ光をぼーつと力無く重たい／＼闇の空氣に吸はせてゆく。昨夜は晩迄皆が騒いで眠れなかつた。少しは遅く迄眠れるだらうと思つた一縷の望も騒ぎ手は依然として騒ぎ手だから断念せざるを得ぬ。よく人が「そんなに寝てゐると黒目がさろけますよ。」と云ふが今の僕は全然此の反對だ。僕の眼は漉くて／＼とけるどころではない。漉の中に乾葡萄が泳いでゐると思へばい。

然し塵の中に従客と控へてゐるのは嫌いだから漉々起さる事にした。冷い水で其漉を拭くと早速館前の廣場に出る。濡つた小砂利の間からは踏めば消えさうな緞い銀の玉を宿らした可愛い芝が覗いてゐる。日の出には少々餘裕がある。併し東隅の光が濃くなるにつれて四顧は漸く明るくなる。さつき迄目前の灣は漉へた様に水波一つ起らぬ底知れぬ淵に見られた。島影松影一つだに漆の中に封じ籠めて表はさす背後の連山も一樣の虚無に封じて天地山水此れ天狗の翻弄かと思はれた。然るに日の一步は數百の島を躍らせ數千の松樹を靡かす。刻一刻、分又分。島と島との間に燃ゆる火焰は秋空高く嘗め盡さんと火の手を伸ばしてゆく。既に逃げ後れや鬪雲は忽焉として狭霧に化し一村の蘆に煙る。斯くして漆黒の水を銀波と化せしめ、迂る島に金箔を負はし、高からんとする空を追ひ遁れんとする雲に緞く、熾烈に熾烈を加へたる金塊は忽焉として離水し、其玲瓏たる光華は斯く目前に展開したる熾烈中の緊張味と沈黙中の壯嚴味との裡に忽如本年本月本日の森羅萬象を盡く透徹照破したのである。

味噌と湯とがゆき分れてゐる味噌汁を箸で無難作に拵拌して其の波瀾が治まらぬうちにぐつと飲む。兎に角朝飯の感じを受けながら御膳を離れる。一行全部身支度を整へた後五大堂を背景に記念の撮影をやり、其の足で直に瑞巖寺を参拜する。寺の門は此の宿屋のすぐ後に在る。右側の老杉鬱蒼と繁茂してゐる處に野多の洞窟がある。

此處で昔僧が難行苦行専ら修行を積んだのださうだ。堂前の水出觀音の恩澤に浴して渴を癒やしてから堂内を拜觀する。吾々滅多に踏めぬ様に滑かな廻廊がある。此れに沿つて貞山公の像、玉座、孔雀の間、鷹の間など其他種々の寶物が安置してある。一行は兩班に分れて雜僧に説明して貰ふ。僅十歳位の辯に實に流暢な聲で高速度に説明と云ふよりは暗誦をやる。どうか珍しいものを拜觀し終つてから四散して樓に歸る。暫くしてから辨當を夫々後生大事に抱へつ、樓前の波止場からモーターボート二隻に曳かれる和船數隻に分乗する。日は既に高い。涯しもない秋の空には綿をちぎつて投げた様な雲が點々として帆を張り向ふの方へ／＼と流れて行く。聽て吾々を乗せた船は此の波一つ無い松島灣の靜寂を破つて紫の水を銀の泡に蹴つて迂り出したのである。ふりかへればはや松島の町——觀月樓も五大堂も瑞巖寺も皆箱庭の如く小さく朝霧の中に霞んで了つてゐる。

「松島や松の叢立ち岩がねに根ざしそめしは神の御代かも」

大小數多の島嶼は奇異萬態、巖巖錯峙、似龍伏虎而も老松蟠曲して緩かに土壤を嚼み巖石を抱き忽ち落下轉倒せんとしてゐる。

「近き島あらはれ出ても速き島未だねぶれりあさ霧の中に」

吾が船を壅塞防禦せんとする一巨島、忽焉として右に飛び左に散じ、渙然として數島、吾が進路を開く。開きて碧水を流し、狭ま

りて藍を湛へ、或は明るき影を倒に映し、或は暗き影を重く描す。八百八島總て烟波の中に出没して松翠愈々濃く、白帆を點々として布置し、海鷗を波頭に放ちたるとは相映帶して宛然一幅の畫圖を展開したると疑はれて實に筆述遠く盡す事を得ぬ。船中等しく奇を競ひ妙を争ふ景趣に吾を失ひ或は船頭の説明を傾聴し、或は指示に従ひ反問、答辨實に自然を教室とし自然を資料としたる鋭敏なる修學旅行に他ならぬのである。「あ、此處から見えます、それあの島影の向ふに見えるのが金華山です。此處から二十里の沖合にあります。あの宮戸島の向ふは茫々たる太平洋です。」「學生さん、松島を只美しいとばかり見て居ては駄目です。松島の松は土のない岩の上に立つてゐるのです。」「勿論、東北のヅウ／＼は吾々には多少むづかしいが此の賤しき船頭として日稼ぎをするとは云へ此の純真な自然を相手に櫓を持つ彼は一大自然の優美を材料として熱誠なる形容と辯舌とを奮ふ一大自然科学者ではなくてはならぬ。教鞭の代りに櫓を執る吾々の先生でなくてはならぬ。故に吾々は此れを修學旅行の有意義なる一端として而も精神的にも肉體的にも大なる修養ありと考へねばならぬ。」「やあ魚だ。」「吾が旅行團を歓迎するが如く先導するが如く吾が船と共に走る魚は卒然船中に而も誰かの靴に躍り入つた。モーターボートはさつきから前になり後になりして水を蹴つてゆく。向ふのボートは二隻の和船を曳行し、こつちは一隻の和船だから速いに定つてゐる。

兎角人間はこんな時に屹度競争心を起す。大抵は此方の船が前になる……皆が心で萬歳を唱へる。するさ向ふは苦笑する……にきまつてゐる。こんな時竹内先生が最前の魚をエイツと向ふの船を目がけてお投げになる。感服敬服。吾々は心中感嘆詞を發する平生テニスの修行がお積みになつてゐるせいからやんと船の中に落ちたんだもの。すると向ふは日の丸の扇を射られた氣持で、でも等しく船端を叩き度い氣持になる。「なんて愉快なんだらう。これは今こうしてゐる吾々にしか言へぬ様な氣がしてならぬ。あの煤烟の多い單調な汽車に揺られ徒に水氣ない褐色の大地を凝視してゐるのみで何の風趣もない旅行よりも碧空碧水翠松翠巖なんの汚濁もない自然を向ふに廻してこんな詩趣を翫味し得る方がどれだけ吾々の心を満足にしたか知れないんだもの。然し此れは鹽釜港に接近するに従つて否定してもよい、いくら仙臺市の外港だつてかう頻繁に船舶輻輳して透明なる水を油と濁し明媚なる風光を忽ちに汚さんとしてゐるんでは詩人は因より吾々だつて泣き度くなつちまふ。なんだか水溜りの様なごた／＼した波止場ともつかぬ處から約一時間の楽しい夢から醒めた様な、なんとなく名残惜しい様な氣持で仕方なく第一歩を鹽釜の地に掛ける。三町位歩けば鹽釜神社に到達する。三百に近い急な石段を此れでこそ御利益があるんだなと、はあ／＼呼吸をきらしつゝ登つてゆく。やうやく階の無い處に出る。石燈籠がある。狛犬の石像がある。朱塗りの柵について右に這入れば即ち正面は國幣中社鹽釜神社

で祭神は鹽釜神、左右兩宮には武甕槌大神と經津主大神との天孫降臨當時の功神を祀つてある。別宮には煮鹽の事を司られた鹽土翁大神を祭神とする。吾々は先づ玉の汗を拭つてから神前に叩頭く。境内には林子平の作つた日時計が雨露しになつてゐる。石の盤面にはローマ數字で十二迄刻んである。そして鐵の棒が直角に曲つて立つてゐる。計つて見ると其の影が十一のあたりに落ちてゐた。参拜後勝雲樓の前で永らく待ちこがれてゐた辨當に箸をさける。餘り柔かでない沙魚の甘露煮も物かはどん／＼蒸み下してしまふ。此時だけは例の咀嚼翫味は容赦して貰ひたかつた。食ふに其れだけが體内の細胞を形成してゆくことに思はれる。一時半迄の鹽釜驛集合にはまだ早すぎると思つたから殆んど殿を勞めて腰を上げる。ぶら／＼歩きで御釜神社を参詣する。料金一錢也を拂つて柵外より覗く。平べつたい直徑四五尺位のお釜が四つ兩露しになつてゐる。蓋なんぞはない。其中には水が溜つて底には赤錆が層をなして當時の手柄とか面影とかを物語つて居らぬとは云ひ難い。

すぐに驛に向ふ。どうも鹽釜の町は餘り立派ではないらしい。小さい町だ。大體から最初の印象がよくない。併し水道があるには感心だ。古來から神聖なる土地而も仙臺の門戸なる此の土地が今少し發展しても嘘ではないだらう。

「鹽釜の浦吹く風に霧はれて八十島かけて澄める月影」

何卒永久に此の儘であれと鹽釜全體に向つて叫び度い。一時五十五分發の汽車は二時二十七分無事仙臺驛に着く。

愈々東北第一の仙臺市に踏みこんだんだなと思ふと何となく愉快だ。驛前の大泉支店に皆の荷物を預け此れを本店に送つて貰ふ事にして店の者の案内によつて歩きだす。電車はない。人馬の通り方だつて少い。だから東京の様に神經を光らして歩く必要のないのが極く嬉しい。先づ驛の西北の榴岡公園をつ、切つて考勝寺内の彼の伊達家の柱石伽羅千代萩岡の墓を成程と柵外より参拜してから青葉城址の方へと足を運ぶ。途すがら縣廳、東北帝國大學、第二高等學校、控訴院等數多の高莊なる建物を見る。鹽釜は廣瀬川に架した大橋を渡り終れば、右は第二師團の兵營、左は一面の廣場、此の奥の高臺には川に平行して青葉城址がある。登る徑は軌轍の如くに風雨に侵蝕され、或は磐石磊々とし或は盤根累々として蹉跎すること屢々である。黄昏近い此の森は彌が上にも薄暗く蕭瑟として吹く秋風は愁然として咏歎の面影がある。無言で登る吾々は忽ちに冷濕と化する汗と枯葉におく露とにそぼ濡れて言ひ知れぬ凄愴の思ひに戰慄する。丘山に達したつて何も見る物はない。東に面して仙臺市を俯瞰することが出来る位なものである。老杉は轟々天を衝いて蔓草は徒らに跋扈して當時を誇る金城も湯池も天守の礎も見出すことは出来ぬ。此れが宏圖雄略權勢ならびなき英雄の一炊の夢の跡かと思へば如何に人生 慶祥富貴は夢幻泡沬的なるかを染々と感じる。一門の榮華が盡きると倅

臣が出る。蕭蕭の憂は此處に於て生ずる。時に忠臣が出て其の豺狼を拂はうとする。月には盈虚がある。禍福は糾へる繩く吉は凶の痛恨ありと言ふ。嗚呼、榮枯盛衰は世の常なりを思へば轉々感なきを得ぬのである。天地は閑寂として暮雲は低く垂れ赫焉たる夕陽は既に桑榆に没せんとしてゐる。再び重たい足を引きづりつゝ、下山して右曲左折幾多の若を過ぎつて遂に草鞋の紐を宿屋の土間に解くことを得た。食後入浴して終日の疲を充分抜き友数名の者と散歩する。九時半迄には全部歸宿してお互に劉秀をきめ込みました。そして反側子なんて無い様にして眠り始めたのがさう十二時頃でしたらうねえ。(終)

第四日。十月二十九日

仙臺市發——鹽原——上野驛解散。

四〇 堂 寺 利 又

朝未だ暗く四方は夜の幕の中に昏々と眠つてゐる。

突如警笛一聲自働車ボムブが通過した。時計を見ると未だ三時、警笛に目を醒ましたのか、ひそ／＼話する聲が聞えて来る。何時だかとふと目を醒ますと、一同は何處へ行つたのか只二三人が隅に寝てゐる。慌て、飛起きて洗面所へ行く。口からはく呼

氣は白く煙の様に消えて行く。五時半朝食をする。朝食を終り一同旅館の前に整列したのは其れから一時間の後であつた。爽やかな朝の空氣の中を十町にして仙臺驛に着く。午前七時二十五分、我等を乗せた列車は、汽笛と共に仙臺驛を離れて西那須野驛に向つた。太陽はきら／＼輝いて白雲一つない。

空は青。地は黄に薄紫の山々を送りては迎へ汽車は一散にひた走れば、黄は動いて黄金の波を生じ、紫は變じてや、黒く、須臾にして老杉の森現はると見る間に汽笛一聲高く叫べば、群鳥驚いて散じ、一團の黑影は遙か彼方の山嶺に飛んで行く。車内はひつそりとして聲なく、長浜の旅に倦れたのか長い欠伸をして、ほんやり外を眺めてゐる友もゐる。

窓に移る單調な景色に飽いて宿屋より用意して來た辨當を食べる。四方が急に暗くなつたかと思ふと汽車の音響が以前にまして烈しくなつた。隧道へ入つたのだ。と直に思つた。時計を出して見る。

十秒……二十秒未だ出ない。薄い電氣の光がほんやりと針に光つてゐる。友二三人側へ來て時計を覗いた。「何秒だ。」「もう一分餘。僕はこう答へて尙も針の進むものを眺めた。二分五秒にして汽車は轟々と隧道を出た。窓を開けて出口を見ると、煙の煙管より出るように白い煙がもく／＼と汽車の屋根を這ひ乍ら山の枝へかゝつて行く。かくして宮城野平野の一部を横ぎつて白河驛を過

ぎると未開な野蠻國から歐米の文明國へ來た様に、陰鬱な奥羽地方を後に、關東大平野が現れて來た。

二時三十分西那須野驛着。驛と屋根續きの電車出發所へ行き直ちに二臺連結電車に分乘、新鹽原に向ふ。

此の電車の走る所は所謂「武士の矢並つくるふ籠手の上に霞たばしる那須の篠原」の一部である。

電車は暫く人家と並んで行き、所々田畑を夾む頃になれば人家盡きて林來り、林去れば草木の隧道の如き中をつき進む。茫漠たる那須大曠原をひた走りに走つて、懸て坂路にかゝつて來た。速度は急に減じて來る。ぐる／＼曲る毎に、齒をきり／＼噛む様な音を立て、十町ばかり後河坂を下り、電車は靜かに新鹽原終點に着いた。

時に三時四十分。一同整列、直ちに徒歩にて温泉場に行く。

是からは、彼の尾崎紅葉氏の筆になる名文其の儘の神祕的な秋の自然美を現してゐる。

入勝最初の景なる回顧橋、回顧瀧を過ぎて進むと、道は次第に細くなり左は青、黄、紅色様の衣着て立つ山々で境して、何十丈とも知れぬ深い谷川に臨んでゐる。

血の滴らんばかりの紅葉は進むに従ひて次第に濃まり、遙か彼方に潺湲の音を立て、流れる箒川が石に碎け、岩にあたつて銀煙を上げ、小さな瀧を造る頃になると全山燃ゆる如く赤く映えて來る。稚兒ヶ瀧、白雲洞、材木岩等の勝景は是等の間に或は底知れぬ青き瀧を湛え、或は黒き洞を覗かせ、又は虎踞して天に嘯く。

全景總て仙境誰かよく其の美を云ひ表す事が出來よう。一同はもう散々になつて、二三の友が遙かの岩かどを廻る邊りには自分と友二人を除いては人の影もない。日は早や山の彼方に没し夜の暗が次第／＼に頭上から壓して來る。斯くして疲れた足をひきずりながら、一里十町の道を歩いて、湯の氣に煙る福渡戸の町に着き、磯屋旅館におちついたのは五時四十分であつた。

荷物を床の間に置き欄干から外を眺める。あの何十丈の下に流れてゐた小さな箒川は今直ぐ目の前にせ、らぎの音を立て、旅館の礎を洗つてゐるではないか。蜿蜒と飛瀑を造つて流れる川の上み手には福渡戸がもやの中にもほ／＼と浮んでゐる。

小憩の後温泉に浸る。手拭片手にぶらりと行くと脱衣場には早、二三人の衣服が脱いであつた。戸を開けて入ると湯氣で一杯になつたラヂウム温泉の香がふんと鼻をつく。足元は暗くてつる／＼してゐる。湯船は一間四方位の物を二つ並べたものである。

そつと入つてみると湯は腰切位いで少しぬるい。首迄入れて、じつと四邊を見廻した。薄暗い電燈が眠つてゐる様に四方を照らしてゐる。足を伸し、頭を端に載せてじつと目をつぶる。山深い温泉場に初めて來た感じが胸一杯になつて來る。

湯から上り着物を着乍ら鏡を見る。耳迄眞紅になり白い眼だけがきら／＼光つてゐる。六時半々飯が出る。食、自由散歩を許された。夜の暮は既に深く、月の影も星の姿も見えない。紅の楓、青い木の葉は黒い袋に包まれ定山の間もなく、地は天に連つて只點々たる螢の光の如き電燈のみ暗の中にくつきり輝いてゐる。化石、繪葉書等を買つて宿に歸り五六の友と ترامプを遊ぶ。再び湯に入り、熱い身體を其の備蒲團の上に横へた。時に九時半。

電氣は間もなく消えた。騒ぎ疲れた人々は一人で夢を食つてゐる。この長かつた旅行も明日で愈々終りである。上野驛が現れた。それから電車、町の様子と次第に現れて、我が家の影が見えた時吾心は既に夢の國へ遊んで居たのだ。

第五日。十月三十日

ひたひたと身邊に迫る冷氣にふと目を醒すと、室内は薄暗く友は皆よく寝てゐる。時計を見ると五時。そつと起きて洗面所へ行く。ふと外を見ると、空は鉛色の如く黒ずんで、屋根は水でも渡した様に濡れてゐる。「おやつ」と思つて尙よく見ると、絹糸の様な細い雨が音もなく煙るが如く降つてゐる。「雨だ。」僕は其の場にじつ／＼佇んだ。軒からぼたり／＼雫がたれてゐる。餘程前に降つたものと見えて雫の落ちる所は、所々深く穴があいてゐる。冷氣でぞく／＼と身にしみみる。間もなく夜は全く明け離れて對岸の森さへはつきりと見えて來た。或る友は傘をさして雨の中を清流中の石から石へと傳はつてゐた。

豫定では八町ばかり箒川を廻り鹽原の絶景を集むと云ふ鹽原橋附近を探る筈であつたが惜しい哉雨の爲中止せざるを得なかつた。歸京の準備全くなり、午前九時雨を冒して湯の里を出發した。箒川は水が一杯に溢れて、凄しい程音を立て、下手へ流れてゐる。粗末な隧道を出て暫く行くと雨は次第に小止みになり、鉛色の雲の上に白い雲が顔を出し始めた。そしてそれが一寸動くと、太陽の鈍い光がさつと木の間に光つた。霧の様な雨は未だ「ほつ／＼」と沫を上げて向ふの木々に降り、日光に光つて銀粉を散らす様に見える。木の葉末から落ちる雫は水晶の様に澄んで見える。

暫く行く内に雨は止む。塵を一杯にあびてゐた全山は降りしきる雨にすつかりと其の塵を洗ひ流して、後には楓、松、杉等が或は眞紅に、或は眞青に、清い雨にしつ／＼と濡れて或は高く、或は低く白い雲と相接してゐる。

「停車坐愛楓林晚、霜葉紅拾二月花」の杜牧詩(但し轉句、結句)とこの景は一方は文章、一方は實形の差のみで、其の間には一枚の白紙だに入れる事は出来まい。

四方は驛まり返つて吾等の足音のみが木霊に響いて聞えて來る。一雨毎に其の美を増す仙境を夢心で過ぎ、新鹽原に着いたのは

午前十時である。停車場の前に居る五六人の紅葉賣りが切りに勤める。停車場内は同じ觀光者で一杯である。間もなく吾々一同の分乗した買ひ切り二臺電車は美しき鹽原を後にして迂る様に西那須野驛へ向つて走り出した。時に十一時。網棚の上にも友人の手にも膝にもあつた黄色、桃色、紅色や青みか／＼つた楓等が電車の進むにつれて、ゆら／＼とゆらめく。日はほんやりと陽炎の如く遙の山嶺を白めてゐる。

車内では寢る者多く、車の動搖は次第／＼に烈しくなる。十一時四十分電車は西那須野驛に着く。眠い目を擦すり乍らブラツトホームに汽車を待つ。聽て上野行列車は、轟々と長蛇の如く向ふの角に現はれたかと思ふ。早ビタリと驛に着いた。零時九分列車は驛夫の合と同時に懐しい東京に向つて奔馬の様に馳け出した。

窓に廻り行く景色を見ながら持參の辨當を開く。「君はあれは桑だね」と僕はA君に尋ねた。

A君顔を擧めて「君あれは桐だよ一なにあれでも桑の卵だと僕は思はず笑つた。

小山驛、大宮驛を過ると流石に汽車は都の人で満された。赤羽、日暮里等矢つぎ早に過ぎると窓からの様子は急に變つた。赤く熟した柿の木が井戸の側から根を砲り出て、廣々とした黄金の波が秋風に靡く様は、何處迄續くか分らない。黒い瓦、黒ずんだ亜鉛板等が黒黒な煙や黄色い煙の中にあえぐ都の景色に變つたのである。

もうグートルも巻いた。荷物も棚から下した。車内は急にざわ／＼して來た。胸が妙にざ／＼する。「ぼう」と長い警笛の響と共に「シュー」と一瞬間に右手を省線電車が通つた。斯くして吾等を載せた列車は、無事に悠々と上野驛に入つた。時に午後四時二十分。一同改札口を出ると、H君、O君等は迎に出て來て呉れた。

「やあ」、「やあ」嬉しい握手を交した。一同直ちに構内に整列。嚴正な點呼を行ふ。一行八十餘名中一名の異常もない。後各組先生より夫々御話があり、此處に五日間に渡る修學旅行も無事に終了し、敬禮を最後に愉快に一同解散。直接には古色蒼然たる遺物により、實際に古の有様に直面する感起し、森々たる大海に浮ぶ松島の景色を見ては、自然の美の價值を知り、間接には師弟朋友間の親情を増し敬慕の念を一層深くするのは修學旅行において他にないと思ふ。旅行の功も又偉大なるものである。終

關西地方修學旅行記

東京より二見まで

五B 中村 魁

月は武蔵野原頭を照らして無数の星は輝やいて静かに細い光を地上にながして居る。あゝ待ちに待つたる日焦れた日の十月二十五日は遂ひに來た。ゲートル巻いた勇まし姿が二三驛頭に現はれ出すと互ひに無事にて旅行が終る様にと祈る心が見える。客を呼ぶ聲も人の聲も一つの音楽になつて驛の情勢をそへてゐる。やがて人員點呼も終つて威勢のよい若人は客車に宛けて行く。車内は急に静けさから騒もささきに變つてしまつた。「M君、O君」と呼ぶ聲も忙しい。橋村先生が家事の都合上旅行をおやめになつた事は我等を失望させたが我等の心の底には赤い燃え立つ様な意気がひそんで居た。やがて先生や在校生數氏と我等との間に「御機嫌よう」御無事にの言葉も交はされて汽車は静かに滑り出した。關西旅行の第一日は寒い晩秋の寒さが静かに窓から流れて來る。車内はポンプや雑談に耽ける人で賑はしい。品川も何時しか過ぎて汽車は町から村、村から町へさ暗の中に吸ひ込まれて行く。發車のベルの音も旅の淋しみを慰めて呉れる様で半ばゆめ路の中に入つて居る様だ。最早箱根路に差かゝつた。秋虫の聲もいと哀れにて汽車の煙が火に照られて赤くなつたり消えてあたりが暗くなつたりするばかりだ。静岡も濱松も過ぎ豊橋の邊より一人二人目をさまし出す。大府の驛の名も聞きながしに第一日の踏地名古屋に汽車が着いたのは午前六時半頃であつた。驛前の廣場に集つて點呼をなして名古屋城へと向かふ。町は静かだ。實に中京の感を我等に思はしめる。十四五分にして城に達した。金鐘の光も朝日にかがやき風光がよくて一尾張名古屋は城で持つ。の名に恥ぢないと思はしめた。直ちに廣小路に出る。車夫が自慢さうに説明して居る。熱田神宮に参拝しなかつたことはいたく我等を失望させた。名古屋驛に向ふ。少し休みが許されたので皆なは親しい友達に手紙を書いたりした。驛にて荒川校長先生に會ふ。これから伊勢と思へばさうに何んだか緊張を帯びさせた。龜山にて乗りかへて行く山驛に着いたのは一時頃であつた。直ちに外宮に向かふ。あゝ久しく憧がれて居た所に来たと思ひながら不圖見ると神々しい外宮の前に來て居る。小砂利を引きつめた庭も神木も何一つとして神々しくもないものはない。校長先生よりお話しがあつて列を作つて入る。口や手を洗ひこゝろにまでも洗つて静かに最敬禮した時何んとも云へぬ身全體神々しい氣分になつて「何事のお在しますか」の歌も成程と感ぜしめた。後に神宮巡使より稱讃の言葉を貰つた。電車にて内宮に行く。二十分許りにして着く。

前の家に荷物を預け宇治橋を渡つて校長先生より「唯神様の前に行つて頭を下けてお願ひするのがほんとに神を敬ふのではない。神様は願ひを聞いて下されはしない、私等は神様の前に行つて心を入れかへ將來立派な人間となつて國にお役に立つ様になつてまいります」お誓ひ申すのがほんとに神様にお参りした價値があるのだ。云はれた。さくさく音を立て、我等は口ばかりでなく心まで清らかにと五十鈴川にて、洗らひ二列をして向かふ。老杉がすく／＼と立つて神々しい、二の鳥居を潜つて登る。外玉垣御門「だ静かにおごそかにぬかづいた。柏手の響もあたりにひびいて益々神しさを増さしめた。橋の袂で寫眞を取り二見に向ふ。電車の速力が早いにはおそろいた。六時半頃二見に着く。直ちに松島屋旅館に宿る。夕食に腹をふくらまして三々伍々連れ立つて散歩に出た。ささえの焼いたのに舌鼓をうつて太平洋のうち寄せる波の音を聞きながら旅の疲れと明日早く起きなければならぬので早く寝た。潮の音もさあ／＼と枕許に聞へて來る。我等の旅を慰めて來れる様に。(一九二六、一、一二)

二見より京都まで

池田 均

心好い聖地の朝がほのほのと夢を疊して、起き出づれば又なくうれしい秋の汀である。廣重めいた濱の老松、磯の飛沫に漕ぎ出でる漁夫の小舟、いまだ明けやらぬ空の銀輝し。

程近い夫婦岩に登る日の出を美しく見て、一路奈良への列車に投ずる。懶い秋の陽光をあびながら、汽車は夢とトランプと唄とを乗せて、唯無心に二條の銀線を進る。近くは紅葉落葉の山麓、遠くは紫に煙る山脈、薄さし招く曠原を抜け、雪花玉を散る谿谷を飛び、さては松坂、さては津と名残りの旅情を一片の白煙に託して、汽車は笠置山行宮の下をかすめる。脚下數丈、綠翠を湛へた木津川の溪流が盡きると奈良である。

驛からの一本道に、鹿の角を賣る店がある。美しい春日人形を賣る店がある。静かな街に静かな人の足どり、何と古都寧樂の香りが漂ふではないか。道が開けて正面に猿澤の池を見る。池畔の柳の倒影に、かの采女の物語りを憶ひ出して、一片の旅愁を認め

る。池畔から望み得る興福寺の五重の塔を目當てに、静寂を産む杉林の坂を登つて行くと、積る落葉を踏みわけて古風な神主を憶はせる小鹿が、なつかしけに集つて來る。其の温貌に美しい毛並、じつと見つめる小さな瞳に限りない愛着の念を感ずる。なほ數町の杉林を抜けるに、南都七大寺に指折られる名利興福寺である。今は昔、聖武帝の建立になると云ふ東金堂も藁は破れ壁は落ち、

圓柱の丹塗りも削げて昔時の輝を偲ぶべくもなく、唯境内の花の松が綠濃 姿を楚々として榮華の昔を憶ひ出顔である。道を左手に取つて數町目前に東大寺の剎廊を見る。流石、華嚴宗の本山總國分寺の名に恥ぢず、威大な南大門を潜つて石疊を進む。眞正面の大佛殿へ入ると有名な大佛の尊像がある。線香の煙に咽びながら、見上げるに見る内に膨脹して眼界を遮る。今更ながら其の壯大さに驚かされて、大佛開眼當時の壯麗さも忍ばれる。大佛殿には大佛尊像の外如意輪觀世音菩薩の像、虚空藏菩薩の像、多聞天の像、及び廣目天の像などが安置されてある。偶像禮拜の遺物は思はれるが、しかし偉大なる宗教上の藝術品として永遠の國寶であらう。

東大寺を出て、手向山八幡宮に詣り、春日神社に向ふ。古木の暗を抜けて小坂を上下し二の鳥居を潜ると、名にし負ふ春日燈籠丹塗りの社殿、あてやかな春日神社が森の中に浮び出て居る。廻廊を歩む巫女、神宮を眞白く映し出したであらう無数の燈籠に、もう秋の陽は淡く隈取つて居る。

古木に囲まれた幽邃な二月堂、三月堂を訪れて、此の大きな森を出ると其處に和やかに微笑むもの、それは奈良の若人等の限り無く愛する嫩草山である。

詩に歌にさては文章に憧れを秘めつゝ、春にもなれば馬酔木咲くと聞く嫩草山である。なだらかな曲線の全山を包むものは唯軟かい草のみで、中腹に登れば近くに東大寺の蔓を見、頂上に登れば眼下は古都奈良の鳥瞰圖である。斜面に寝轉んで春日の森を眼めなが遠く平城朝の佛を追憶する時、お隣の三笠山に眞白な弓張月が夢の様。忙がしい旅路にも大空はやはり眼にしみる。陽はもう紅炎を西に沈めて、見下す奈良の町に灯が入つた。宵の明星と其の影を競ふかの様に。

盡きぬ名残りを嫩草山の夕につけて。有名な菊一文字の刀鍛冶の前を通り、三々五々驛路を辿る。此の邊一帶は奈良公園の地で老杉古木は天を摩し、日暮しは今山の彼方から大奈良に夜の幕を引いて居る。雄鹿は大木の窟に妻を呼び子を呼び友を呼んで、すごとくと暗に消える。芝地の瓦斯燈に青く灯がこもつて、潤んだ空気を頼はして居る。

奈良の夜はあまりに静かだ。或ひは此の都が持つ特有の清楚とか神秘とか云ふ様なものが、熱情を吹き消してしまふのかも知れない。芝居の書き割りめいた軒續きに、或ひは酒杯を求め、或は春日人形を求めて、夜道ならぬ夜汽車。ひたぶるに京路を辿る。大阪と奈良の間に在つて、京都は又事實上中性の都だ。大阪の野車喧騒がなく、奈良の野懸佛具が少ない。奈良よりも確に温い力が感じられる。

驛前の廣場に輝く紅い電氣の廣告燈、電車のきしる音、夕刊賣りの鈴、さては人々のざんざめき、總てが都會情緒であらう。何んと云つても我々が遂に屈服する都會の零團氣であらう。

程近い旅館鶴屋に旅装を解くと、離された小舟は喜々として、京極へ四條へ、祇園へ。

目映ゆい程の友禪、西陣に、そゞろ歩む佳人の美しさに、加茂の流れの星影に、目を見張つて歸つて來たのが十一時。

京の夜は更けやすい。音も無く夜霧が湧いて、眞暗に寝た街から街へ、頭に傘、手に四ツ竹、小さな箱を肩から掛けた辻占賣りが、關の五本松を好い喉で唄ひながら霧から現はれて、霧へ消えて行く。

哀調が胸にせまる。淋しい旅愁は、又甘い胸の悩みでも。何處の鐘だらう十二時を知らせるのは、友の寢息は安らかな夢路を畫いて。

京都より東京へ

五〇 島崎重樹

京の街は何處もまだ靜かに眠つてゐた。

霧が一杯に立ちこめて東山の黒い塔も見えない。

加茂川に沿ふて植えられた柳が吐息してゐるかの様に、柔かに俯垂れてゐる。

夜の名残の燭だけが白く力なく消えがてに瞬いて見るからに打ち沈んだでも何處となく柔かい懐しみを持った古都の情緒を味ひながら朝霧の中を桃山へ――

桃山驛へ下車して美しい砂利を敷きつめた参道をゆく。青々した常盤木に囲まれた廣い参道に柔かい秋の陽さしも心地よく先帝御在世の昔を偲び崇高な氣分にしたゞ黙して歩いた。

ざくざくと砂利を踏む靴音のみが邊の靜寂を破る。

御陵の前になかついた時云ひ知れぬ敬虔の念に胸を押さへつけられる様な氣がした。

眞白な玉柵。これを圍む松の緑、この神域を守るによさはしい大自然のたゞすまひ。おゝなんこいふ清楚なそして尊い姿であらう。見渡せば和泉、攝津の山々は遠く近く薄紫に匂ひ、美しい秋晴れの空には刷毛で書いた様が雲が浮んでゐる。

うら悲しみさゝぎ山を中にして大天地に秋さびにけり。 (前田利定)

神ながら我が大君の眠りいます伏見の御山尊くもあるか。 (原三溪)

それより東陵に照憲皇太后の御跡を偲び南に下つて乃木神社の前に出る。先帝の御跡慕ひて逝きませし軍神の靈に祈つて、寶物を拜觀すると再び車中の人となつてまた京都へ引き返す。

三條大橋から電車で大津に赴く。

高い石段を上ると三井寺である。

湖が秋の陽を受けて燦銀のやうに輝いて見える。

明るいなかに何處もなくうらがなしさを持つた美しい湖。かすみの物語秘めし湖を眺めた時、しばし美しい追想に耽つて苦むした石垣のほとりに佇んでゐた。

三々五々連れ立つて奥の院の側にある辨慶の釣鐘を見にゆく。

齒の抜けた老人が訛な記でその由來なるものを説明してくれた。山寺の奥の薄暗い室の中で老人の因果物語は何處となく相應しい様な氣がした。

三井寺を出るに硫水である。湖から引いた水がすさまじい勢で流れて行く。

水上の方を見ると琵琶湖が薄く光つて見える。

三艘の舟がいよ／＼硫水を下る――

岸を離れると直ぐに眞暗なトンネルに入る。

ぎい／＼ときしる櫓の聲。水に映る赤い灯。

なん／＼いふ美しさだらう。あゝそしてなんといふ惱ましきであらう。

この灯の流れてゆく小暗き影に悲しき漂泊の子の奏でる咽ぶが如く訴へるが如く、また歎くが如きわびしい唄でも微かに聞えて來そうな惱ましき。

赤い灯がゆらぐ。ぎい／＼と櫓の音が淋しくひびく。トンネルを出ると急に邊が明るくなる。

日の光がまぶしい。ひた／＼と波がよせる處に秋草が一杯に亂れてゐる。

落葉した土境の處に朝鮮人の子が野菊を摘みながら、しよんほり立つてゐたのも一入旅情をそよる。硫水下りも終つて南禪寺へ歩を運ぶ。

高い樓門に石川五右衛門の佛をゑがいて、岡崎公園を経て青き葺、丹塗の柱、繪の如き平安神宮を後に智恩院へ急ぐ。

淨土宗の總本山。洛東第一の巨刹だけあつて、なか／＼壯大なものである。案内者に導かれて鶯張りの廻廊をゆく。踏んでみると、げきよ、げきよといふ音がする。國寶のかす／＼を見て廻る。その數の多いのに一驚した。

圓山公園、八坂神社を経て電車を驅つて北野天満宮に參詣する。

たくさんな梅の古木が枝を交へてゐる。

時々吹いて來る風に落葉が、かさ／＼と音を立てるばかりで訪ふ者も極く稀れな靜かな社。

砂塵の多い田舎道を通つて金閣寺へ――

多數な寶物を見せてもらつてから、三層樓の金閣に上る。金は全く割けて了つて雅趣に富んだ庭園泉石の外は足利氏全盛の榮華を偲ぶすもなかつた。

私達が一日の見學を終つて疲れた身體を宿やに運ぶ頃。靜かに暮れてゆく古都の空には夕の帳が仄かに薄絹を披けたやうに匂ひわたつて、街には泣き濡れた女の瞳のやうに灯がうす赤くほつと瞬き初めてゐた。

一風呂浴びてから夜の情緒を味ふべく灯の街に憧れ出る。

賑やかな街。夜の新京極！

敷きつめられた登の上を、利休の前齒をキイ／＼云はせながら、小きざみに歩いてゆく者。男が通る、女が通る。靴の音、雪駄

キラ／＼輝く燭。渦巻く人の波。

私は何時かわづらはしい人ごみから逃れて、青白い月光を浴びて一人加茂川の畔に佇んでゐた。

雜踏々想はせる様に遠くの方で赤や青の燭がまつたく。商家に遠い此の邊はもうすつかり靜まりかへつて、月の光のみがいたづらに青くまるで海草の一杯はえた海底の岩蔭にでも居る様な氣がする。

水面は更けゆく夜と共に水のやうに澄んだ青い光を浴びて水の精の亂舞にまかせて、波立つてゐるのではないだらうか。

ひた／＼と波がよせる。河岸の柳がふるへてゐる。

加茂川！お、この名に私はどんなに憧れて来たことか。この名を呼ぶ度に私は廣重の錦繪でも見る様な色彩と情緒を心に描ながら何時も美しい追想に耽つたのであつた。

登をさそひ軒を並べたる京の街車中ゆるやかに行く平安の朝。川風涼しき夏の宵龍頭鶴首の船に乗り管絃の調も高く綾羅絢爛の限りを盡くして歡樂に酔ひ驕奢に耽りたる大宮人のみやび姿、併しこつた私の追憶も今は儚ない過ぎし日の幻影として心に存する計りで加茂川の流れも時代と共に益々混濁の淵となり此處に軍められた情緒もだん／＼に廢滅してゆくのではないだらうか。

美しい橋、擬寶珠にたれか、つた橋畔の柳。

あはれこの橋の上の過ぎ古は美はしき後の君や宮女達が蓮歩をよらに緩なす錦の裳をひき、金泥蒔きしかどやかな帝輿が行列美しく渡つたであらうものを……

きつと此の夜半の静寂に過ぎし日の美しき夢を描きつゝ近きにし春を歎いてゐることであらう。

波がひた／＼音たてゝ慕ひよる。月の光が益々澄んで来た。

加茂川の水を眺めても思ふさすらひびとにもな問ひそね (吉井 男)

懐しき橋の名などを數ふるもさすらひびとのありのすさびか (同 人)

土産の人形や繪葉書などを持つて宿屋に歸つたのは十二時近くだつた。

離れも眠るのが惜しいとみへて床の上でランプをしたり友への便りを書いたりしてゐた。

床に入つてもなかく寝つかれない。色々の佛が浮ぶ。あゝでも草臥れたなあ……

(第五日)

「さよなら」「あゝさよなら」……

「えらうおかまひもしません……また今度来ておくれやす……」

「さよなら」愛嬌のよい宿の人と別れと告げて、まだすつかり明けきらない温氣を含んだ静かな街を通つて最後の京見物に出かける。豊國神社に詣で、桃山城にあつたといふ唐門や、朝鮮征伐の時切り取つて来た耳を埋めたといふ耳塚などを見てから方廣寺に行き關ヶ原の戦亂を捲き起した國家安康の銘のある梵鐘や木造の大佛様を見て西大谷を経て清水寺へと赴く。

この邊一帶は鳥部野で苔むした墳墓がたくさん並んでゐる。歌舞伎で名高いお俊傳兵衛の墓には四時参詣者が絶えぬ。

静かな空氣の中に仄かな匂ひが流れゆく水のやうに漂つて来る。

楓がすつかり紅葉して秩の陽さしもなごやかな清水寺に詣でる。結構壯麗を極めた本堂を通つて洛中第一の眺望の地と云はれる舞臺に立つ――

美しい京の街、山に、樹に、水に飽くことを知らぬ美しいながめ。先を急ぐので緩くりしてゐられない。残念ながら又今度にゆづつて高樓を下つて道々月照上人や西郷隆盛の碑などを見て外に出る。

だら／＼坂の途中に清水焼を賣る店がたくさん軒を並べてゐる。

「お土産たくさんね」と云はれた言葉をおもひ出して品定め忙しく二品、三品を求めらる。

初旅の京の土産と陶器の塔なご買ひぬ清水坂に。(根岸光子)

京都に於ける最後の見學場所たる三十三間堂では昔の人が通し矢をしたと云ふ大矢敷の射場や佛像の澤山ある薄暗い氣持の悪い處を坊さんの案内で見て歩く。處々に國寶と書いた札が下つてゐた。

これで大體京都見物も済んだわけだ。慌しかつたけれども懐しい一日間……

美しい京の街よ、立ち去り難い思ひ出の數々を止めて次の泊へと旅立つてゆかねばならない私達。

人もなつゝこい微笑と共に迎へてくれた京の街よ。さようなら……

もしも私達が若き日の懐しき想ひ出をぐりかへす時があるならば、數々の物語秘めし我が胸の想ひ出のアルバムに見出すであらうそれ等の山よ、川よ、家よ、誰れよ彼れよ、さようなら……

七條大橋から京坂電車に乗つて浪花の地へと急ぐ。天満橋に下車すると砂塵のバツバと舞ひ上る道を蹴或不落といはれた大坂城址に歩を運ぶ。

城門を潜ると苔むした石垣の天然石が昔を語り顔に残つてゐるのも何となくうら悲しく、草荻の葉末におく露の如く果敢なく散つていつた幾多の將士の末路を思はせられてせざるに涙を禁じえない。天主閣に上れば浪花の天地は一目に見渡される。

灰色の空。林立する煙突の數。忙しく往き來する車馬。一杯に立ちこめた家並。さすが日本一の工業都市だとなつてなげかせる。

豊食を濟ます時分からボツ／＼雨が降り出して来た。雨に濡れながら四天王寺に参詣する。我が國佛教の最初のお寺だそうなの。

聖徳皇太子額徳鐘といふ大梵鐘や龜の池寺を見てから午後四時までに梅田驛集合の事で僅かの自由行動の時間を何れも浪花情緒を

修學旅行記事

五五

味ふべく思ひ／＼の方に歩を運ぶ。

午後三時半、未だ集合の時間には充分間があるのに最早たいてい集つてゐる。

送る人、送られる人。土産物を一杯手にした若人の群。奈良へ京都へ七日間の慌しい旅にも少しも疲れた色もなく皆元気で汽車に乗込んだ。わざ／＼送つて来て下さつた先輩の方々や後に残る友の誰れ彼れと窓から温い別れの辭がかはされる。いよ／＼東京へ歸るんだ。四時二十五分！汽車は靜かにプラットフォームを離つた。

段々／＼さかつてゆく煙の都。大聲に叫ぶ者、樂しそ／＼に取りとめのない話に興ずる者。ハーモニカを吹く、皆元気で車中はとて賑やかだ。私はそつと窓を開けて靜かに暮れてゆく平野の起伏地を眺めた。上氣した頬に雨氣を含んだ冷たい風が心地よく當るまだ小雨がシト／＼降つてゐる。糸のやうな雨脚がかすかな音を落葉の上に残して木立から丘の方へと走つてゆくのだつた。

岐阜に着く時分には短かい秋の日はすつかり暮れて了つて、ぬば玉の暗は森も、畑も、家も、野もすつかりおほひかくして了つた。暗い曠野の處々に赤い灯がテラ／＼輝いて見える。雨は何時の間にか上つて、澄みきつた秋の夜空には青い星が一杯に瞬いてゐる。

河岸へ買ひ出しにゆく哥兄弟が威勢よく車を引き出す時分には私達は無事なつかしい東京へ歸りついて、わざわざお出迎下さつた校長先生や、橋村先生や親しい友の誰れ彼れと一週間の顔を合はせたのであつた。

かへり来て二日三日はまづはれる旅の心のなつかしきかな (金子薫園)
終りたる旅をみかへる淋しさに誘はれてまた旅をしぞおもふ (若山牧水)

此の拙き文を結ぶに當り御多忙中わざ／＼お出かけ下さつて我々の爲め種々お世話下さいました校長及び終始懇切に御指導下さつて豫期以上の成功を收めしむる様御努力下さいました萩原、櫻井兩先生に對して心からお禮申上げます。

校友會記事

- 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

Various faint vertical text columns on the left page, likely bleed-through or secondary content.

學藝部

委員 五A 道明 敏雄
五B 大島 正安

菊花薫る十一月廿二日(日)震災後巍然として江東の一角に建てられた校舎の講堂に於て震災後第二回の學藝會が開かれた。當日は天氣晴朗にして生徒は早朝より校庭に集まつてゐた。校門より少しはいつた所に五A 福島君の設計の下に五年の裝飾委員が貴重な二週間の努力によつて作られた桃色のアーチが立つてゐる。講堂の入口には加藤先生が學藝會と御書きになつた五〇鈴木君の製作にかかる額がかかつてゐる。振鈴が鳴つて全生徒は講堂にはいつた。

講堂は四方紅白の幕でかこまれ萬國旗が入りまじつて吊されてあつた非常にきれいである。午前九時になるや學藝部委員大島君の流暢な開會の辭によつて學藝會の扉は開かれた。プログラムは次の如し。

- (一) 開會の辭……………五A 大島 正安君
- (二) 漢文朗讀……………一A 齋藤 壽一君
- (三) 英語對話…Losing the way…一E 田中 土方君

- (四) 演說……………自己ノ妻ヲ見ヨ……………三C 加藤源三郎君
- (五) 英語讀誦…The sheep herd boy and the king……………三C 石川信太郎君
- (六) 國文朗讀……………一D 高田 正君
- (七) 演說……………帝國……………二A 久松 茂君
- (八) 英語對話…In the game……………一A 生徒 八人
- (九) 漢文朗讀松下の聯壁……………一C 吉田孝三郎君
- (一〇) 英語讀誦……………四A 永山 秀雄君
- (一一) 國文朗讀……………三B 原田 芳華君
- (一二) 演說……………四B 岡田 治良君
- (一三) 席畫……………一年生徒 七人
- (一四) 英語對話…Spelling game……………一C 生徒 十二人
- (一五) 漢文讀誦……………四A 岩瀬四五六君

(四) 演說……………自己ノ妻ヲ見ヨ……………三C 加藤源三郎君
(五) 英語讀誦…The sheep herd boy and the king……………三C 石川信太郎君
(六) 國文朗讀……………一D 高田 正君
(七) 演說……………帝國……………二A 久松 茂君
本日あつた演說の内が一番論旨が徹底し且音聲が良く下級生としてはなかく上手であつた。

(八) 英語對話…In the game……………一A 生徒 八人
(九) 漢文朗讀松下の聯壁……………一C 吉田孝三郎君
(一〇) 英語讀誦……………四A 永山 秀雄君
永山君は發音態度も普通であつたがクラウン四卷中の數頁にわたる文章を一語もつかへることなくすらくと云つたのには感心する。
(一一) 國文朗讀……………三B 原田 芳華君
(一二) 演說……………四B 岡田 治良君
(一三) 席畫……………一年生徒 七人
生徒七人は席畫と呼ばれるや直ぐにをの／＼わかれて直ちに美しい風景を畫いたのは一年生としては上手である。
(一四) 英語對話…Spelling game……………一C 生徒 十二人
(一五) 漢文讀誦……………四A 岩瀬四五六君

- (十六) 唱歌……………四A 佐藤 兵次君
- (十七) 國文朗讀……………一E 湯淺 正造君
- (十八) 演說……………黒潮を望みて……………一五C 鈴木龜太郎君
- (十九) 英語對話…Asking the way……………一C 門脇 島二君
- (二〇) 漢文讀誦……………四C 飯岡豊次郎君
- (二一) 英語讀誦……………三A 阿佐美元三郎君
- (二二) 國文話方…太白山の激戦……………一E 熊田五 郎君
- (二三) 演說…無常の世に處して……………四A 山田 知男君
- (二四) 英語對話…At the telephone……………一A 笹川 渡邊、吉岡君三人は大體に於いて發音態度は普通の方だ。
- (二五) 英語讀誦…Hood of sweet porridge……………一E 山田君は態度も良く音聲も良く通つたが不斷の雄辯會にやるのよりも下手に見えた。

- (二六) 國文朗讀……………三A 日野島德彌君
- (二七) 英語對話……………一E 澤田 櫻井君
- (二八) 英語對話……………一D 生徒 八人
- (二九) 演說……………五B 福士 清君
- (三〇) 琵琶……………四A 松崎 幸吉君
- (三一) 音樂……………本校ハーモニカバンド
- (三二) 講談……………乃木將軍……………桃川 若燕君

(二六) 國文朗讀……………三A 日野島德彌君
植原君は態度は非常に良く發音もよくわかり又文章も面白く本日中の白眉であつた。
(二七) 英語對話……………一E 澤田 櫻井君
態度發音も一年生としては普通の方だ。
(二八) 英語對話……………一D 生徒 八人
一年生にしては態度發音よく上出來の方だ。
(二九) 演說……………五B 福士 清君
松崎君は琵琶はなかく堂に入つたもので時間があつたので橋大隊長を演奏し皆の者はしんとして聞いてみた。
(三〇) 琵琶……………四A 松崎 幸吉君
琵琶が終るや豫定時間よりも早く午前のプログラムが終つたので午後零時二十五分迄休憩した。
(三一) 音樂……………本校ハーモニカバンド
吉川樂長指揮棒を一振するや本校の校歌が演奏せられつづいて數曲の演奏ありて約五十分にて終る。
(三二) 講談……………乃木將軍……………桃川 若燕君

若燕氏は巧に乃木將軍の人格を講談し皆しんとして話を聞
いてゐた。

(三三) 閉會の辭……………橋村部長
此桃川氏の講談終るや部長橋村先生の閉會の辭があつて無事
に學藝の扉はとぢられた。

本日の入賞者は次の如し

- 一等五〇 植原直記 一D 高田 久 二A 久松 茂
- 二等四A 永山秀雄 一年生徒七人 一E 湯淺正造
- 三A 阿佐美元一郎 一D 生徒八人
- 三等四〇 飯岡豊次郎 四A 山田知男 二A 笹川渡邊
- 吉岡 三A 日野島徳彌 一E 澤田 櫻井。

去年と同様に校舎に小學校作品本校生徒の地圖圖畫測圖英語
字習字の展覽會があり又特に荻原先生の關西旅行滿洲朝鮮支那
旅行の展覽會があつた。

入賞者は次の如し

- 地圖一等五〇 末藤郡四郎 二等四〇 堂寺利文三
 - 三等三A 貝塚 實
 - 測圖三等五A 武市靜一
 - 英語字貳等二C 陳 忠和 三等一D 清水 繁
 - 圖畫一等五A 皆川四郎 二等四A 小松良平
 - 三B 光瀬一郎 三等二C 大島賢一
- 學藝會終つて後、各學年生の苦心の結果たる階上三階へと行

く人が多かつた事。

まづ三階南角三年の裝飾武蔵野の秋
巧みに教室を草深き林立の武蔵野と化せし手腕の凡ならざるを
賞す。たゞおしむ事は蟲の聲のきこへざりし事である。

次に五年有志の、地獄極樂へと歩をむける。なんとした騒ぎ
か。行くも引くもならない人の浪の中にもまれながらやつこ入
口にたどりつく。

やれうれしや、と思ふまもなくまつくらな中に入る、迷宮を
さぐりながらここかしこにあがる悲鳴にまや肝をひやす。でも
やつと五年の裝飾室に入る、と入口に大きく、極樂とある、成
程極樂だつた。

そこを出て、生徒作品室に入る者、屋上に登つて、くれて行
く秋の日をながめるもの。みんなの顔に満足の色のただよふの
をみて、長い準備時の苦勞もわすれた。

(委員 五A 道明敏雄記)

辯論部

——(役員)——

- 部長 渡長五郎先生 同 廣瀬渡先生
- 委員 五年 三宅英夫、福士清、仙石良郎、鈴木龜太郎
- 委員 四年 山田知男、佐藤兵治、浦野信太郎、田代茂守

辯士派遣

沈滞の底から燃え上つた中等學校雄辯界は今や總ての復興に
先立ちて吾人の活壇場を輝してより良き強き舞臺を形造つた。
都下中等學校否な全國的にも押しも押されぬ位置を保ちつ、あ
る吾が部は一時に全國の覇者竹澤君を始めとし、花形辯士數名
を活社會に出したるは祝福すべき事でもあるが、一方何んとな
く物足りない感もあつた。新學期責任觀念に立つて一心に江東
の三階に火の出る如き熱辯を揚げた新時代の武器に目覺めて集
ひ來れる新入部員將に百餘名、共に相和し寸分も其の建築の
努力を休めなかつた。其の努力の結果は各方面よりの辯士招待
狀の舞臺に於て堂々他校辯士を壓し猛烈なる批判、下品な彌次
の中に常に沈着なる態度を持し天晴れ日大中の名に恥なかつた
と共に自由の學園の江東健兒の眞價を充分輝した。然しながら
惜しむべきは一等賞の獲得未だ見ざる事なれどそは決して部の
評價の眞の代物ではなからう。

五月十七日 東京高等師範學校主催全國中等學校懸賞雄辯大會

榮光と屈辱との彼方に……………五A 仙石 良郎君

○惜しむべきかな講堂の廣大なるに比し聲量の少きを寧ろ
音聲が練習のため枯れて居たのだ。

五月三日 明治學院中學主催全關東中等學校雄辯大會へ
赤土に立てる農夫……………五A 大島 嶺一君

校友會記事

五月廿三日 青山師範主催全國中等學校雄辯大會へ

世に埋もる人のために……………四A 山田 知男君

○懸賞なき故花形辯士も一等三呼はれざるを惜む

五月廿四日 日本醫專主催第二回都下中等學校懸賞雄辯大會へ

當來社會の文化へ……………五A 仙石 良郎君

○好漢よく吐けど賞に洩れた

五月廿四日 浦和高等學校主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ

新文化への道……………五B 三宅 英夫君

○優賞カツプの所有校名學校として稱讃せられた日大中
の老練の士君は順番も折悪しく音聲も凋枯し充分に技
量を發揮し得なかつたのは實に残念至極。

六月三日 早稻田第一高等學院主催全關東中等學校雄辯大會へ

國民的創作の時代……………五B 三宅 英夫君

六月十日 東洋商業主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ

信 仰……………五B 福士 清君

○同君は北國青森の片田舎にて退學後農業に従事し居り
しが再び復校し最初の獅子吼。

(優賞三名に入賞す)

六月十三日 明治大學主催全國中等學校懸賞雄辯大會へ

我等何處に行くべきか……………四A 山田 知男君

○應援には先聲伊藤、松本、杉本の諸氏見え殊に滿堂に
溢るゝ怒鳴りの中に赤き幼兒の如き應援の一聲、天日

六一

の虹の如し、それは本校の年若きデモステラニス連中曰く
三間根山、渡邊他の諸兄揃ひ、同君の雄辯恰も敵無きが
如し。

(優賞七名に入賞す)

七月一日 全關東中等學校雄辯聯盟發會式へ
新文化建設のために……………五B 三宅 英夫君

十月三日 學習院主催全關東中等學校雄辯大會に左之花形辯士
を派遣す
立てよ若人……………四C 浦野信太郎君

○同君之熱辯火を吐く如き感あるは良く日大中の熱血兒
花形辯士の名に恥ぢなかつた自重ノ。

十月二日 都文館中學校主催全關東中等學校懸賞雄辯大會に左
の辯士を派遣す
黒潮に臨みて……………五A 鈴木龜太郎君

○同君初陣の此の日萬丈の氣を吐き都下の老練の士を斷
然凌ぎ優賞七名中に入賞せり。

十月四日 東京醫專主催全關東中等學校雄辯大會へ
巖頭に立ちて……………四A 田代 茂守君

○君の同僚を驚す猛辯の好箇の試金石は此の日だ其の
報遂に八人中の入賞者中に入る年若き壇上の君の姿實
に雄辯其の物であつた。

十月十日 日本中學校主催全關東中等學校雄辯大會に
内を顧みて外を見よ……………五B 福士 清君
十月廿六日 世田谷中等學校雄辯大會へ
難關を切り通せ……………五B 福士 清君
○第二等賞に入賞す

十月三十一日 高輪中學校主催全關東中等學校雄辯大會へ
偶 感……………五B 福士 清君

十一月十六日 早稲田實業主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ
勇躍き叫び……………五B 三宅 英夫君(本選手トシテ)

大自然の聲……………四A 山田 知男君(番外トシテ)

○三宅君は優秀五名に入賞す山田君は番外として取扱は
れ二人共に入賞せざるは遺憾だつた。

【校内大會】

江東の學舎に三百の新入生を持つた吾等は一段の激導に
務めねばならぬ。此の時に當りて豊百餘名の新入部員を
加へる我が辯論部は新進氣鋭の精選せられたる辯士の若
き獅子吼を先づ聞くべしだ。

六月四日 春季校内懸賞雄辯大會は大講堂に於て開催さる
プロگرام……………五A 仙石 良郎君

動機に就いて……………一A 中澤 利雄君

必ずしも成功を尊しとせず……………一C 菊地 治雄君
吾等の行ふべき道……………一C 羽生 順一君
所感……………一A 飯田 晃君

自動的なれ能動的なれ……………四A 佐藤 兵次君
十月二十三日 東洋大學主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ
力ある聲を叫ばしめよ……………五B 三宅 英夫君

○真に力ある優秀者五名に入賞す
十月十五日 豊山中學校主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ
立てよ若人……………五B 福士 清君

○其の一貫せる論旨熱し卓上のカツプを落し失態を見せ
たが優秀者に入賞す惜むらくはカツプの失敗豫想を裏切
つた。

十月二十四日 専修商業主催全關東中等學校懸賞雄辯大會へ
偶 感……………四C 浦野信太郎君

○滿堂の聽衆は君の雄叫びに唯夢の社會に遊べるが如し
其の言辭下層社會狀態に及ぶや涙を絞らせた唯入賞せ
ざるは豫想と聽衆の拍手を裏切つた。

十月二十三日 攻玉舎中學校主催全關東中等學校雄辯大會へ
青年奮起の準備……………四A 佐藤 兵次君

○君は日大中切つての名物男だ而し押しも押されぬ中堅
丈けに集れる辯士の中に一段色鮮かなもの、野呂、福
士の關東の大立物の聲援は君に依つて撞に吐かれた滿
堂君の縷々として續いて盡きざる整然たる辭句にて水
を撒けるが如し懸賞なきは惜し。

十月二十三日 立正中學校主催全關東中等學校雄辯大會へ
團體……………一B 宮坂眞喜雄君
苦樂……………一E 川北 正雄君
市民……………一A 久松 茂君
日本の將來に對して吾等の取るべき途……………一A 岩崎 正一君
眞剣で進め……………一A 吉田 城吾
が學校二……………一C 佐藤 正雄君
國民自覺せよ……………一A 池 道雄君
不撓不屈の心……………一E 土方 兼雄君
勉強……………一E 山岸 正一君
慈善……………一C 大住 正二君
電氣の世界……………一C 松本 松治君
青年と吾が團體……………一A 田中 幸助君
世界の平和に就いて……………一A 渡邊福一郎君
萬國に比して吾が國の尊きを知れ……………一A 吉岡 武男君
ナポレオン比喩……………一C 加藤源三郎君
堪忍……………一A 森山 一雄君
世界的文明に就いて……………一A 間根山啓彌君
自由平等……………一A 風間金太郎君
吾等の前途……………一B 光瀨 一郎君
大事業と青年の活躍……………一A 諸木與四郎君
自動的なれ能動的なれ……………一A 佐藤 兵次君

- 學生の希望……………四A 辻村 秀春君
- 大車輪大廻轉の時……………三A 日之島徳彌君
- 太平洋を望みて……………四A 田代 茂守君
- 種蒔けよ青年……………五C 鈴木龜太郎君
- 所感……………五A 森 勇喜彦君
- 未定……………五A 新田 英司君
- 生きんとする努力……………四A 井上恭一郎君
- 完全への道程……………四C 浦野信太郎君
- 當來社會文化へ……………五A 仙石 良郎君
- 世に埋る人のために……………四A 山田 知男君
- 信仰……………五B 福士 清君
- 挨拶……………先聲 伊 藤 氏
- 同……………先聲 星 氏
- 賞品授與……………部長 廣 瀨 先生
- 閉會の辭……………委員 三宅 英夫君
- 尙ほ懸賞は二部に區分せり。

第九等賞 久 松君 第十等賞 中 田君
 (二部)プログラム順にて優賞者四名
 佐藤兵次君 鈴木龜太郎君 山田知男君 福士清君
 【早稻田實業對本校雄辯大會】
 七月二十日夏の土曜日の晝の校庭には生徒の影は左程黒くなかつたやがて講堂から開會の辭が洩れて來る時折々立の様な雨は幸にして豫想外の聽衆を集め得た都下に名譽並びなき二校の精選された猛者の眞劔な雄辯は實に壇下の嚴正なる批判と相俟つて鎗を削るが如き對校の實は成り都下否な全國的に雄辯熱を鼓吹するの一大事業たるの價値が充分あつた。而して其の結果たるや價値が充分あつた。而して其の結果たるや從來は總括的な優劣は三者の鑑識と批判の嚴正なる物に委ねたと雖ども今回の如きは全く兩虎相戦ひたる如く其の數を以つてなす能はざる物であるそは勇往邁進一に其の新境に入りたる兩校の堅壘の對校を意味する物であらう。永久に對校の眞意を失はず新界の先導者たるを祈る。

(プログラム) 司會者 三宅、福士本校委員
 一、開會之辭……………本校委員 三宅 英夫君
 二、吾等の現代……………本 校 田中 幸助君
 三、吾人の目的……………早 實 鶴田 一二君
 四、列國の眼……………本 校 池 道雄君

- 五、強固なる國家は何に基づくか……………早 實 金子 幸治君
- 六、世界的發明に就いて……………本 校 間根山啓彌君
- 七、現代社會を顧みて……………早 實 伊藤 咲君
- 八、生活の基準……………本 校 久松 茂君
- 九、活大學者たれ……………本 校 佐藤 正夫君
- 十、宇宙は大學なり……………早 實 宮坂 文雄君
- 十一、我等の行くべき途……………本 校 加藤源三郎君
- 十二、眞理……………本 校 光瀨 一郎君
- 十三、世界文化に對する我が日本……………早 實 金子 政記君
- 十四、燃ゆるが如き愛を以つて祖國の……………本 校 小沼 壽三君
- 十五、戦争か平和か……………早 實 宇佐美建造君
- 十六、思ひ出づる儘に……………本 校 田代 茂守君
- 十七、飛ばんとする力……………本 校 日之島徳彌君
- 十八、正義の使命……………早 實 福田 正一君

十九、日本人……………本 校 浦野信太郎君
 日本の立脚地、日支親善を説き革新と改善のために突進せんと大いに熱を擧げ本校の名闘手振を發揮した自重せよ而して向上の道を歩まんことを頼む。
 二十、混沌たる時局を論じて新青年の………早 實 山口善次郎君
 歐起を促す……………早 實 山口善次郎君
 二十一、時けよ若人……………本 校 鈴木龜太郎君
 自身に出發して成功への道程を説く態度の嚴肅を見せたのは晴天老巧味を現した。
 二十二、自動的なれ能動的なれ……………本 校 佐藤 兵治君
 「水を飲まぬ馬に水を飲ませやうとしても飲むのではな」と論旨の徹底せるのは透徹せる聲量と洗練せられたる態度は此の日の白眉だつた。
 二十三、現代の状況を卜して新日本建……………早 實 坂上 賢治君
 設への道……………早 實 坂上 賢治君
 早實切つての君はローマの滅亡と日本のそれと對照し完全無缺民族團結の文化社會への努力と犠牲を敢てせんと好漢本壘を突く。
 二十四、吾等何處に行くべきか……………本 校 山田 知男君
 好漢好坂上の向ふを張つた強の者純な愛に培はれた君は矛盾と不正義と罪惡の錯交せる社會より何處に行くに可きかと歡愴の叫びは清く高く堂に溢る論旨の整然た

る水の流る、如し戦正に沸騰點にあり幾百の聴衆唯だ陶酔の中に夢む。

二十五、建設か滅亡か……………早 實 竹内 昇君
 早實の御大君は名にし負ふ一流チャンだ帝國々狀の云々は早實凡べての總論を短縮した論旨は實に見物だつた自然な態度は其の論旨と共に又模範形だつた。

二六、江東の地より……………本 校 藤士 清君
 幾萬の若き友よ!! 靈は眠る永劫の一瞬を劃して居る孤獨の吾人、それを心から救ひ煩悶の扉を開くものそは何ぞや宗教!! 而して現代社會の腐敗と矛盾は吾人等パンを求めんとしてパンの解義を求めず食を求めず精神的の缺乏者でなくて何んであるかと悲憤慷慨し敬虔な氣分と獨特の熱は鬱風な容貌の君に始めて見られる。

二七、閉會之辭……………早 實 竹内 昇君
 尙ほ雄辯社賞牌は早實竹内君、坂上君、宮坂君、本校山田君、福士君に贈呈され一同晚餐會後江東の暗に相囁きながら淡く消え去つた。

○秋季校内雄辯大會
 十月三日、三階の五A B 講堂に開催す

六、司會者 福士 清君

一、開會之辭……………委員 福士 清君

二、勤儉即日實行……………一A 中澤 利男君

三、節約……………一A 渡邊福一郎君

四、所感……………四C 浦野信太郎君

五、勉強……………一E 山岸 正一君

六、大いに諸君と共に抗議の聲を擧げん……………一A 田中 幸助君

七、日本人の長所と短所……………一A 間根山啓彌君

八、青雲の志……………一A 飯田 晃君

九、國家の干城は果して軍人か……………一A 池 道雄君

十、運動獎勵……………一C 吉 田君

十一、我が國の現状を顧みて……………一A 室木與四治君

十二、忠君愛國……………一A 中田 幸八君

十三、吾々青年の覺悟……………一A 西城 素堂君

十四、排日實行されて以來の國民思想……………一A 山崎綱之助君

十五、帝國と帝都……………一A 久松 茂君

十六、偶感……………一A 渡邊 庄吉君

十七、成功への道……………一A 森山 一雄君

十八、現代宗教の支配者……………一B 光瀨 一郎君

十九、人生々活の讚美……………一A 吉岡 武雄君

二十、人工的蔓性飢饉は接近せり……………一C 風間金太郎君

二十一、公正……………一C 佐藤 正夫君

二十二、生んみする者……………一A 日之島德彌君

二十三、巖頭に立ちて……………四A 田代 茂守君

二十四、所感……………四A 山田 知男君

二十五、所感……………部長 廣 瀨 先生

二十六、閉會之辭……………委員 三宅 英夫君

尙先輩横山、松本兩氏の所感もあり續いて賞品授與式ありたり、授賞者左の如し(參年以下)

一等賞 日之島君 二等賞 久松君 三等賞 池君

(優秀七名) 間根山君 光瀨君 中田君 室木君 田中君 佐藤君 渡邊君

○本校主催全國中等學校懸賞雄辯大會
 十一月七日都下各新聞社殊にやまこ新聞社、日大雄辯會の後援の下に本校大講堂に開催す。

司會者 三宅 英夫君

同 福士 清君

審査員 本校々長 荒川 五郎先生
 本部々長 渡 長五郎先生
 本部々長 廣瀨 渡先生
 社會裁判家 馬場 恒吾先生
 やまと新政治部々長 長谷川 了先生

同 代議士 原 惣兵衛先生
 同 日大教授 富田 先生

一、開會之辭……………委 員 三宅 英夫君

二、勞働は如何なる意味に於て神聖なりや……………青山學院中 長 原君

三、散り行く花をして……………横 商 竹内 芳彦君

四、日本男子としての生活……………在 中 深谷 利國君

五、勞働者を光の社會へ導け……………専修商 柄澤 二郎君

六、聞け靈魂の扉を……………川 越 中 比普間喬介君

七、さらば大地は微笑まん……………東植質 加羽澤登美雄君

八、没落期に臨みて……………名 教 中 未次 村生君

九、奮へよ若人……………駒 込 中 宮崎 佑玉君

十、堤防を突破せよ……………青 山 師 高宮 豊明君

十一、支那の獨立は日本の獨立……………海 城 中 内山 正篤君

十二、生んみするものは先づ吾が言を聽け……………東 商 土肥 正敏君

十三、文化の變遷に鑑みて……………天 臺 中 大久保 仁君

十四、道徳的要求……………不 動 岡 中 篠塚 英君

十五、青年萬能を絶叫す……………赤 坂 中 田中 義男君

十六、唯自力に信賴して……………横 賀 津山喜久三君

十七、國魂の恢復……………世 田 ヶ 谷 中 古山 眞文君

三千年來の傳統的精神は大和魂の精髄である廟堂に轟る不義不正の奴を撲滅せよ、今や進歩の社會の萬能の鍵は黄金なりこそ其の眞剣や晴れ渡る牙えた聲量と熱に自然に動される其の態度とは聽衆の舌を巻かさず居なかつた十八、第二十世紀は太平洋の時代なり

- 十九、土着せよ然らずんば雄飛せよ 日 中 荒川 鎮雄君
- 二十、戦争か平和か 埼玉師範 長濱 周吉君
- 二十一、逆境に立ちて 荏原中 望月 六郎君
- 二十二、奢侈よと質實へ 京橋商 合田 熊一君
- 二十三、偶像を求むる人々 大成中 阿部 實君
- 二十四、現代國民の覺悟 本牧中 石川 信彌君
- 二十五、大地より湧き出づる聲立正中 三浦 周三君
- 二十六、賃銀労働の排斥 郁文中 勇 君
- 二十七、時代對英傑 目白中 井上豪太郎君
- 二十八、團結して立て我等青年慶應商工 關口 重藏君
- 二十九、九月一日を偲ぶ 高輪中 高士 一夫君
- 三十、帝國の危機と國魂の恢復 豊山 岡田正太郎君
- 三十一、痛しき犠牲者のために立正中 渡邊不二緒君
- 三十二、戦後の準備と我が外交早 實 山口善次郎君
- 三十三、男性の意氣 正則中 淺野 啓一君

- 三十四、社會政策を充實せよ 法政商 松井 春吉君
 - 三十五、青年よ奮起せよ 豊島師 石崎 甫君
 - 三十六、東亞に警鐘は響く 明治學中 池田 蓮香君
 - 三十七、青年奮起の時 本校 佐藤 兵治君
 - 三十八、我等の生活を顧みて 早 中 菱山 修三君
 - 三十九、人の目的を放恣した愛 中央商 岩村建三郎君
 - 四十、所感 早 實 深谷育太郎君
 - 四十一、所感 日 大 友澤 貫一氏
 - 挨拶 日 大 岩井 肇氏
 - 挨拶 先 輩 竹澤 倫夫氏
 - 挨拶 校長 荒川 先生
 - 閉會之辭 委員 福士 清君
- (賞品授與)
- 壹等賞 世田ヶ谷中 古山 眞文君
 - 貳等賞 東 洋 商 土肥 正敏君
 - 參等賞 川 越 中 比留間喬介君
- (優秀)
- 君、本牧中石川君、横商竹内君
 - 閉會後一同晚餐會を共にして自己紹介に入り長谷川審査員の綿密な批判をされた事は茲に謹んで感謝の意を表します
 - 尙今日時間の都合上十校餘りの選手達の出場出来なかつた事も合せて謝します、荒川先生の發聲にて萬歳三唱し解散

した各選手達はメタルに雜誌を手に秋の靜さに淡くなり行つた。

雜感

福士 清

一、過去一ヶ年間を靜かに顧みると去年の黄金時代から比べて下火であつたと思はれる點は第三人者の嚴正なる批判に委せまされし苦しかつた點も考へて下さい。

一、全國中等學校懸賞辯大會には北は札幌中南は京都第一商業からも申込みがあつたか出場に迄致らなかつた名實共に漸時完全への途へ向つて居るので大いに今年は内容充實を計つて下さい。

一、残る人々よ、後から来る人々よ、大いに思想を堅固に内容思索を充實させ人格を築き實行の伴ふやふやうに努力して下さい。さうして學校のため大いに自己の爲めやつて下さい。

音樂部記事

本校ハーモニカソサエティ

(日本大學ハーモニカソサエティ第二部)

部長 丸島伸先生
指揮者 吉川慶篤

ハーモニカ界に於ける現在の隆盛は全く無意識的の自覺にして當に樂界の一大福音とも云ふべきものなり。元來一般民衆社

校友會記事

曲目

- 一、行進曲「軍艦マーチ」……………瀬戸藤吉作
- 二、フォクストロット「蝶々さん」……………フレール作
- 三、組曲アル、の女ヨリ……………ビゼー作

以上指揮者 吉川慶篤

又同日卒業生永峯氏の依頼により午後三時より向島小梅小學校同窓會に出演し大喝采を博した。

曲 目

- 一、行進曲「軍艦マーチ」……………瀬戸藤吉作
- 二、序曲「バグダッドの酋長」……………ボワルディユ作
- 三、組曲「アラーの女ヨリ」……………ビゼー作

以上指揮者 吉川慶篤

當日午前拾時に校庭に集合す。出演者拾五人。

五月十日(銀婚式祝日)

本日第一部(日本大學ハーモニカソサエタイ)と合同にてJOAK放送を爲す。

曲 目

- 一、描寫曲「森の水車」……………アイレンベルヒ作
- 二、序曲「ムイリアムテル」……………ロシニ作
- 三、長唄「越後獅子」……………山田耕作變曲
- 四、序曲「詩人と農夫」……………ズツベ作
- 五、サムソンミダリラ中の「バツカナル」……………サンサン作

以上

夏期關西演奏旅行記

監督 日本大學人事課々長 原 侑氏

大正十四年八月、日本大學ハーモニカソサエタイ第一部及二部並にエコーハーモニカソサエタイは全部合同にて夏期休

暇を利用し、關西演奏旅行を舉行せり。十四日午後八時十分下關行に乘車し、懐かしの都を後に目的地大阪へと向ふ。此日朝より天候悪しく發車後漸次風雨を加へ、遂に暴風雨は襲來し、濱松に到着せる頃蒲生郡地方出水の爲凡そ三時間程停車動くかと思はる間に又、豊橋に於て一時間程停車し爲に大阪に到着せるは翌日午後十二時半にして此間約四時間の遅延を見たり。

八月十五日(雨)

下車するに直ちに迎の人とJOBKに行く。

大阪ラヂオ放送曲

- 一、組曲「埃及舞曲」……………ルイギニ作
- イ、アレグロ、ノントロツボ
- ロ、アレグレット

ハ、アアンダンテ、ソステスート

ニ、アンダテイノ、エスプレツツボ

以上

此處は不快の感あり三越の二階にて室の周圍は硝子張りなるため人々が覗くけに水族館にもさも似たり。

放送終りて直ちに一同は道頓堀の大黒屋旅館に旅装を解き午後六時より會場に向へり。

會場 實業會館 午後六時半開演

曲 目

- 第一部
- 一、第五シンフ「第一樂章」……………ベートーベン作

第二部

- 五、歌劇「ウイリアムテル」……………ロシニ作
- 六A、行進曲「双頭の鷲」……………ワグナー作
- B、西班牙小夜樂「ラマノーラ」……………アイレンベルヒ作
- 七、組曲「アル、の女」……………ビゼー作
- イ、鐘ノ曲……………ロ、フアランドール

以上大阪に比して甚だ盛大、聴衆熱狂して感歎措く能はざるの感あり。此夜縣人會支部長山崎氏の招待により歓迎會の席に列十萬歳三唱の後宿に歸り午前一時床に就く。

八月十七日(雨)

午前十一時ヲリヤ旅館出發。午後六時神戸着。直ちに會場に向ふ。

會場於神戸市下山手通青年會館 七時開演

曲 目

- 第一部
- 一、序曲「フェードレ」……………マスネー作
- 二、印度寫生曲……………ハツセン合作
- イ、印度神殿への接近及通過
- ロ、ヒマラヤ山地の牧女
- 三、劇曲「ベニス商人」……………ロツツス作
- イ、第一前奏……………ロ、第二前奏

- 二、天使の夢……………ルビンスタイン作
- 三、組曲「繪畫的情景」……………マスネー作
- イ、晚鐘……………ロ、ボヘミヤ祭
- 四、歌劇「蝶々夫人」……………ブチニ作

第二部

- 番外序曲「詩人ミ農夫」……………ズツベ作
- 五、序樂「ビツクダーメ」……………ズツベ作
- 六、組曲「埃及舞曲」……………ルイギニ作
- 七、歌劇「バツカーナル」サムソンとダリラ中より……………サンサン作

以上十時半終了

八月十六日(雨)

難波驛を午前十時出發二時間後に和歌山市驛着。日大の先輩志波氏友和歌山縣人會の人々の案内に依り旅館ヲリヤに旅装を解く。其れより一行和歌浦を見學す。

會場於和歌市公會堂 午後六時半開演

曲 目

- 第一部
- 一、序曲「詩人ミ農夫」……………ズツベ作
- 二、喜歌劇「マルタ」……………フロート作
- 三、天使の夢……………ルビンスタイン作
- 四、歌劇「イルトロバトーレ」……………ヴェルディ作

ハ、東方行進曲

ニ、總督行進曲

四、歌劇「椿姫」…………… ヴルゼイ作

番外田園詩曲「森の水曲」…………… アイレンベルヒ作

第一部

五、序曲「詩人と農夫」…………… ズツベ作

六A、小夜樂中第一樂章…………… モツアルト作

B、西班牙小夜樂「ラマノラ」…………… アイレンベルヒ作

七、歌劇「ウイリアムテル」…………… ロシニ作

以上終了午後十時半、直ちに一同神戸驛に向ふ。途中進行中の電車を異口同音大聲に呼び止む。

神戸驛より岡山さして出發す。此間約五時間翌四時岡山驛に着く想外の大騾なり。

八月十八日(晴)

着けば歡迎者一人も見えず、故に電話にて呼寄す間も無く岡山縣會の櫻井氏來りて我々を案内す、途中ふと氣附けば本校ハーマニカソサエテイの重鎮野村幹君見えず、さあ周章狼狽一體何處に忘れて來りしや故に二三の者手別して探搜に出づ。

残りの者は其儘櫻井氏と禁酒會館に行きて旅装を解く。宣傳終つて午後五時より會場に向ふ。

會場於岡山市公會堂 七時開演

曲目は總て、和歌山縣に同じ。以上終了午後十時半。

此處に於て我等ハーマニカソサエテイ關西旅行第一回は旅

行を閉ぢ解散す。關西演奏旅行記終り。

十月廿一日(水) ラヂオ放送(一部二部合同)

午後一時放送局(JOAK)に參集し、一時四十分マイクホンの前に立つ。

曲 目

第一部

一、小夜樂「第一樂章」…………… モツアルト作

二A、繪畫的情景より「晚鐘」

B、アルーの女より「フアランドール」

四、天使の夢…………… ルビンシユタイン作

十月廿四日(土) 以上二時半終了

横濱市社會局の懇望により第一部第二部合同にて同市大岡町高等工業學校大講堂に於て行はれたる民衆慰安演奏會に出演す

曲 目

第一部

一、序曲「詩人と農夫」…………… ズツベ作

二、喜歌劇「マルタ」…………… フロート作

三、組曲「埃及舞踏曲」…………… ルイギニ作

四、歌劇「カルメン」…………… ビゼ作

第二部

番外描寫曲「自動車旅行」…………… ビッドグツト作

五、序曲「バグダッドの酋長」…………… ボワルティユ作

十一月廿二日(日)

此日我々校學藝會の爲、本校大講堂に於て一時四十分より演奏す。

曲 目

日大中校歌

一、序曲「バグダッドの酋長」…………… ボワイデュル作

二、描寫曲「自動車旅行」…………… ビッドグツト作

三、長唄「越後獅子」…………… 山田耕作變曲

四、喜歌劇「マルタ」…………… フロート作

以上 指揮吉川慶篤

圖書部概観

沿革 大正十四年七月校友會諸部の末弟として圖書部が御仲間入をしました。他の兄さんがたがズン／＼成長して大きくなつて居るのに之れは又漸く獨りで活動が出来る様になつた處であります。併し此の少年は仲々希望が大きいので行末は相當なものに成り他の部と肩を並べて我校の誇と成り得るでせう。圖書部の沿革は可成古いものであります。大正三年十一月に皇太子殿下の立太子式を記念して山内先生の監督の下に開始されました。其後少くはありましたが正式に豫算を分與されたのは大正十二年度からで多少の圖書を購入して教員室の一隅に僅かに

七三

十月廿五日

日本大學相模部關西遠征基金募集の爲演奏會を開く。

會場於日本大學大ホール 午後七時開演

曲 目

第一部

一、行進曲「軍艦マーチ」…………… 瀬戸茂吉作

二A、田園詩曲「森の水車」…………… アイレンベルヒ作

B、描寫曲「自動車旅行」…………… ビッドグツト作

三、歌劇「カルメン」…………… ビゼ作

第二部

四、序曲「バグダッドの酋長」…………… ボワルティユ作

五、印度寫生二曲…………… ロツター合作

ハ、神殿への接近及通過

ロ、ヒマラヤ山の牧女

六、歌劇「ウイリアムテル」…………… ロシニ作

以上

校友會記事

存在を保つて居ました。大正十四年度に至つて始めて三百圓云ふ一人前の豫算を戴いて庶接室の一隅に獨立の立派な書架を有ち多數の圖書を購入し委員を定めて任務を分擔し、生徒及び職員に希望の本を貸出す事が出来る様になつたのであります。

蔵書の種類及冊數 蔵書の種類は學科の参考書、偉人の傳記歴史、趣味及び藝術、科學的の知識、人格精神の修養等萬般に涉つて、廣く良書と目されて居るものを集むる方針であり、大正十三年に生徒及び職員から投票によつて集めた書名を基礎として第一回の購入を行ひました。蔵書の數は開いて間も無い事でありましてから圖書館としては至つて貧弱であります。爾來職員及び生徒諸君からの御寄贈もあり、順次購入もして行きまして、兩三年後には立派な圖書室が出来上る積りであります。現今の蔵書を部門によつて記して見ますと、

文學雜辯門八三冊、教育、哲學、宗教門一一冊、紀行隨筆門一四冊、語學及び原書門二〇冊、體育運動門四冊、社會政治門五冊、地理門一冊、科學數學門二四冊、歷史的傳記門一二冊、合計一七四部であります。諸君の最架に御不用の用物がありません。何卒御寄贈を願ひます。

貸出しの記録 大正十四年七月九日貸出し開始の日から同年十二月二十四日迄合計一〇二八部云ふ多數の記録を示して居ります。其内最供覧の多い圖書を擧げて見ますと、

(文)潤一郎傑作集五二回、(傳)豐臣秀三二回、(語)巖窟王二

四回、(文)里見八犬傳二四回、(歴)三國誌二二回、(文)破船一九回、(傳)西郷南州一八回、(文)白秋詩集一七回、(語)ヴェニス商人一六回、(紀)日本から日本へ一六回、(文)レミゼラブル一五回、(語)アンデルセン童話集一五回、(文)藤村創作集一四回、(隨)肉彈一四回、(文)獨歩全集一四回、(傳)思ひ出の記各一四回、(隨)十字街頭を行く、(隨)へちまの皮、(語)リヤ王(文)法城を守る人々各一三回、(語)シヤロツクホルムス、(語)ドンキホーテ、(文)我輩に猫である、(科)宇宙の謎、映畫及映畫劇各一回、(傳)吉田松陰、(語)オセロ、(文)十八史略國字解、(傳)ナポレオン、(隨)ウソの効用、(文)死線を越へて各一〇回。以下は略しますが要するに書架の隅々迄眠つて居る本は殆んど無い程運轉して居ます。銀行であつたら大金持になりませうし人間であつたら随分の過勞で病氣にもなりませう。其の爲めか本の痛む事も甚しい様です。何卒成る可く叮嚀に御取扱ひを願ひます。

借覽申込中の圖書 右の様次第で圖書は不足を告げ借覽申込中で借出せずに願を待つて居る圖書は第二學期末迄百七十六部に達して居ります。

寄贈圖書 昨年中寄贈の圖書及び寄贈者芳名は、西郷南州、道明敏雄、代數學のみち、櫻井先生、和文英譯法、林貞雄、算術應用問題正解、徹底せる心の生活、人生と修養、算術問題通解、以上新井先生、夏くさ、若菜集、近松世話淨瑠璃集、ロゼ

繪畫部

繪畫部が校友會の一部として活動を始めてから茲に三年部員の努力によつて歩一歩吾人の理想に返つてつあることは誠に愉快なものである。例により左に當部過去一ケ年間に於ける行事の大略を報告する。

- △三月七日 先輩諸氏を送る
- △四月上旬 繪畫部員募集へ宣傳ポスター貼出。
- △七月下旬 宇都宮實業學校の繪畫寫真展覽會に於て飛入出品に委員入賞す(寫眞)
- △八月十五日 東海道平塚尋常小學校に開催中の繪畫展覽會と委員出品す。

- △九月十九日 委員を院展に派遣す。
- △同月廿日 吉例により百草園にスケッチ旅行を試む一行十三名、畫袋に多大の收穫を得て歸る。
- △十月十五日 運動會對部リレー競走に一等賞を受く。
- △十月中旬 學藝會賞品メタルの圖案を考案す。
- △同月同日 廣瀬先生の依頼により動物參考圖を畫く。
- △十月廿三日 委員を帝展に派遣す。
- △十一月七日 展覽會準備のため委員諸君不休の活動を始む本所區内十三小學校に對し出品勸誘に奔走す

ンフツド、ウイルベルムテル、島崎重樹、釋尊とその宗教、時蒜先生、黃道吉日、自然と人生、南國見たまゝの記、代數學問題通解、科學知識辭典、火星の生物、新しい發明發見物語、サイン オブ フォーア、スリーマスケチアス、ストーリー、オブ ビーター、パン、以上宮田弘、總水房山、安房名所文學、安房名所句集、以上丸島先生、書簡文講話及び文範、作文講和及び文範以上宮田弘、改正選舉法詳解荒川校長、バーレー萬國史、生明先生、テニス戰術(不明)、科學の要點、古屋先生、英語々原の研究、鳥海先生、唐詩選新譯、保坂先生、人耶鬼耶、雄辯の新研究(不明)、懺悔の生活外二部、武内先生

向此の他に數部不明のものがありますが精査の上次號に發表します。

- 部長及び委員 部長 平澤、保坂兩先生
- 委員 五年級 森勇喜彦、松平勝敏、大島正安、増淵梅夫、道明敏雄、新井藤一
- 四年級 五十嵐英次、石館壽太郎、篠田芳一、浦野信太郎、中田耕一、川岸恒彦
- 三年級 井川正、貝塚實、阿佐美元三郎、山口彌一郎、田邊實、鈴木幸三郎

附記 本所圖書館長北島金次氏來訪されました本校生徒に對し必要な圖書は何時でも貸出し、又學校の保證の下に貸出をも許可する由で遠慮なく出入して下さいの事であります。

ボスター、入場券、アーチの額面製作書畫室
並に地圖の整理。

△同月廿二日 學藝會と同時に繪畫寫真展覽會開催。

當日入賞者氏名

- (繪畫)
- 五C 高崎三郎 鈴木龜太郎
 - 四A 山崎忠美 柳川處義
 - 四C 橋本廣 黒田久男
 - 三A 松林崇昌
 - 三B 豊島兼雄
 - 三C 竹内武勇
 - 二C 君島洋二
 - 一A 田中幸助
 - (寫真)
 - 五C 佐久間勝博 池田均 大野耕造
 - 四B 篠田芳一
 - 三B 佐々木孝太郎
 - 五A 野口武雄
 - 五C 日比谷進
 - 三B 石田加都雄 田邊實 石井福吉
 - 新井啓藏 中野兵藏
 - 二B 播磨清恒
 - 一A 松井主税
 - 一B 土浦日露城

學藝部賞

- 一C 菊地治雄 松本辰馬 土肥一英
- 高橋一男
- 一D 二村衛 北澤進
- 一E 秋元正利 富川善之助 川北正雄
- 五A 皆川四郎 (一等)
- 四A 小松良平 (二等)
- 三B 光瀬一郎 (二等)
- 二C 大島由三 (三等)

當日は九時開場本年は父兄保護者諸氏の夾會多數にて同畫室
は一時滿員となり繪畫寫真室の茶菓の設備はお粗末ながら一般
の好評を博し閉會まで觀客の絶え間ない有様であつた。
本展覽會の作品については概観するに風景人物花鳥全般にわた
つて特に人目をひいたことは觀察の精緻にして表現の手法取材
の穩健着實な點である。即ち金泥を加へて描いたものや、淡色
を度々繰返し塗つたものなど益々その好果を六ならしめんため
に苦心の跡の歴然たるものは、要するに破綻なき畫面と靜肅な
氣分と目標とするものの當然の行程であつて、之等のこゝは一
面非常によい傾向ではあるが稍もすれば舊套に墮し易いのであ
る。一方穩健着實な畫風も極めて必要であると同時に他方には
清新な筆觸(例へば最初の一點一劃が最後までもの云ふやうな)
と氣品も數點あつて欲しかつたのである。

劍道部記事

- 名譽師範 高野佐三郎先生
部長 林 義雄先生
師範 白土 留彦先生
- 委員 五年 渡瀬 菱木 江中 赤松 鹽澤
四年 川岸 田尻 大河内
三年 石井 磯貝 栗原 佐々木
二年 伊藤 山崎 早川 杉野

寒稽古(一月十四日より十日間)

江東の新校舎に來りて三ヶ月。木の香の未だ消えない道場に
於て第一回寒稽古を行ふ出席者多數皆勤者精勤者も少からざり
き。其の結果は納會試合によつて表された。
寒稽古納會兼卒業生送別試合(一月二十四日)
三 相變らず寒い北風の吹く然し天氣のよい試合日和だつた。午
後正一時白土兩先生の訓辭後叫聲勇ましく試合開始、終つて例
年の例により汗粉會を行ふ。大きな井に砂糖豊富、さすがの勇
者連も先生方も揃ひも揃つて二杯目には「降参々々」五時盛大
裡に終了す。

送別會(二月二十五日)
四五年の學年試験終了後開催す。

何はとまれ所謂以上に作品も集り非常なる技術の進境を示し
たことは悦ばしいことである。此上は全校諸君、益々精進せら
れ我が繪畫部のためと云はんよりは我名校名譽のために競つて力
作の出品あらんことを次回を期して待つ次第である。
終りに臨んで學藝部長はじめ多數同學諸兄の多大なる御聲援
御盡力に對しては滿腔の謝意を表して後來一層の御援助あらん
ことを切望して止まないものである。

△十一月廿三日 委員慰勞會を開催す。
△十一月十三日 委員會を開催左の決議をす。

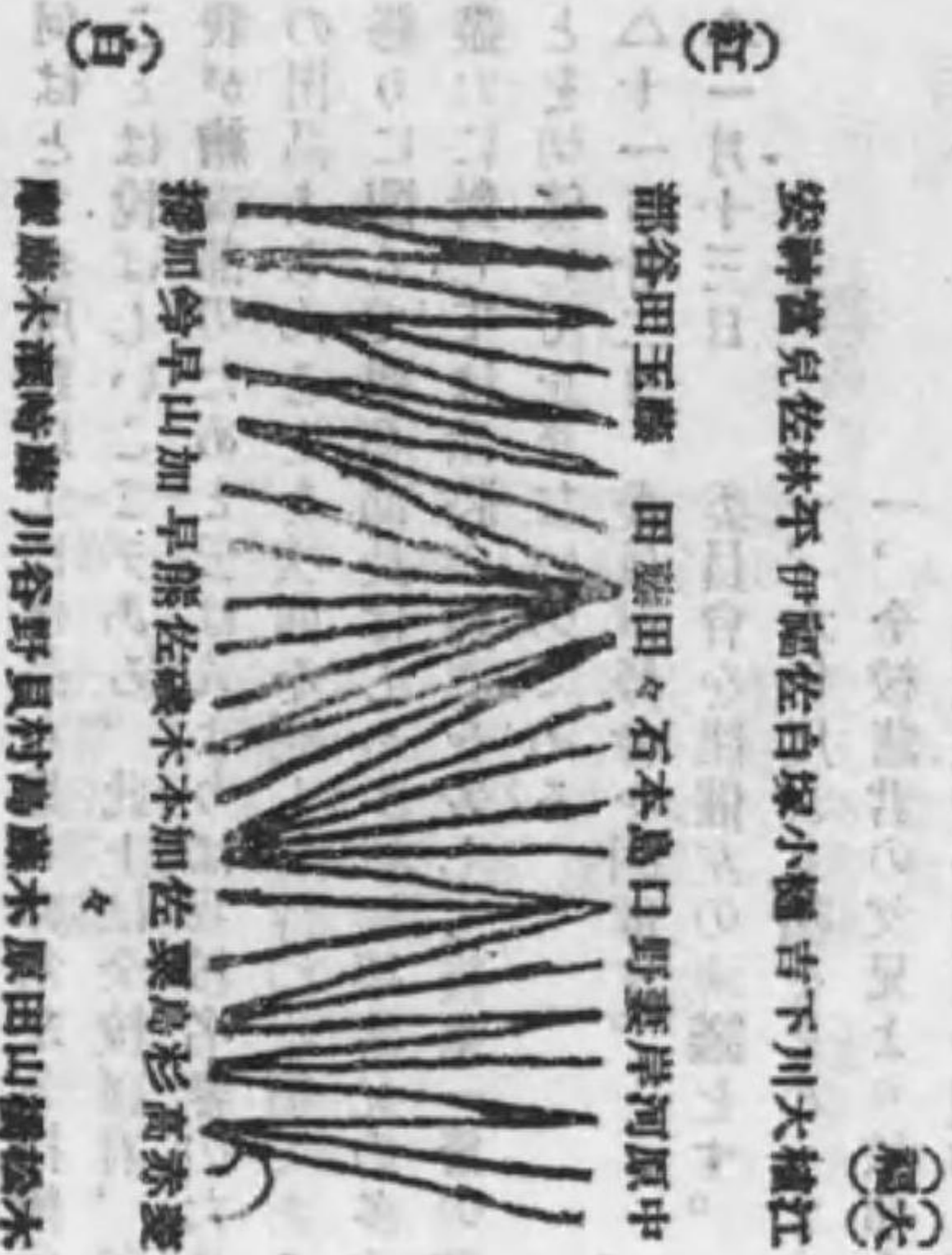
- 一、本年度より額をそろへたきこと。
- 一、全校諸君の父兄より依頼を受け、商店の包紙及廣告圖案を製作し兩者の満足を得ること。
- 一、委員部員の數を増すこと。
- 一、スケッチ旅行の回数を増すこと。
- 一、二ヶ年以上の會員を委員となすこと。

繪畫會本年度卒業すべき委員氏名左の如し
お大尉 五A 松本英八郎
及の部 五B 大久保一夫
風子 五C 高崎三郎
才の部 五C 鈴木龜太郎 日露田 修 佐久間勝博
林 圭三

林先生も櫻井先生も御出席、白土先生の御出席なさらなかつたのは残念だつた、が生徒数百五十名餘には卒業生諸兄にも満足そうに見えた。林先生の訓話櫻井先生の御經驗談。卒業生諸兄の感想在校生徒の面白いかくしけい。最後に願引を行ひ或ひは大根を或ひは赤子のおもちやを貰ひ和氣霽々の裡に五時半散會す。當日紀念撮影をなす。

春季小會 五月二十四日

出席者非常に少く委員達面喰ふ事甚だしい、正午後一時より林部長の訓辭によつて開始す。白土師範は京都へ旅行中出席をばさかず。依りて豫定の進級試合を取りやめにした。



(大)

安部寛児佐藤平伊藤白塚小嶋吉下川大橋江

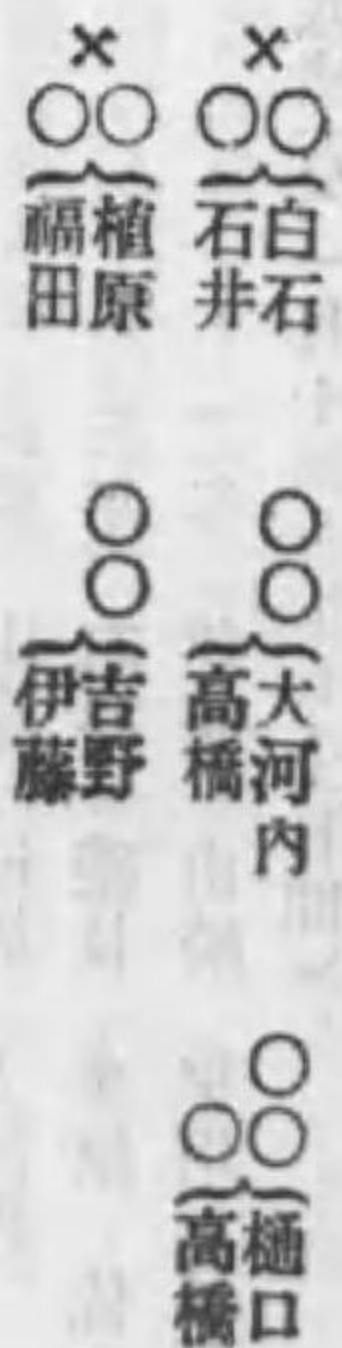
新谷田玉藤 田藤田々木島口野藤岸河原中

櫻井早山加早藤佐藤水木島松島松島松島松島水

戰跡批判

紅白交々に進みつ退きつする事數回、白軍鈴木出で二人を破るに勢を得て同山崎も二人を抜きて白軍優勢、とみる中に紅軍より出でたる伊藤無二無三に切り込みてまた、く間に六人を破る、後白軍の加藤五人を打ちて盛りかへしたれど再び紅軍に大兵樋口出で、三人を抜く島田樋口を破れども下妻に破るる下妻三人を破れども最前よりの奮戦につかれて杉山に破るる紅白一進一退、大河内出でよく二人を打つ然るに白軍三將高橋おぼえの腕をふるひてよく戦ひ紅軍の副將植原大將江中の首級を打ち取り勢餘つて味方の副將大將を切る。

三時半試合終了、これより三本勝負を行ふ。



高點試合優勝者

- 一等賞 二年A組 伊東 六人抜
- 二等賞 三年C組 高橋 五人抜
- 三等賞 三年C組 加藤 四人抜
- 四等賞 三年C組 樋口 三人抜
- 四等賞 四年A組 下妻 三人抜

曇中稽古

試験終了の翌日十七日より二十三日まで行ふ。

五なす汗を物もせせず若者十數名は朝八時より十二時まで一心不乱に稽古せり、結果は秋の大會によつて發表された。出席中皆勤精勤者は次の如し。

- 皆勤者 五年 江中 菱木 赤松
- 四年 川岸 大河内
- 三年 石井 木村 田宮 加藤 佐々木
- 二年 山崎 横關
- 一年 岡崎 柳沼 金谷 山岸

第九回大會(十月十一日) (於道場)

御執相磨の血湧き肉躍り殺氣堂に滿つ。いでや左に大會の次第を詳記せん。

一、開會の辭

二、訓辭

午前の部(高點試合) 得點は姓名の下に

- (紅) 藤田 廣志 (一) 長野 柳沼 (白)
- (白) 相馬 (二) 中澤 小花 金谷 (一)
- 三尾 飯田 (四) 大須賀 松岡
- 早川 高橋 岡本 油原
- 樋口 吉田 (六) 浮谷 中山
- 關野 池 (三) 林 (一) 鈴木

校友會記事

(紅) (白)

- 磯貝 (一) 戸崎 伊與田 山岸
- 土浦 (一) 大澤 南 小川
- 小野 (三) 齋藤 (五) 加藤 (一) 山中
- 羽生 植木 (三) 今關 (一) 中里
- 藤岡 田島 (一) 岡崎 芝田
- 大森 (三) 飯田 (二) 鶴岡 (二) 澤田
- 小川 木内 鈴木 (十二) 川村
- 竹杉 坂本 鈴木 佐藤
- 川島 仲村 (一) 小野 兒玉
- 金子 廣田 (三) 熊谷 杉野
- 加藤 (二) 加藤 (三) 白石 加納
- 菊池 室木 (三) 平田 (三) 石田
- 土屋 伊藤 (一) 瀧 上東野
- 神谷 (三) 土方 水谷 鈴木 (五)
- 小林 (三) 播磨 (二) 石井 (二) 岩本
- 早瀬 伊勢海 樋口 (六) 川本
- 笹倉 松本 中村 佐々木 (三)
- 横關 (一) 早川 (二) 島田 磯貝
- 野原 吉原 (二) 栗原 加藤 (一)
- 加藤 (三) 都留 花岡 佐々木
- 阿佐美 (一) 節木 川岸 佐野

肆兵 田宮 (一) 戸村 (一) 一堂寺
 吉川 下妻 副將高橋 (一) 日比谷 (一)
 江中 植原 大將渡瀬 (一) 大河内 (三)
 菱木 赤松 鹽澤 (四)

二、本校生徒三本勝負

○ ○ 樋口 × ○ ○ 石井 × ○ ○ 川岸 ○ ○ 栗原
 ○ ○ 日比谷 × ○ ○ 佐々木 ○ ○ 下妻 ○ ○ 伊藤
 ○ ○ 阿佐美 × ○ ○ 戸川 ○ ○ 伊藤

三、中學校三本試合 (校名なきは本校)

○ ○ 戸田 (日中) ○ ○ 野澤 (早實)
 ○ ○ 菱本 ○ ○ 江中
 × ○ ○ 田邊 (専商) ○ ○ 榎林 (京中)
 ○ ○ 高橋 ○ ○ 渡瀬
 ○ ○ 長野 (京中) ○ ○ 貝村 (専商)
 ○ ○ 鹽澤 ○ ○ 大河内
 ○ ○ 本多 ○ ○ 山口 (専商)
 ○ ○ 鹽澤 ○ ○ 赤松
 ○ ○ 石野 (日中) ○ ○ 長瀬 (京實)
 ○ ○ 鹽澤 ○ ○ 廣瀬

四、専門學校三本試合 (校名なきは卒業生)

○ ○ 清水 (日大) ○ ○ 伊藤 (體操)
 ○ ○ 渡瀬 (日大中) ○ ○ 奥谷

○ ○ 森口 (中大) ○ ○ 永田 (相生署)
 ○ ○ 江中 ○ ○ 門脇
 ○ ○ 半田 (日大) ○ ○ 福田 (中大)
 ○ ○ 多多良 (高師) ○ ○ 菅野 (法大)
 ○ ○ 榎山 (高師) ○ ○ 野元 (相生署)
 ○ ○ 佐賀野 (早大) ○ ○ 佐藤 (法大)
 ○ ○ 吉武 (日大) ○ ○ 上本 (早大)
 ○ ○ 江中 ○ ○ 奥谷

本校三本勝負批判

日軍の先鋒廣志は勝負はすべて最初の一分にありと思ひけん紅軍の藤内を破る、紅軍の相馬味方の不利を見る一心不亂に攻めて廣志中澤を破る、白軍飯田入學する頃より一心不亂にきたへた其の術を盡くして紅軍の四人をぬく、紅軍長野味方の一大事と怒り立ち飯田高橋を抜けども白軍吉田はさせむと片ぱし打ちまくり、六人の首を上ぐ、味方の不甲斐なきに腹を立てたる磯貝は吉田を破れども柳沼どつこいやらぬと立ちあがり吉田の仇と美事に打ち破れども次に躍り出でたる土浦の腕や勝りけん小籠手破をられて退きたり、金谷土浦を抜く、小野金谷以下四人をあつさり破る池白軍に利なしと見て氣合勇ましく小寺三人を真二つにする。大森は池の如きものに負けは取らばごまたたく間に三人を打破る。

大森最前よりの奮闘に堪へ兼ねて齋藤に面を打たれて斃る。齋藤勝に乗じて小川等五人も破りつゝ、林に向ふ精氣満々たる林容易に之を抜く。植木さへたる腕にて林を破り次いで伊與田、南を抜く、然れども最前よりのつかれに加藤にもろくも破らる以後しばらく一進一退なりき紅軍森田鋭鋒にて仲村以下十二名を抜く其の勢ものすく白軍勢もあやふく見えたり、加藤味方の不利と見て取るや森田等三人を破る、又もししばらく一進一退なりき、白軍鈴木正日比きたへし腕もて五人を抜き破る。平田味方に不利と猛りたちて三人を抜く。白軍佐々木はそうは行かぬと三人を打つ紅軍の佐々木石井なんぞに負けるものかと佐々木磯貝などの首を引き抜く。

加藤味方の一大事、石井を打ちて樋口に走せ向かへども名にしほふ樋口なれば容易に破る。

樋口覺えの腕をふるひて佐野堂寺下妻植原等の猛りくるひ向ふをあつさり打ち破る赤松も腕を取られて退きたり、副將大河内は一大事と無二無三に攻め入り樋口を破り次いで中村、島田、栗原等を抜き力つきて花岡に破れたり。白軍あやふしと聞きて後れて走せ來たる日比谷等きたへたる腕もて左に現れ右にかくれて花岡川岸を退ぞかせしかと元氣衰へ終に戸村に破らる終に白軍大將の出陣、白軍大將鹽澤其の日のいでたちには黒の稽古着黒の袴、三人の竹刀をさしはさみ「不甲斐なき味方の者哉いでや我と思はんもの出で戦へ」とばかりに仁主立に道場の

真中につつたちたり、日比谷に勝ちたる戸村の首を地に落し讀いて出でたる吉川もなんのその江中菱木もむなしく退きたり、白軍副將高橋の出陣鹽澤も機械にあらざれば最前よりの奮戦に身心共につかりれておいかかな紅軍に勝をゆづるを餘儀なくせり。高橋味方の大將と戦ひて破る紅軍大勝せり。

本年度各學校選手の派遣は左の如し。

六月十四日 明治大學主催中學校優勝大會に
 渡瀬 鹽澤 田尻 高橋
 第一回戦正則中學を破る第二回戦に錦城商業を破る
 第三回戦不戦一勝第四回戦阿波中に破らる。

六月二十一日 法政大學へ
 △菱木 ×江中

九月二十日 慶應商工大會へ
 ×赤松 ○大河内

九月廿三日 早大優勝旗大會へ(全國中學校)
 渡瀬 鹽澤 大河内 高橋
 大將渡瀬病中をおして出場せしかども武運つたなく第一回に日本中に破らる。

九月廿七日 高師優勝大會へ(全國中學校)
 渡瀬 鹽澤 高橋 樋口

十月四日 明治神宮中等學校優勝試合豫選へ五B渡瀬を派す、
 福島師範に一點の差にて破らる。

惜しむべし決勝にて豊島師範の舟久保君に打たる。

十月十五日 早大大會へ

×渡瀬 ○菱木

十月十七日 専修商業大會へ

○渡瀬 ○菱木 ×鹽澤 ×赤松

十月十七日 郁文中へ

○江中 ○川岸

十月廿五日 日本中へ

○渡瀬 ○鹽澤 ○大河内

十一月一日 中央大へ

○渡瀬 △高橋

十一月一日 立正中へ

○赤松 ○川岸

十一月八日 日大へ

○渡瀬 ○鹽澤 ×江中 △菱木 ×赤松 ○川岸

十一月八日 豊島師範へ

○渡瀬 ○菱木 ○江中

十一月七日 正則中へ

○菱木 △赤松

十一月八日 東京醫專へ

○渡瀬 ×大河内

十一月二十三日 早實及び皇道義府大會へ

〇〇渡瀬 ○菱木 ×鹽澤 (赤松記す以上)

柔道部

□本年度師範 並びに役員

名譽師範 三船久藏先生

師 範 伊藤四男先生

部 長 中村清吉先生

委 員 林 義雄先生

五年 梅宮 清水 林 平沼 田口

四年 澁川 福村 阿部

三年 田邊 藤野 花本 青山 貝塚

二年 善如寺 石崎 大淵 柳田

一年 級長を以つて任す

□稽古日割

水曜日 二年

木曜日 一年A組 E組

金曜日 三年

土曜日 一年B組 C組 D組

□春季小會

五月三十日午後一時より、本校道場に於て舉行す。師範部長及び先輩諸兄の御出席あり、出演者百數十名の多数に上り、技量

の非常なる發達振りを見せ、甚だ盛會裡に終つた。

□暑中稽古

自七月十六日 至七月二十五日 於本校道場

恰も十六日は試験の最終日であつた。然るに熱心なる部員はその疲を慰す暇もなく直に道場に集り有益なる部長の閉會の辭のもとに開始された。暑さにもめげざるその自發的なそして熱烈なる稽古には多くの人を感動せしめた。新しく日々業を積んだ廿五日の納會の日、紅白勝負を行ひ、後型を行つた。

講道館投之型

取 梅宮 甫

受 清水 正之

講道館固之形

取 平沼 正治

受 田口 傳藏

今度の暑中稽古に於ける皆勤精勤者實に八十数名の多くに達した事は、部員の熱心さ、即ち我が部の向上を物語る一つである。最後に賞状授與、茶話會を催し喜々として解散した。

□第一回東北遠征

自九月一日 至同月八日

師 範 伊藤 四男先生

先 輩 田口 豐藏君

選 手 梅宮 甫

校友會記事

同行人 梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

梅宮 甫

である。途中全輩の半澤股保君が福島で又嘗つて本校に教鞭を
とられた鈴木先生が郡山で御世話下さつた事は感謝に堪へない
□浦和高等學校主催柔道爭覇戦
九月廿七日 第一回戦に不戦一勝、續く二回戦に日本中學と
四對一の成績で勝ち越し、第三回戦は浦和中學と三對一にて惜
敗した。此の日東京よりの参加十校中、三回戦まで残つたのは
實、早稻田實業と本校との二校のみであつた。時の選手左の如
し。

大將 平沼 正治 補缺 澁川喜久雄
副將 林 博 同 阿部 豊治
三將 梅宮 甫 同 福村 五郎

田口 傳藏
福士 清
清水 正之
先鋒 田邊 實

□秋季大會

十月四 日於本校道場
早朝より部長三船師範、伊藤師範、先輩に今井君を始め來校
午前八時部長の挨拶の後校内紅白勝負開始(但し當日時間の都
合上二分して行ふ)

大將 澁川喜久雄
副將 阿部 豊治
三將 福村 五郎
田口 傳藏
福士 清
清水 正之
先鋒 田邊 實

佐松佐杉野新中有伊五早素一口笹伊長岩岩城小河萩若
藤林木山野崎井爪井藤嵐川藤戸島川藤南田村 田合野崎
本外石藤今越山小能金船山一内飯今山山鈴屋小水宮藤小

島山井井井部中倉瀧井越口色田坂村口崎木野島村城 林

先内藤門森柳秋大太島藤津長松能田山山吉株吉



藤山島藤雪木山塚島石田田田本山 井田上岡川岡
藤進岩大佐宛間小松村中 濱野佐末山宮町念西潤
山藤本塚伯木中川木山田谷井藤吉口崎田子田田

大町岡松濱藤日高栗杉守菊水野濱藤高小柳石島藤久中
島田村平田野高宮根浦谷川口倉島 橋倉原岡井田田本

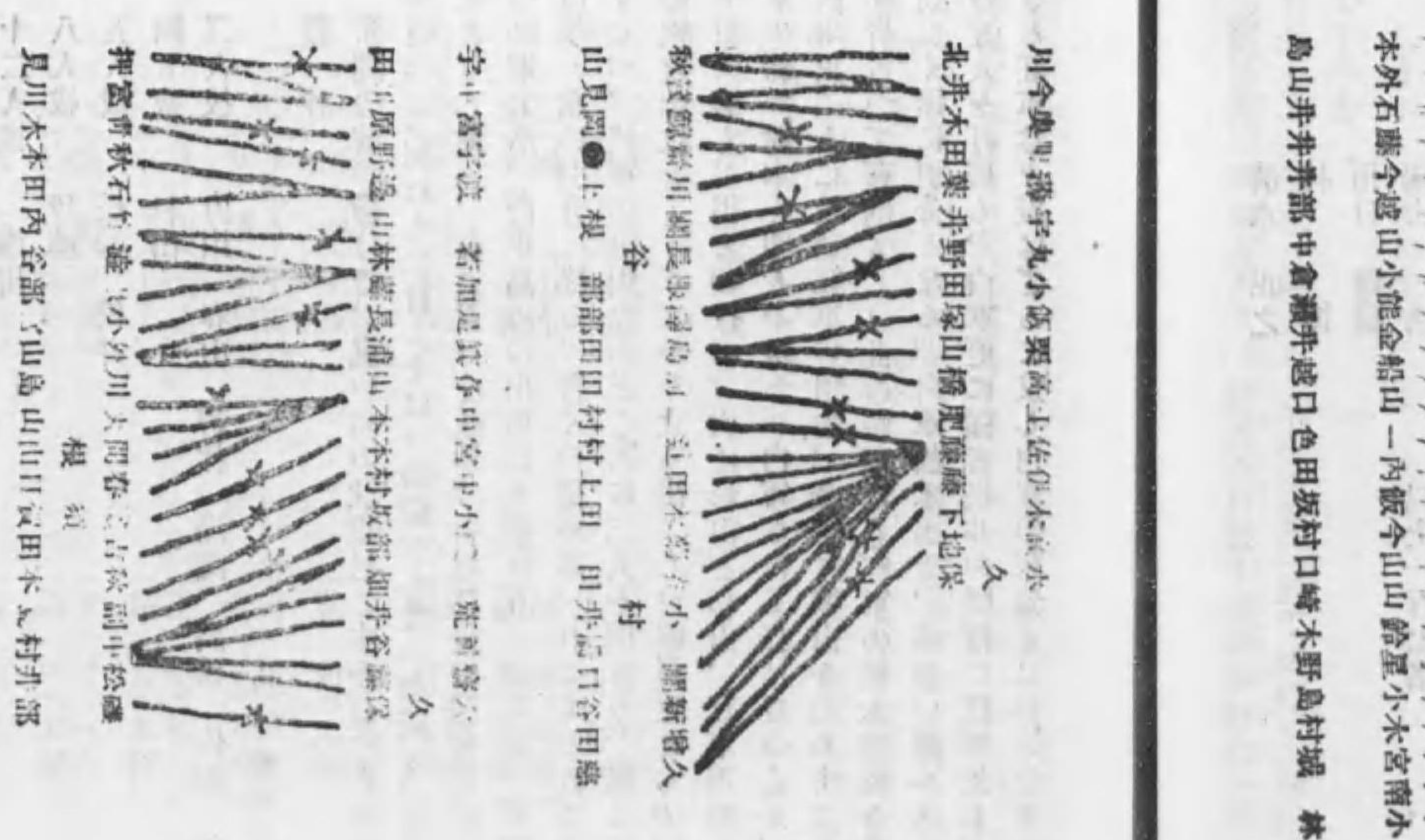


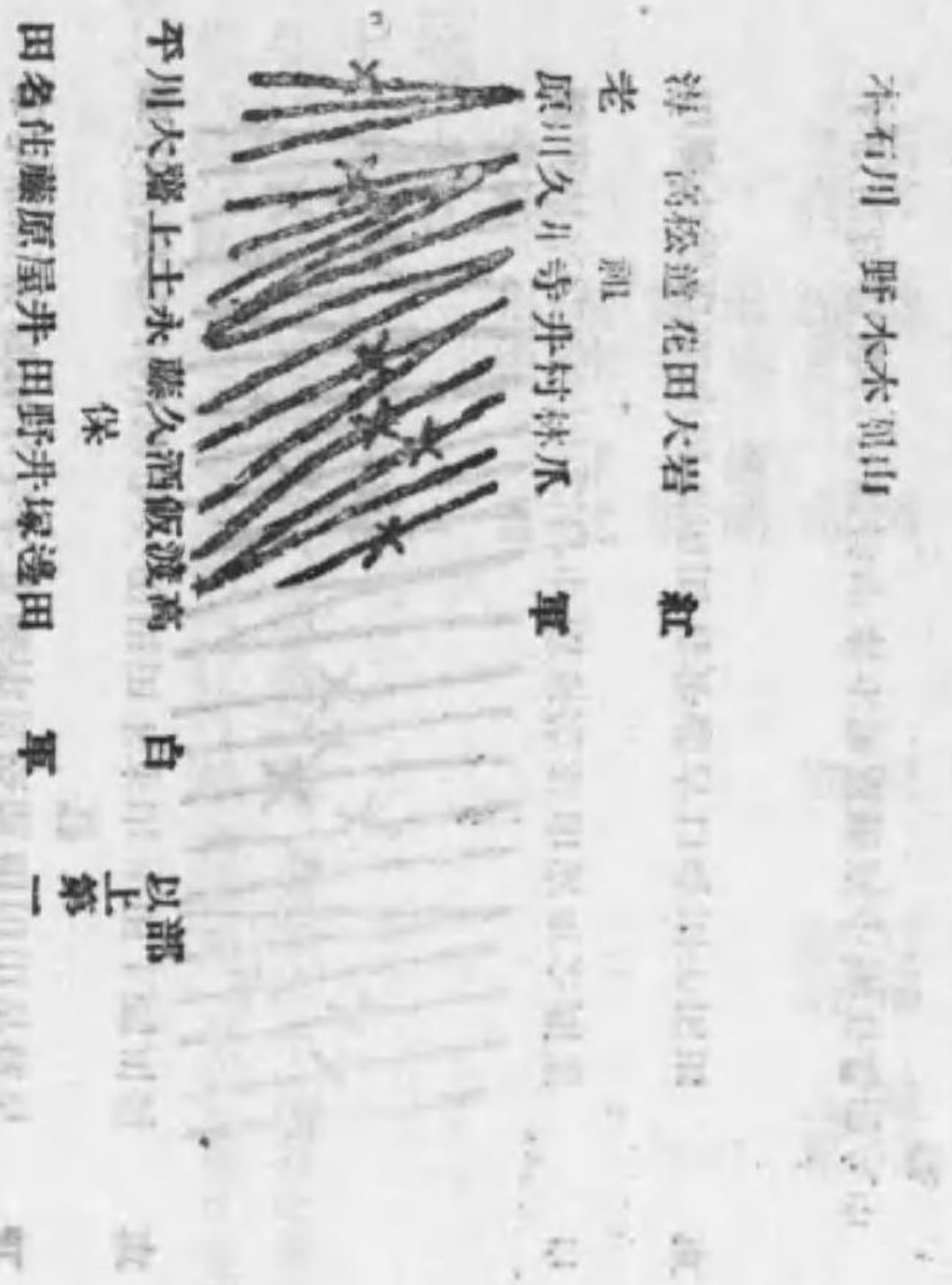
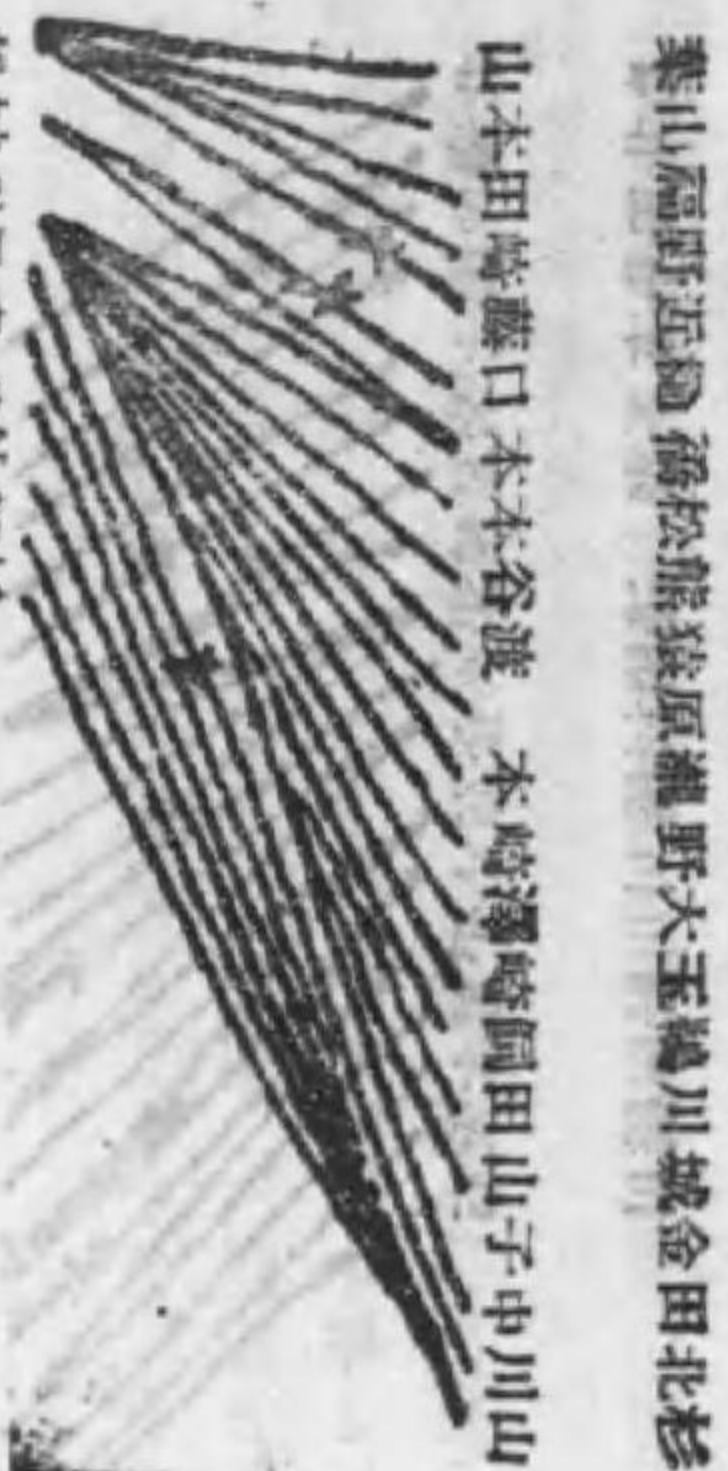
北瀧仲親土岩星鶴湯高倉高小平星大太石
島井田井方下野 淺橋杉藤川川野塚橋川

大將 澁川喜久雄
副將 阿部 豊治
三將 福村 五郎
田口 傳藏
福士 清
清水 正之
先鋒 田邊 實

川今奥里藤字丸小藤栗高上佐伊木藤水
北井木田葉井野田塚山橋肥藤藤下地保
秋濱野崎川淵長藤藤島山一連田本野有外 藤新増久
山見岡●上根 部部田田村村上田 田井田日谷田藤

字中富字渡 若加足其存申宮中小 荒前藤久
田原野邊山林藤長浦山本木村坂部淵井谷藤藤
押宮前秋石有邊 小外川大岡春吉藤副中松藤
見川木本田内谷部 山島山山日賀田木村井部





- 校内高部 左の如し
- 十二人抜 西川
 - 八人抜 伊藤
 - 五人抜 松本 松井
 - 四人抜 杉山
 - 三人抜 山川 春山 若林 湯淺 高橋 佐藤 鈴木
- (以下省略)

奮闘の前の静けさ、嵐の前の沈黙!! 水を打ったやうな静かな道場に、何れも今日こそは日頃鍛へし此の鐵腕を、振るはんと集まりし健兒、有に五百を數ふ。中村部長の開會の辭の本に先づ紅軍岩爪、白軍高田の出馬に火蓋は互に切らる。初陣の兩雄白熱し遂に引分に終る、暫くの間兩軍何れもつかざる有様なりしが、紅軍の山川たちどころに三人を倒せり。續く白軍の齋藤戰友の仇を……さばかり立ち出でしが勝負定まらず引分、海老原善戰し平田と相打す。次に杉山と杉山、紅軍凛然たり、白軍の新堀鈴木と四人を破る。白軍なほも振はざりしが、豪の者西川出づるに及び紅軍の田中、金子、城山を始め十二人の猛者は折重つて難倒さず、此の時現れし紅軍の松本秘術を盡せしも効なく遂に引分となる。白軍松本出で、得意の押へ込み紅軍の五人を打破る、白軍更に強者松井の腰投に紅軍忽ち五人を倒さる紅軍益々振はざるに反し白軍の意氣正に昇天たり。

此の時、絡軍春山川馬して三人を倒す、然るに白軍川島二人を破り紅軍再び危地に陥る、やゝして紅軍若林が三人を破りしも白軍湧然として優勢なり。紅軍中川二人を倒し、續く伊藤も亦得意の巴投に白軍の新谷、關口、石橋を始め八人の強者は枕を並べて打破らる。白軍に辻村出で互に妙術を盡して戦ふも遂に引分に終る、此處に至り兩軍の陣營整ひし感ありしが、白軍高橋三人を倒し續いて湯淺も亦三人を破り、紅軍四人を残して優勝せり。

紅軍吉岡白軍園田を始め技量伯仲し兩者引分、白軍宮崎紅軍山田を倒し、田中に破れ、紅軍田中、山口と分、しばらく順調に進む。紅軍柳田中田を破り村上に破れ、村上紅軍島田に倒る島田杉本に破らる。紅軍大石松本を破り間中と引分、試合の進むにつれ兩軍とも秘術を盡して戦ふ。紅軍日野島二人を倒し、山口と相打す。紅軍佐藤二人を倒す紅軍鈴木更に二人を破り豊島に倒さる。白軍松本二人を破り中野三分、兩軍いよ／＼満腔の勇氣をふるひ起し抜きつ抜かれつの有様なり。兄に劣らぬ藤野弟の大軀には流石の大淵も破る、白軍濱田代りてやうやく倒し、紅軍石崎に破らる。紅軍の善如寺泰然と出で得意の跳腰に大谷、小野寺の大男を跳飛す。ねばり強い山下も藤野兄にはせん術もなく打破らる。紅軍の

副將村花本と引分、紅軍は大將澁川を送り、白軍松平と戦ふ時白軍なほも三人の強者を残す。方や大將澁川、白軍松平と龍虎の争ふが如く暫くの間火花を散して決戦す。然るに如何なる隙あつてか、澁川巧に釣込まれて一本となる。斯くして二部の紅白勝負は白軍の勝に歸す。三船師範の訓辭あり時に十二時半、午後一時半より

- 無段者の部
- (赤)井(名倉)
 - (赤)佐々木(郁商)
 - (赤)橘(中商)
 - (赤)善如寺(本校)
 - (赤)外川(専商)
 - (赤)松平(本校)
 - (赤)佐々木(海城)
 - (赤)阿部(本校)
 - (赤)宇都木(早實)
 - (赤)田邊(本校)
 - (赤)宮田(大成)
 - (赤)宮下(井上)
 - (赤)波野(早實)
 - (赤)白土(本校)
 - (赤)藤野(本校)
 - (赤)藤野(本校)
 - (赤)入倉(中商)
 - (赤)石崎(本校)
 - (赤)河邊(専商)
 - (赤)武市(郁中)
 - (赤)福村(本校)
 - (赤)寺田(錦商)
 - (赤)藤野(本校)
 - (赤)森村(早實)
 - (赤)田上(大成)
 - (赤)渡邊(明大)
 - (赤)福士(本校)
 - (赤)中村(一心)
 - (赤)澁川(本校)
 - (赤)緑川(井上)
 - (赤)白土(本校)

○伊藤(井上) 藤(本校)
○福士(本校)

○田中(郁商) 青(本校)

○阿部(相生) 林(本校)

○中村(千中) 伊藤(講道)

× 梶原(中大)

以上 初段

○栗原(日大) 出(本富士)

○崎山(直陽) 神(本富士)

以上 二段

五人掛(時間四十分秒)

二段 神戸

三段

免出 伊藤

◎光藤 初段

田中

八人掛(時間十三分五十秒)

四段

今井 酒井 秋本

◎星崎 二段

神戶 伊藤 田中 梅宮 林

前二氏の掛には部員の大いに得るところがあつた。部長挨拶
賞品授與勝ちしも負けしも皆最後まで武士道の精神を固守して

終了せられたのは甚だ喜ばしい事である。

高等師範主催全国柔道大會

十月十一日出場する筈であつたが選手負傷の爲め棄権選手
名は省略す。

□他選手派遣

一心館道場(四月廿六日)

一級 田口 徹藏

三級 善如寺 清

郁文館中學(五月)

三級 阿部 豊治

同 澁川喜久雄

大成中學(五月廿五日)

一級 平沼 正治

同 田口 徹藏

法政大學(六月十四日)

同 清水 正之

同 田口 徹藏

同 梅宮 甫

同 田口 徹藏

同 平沼 正治

同 清水 正之

同 清水 正之

同 茶 博

日本中學(十月四日)

二級 橋本 哲郎

三級 花本 信男

東洋大學(十月十日)

一級 澁川喜久雄

二級 福村 五郎

同 阿部 豊治

三級 花本 信男

同 石崎 政治

専修商業(十月十一日)

二級 福村 五郎

攻玉社中學(十一月)

初段 林 博

早稻田大學(十一月八日)

一級 澁川喜久雄

高輪中學(十一月三日)

初段 平沼 正治

中央商業(十一月同日)

二級 阿部 豊治

初段 林 博

同 田口 徹藏

豊島師範(十一月同日)

一級 澁川喜久雄

早積田實業(十一月廿五日)

二級 福村 五郎

初段 林 博

初段 田口 徹藏

三級 善如寺 清

明治大學(十一月廿六日)

初段 林 博

同 田口 徹藏

校會會記事

中央大學(十一月廿二日)

選手 同右

附屬中學(十一月十六日)

初段 平沼 正治

日本大學(十一月廿九日)

初段 梅宮 甫

同 田口 徹藏

同 林 博

同 平沼 正治

同 清水 正之

一級 齋藤 武

同 澁川喜久雄

同 阿部 豊治

同 福村 五郎

二級 花本 信男

同 花本 信男

同 梅宮 甫

同 清水 正之

同 平沼 正治

同 林 博

同 田口 徹藏

□本校選手

以上

- 同 齋藤 武
- 同 福士 清
- 一級 澁川喜久雄
- 同 福村 五部
- 同 安部 豊治
- 二級 松平 勝敏
- 同 橋本 哲郎
- 同 田邊 實
- 同 藤野 勝善
- 三級 花本 信男
- 同 善如寺 清
- 同 石崎 政治
- 同 薦原 誠造
- 同 青山 徳治

□總評

概して本年度の我が部の發展は部員諸君の熱心さに於ける、亦大會小會、暑中稽古の如き著しいものであつた。先の遠征又他校へ派遣した選手の成績は、上出来と言へぬまでも決して不成功ではなかつた。然し日頃意込むでゐた、對校試合の決行されなかつた事は残念である。漸く頭を擡げ芽ぐむで來た今日聽ては花あり實のある黄金と

以上

も言ふべき時代を作り上げるのも、一重に在校部員諸君の意にあるのであるから、益々その氣を養ひ以つて、發展向上せらるべく此處に望んで擲筆する次第であります。 清水正之記了

弓道部記事

- 部長 原 顯一先生
- 師範 根矢熊吉先生
- 委員 井上 八郎 荒澤 鉄次郎
- 松平 貞雄 鈴木 未 勇

春季小會記事

六月拾參日(土曜日)

我等部員一同日頃練磨し鍛え上げたる此怪腕を發揮する日は來た。其の日は幸に弓引く者に取つては御誹向の好日和であつた。午後一時一〇分巢鴨天神山道場に集合。集る勇士六〇餘人各自今日こそ日頃望みし優勝の榮冠を握らんと意氣揚々としてゐる。午後一時三〇分、鐘の合圖に委員の開會の辭があり、それより甲組を先頭に乙丙組相續いて戦ひの火蓋は切られた。此の清々しく澄み渡つた春の天地に響くは、弦音、的の音、一矢一矢

に勇氣があり接戦又接戦 白熱の内に甲乙兩組の競射終る。

成績 甲組(八間) 八射 的尺二寸

一等 仙石 良郎 二等 植原 直記

三等 松野 猛雄 四等 福富 八郎

五等 道明 敏雄 六等 谷山 浩造 以下略

乙組(八間) 八射 的尺二寸

一等 若林 鐵申 二等 加藤 知八郎

三等 吉川 東雲 四等 鈴木 安政

五等 根 木 剛 六等 瀧 清 治 以下略

次は丙組の競射甲乙兩組より先輩だけに型も好く出來てゐるし又其の技量は甲乙兩組より一段と輝いてゐた。

一粒選りの選手だけに初めより猛烈な當りを見せた。成績 丙組(十六間) 八射 的尺二寸

一等 鈴木 勇 二等 石 倉 進

三等 石 原 進 四等 五十嵐 英治

五等 日 鼻 豊人

次は全部員を源平の二氏に、け源平試合を行ふ。

源氏方は御大の植原副將の根本先ず皆中して源氏の氣煙を上けたが其の後振はず合計八本を入れたのみ。

平氏方は初め一向振はず勝利は源氏方に定まつたと思ひしに谷山の皆中を筆頭に續く面々好く努力して合計十三本を入れ遂に五本の差で平氏方が優勝した。

次は呼物の金的

何はともあれ直徑一寸五分の小的なり尋常一様の腕では中々當るものではない。此の困難なる小的を誰が射當てるかと居並ぶ面々皆緊張して見物する。

甲乙兩組は八間にて競射したが當らず二回も又一回の如く當らないだらうと思ひきや突然カーンと一音春天に響き渡り拍手喝采萬雷の如く起る。

植原直記君乙矢にて射落す。

續いて十六間にて競射あり御大の井上、荒澤の出馬。

先ず荒澤申矢にて射落せば續く井上も甲矢にて見事射落す。

次は番外として射刺を行ふ。

此れも金的に次々快物で二寸五分平分的と同様甲乙兩組は八間にて競射したが當らず續いて丙組十六間にて射た先ず御大の荒澤一矢にて當れば續く鈴木勇取けては居らず、二矢目に射落す。

豫定の番組も無事に終り、委員井上荒澤の四名により賞品授與が行はれ遂に此の盛なる春季小會も終りをつけた。

秋季大會記

秋晴の天空に弦鳴響かしたつ 白箭はゆけり 若人の腕に盛り上る血汐をうけつぎてん

白箭、吾が若き今日の象現を希ふ。

來る十一月七日 午後一時半

於東鴨天神山道場

秋季大會を開催す。

と揭示すれば部員一同喜び勇み、此度こそ小會の汚名を雪がんと其の當日より一般の努力を以つて猛練習が行はれた。大會は如常何なる働きを見せるであらうか？

大會當日は来た。午後一時には大勢の部員集りしきりに巻藁の前に立つて型をなほしてゐる、誰も彼も一生懸命である。一時半合圖の鐘は靜まり切つた此の天神山に響き渡ると共に根矢師範の嚴かな一手の禮射が行はれ次いで甲乙兩組より競射の火を切られた。

一日過れば一日の差とやら、皆小會よりは餘程其の技術は上達して居り、其の上達せる技術を見ても如何に小會以來奮勵努力して練習せるかが分る、接戦く、又接戦同點者多く其の實力皆同等の様である。

- 成績 甲組(十間) 八射 的尺二寸
- 一等 大久保 一雄 二等 加藤 喜八郎
 - 三等 岡 澤 隆 四等 瀧 清治
 - 五等 鈴木 房政 六等 松野 猛雄 以下略
- 乙組(十間) 八射 的尺二寸
- 一等 根 本 剛 二等 鈴木 次郎
 - 三等 日比谷 進 四等 日鼻 豊人
 - 五等 末藤 郡四郎 六等 篠原 友夫 以下略

一騎當千の勇士の出陣

石倉先ず二本を入れれば鈴木も勝る者一回に羽分二回二本當てる。續く松平、石原平凡に終る。次の荒澤奮闘して一回に二本二回羽分を射落す。最後に井上一面一中二回皆中して鈴木荒澤井上の三名同點となる。

- 成績 丙組(十六間) 八射 尺二寸
- 一等 荒澤 鉄次郎 二等 井上 八郎
 - 三等 鈴木 勇 四等 石倉 進 以下略
- 來賓競射 的尺二寸 八射

町道場一流の先生連なり當りは當然、かへつてはすす方に面白味が出て来る、一番の白勢氏一面羽分二面に二本を次の横山氏一回羽分二回も羽分を射て我優勝せりと鼻を高くす、然し續く鈴木氏一回皆中二回三本を射て横山氏の天狗鼻をへし折る。門井、横谷兩氏平凡に終る。次に出で来るは本部の師範三室氏なり何にくそ鈴木等に敗けてなるものか奮闘せしが一回羽分二回二本當てたのみで白勢氏と同點となる次の勝山、橋本二氏平凡、遂に勝敗は定まつた。

- 一等 鈴木 氏 二等 横山 氏
 - 三等 三室 氏 四等 白勢 氏
- 金的、甲乙先ず十間にて競射を開始し一生懸命當ようとすれど相手は中々の難物なり、さう安々とは當らぬ。然し皆好く金的の近く迄滑ぎつけたのは上出来であつた。乙

競 技 部

- 五年委員
- 部長 浦 郷 先生
 - 先輩 奥 田 信 雄

- A 大野 耕 造
- B 齋 藤 武
- C 長 島 三 三 男
- D 三 重 野 次 郎
- E 池 川 重 雄
- F 淺 野 武 男
- G 池 田 記

大正十四年競技部記録
大正十四年一月廿六日

- 三年
- 早 瀬 道 應
 - 岡 田 治 良
 - 星 名 新 吉
 - 仲 田 耕 一
 - 濱 田 義 行

右農大主催のチムレースに出場す。此日雪の後の事とて意路悪しく甚だ選手は困難であつた。然し諸君の健闘により斷然四着に入賞す。

組は甲組等に敗けてなるものかと此れも好く奮ひしが一向當らぬ、又甲組も同様であらうと思ひきや最後の五十嵐大司満中の如く引絞り此處ぞとヒューと離てば、矢は鋭く空を切つて飛びあやまたず三重の上金的に見事的中、續いて來賓の競射一番より五番迄平凡に終る。六番の勝山氏先ず射落せば次の鈴木氏敗けてなるものかと引絞つてヒューと離てば見事金的の真中を貫く。

丙組は時間の關係上中止となる。

- 的 中者 五十嵐英治君 鈴木氏 勝山氏

續いて射割
甲乙兩組平凡に終り丙組に至る流石は丙組なり三番目の荒澤一矢にて射止む、續く井上同じく一矢にて射落し來賓の手を借りず二つ共射落したのは上出来。

此の様にして豫定の競射は無事に終り、部長原先生より賞品授與が行はれ、同部長の大會についての訓話があり續いて弓道會本部師範兼我が弓道部師範根矢先生の弓道に關する御話があり遂に此の盛大なりし秋季大會も終りを告げた。

午後五時三〇分。
一同我が弓道部及び日本弓道會の發展せられん事を祈り萬歳を三唱して解散す。

終りに望み御助力して下された部長並びに師範又奮闘せられた部員諸士に對して全委員に代り厚く御禮申上ます。(井上記)

二月六日

四年 長島三三男
三年 濱田義行

星名新吉
早瀬道應

岡田治良

右東京日日新聞主催の内濠五哩のマラソンケルに出場し大雪にもかゝらず選手は奮闘に奮闘を重ねしが惜敗せり。當日日比吾々の爲め心身共に熱を以て盡して下さる奥田先輩の御父上の御葬儀にて選手一同は涙と共に退場せり。

四月三日

五年 長島三三男
四年 三木直之

岡田治良

早瀬道應

星名新吉

渡邊彌太郎

右報知新聞主催東京横濱間第六回驛傳競走に本校代表選手として出場す。一月以來臥薪嘗膽練習を重ね、此に斷然必勝を期す。戦へ。日大中八百の健兒の代表諸選手よ。永島君スタートで事故にて少し後れしも大スピードを出して内幸町あたりで斷然トップとなる、鎌倉師、埼玉師、豊島師

三十一秒の差で斷然第二着

先聲應援の人々は第二着を祝ひ喜んだ。此に於て我々は斷然都下マラソン界の重鎮となつた。驛傳の始より未だ中學校にも第二着を得しは本校と小田原中あるのみ。

四月九日

五年 長島三三男

四年 渡邊彌太郎

右荏原中學校の一萬米競走に出場し斷然渡邊君第一着長島君第三着に入賞し大いに本校の氣をはいした。

五月

四年 渡邊彌太郎

右極東オリシピック第一種選に出場し千五百米に第三着五千米及一萬米第二着にて我校のため目覚しき健闘をしてくれた。尙一萬米競走中パンツのひも切れしも責任感に強き渡邊君は奮闘を重ねて遂に堂々たる成績を擧げて萬場を驚かした。

五月十六、七日

五年 長島三三男

四年 渡邊彌太郎

門脇重雄

早瀬道應

渡邊彌太郎

岡田治良

校友會記事

日大中の四校巴の如く戦ふ。中鎌倉と埼玉は先に日大中と豊師は伯仲の勢となる。奥田兄聲を怒らして「豊師の荒命は内濠の時お前(永島君)よりおせいぞ」はげまされ長島君奮起して荒金君を抜いて第三着のまま三木君にタスキを渡す。

新進三大選手は始め意氣上るも長距離になれぬ爲か蒲田邊で少しふらふらとなりしが奥田兄の聲援や永田兄の「氣まゝに走れ」に氣をとりなほし又小島が走つたので元氣百倍段々と盛り返し遂に岡田君にタスキを渡す。

岡田君一名茶目ネグロ三木君よりタスキを受くるが早いかどん／＼他校を抜き神奈川にて又一校を抜き櫻木町カーブの處で鎌倉を抜き。意氣大いに上り早瀬君にタスキを渡す。大じようぶだ」と早瀬君は育英を追ふ。その内郷郷先生奥田先輩のサイドカー松井兄其他の自轉車隊が脇について進む。神奈川驛の坂で育英選手を見るや早瀬君足が自然と早くなり活動附近で平行になり奥田兄又多数の自轉車隊の聲援で遂に育英を抜き。鶴見邊で早瀬に追いつき星名君にタスキを渡す。

星名君は變らずロングで行、六郷邊で早瀬を抜きつ抜かれつ大接戦を續け永田兄「相手はウドの大木だ」の聲に元氣づいて大木を後に意氣陽々とタスキを日本一流の渡邊君に渡す。

渡邊君の得意のスピードは見物人應援團を驚かせる。應援者は應應どころかハイハイ息切れる程であつた。飯倉の坂下邊より埼玉師を見て追ひかけ遂に有樂町ガード下で相手をパスして

三木直之

浅香政治

遠藤孝一

林一吾 隆

右全国中等學校選手權大會に出場しトラック後選には渡邊、早瀬、岡田の三選手が八百米、千五百米に入選し渡邊、浅香兩選手が二百米に入選せり。フィールドの方は惜しい所で破れた。トラック決勝にて八百米に渡邊選手が第四着千五百米に渡邊選手四分三十七秒で斷然第一着、早瀬選手が第三着にて入賞す。五千米も渡邊選手立派に第一着に入賞し當日の五千米の十七分一秒は中等學校の新記録なり。全国にて第三位の好成绩にて我校の名大いに上る。尙惜しむらくは關東スロウイング界の重鎮齋藤武君の出場せなかつた事である。若し出場せば第一位たるこゝは斷じてうたがはないのである。

五月二十七日

五年 長島三三男

四年 渡邊彌太郎

右法政大學主催の外濠一馬マラソンに出場し渡邊君は斷然四十七分十秒の新記録を以て第一着に入賞す。長島君は惜しい所で敗れた。

今日全校の目黒玉川間のマラソン競走あり。健兒皆長く走り在來のレコードを破るもの三人を出せり。

五年——目黒競馬場より玉川迄二里十町

- 第一着 B 中村 魁 三四分一四秒
- 第二着 A 増湖 梅夫 三四分四六秒
- 第三着 A 八卷 強 三五分〇二秒
- 第四着 A 杉山 榮一 三五分〇四秒
- 第五着 C 荒井 藤一 三六分
- 第六着 C 植原 喜夫 三六分二〇秒
- 第七着 B 福士 清 三七分二四秒
- 第八着 A 鈴木 次郎 三八分
- 第九着 B 有賀 勝次 三八分五秒
- 第十着 C 小田 島信一 三十八分一〇秒

(以下略)

第十着 C 川岸 恒彦 三七分一四秒

三年——コース前に同じ

- 第一着 C 小澤 芳夫 三四分〇八秒
- 第二着 B 七夕 義治 三四分五〇秒
- 第三着 C 鈴木 幸次郎 三五分二四秒
- 第四着 A 長南 本壽 三五分二八秒
- 第五着 A 長澤 四年 三五分三四秒
- 第六着 A 根來 重利 三六分一七秒
- 第七着 B 東野 倫臣 三六分二九秒
- 第八着 B 坂田 芳夫 三六分四三秒
- 第九着 A 境 監安 三六分四六秒
- 第十着 C 外山 稔 三七分〇三秒

(以下略)

四年——コース前に同じ

- 第一着 B 渡邊 彌太郎 二八分四九秒(新記録)
- 第二着 C 早瀬 道應 三十分五七秒(新記録)
- 第三着 B 岡田 治良 三一分四九秒(新記録)
- 第四着 A 星名 新叶 三三分一九秒
- 第五着 B 吉野 一斤 三三分五三秒
- 第六着 A 小島 壽太郎 三四分二〇秒
- 第七着 B 百瀬 泰男 三六分三二秒
- 第八着 C 橋本 肱 三六分五一秒
- 第九着 B 高橋 信一 三七分一三秒

二年——氷川神社より玉川迄一里十町

- 第一着 A 熊谷 四郎 一八分四三秒
- 第二着 A 峯 政雄 一九分一六秒
- 第三着 C 秋元 干城 一九分三一秒
- 第四着 B 早瀬 武太郎 一九分三五秒
- 第五着 C 菊地 豊彦 二〇分〇五秒
- 第六着 B 安藤 保 二〇分一三秒
- 第七着 C 小川 徳太郎 二〇分二六秒

- 第八着 C 鈴木 照次 二〇分三六秒
- 第九着 B 山下 積 二〇分三七秒
- 第十着 B 岩本 幸作 二〇分四〇秒

一年——コース前に同じ

- 第一着 A 佐野 秀雄 一八分一五秒
- 第二着 E 留場 秀雄 一九分〇六秒
- 第三着 B 石坂 正夫 一九分一七秒
- 第四着 A 井義 助 十九分二二秒
- 第五着 B 杉浦 正義 二〇分〇四秒
- 第六着 E 野崎 利一 二〇分〇六秒
- 第七着 B 竹内 清 二〇分〇八秒
- 第八着 E 佐藤 泰夫 二〇分一六秒
- 第九着 E 細野 利則 二〇分一七秒
- 第十着 E 鶴飼 貢 二〇分三一秒

(以下略)

右の成績で競走は八時に開始され十一時には全部のものが決勝に入つた。荒川校長より一場の訓辭があり、大盛會に散會し喜にみちた若人は家路にむかつた。

- 四年 渡邊 彌太郎
- 早瀬 道應
- 岡田 治良

右日本齒科醫專の八百米競走に出場し各選手皆豫選に入選し決勝にて渡邊君第二着に入賞す。

四年 三木 直之

右帝國大學運動會八百米リレーに出場し斷然第三着に入賞す

- 五年 齋藤 武
- 四年 門脇 重雄
- 早瀬 道應
- 渡邊 彌太郎
- 遠藤 孝一
- 淺香 政治
- 佐野 秀雄
- 一年 石坂 正夫

右秋季全國中等學校對校選手權大會に出場し第一日トラック豫選にて齋藤君が百米に渡邊君が千五百米に入選しフィールドにて齋藤君が砲丸投に入選せり。第二日決勝に於て渡邊君千五百米と五千米に第三着となり齋藤君が砲丸投決勝に第三着となる。當日兩選手ともオーバワークの爲め實際に涙ぐましいほどであつた。

九月二十七日

五年 淺野 武夫
 四年 遠藤 孝一
 三木 直之
 淺香 政治

右商科大學運動會中等學校八百米リレーに出場し、強敵と相手として奮闘し、第三走者の淺野君運悪くたをれて惜しくも敗る。

四年 遠藤 孝一
 三木 直之
 淺香 政治
 吉野 一斤

右法政大學運動會の八百米リレーに出場し奮闘せしが運つたなく惜い所で敗れた。

十月十一日

五年 長島 三三男
 門 脇 重雄
 四年 渡邊 彌太郎
 三木 直之
 遠藤 孝一
 淺香 政治
 吉野 一斤

和浦和高校主催の浦和高校の關東中等學校選手権大會に出場

十月二十五日

四年 渡邊 彌太郎

右高等師範の一萬米競争に出場體の調子悪しく成績はあまりよくなかつた。

十月二十五日

四年 早瀬 道應
 遠藤 孝一
 三木 直之
 淺香 政治

右高等蠶絲學校ミドルリレーに出場し斷然第二着にて入賞し
 我々の名を擧げた。

十月二十五日

五年 齋 藤 武
 右水戸高校主催關東中等學校選手権大會に出場し砲丸投に十二米二十四の新記録を造つて斷然第一着に入賞し且孤軍奮闘して第三位と併り大いに我々の名をあらはせり、尙當日大野君の多大の應援を感謝する次第なり。

五年 池田 重雄
 四年 増田 理平
 三年 永妻 大綱

す。十月十日に選手一行は諸先生や應援團に送くられて必勝を誓つて浦和に向つた。上野を離る、時應援の聲は山にこだまし選手をして必勝の意氣を増さしめた。愈々當日は我々の選手の活躍目覚しくまづトラツクで三木選手が四百米豫戦に五七分五分一の記録で入選せしも決勝には惜い所で敗る、渡邊選手は五千米決勝に十六分一秒の日本新記録を作り斷然第一着に入賞す齋藤選手は砲丸投に十三米〇六の新記録を以て斷然他校をおさへて優勝す、多くの應援團諸君の熱誠なる應援は選手の意氣を百倍せしめた。

十月十七日一、二年學校小田原間六十哩驛傳
 十月十七日猛雨中にもか、わらず元氣なる一、二年生は本校々庭小田原驛前六十哩驛傳を行ひ六時間五十九分と言ふ優勝なるレコードにて美事大成功をおさめたり。受持區域は

學校八ツ山間 八哩 熊谷 (二A)
 八ツ山川崎間 八哩 杉浦 (一B)
 川崎保土ヶ谷間 十一哩 留場 (一E)
 保土ヶ谷藤澤間 十一哩 石坂 (一B)
 藤澤大磯間 十一哩五分 佐野 (一A)
 大磯小田原間 十一哩 峯 (二A)

にて白輪車附添には松井先輩星名君附添として奥田先輩北澤君が盡力されたり。

右中央大學運動會の八百米リレーに出場し豫選に第一着決勝にて第三着に入賞せり。

四年 吉野 一斤
 野口

右拓植大學の八百米競走に出場し吉野第三着野口第四着にて入賞せり。

四年 早瀬 道應

右攻玉社中學校の三千米選手走に出場し悪コースにも拘らず斷然第一着に入賞し萬丈の氣をはいた。

五年 池田 重雄
 四年 永妻
 遠藤 孝一
 吉野 一斤

右駒場農大の八百米リレーに出場し豫選に第二着で入選せしも決勝戦で惜しくも敗る。

十月十七日

四年 渡邊 彌太郎

右明治神宮競技大會豫選に出場し五千米に一流選手と健闘し後藤信雄選手と胸一つの差にて惜しくも第四着となる。

四年 三木 直之
 遠藤 孝一
 淺香 政治

永妻
右府立實科工業學校の八百米リレー模範競技に出場し断然他校を置き第一着に入賞す。

四年 渡邊彌太郎
右全日本選手権大会に出場し五千米及一萬米に第四着を得て入賞し我が校の名譽を擧げた。

五年 門脇重雄
四年 三木直之
渡邊彌太郎

右學生聯盟主催萬朝報社後援の冬訓練習會の試練會に出場の門脇選手は走高跳團擊投に第一着渡邊選手は四百米千五百米に第一着三木選手は百米四百米に第二着を以て共に入賞し尙八百米リレーにも断然第一着に入賞す。

七月末……八月
七月末より八月半まで各選手は夏季練習をなし合宿して盛大に行へり。
(合宿記録参照)

十月廿五日
本日我が校第十三回大運動を平井に於て開く。

(運動會記録参照)

十一月二十八日
今日校内聯合マラソン大會を開く。

(校庭出發外手町淺草橋廻)

第一着 O組 熊谷、星名、細野、吉野、齋藤
第二着 D組 武田、高橋、早瀬、留場、渡邊
第三着 B組 小川、宇野、早瀬、杉浦、三木
第四着 A組 石坂、檀上、峯、野口、岡田

競技部夏季合宿(於吉濱)之記

三重野次郎記

合宿員人名

葛田先生、奥田先輩、名取先輩、鈴木先輩、近藤氏、藤崎氏
五年 齋藤武、三重野次郎
四年 川名利雄、水口利雄
二年 土戸義雄
一年 佐野秀雄、武田恒一、松井健三、野崎利一、鈴木正吉、露木秀夫

全國中等學校の競技界に覇を唱へ、黄金時代を現出しつゝ、ある我が日大中競技部は奥田先輩の御苦心により湘南の一角その名高き熱海温泉の程近き吉濱に八月五日より同十八日迄身體を健全にして「来るべき日」を待つ爲に合宿をした。

八月五日午前八時、俗塵の都に一箇の別れを残して汽車は葛田先生及コーチ奥田先輩外二十餘名を乗せて南へ南へ吉濱さして進んだ。我等の豫期以上吉濱の景色は良かった。朝は五時

床、海上遙に昇る朝日に吾等而して吾校の前途を祈り二時間餘勉強の後競技の練習に移るのである。温泉温泉迄四哩の山路を毎日走破するのも愉快である、午後はスパイク片手に元氣よく鹽風に吹かれながら小學校々庭で猛練習をし、汗まみれにつれた身を清き水にひたしてサツパリと夕陽を背にあび校歌を歌ひながら蟲も泣く様な山路を合宿さして行く、それが一日のプログラムである。黄昏時合宿の窓を開けば我等がもゆる希望を表現するかの様な赫々たる夕陽は明日を約して沈みかけて居る沖は静かだ眠れる如く近くまでキラ／＼して居た空と海は一日の強い反射の光を収め様としてゐる、東西の地平線をほかして水に浸りそうに垂れ下つた薄雲の裾のバツと落陽に射られた隙間から伊豆の大島が微に三原山の頂を露はしてゐる。夕なぎの波の上にボツ／＼と眠たけな響を續けて漁船は吾等が平和な町をさして歸つて来る。この絶景に我等がスポーツマン、ドリーミ

リーは續けられたのである。
おぼろに霞む月の光を窓越しに
一つと出たわいなよさほいのほい
人も知つたる日大中ほい

今年合宿吉濱でほい／＼
二つと出たわいなよさほいのほい
舟は出て行くさがみなだほい
あじろ伊東を右に見てほい

校友會記事

三つ——みどりしたゝる磯の松
あれに見ゆるは吉祥院ほい／＼
以下略
競技の進歩に餘念なく語りあふ者や歌うたふ人の聲静まる時皆は安らかに眠り行くのであるかくて我等の合宿は無事に面白く終つた。
(完)

野 球 部

部長 田中長男師
委員 野口武雄 野村不二男
江田善作 鹽澤昭信
三上正之助 菱木三郎
田淵秀夫 熊谷四郎
笹川慶永 大淵俊夫
林儀助 高宮昌平
樋口圓至

日大中二十八赤陽
吾校野球少年部は拾月廿四日午後二時より平井球場にて城東の雄赤陽俱樂部少年部と戦を交えた。
審判三上氏(球)菱木氏
第一回本校先攻して高田投制高校滋谷の三匴高宮の三匴に早

くも満塁となり好機吾校を見舞う、打者は名に負ふ好漢峯、然し敵投手も落つきはらひ、故意に四球を送りて進塁さす。高田勇躍して最初の一塁に入る。續く中山も四球にして澁谷も還る次の神谷見事な曲球にて三振後、林投捕に生き、高宮還る、荒井四球にて峯還る、打順一周して高田立ち3121の後三振に退く。澁谷四球に中山還りの一塁を加へて五點となる、次の神谷投捕に死す。

赤陽、中山先づ四球に進塁す。次の堀内二捕に死した後、橋本も一捕に死後、四番山口一捕に生き好機来りしと見えしが島村三捕に退き最初のチャンス逃がす。

第二回本校林投捕に生き、加藤の一捕に二者死す。次の金井四球にて進塁せしが高田の二捕に退く。

赤陽、高橋三球にて三振、金井一捕に生きしが續く中山(弟)佐々木、峯の快腕に枕を並べて三振す。

第三回本校此回はつるべ打の安打に四球を加へて、總計十一點を算し断然リードす。

赤陽、中山、堀内、橋本三者三振に退く、峯の快腕益々敵軍を●伏す。

第四回、本校高田、澁谷、加藤の憤打、並に神谷、荒井の駿足に四點を更に加ふ。

赤陽、島村、高橋、金井全く峯の快腕に打撃を封ぜられ三振に退く。

第五回本校高宮、中山、林の長打に敵失を加へ、て更に八點を加ふ。本校猛打の前にはさすがの赤陽も精氣なし。赤陽かわつて攻め島村の三捕失に生き、高橋、金井の横打に三壘に進む、續く中山(弟)の一撃右翼をかすめて二壘打し、最初の一塁を入れしが次の佐々木三振に退く。

第六回本校林、加藤、荒井三捕遊に退く。赤陽、中山三振後堀内遊安打に進み巧みに二三壘を盗みしが次の橋本三振に終れりと思しが、山口二壘後方に安打して堀内還る。次の島村投捕に終る。

第七回本校高田、澁谷二壘飛球に死後、高宮三捕に退く。赤陽最後の攻撃も空しく、峯の快腕に三者三振に退きて萬事休す。

(赤陽)	山内本白村橋井	打數二	四死	四
(捕)	堀橋山島高金中山(弟)木	安打	三	盜壘二
(一)	堀橋山島高金中山(弟)木	横打	四	失策四
(遊)	堀橋山島高金中山(弟)木	三振	十五	得點二
(中)	田谷宮	打數三	二	四死
(右)	峯	安打	六	盜壘三
(左)	林	横打	四	失策三
(遊)	中山(弟)峯澁谷神谷加藤	三振	四	得點廿六

二壘打 中山(弟)峯澁谷神谷加藤
時間 二時間十分

かくして初陣の戦に廿八對二のスコアにて大勝せし本校野部の實力も、遂に一般を認められるに至つた。

當日の峯、加藤の好投好捕は實に目ざましい物であつた。峯の三振十五本並に高宮澁谷の長打、神谷荒井の駿足、高田中山林の堅實な守備は大勝の大因せしに充分である。

本校野球部は十一月廿一日午後一時より平井球場に於て秋季大會を開催し、左の戦績にてC組遂に優勝せり。

組)	谷井宮谷谷本戸淵口	打數十九	三振十三
(B)	(二)磯荒高熊神宮上大野	安打	二
(遊)	(三)磯荒高熊神宮上大野	横打	三
(捕)	(左) (一) (右) (中)	失策	三
(一)	(右) (中) (左) (一) (三) (二) (遊) (捕)	四死	五
(中)	(遊) (捕)	得點	二
(左)	(遊) (捕)	打數廿三	三振九
(一)	(三) (二) (遊) (捕)	安打	六
(三)	(遊) (捕)	盗壘	四
(遊)	(捕)	失策	二
(捕)	(捕)	四死	二
(捕)	(捕)	得點	五

三壘打 熊谷
時間 二時間 審判 宮崎(球) 江田 鹽澤氏

第一回戦で勝つと思はれたB組の敗因は、折角のチャンスをむざ／＼逃がしてしまつた事、並に全く峯に打撃を封じられた事に依る。此の日峯は又三振十三本をとつて味方を勝利に導た第七回の裏で大淵が一本安打を出したならば、或は試合は逆轉

したかも知れなかつた。

熊谷は峯のアウトカールの曲り目を左翼に打つて、三壘打を出して萬丈の氣を吐いた。

峯大淵の好投、熊谷高宮の猛打、笹川の元氣、樋口樽美荒井の好守は一段と光つてゐた。

組)	澤田村淵上代木野口	打數廿三	三振三
(C)	(三)鹽江野田三上菱大野	失策	一
(遊)	(二)鹽江野田三上菱大野	横打	二
(捕)	(左) (中) (右) (一)	打數十七	三振十
(一)	(右) (中) (左) (一) (三) (二) (遊) (捕)	安打	二
(中)	(遊) (捕)	盗壘	三
(左)	(遊) (捕)	失策	〇
(一)	(三) (二) (遊) (捕)	四死	四
(三)	(遊) (捕)	得點	五

第一回戦に勝ちしA組と不戦一勝のC組との間に優勝戦を行ひ八對三にて遂にC組優勝せり。
審判 谷口(球) 宮崎兩氏
時間 二時間廿分

庭球部

部長 武内猛夫先生
 委員 五C 日比谷進 五B 鷹見嶺夫
 總部員 約百五十名
 部報

五月二十日(金曜日)

春季練習小會

本日は時間の都合上餘儀なく次の如くにして舉行した。

紅白試合 (二回戦)

○(岡崎)	(辻村)	(安部)	(豊田)
○(神谷)	○(長野)	○(佐野)	○(渡瀬)
○(宮城)	○(佐野)	○(杉山)	○(田口)
○(櫻井)	○(佐藤)	○(田島)	○(橋本)
○(仲本)	○(川上)	○(田口)	○(筒井)
○(北川)	○(鈴木)	○(三井)	○(岩崎)
○(佐々木)	○(谷川)	○(小田島)	○(松丸)
○(高橋)	○(増淵)	○(佐々木)	○(花々木)

三回戦
 三將(鈴木) 三將(鈴木) 副將(植原) 副將(鷹見)
 (橋本) (山下) (山本) (神戸)

十月二十四日(土曜日)

日中對本校第一回戦を舉行す

日本中選手は早くよりコートに來て練習し本校選手は旅行の事でおくれ選手中には晝食もたべざる者ありて振はず、上代野村君の優退の外鈴木山下君の一回リードの外利を得ず又植原來栖橋本の有力なるもの、缺席により終に破れた。

十月二十四日

立正中學に左の選手を派遣しその結果勝を得て歸つた。

(來) 栖(四年) 橋(五年)

十月二十五日(日曜日)

埼玉師範主催全關東庭球大會に於て上代野村組鷹見神戸組を派遣す、その結果二組とも二回戦にて破られた。

感想

委員 日比谷 嶺

吾が庭球部は學校の發展と共に増々其の進歩を示し、曩にはオール本所、浦和埼玉の試合に加はり次ては立正目白日中の諸試合を経て基礎愈々確實となり、今や東京屈指の庭球部と認めらるゝ様になつた。是れ本より部長の誠實、學校當局の理解との賜物である。委員始め部員一同喜んで居る次第である。然れども未だ遺憾と思ふもの唯一つある。其れはコートに不完全な事である。今のコートはコートではなく單に校庭の一部に過ぎず。凸凹激しき事夥しく練習の不便にても口舌の良く盡す事は

校友會記事

大將(日比谷) 大將(上代) 周(野村)

七月十九日(日曜日)

本所區教育會主催本所區軟式庭球大會

本日派遣した選手は左の如くであります。

生徒(上) 村代 (神) 上 原 戸 (日) 比 谷
 (浦) 郷 先生 (丸) 島 先生 (林) 先生
 (武) 内 先生 (原) 先生 (田) 中 先生

此の日はまづテニスに相應しい日ではありませんでした。上代野村組は非常なあたりで準決勝まで上原神戸組、日比谷周組は振はず第二回戦にて敗北致しました。

職員の方は本日大浦郷先生武内先生は振はなく第二回戦にて鈍くも敗れました。原先生丸島先生は非常に奮戦せられ準決勝にて破られました。此の日浦郷先生武内先生のあたりが常の如く運ぶならば確に選手権は我々のものとなつたでせうに此の日はあまりに先生組はあたりませんでした。

八月二十五日(木曜日)

全國中等學校庭球大會

此の日は絶好のテニス日和でありました。しかし夏休のため選手の不揃のため但部長委員の見えた所、誰れも見えずやむなく後衛どうし一組をつくり濱松商業とあたりついに敗られました。

出來ない。されど創立以來日尚ほ淺く練習不足の吾が部も部長始め諸先生の御指導の宜しきを得て今や著しく上達し終には國際に覇を争はん日も餘り遠い將來でもないであらう。

九月十三日(日曜日)

浦和高崎學校主催全國中等學校選手権大會に上原山本、上代野村組を派遣す、此の日植原山本組運悪く二回戦にて敗北しました。上代野村組は三回戦まで行つてこれを空しく敗れましたが、委員一同兩組の奮闘ぶりには深く感謝するところでありませぬ。

九月二十四日(土曜日)

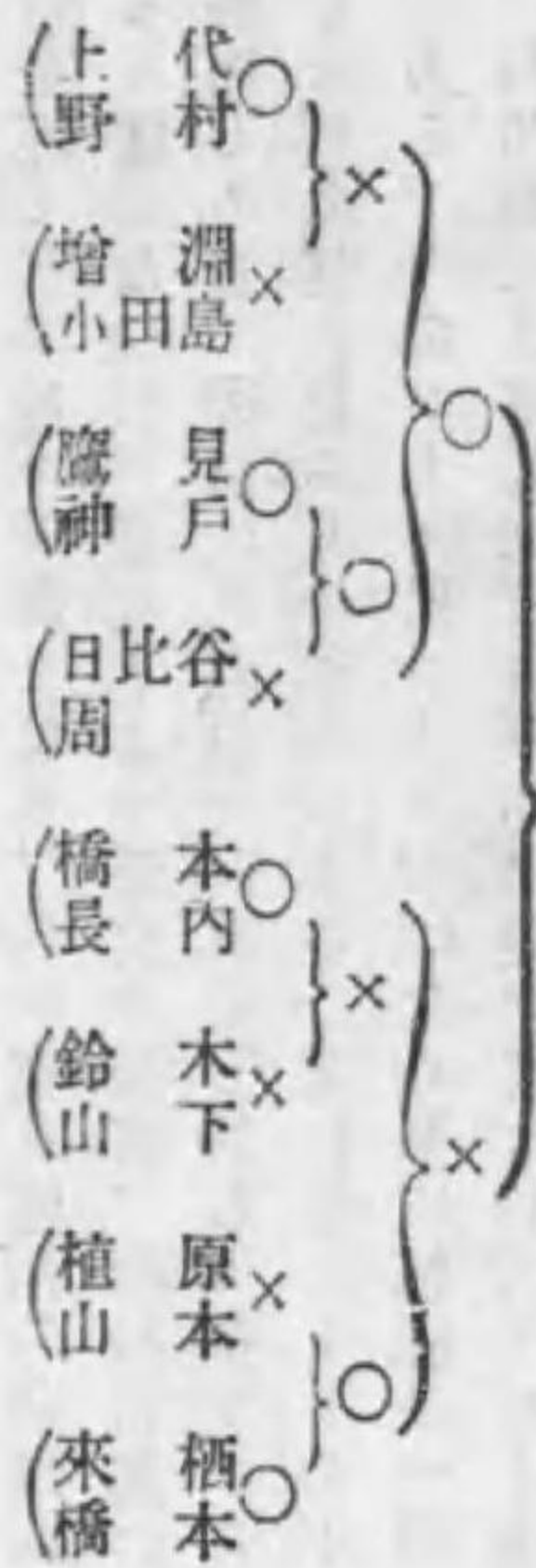
目白中對本校第一回庭球戦を舉行す。

此の日天氣悪くそれ選手の練習不足により目白組にほとんどやられ上代野村組の一組を破る外全部やられた。

十月十六日(日曜日)

秋季校内庭球練習大會

此の日はほんとによい庭球日でありました。朝九時より前日の運動會の疲れも忘れ部員の多くととして選手及卒業生諸君の参加により盛大なる會の幕はおろされた。先部長の開會の辭とそれに關る二三の注意とり一年二年三年と三回戦をつ、け選手側は左の如し。



角力部

部長 櫻井純孝先生
委員 大島 鎮一 浅野 武男

我が角力部は本所に校舎が越してから土俵を失ひ困窮してゐたが部分及び諸先生の御盡力に依つて五月五日に校庭の北隅に土俵開きをする事が出来た。待ちに待つた土俵が出来たので全部員は猛練習をなし術はメキ／＼と達した様だつた。然しその練習する日も僅の内に國技館及び九段、國分寺にと出場する事となつた。我々練習の足りない未製品が良くあれだけ勇敢に奮闘したと云はれる位、諸處で相當以上の成績を挙げたのである。此は實に全校生の熱誠の迸りであると確信する次第である次に我々未製品の出場した成績を書く。

五月十六日 本校、本牧對校角力大會
本校 先鋒◎下村 本牧 ○山内(二本勝負)
◎江田 遠藤

總點

我が選手拾名は元山の紹介で本牧まで遠征に行つて本校の爲に萬丈の氣焔をはき十五對十の五點の差で樂に大勝した。
五月卅一日 第六回關東學生相撲大會第一日
本校 早實 本校 高中
先鋒 元山 ○菊地 先鋒 元山 ○篠山
中堅 野口 ○寺内 中堅 野口 ○近藤
主將 浅野 ○小京 主將 浅野 ○高野
本校選手最善の努力をしたにも拘らず全敗に終り惜しい事であつた。
六月一日 關東學生相撲大會第二日
本校 本牧
先鋒 元山 ○佐々木
中堅 ○野口 成田

主將 ○浅野 上村

本日は本牧に全勝する確信があつたが惜しいかな一點とられた。總點二點で優勝旗は海城に

六月七日 明大主催第二回關東學生根撲大會

本校 海城 本校 専修
先鋒 矢野 ○小川 先鋒 矢野 ○總根
中堅 齋藤 ○吉本 中堅 齋藤 ○伊東
主將 浅野 ○武藤 主將 浅野 ○緒形

七月五日 電機學校角力大會

浅野、齋藤兩名を派遣す。兩名大に奮戦し大勝した。

十月四日 攻玉社中學角力大會

鹽澤、大島兩名を派遣す。兩名大に本校の爲めに奮戦す。浅野途中で飛入りし入賞す。

十月卅一日 高輪中學角力大會

浅野、齋藤兩名を派遣す。兩名共に大勝し入賞せり。

暑中稽古

我が部では七月十七日より十日間暑中稽古をした。出席者は浅野、江田、大島、竹森、澤野、鹽澤、菅、野口、松野、小野等である。

本校 電機 本校 正則
先鋒 矢野 ○植原 先鋒 矢野 ○増永
中堅 ○齋藤 佐藤 中堅 ○齋藤 高橋

校友會記事

主將 浅野 ○佐藤 主將 ○浅野 高桑

本校 赤阪 野不 大成
先鋒 ○江田 田中 先鋒 ○江田 澤川
鹽澤 ○柴田 鹽澤 ○佐藤
野口 ○島口 ○野口 ○長田
齋藤 ○塚本 齋藤 ○多田
主將 浅野 ○西形 主將 浅野 ○方波見

六月廿七日 専修商業相撲大會

本日總得點六點優勝旗は遂に海城に

六月廿八日 箱根土地主催都下學生角力大會

下村、鹽澤兩名を派遣す。兩名大に本校の爲に奮闘す。

本校 赤阪 野不 大成
先鋒 ○江田 田中 先鋒 ○江田 澤川
鹽澤 ○柴田 鹽澤 ○佐藤
野口 ○島口 ○野口 ○長田
齋藤 ○塚本 齋藤 ○多田
主將 浅野 ○西形 主將 浅野 ○方波見

先鋒 ○江田 武井
鹽澤 村崎
野口 伊藤
齋藤 瀬戸
主將 浅野 ○佐藤

總得點八點で今少しの所で準決勝に出場する處であつた。江

校友會記事

田は個人優勝をした。本日は電機を四對一で惨敗させ本校角力部の眞に實力のある事が證明されたのである。

校内角力大會

生憎の雨に觀客も次第に減りしも一同の意氣雨を凌ぐの機ありき。

委員大島鎮一君の開會の辭に奴まる。

取組 勝負 次の如し。

一年(A對B)		(B對C)	
A 戸室	B 岩楯	B 岩楯	C 佐々木
宮城	高田	高田	武藤
山川	杉浦	杉浦	小川
長野	薄葉	薄葉	伊藤
林	滿田	滿田	齋藤
A 一點	B 四點	B 三點	C 二點
(A對C)			
A 戸室	C 佐々木	DE は休みに付	
宮城	武藤	ABC は不戦一勝	
山川	小川	せしなり。	
長野	伊藤		
林	齋藤		
A 二點	C 三點		
二年(A對B)		(B對C)	

三年(A對B)		(A對C)	
A 藤野	B 風間	A 藤野	B 風間
笹川	加藤	伊東	門脇
川合	大島	渡邊	大淵
A 二點	C 三點	三年(A對B)	
(C組棄權のため二回組む)			
A 大管	B 豊島	四年(A對B)	
當田	山崎	四年(A對C)	
福田	花本		
佐藤	藤野		
野口	鍋		
四年(A對B)		(B組棄權)	
A 藤野	B 風間	A 藤野	B 風間
伊東	門脇	伊東	門脇
川合	大島	渡邊	大淵
A 四點	B 一點	四年(A對B)	
(A對C)			
A 藤野	B 風間	五年(A對B)	
伊東	門脇		
川合	大島		
A 四點	B 一點		

四年		安部	
A 高島	C 小野	A 高島	C 小野
長谷川	中村	長谷川	中村
佐藤	安部	佐藤	安部
A 組 四點	C 二點	五年(A對B)	
(B對C)			
A 山田	B 河野	B 河野	C 植原
菅原	中村(治)	中村(治)	松野
林(之)	山内	山内	寺田
松平	岸本	岸本	佐藤
林(博)	水谷(平)	水谷(平)	久保田
A 二點	B 三點	B 二點	C 三點
(A對C)			
A 山田	B 植原	夏季寮日記	
菅原	松野		
松平	寺田		
林(立)	佐藤		
林	久保田		
A 四點	B 一點		

之より個人優勝			
一年 一等 杉浦	二等 武藤	三年 一等 野中	二等 豊島
二年 一等 田淵	二等 風間	二年 一等 野中	二等 豊島
三年 一等 野中	二等 豊島	三年 一等 山崎	二等 大淵

校友會記事

雨繁く、第二教室に於て櫻井部長の挨拶及び賞品授與式あり。後淺野委員の開會の辭に散會す。

水泳部

七月二十三日(木) 昨夜のラチオで天候を氣にしてゐたが、とうとう今朝は雨だつた。

一行五十餘名が兩國驛に集つて来る。八時頃は篠つく様なマシヤ降り、見送りに来てくれた人達から「生憎ですな」云はれる。何だかおつかりしてしまつて淋しかった。

八時四十五分、勝浦行の列車は一行を乗せ雨の中を出發した。出發のその時まで校長先生が一行に對し滞在中の注意やら心得について何くれと我々を督勵して下さつたことは首途の一行に取つて結構な清涼劑であつた。

間足らずの時間は少しも怠屈することなしに勝浦についた。雨は止んでゐた。生徒は歩いて先生達は自動車で、興津へ着いたのは二時前だった。

先發の新井先生が驛まで迎へに来て。荷物等の交渉は全部済ませて置いて下さったので萬事世話なしに我々は興津へ来てしまつた。

毎年の通り妙覺寺天徳寮が我々日大中大水泳部の夏季寮として用意されてゐたわけである。

雨こそなければ、空は荒模様のので今日は海へは入らずに部長の先生、生徒監、水泳教師からそれ／＼注意が與へられただけで今日の日課に代えた。

ここへ来て始めての食事が五時頃始まつた。

生徒はいかにも夏の寺での生活にふさはしい食堂と云ふよりも食事場とでも云ひたい簡易な食卓が大土間へ設けられ、そこでガヤ／＼みんな御飯だ。

食後浴場へ一風呂あびに出かけた。その序に町の様子を見物した（記者は興津町が初めてな爲）暮れてゆく頃から又雨が降つて来た。生徒はあちこちとかたまつて都への第一信を書いてゐた。櫻井先生が、お話を始めると一年生はみんな集つて聴き出した。

人員點呼の後消燈は午後九時、約半時間に亘る停電あり一同暗黒裏に過ごせり。

先生職員達は二三人づゝ各自或は町へ米を飯みに、或は映畫を見に出かけた。今夜はとくに消燈を例外として時間に制限をしなかつたが十時頃には全部歸寮した。

本日佐竹氏午後六時頃到着。

七月二十五日(土) 晴天

今日もよい天気だ。午前九時から水泳開始。

部員の大部分は既に日に焼けて「身體がいたい」との聲は口癖の様になつてしまつた。午後の水泳の時、第一回の試験を行つた。試験には手間取つたので、全部終つたのは四時半頃だった。日が暮れた。今宵は殊に星が美しい。月は出たが五日目で早く消えてまつた。

寺の庭に出て、空を見上げた時の物凄いな夜的神祕、九時にはもう生徒はみんな寢靜まつてしまつた。

本日林先生、富田先生が御いでになつた。

七月廿六日(日) 晴天

起床午前五時四十分。

林先生御指導のもとに裸體操を境内に於て行ふ。

午前九時水泳開始、同十一時終る。

順天中學も今日より當地に水泳部開設にて午後の海岸は急に學生團の活氣を見た。但し三時半海水浴を終つてよりの風呂場の雑沓はお話にもなにもならない。

同一の湯屋ではとてもこの混雑は凶れぬこととて明日からで

七月廿四日(金) 晴天
明くれば快晴、朝風さすがに潮の香を帯び清涼の気分は何と云つても第一夜の翌朝だと思つた。

昨日海に這入らなかつただけに、今朝は規定の時間にならない中から禪を締めるやら裸でさわぐやら大賑ひだ。とう／＼規定より卅分早く八時半に第一回の海水浴が開始された。

赤禪が海岸に整列して先ず豫備體操だ。級別により各分擔教師が指導し、熱心に約二時間に亘る水泳練習が終つた。その間陸に上り砂に息ふこと數回、海水浴一回の時間は二三分の割合だつた。

午食の後一同晝休みが二時迄、午後二時から又水泳だ。こんどは浴後直に風呂に行けるので、非常に都合がよい。初日ではあるし、海水は冷いとのこと故、午前の海水浴はかなり寒かつたらしい。

しかし今年の生徒は皆んな兎にも角にも泳げるものばかりで型さえ正しく教へこめばよいと、水泳教師達は語つてゐた。夕食の後、今夜當寺境内に於いて催される縣衛生課の講演映畫會に就いて自由に聴覽せよと生徒一同に申渡された。日の暮れるに従つて寺の境内へは近所の町村から續々と老若男女を問はず集つて来た。

生徒も大半は物珍らしげに見に行つて寮内は靜かじ。

も湯屋を替えるよりは仕方がない。

夕食後、新井先生が湯屋の交渉から船の交渉に行かれて、明日より湯屋は「竹の湯」とした。舟は明日決る筈。

午後八時人員點呼、八時半就寢。

七月二十七日(月) 曇り勝晴

朝から陽は照らないが、曇天と云ふ程でもない。

氣温は涼しすぎる。それでもさすがに夏だ。

裏の山では蟬がいない。起床後裸體操をすること例のごとく、自習時間がいつのまにか過ぎると午前八時頃。中村先生はもうすつかり體がやけて痛くて海へ這入れないと云ふ。曇つていても海水は却て温い、陸へ上つてゐるときが寒いのだ。午後ヒョククリと廣瀬先生が見えられた。午後四時今日の水泳が終つて「竹の湯」に行く、この湯屋の方が便利だ。外の學校が来ないので全く氣持がよい。

七月二十八日(火) 晴天

よい天気だ。

裸體操の後朝食、自習はいつもの通り。

午前九時晝前の水泳に行く。青組は遠泳の練習をした。午後から中村先生と富田先生が歸京された。丸島先生も御子様様が御病氣とかで、急に郷里に行かれてしまつた。寮内は何となくヒツソリとして淋しい。しかし生徒連の室へ行けば相變らずの賑ひだ。

午後四時半晝過ぎの水浴を終つて風呂入り一同又元氣な一日を過ごした。

七月二十九日(水) 快晴

起床、裸體操、朝食はいつもの通り。自習時間が終ると午前の水泳に行く。

いよ／＼熱の高まつた處だけあつて熱心な事驚くばかりで、十一時の定規時間が済んでもまだ泳いでゐる。

午食の後二時までは午睡だ。近藤氏がやつて来た。

例年の人氣者藤崎ジャンさんは今年は來ないとのこと。茶目連の失望は大きい。午後の水泳が終る。明日はいよ／＼當町海水浴の海鏡祭だ。……など、風呂場で生徒等は語り合つてゐる。

月が美しい。早寝をするには惜しい。

七月三十日(木) 晴天

午前五時半起床。明治天皇祭につき一同境内に整列して遙拜式を行ふ。裸體操の後食事。

今日は當町海水浴場の海鏡祭を行ふと云ふので、本校生徒も餘興の競技に参加する爲元氣なこと／＼。

午前の水泳は特に短時間として十一時には全部歸寮の上食事をとつた。校長先生、加納先生、岩瀬氏が一番列車にて到着。

食事後一境内で寮歌の練習、應援の方法等を練習して芝田君等の假裝應援團を先頭に町を一順して海岸へ乗込んだのは午後一

時だつた。

陸上競技として五十米、二百米、ホスジャンプ、二人三脚、砲丸投等を行ひ、水上競技として競泳、ボートレース等を行つた。午後三時一同歸寮、校長先生が一場の訓話なされた。

校長先生は御多用中にもはらはらず特に學生一同を見舞ふべく日歸りにて御來駕遊ばされたとのこと洵に感謝に不堪。

七月三十一日(金) 晴天

午前五時半起床。今日は一同で小湊へ遠足をする。

山路をめぐり海を眺めて行程二里の小遠足の出發は午前七時であつた。

マラソンをやる連中はこの時ぞとばかり一氣に走つた。

櫻井先生も生徒と一語にマラソンに加はられた。

何でも卅分餘りで小湊へ着いてしまつたさうだ。歩行の一同は八時半にはみんな小湊へ、着きそれから三つの舟に分乗して鯛の浦へ鯛見物に行つた。

一年生などは、全く片睡を呑んで鯛の跳び上るのを見つめてゐた。歸路も歩行でゆる／＼「おせんころがし」の奇勝などを賞し乍ら、寮に歸つたのが正午、腹は空いているし、飯は我々を待つてゐたし、そのうまいこと／＼。

三時半まで午睡してから又水泳をし海へ行く。みんな、つかれてゐるし明日は遠泳なので早目に引上げた。

八月一日(土) 晴天

今日も快晴だ。少し風がある様だが大したことはない。九時から遠泳を行ふ。浮標三個を中心として圓形に雁行して七回半巡る。

但し四級以下は三回にて卒業となるわけだ。

進藤氏が先頭を切り、佐竹氏が殿をつとめた。小波が立つて泳ぎにくいらしかつたが無事に終了したのは午前十時だつた。

泳ぎにくくて二回半に繰上げたとの事。

それから約一時間して一同は寮に引き上げた。

午後も日はカン／＼と照つてゐた。

疲れた體を午睡の夢路に引入れる頃裏山では蟬がしきりと鳴いてゐた。午後二時再び水泳。

日大千葉縣人會の主催で今夜妙覺寺内に活動寫眞會が開かれ盛會裡に終つたのは夜も更けた十一時半頃であつた。

八月二日(日) 晴天

いよ／＼今日一日となつた。夏季寮の生活は、思へばなつかしい十日間であつた。

朝は思ひなしかみんな早かつた。

海老船を見に行く人も多かつた。

午前の水泳はみんな心ゆくばかり泳いだ。

なつかしい興津の海！
辨天岬は日に輝いてゐる。
午後の水泳々早目に切り上げて、一同お名残の茶話會を開く

その前に進級目録の授與式を行つた。夜はとくに門限を九時半にした。最後の夜の名残に美しい月下の逍遙が許された。

最後に長い間御心勞を煩はした監督諸先生、水泳指導者に対し深き感謝を表して擲筆する。(藤田生記)

一級甲	5 A 菅原 精一	5 A 清水 正之	4 C 中田 耕一
	4 A 永山 秀雄		
一級乙	5 A 戸村 貞男	5 B 豊田 穰	4 C 堂寺 利又
	4 B 高橋 信一		
二級甲	4 C 川岸 恒彦	4 A 小島壽太郎	4 A 川名 利雄
	4 A 五十嵐英治	4 A 三木 直之	1 B 澁谷 正夫
二級乙	3 A 濱田 豊三	3 C 伊東 敏雄	
三級甲	3 C 佐々木多聞	1 A 吉田 斌	5 A 道明 敏雄
	5 A 山田 三郎	4 A 相羽 藤吉	4 A 佐久間勝徳
	4 B 二宮 恒郎	2 A 佐久間勝幸	1 E 島村 一郎
	1 C 高橋 壽	1 E 土方 兼雄	1 B 十浦日露城
	3 B 杉村 秀清		
三級乙	5 A 森 勇喜彦	1 D 室越 義男	1 E 檀上 三郎
	2 C 鶴田 茂雄	2 C 野崎 勇	2 C 土戸 義雄
	2 B 秋山 博	1 B 樋口 圓至	2 A 和田 甫
	1 B 鯨岡 正良	2 A 鈴木 五郎	2 A 岩田悌四郎
四級甲	1 B 關野 平吉	1 E 島田 正一	1 B 福島 彰雄

- 四級乙 1 C 仲田 光一 1 E 栗根 鈞
- 2 A 北島 次郎 1 C 榎原 文一 1 B 熊谷 貫一
- 1 C 土肥 一英 1 C 川上 隆雄 1 B 青木 嘉清
- 2 B 森山 一雄 2 C 松本 松治
- 五級 1 A 久保田 昇 1 C 羽生 順一 1 E 芝田要三郎
- 1 B 近藤 良介

端艇部

五A 大森直次郎記

本校に端艇部が創設されてから、最早四ヶ年の星霜を閲してゐる。然しその間に他の部が誇る様に何等特筆す可きはなかつた、學校當局にも、餘り重要視されなかつたので豫算も他の部に此して少かつた。それでも今まで潰されずに續いて來たかと思ふと先輩諸兄に對する感謝の念が湧いて來る。

然して本年度の端艇部はどうであつたらうか。豫算は昨年比して二倍以上になつた。然し我が部としては、その豫算によつて部の充實は朝せなかつた。それにも係はらず本年度の端艇部が今までの端艇部より以上に盛んになり、又校友會からも完全に認められる様になつたのは、部長林先生の御熱心と我が部員の努力との賜であつた。然しその影にあつて、我が部のためいろいろ努力して下さつた、本校の先輩であり、且日大端艇

部選手である彌永君を忘れてはならないであらう。

此處に本年端艇部として特筆す可きは榮ある明治神宮レースに出場した事だ、我が部としては始めから此のレースには出場する心意であつた。そのために夏季休暇の最後を炎天下で十日間の猛練習をした、二學期になつて、放課後雨の降らない限り毎日の様に練習に行つた。彌永先輩が我々のコーチヤアになつて下さつたのはレースの十日位前だつた。丁度その當時學校は修學旅行であつたので、その休みを利用して最後の猛練習をした、朝辨當持參で八時半までに日大の艇庫に集合して午後は四時頃まで練習を續けた、此の十日間の練習は我々が未だ嘗つて経験した事のない苦しい練習だつた。臂の皮はむける、足の甲の皮は破れる……。それでも勝ちたい一心から總ての苦痛を忍んで練習をした。それは實に男としての意地と、我を通した涙ぐましいまでの猛練習であつた。

然しその甲斐もなく當日(十一月二十八日)のレースには永遠に變らぬ隅田の流れの悲憤の涙を流して惜敗した。それは選手として男泣きに泣いて、泣き切れない無念さであつた。

此のレースに於いて痛切に感じた事は、本校選手が他校選手に比して體格の相違してゐた事と、練習とであつた。この様に苦しみ、そのものゝ様な練習をするけれど又一面に於いては、ボートマンでなくては味はへない隅田川情緒がある。

一日の遠漕に疲れた身體をロングに托して、紫色暮色がひた／＼と川面に漂よつてゐる中を靜かに艇庫まで下つて行く。

もうその時には日は川岸に茂つてゐる、木々の枝許りの梢を渡つて西(秩父連山)に傾きかけてゐる、太陽は平安に一日の行路を畢つて、ゆつたりと靜かに流れてゐる、隅田の川面に赤みが、つた光を溶してゐる。太陽の射出す赤い征矢が青空の中に溶け込まうとしてゐる、あはひに、かすかな綿を干切つた様な雲がしづ／＼と北から南に流れてゆく……。艇庫に着く頃には、日はもうとつぷりと暮れて了つて、中秋の月は、苦しい我等の燃ゆる胸を、すりなきたい様な心をも、妙の様な夜霧の底にとさして死の様な静けさの中に眠つてゐる。

此の隅田川特有の夜の情緒が疲れ切つた我等にどの位いの元氣を懐しさを與へて呉れるか分らない。總ての苦しみを苦なりと打ち切る事が出来るであらうが。そこにはより深い苦痛もあれば、楽しみもあるのである。この経路への進展こそ、男として吾、人間として進む可きを道ではないであらうか。

思ひ出多い母校を去るに望んで、後輩諸君が我が端艇部を二層發展させられん事を祈つて擲筆する。それから我が部のモト(日大端艇部のモト)をそのまゝ受けついでもの、と明治神宮レースに出場した選手と、その身長體重を参考までに――。

ボート漕ぐなら泣かずに漕ぎな

ボート氣で漕ぐ腹で漕ぐ。(モットー)

選手	氏名	體重	身長
舵手	元山重次郎	一六、二	五、三
整調	下村義郎	一五、〇	五、三
五番	大森直次郎	一五、六	五、三五
四番	植田理喜夫	一六、五	五、三
三番	山田三郎	一五、七	五、四
二番	松葉吉松	一四、〇	五、二五
船手	七字清秀	一四、三	五、二八

大正十三年度校友會費決算報告

庭球部 九四、五〇
尙豫算外超過支出は翌年度分より補填す。

入 一、金三、二一〇圓、二八
（繰越金共）

支 出	一、金二、七九六、〇五
内 譯	
雜誌部	三四七、六〇
學藝部	一五〇、〇〇
辯論部	一五〇、〇〇
圖書部	三、〇〇
音樂部	四一、〇〇
競技部	四二三、三〇
水泳部	一一五、〇〇
端艇部	五〇、〇〇
柔道部	五一三、一〇
劍道部	六七六、七五
弓道部	五〇、〇〇
繪畫部	八〇、〇〇
野球部	七九、九〇
角力部	二五、九〇

文苑

隨筆 懸賞文 作

野人云々

隨筆 若人たちに

のびる生

私は今若草の上に立つて若さの勝鬨を聞きながら、或喜びに胸を躍らせて居ります。皆さん一緒に歌ひませう！ 若い私達でこの広い世界を占領したやうな、高い喜悅にゆつくり胸を満たして、みんなで一緒に、爽かなしから楽しい調子の歌をうたひませう！ 私の心は今それを言ひたさにむづ／＼して居ります。

けれども皆さん！ 私達は眞實に勝つて居るのでせうか？ 勝つてゐると思ふのはそれは空虚な誇張的なイリュージョンに過ぎないのではないのでせうか？ 私達はすっかり熟した後の冷靜な心を以て、しかも眞面目にそれを考へなければなりません。新しい哲學は妥協の排斥を強い響きで主張して居ります。そして私達の憧憬の眼は唯漚りなく高い空へのみ向けられて居ります。けれども私達はどうしても力強く大地を踏みしめて生きなければなりません。環境の支配から逃れて主觀に生きるのではなくて、奮闘的精神を現實の力あるものとして、進んで環境を支配しなければなりません。そしてこれが若い私達の唯一のモットーでなければなりません。私達はもう徒らに強がり云つて、喚き叫んで居る時では決してありません。「自分々々」をもつと／＼内的に充實して、環境を現實に支配し得るだけの力を養ひながら、もつ／＼環境を理解し得るだけの智識を造らなければなりません。——一般の若人たちはこれだけの事さへも忘れて居るのではないのでせうか？

現代の若人たちは、たゞ外來の思想を簡單に鵜呑みに受入れるばかりではなくて、それを充分に咀嚼するだけの齒牙もなければ又それを十分に分解し得る消化器も殆んど持つて居るのではないのでせうか？ 唯單純な感情の外に一體何を持つて居るのでせう？ 畢竟私達は書物を読む範圍が餘りに狭いばかりではなくて、隨つて趣味も智識も狭く、その上に社會的に普通公平な理解を持つことが出来ません。従つてまた完全な「自己」といふものも發見する事が出来ないであります。こんなことで一體何が出来ませう？ 噫覺めよ覺めよ若人たちよ。

鶴と龜の話

鶴と龜といふことは何か自出度い事がある。直に連想される言葉で詩歌にも文章にも將又繪畫にも模倣にもさか／＼採用されるものである。 ま る し ま 生

鶴と龜とは「鶴は千年龜は万年」といふ言葉から考へても常に長命なものであると見做されて居る。これは元來古那から這入つた思想であつて支那の古書に「鶴は千六百年にして形體定まる」と書いてあるし又「龜は一千年にして毛を生じ壽五千歳なるを神龜といひ萬年なるを靈龜といふ」と見えてゐる。晋の郭璞といふ人の詩などに「借問蟬蛻聲、寧知龜鶴年」など賦してゐるのを見ても随分古くから彼等の長壽は詠はれてゐるやうである。

松も亦古木が多いもので永へに千載の緑をかざるからこれ又鶴龜と共に長壽として芽出度いものである。それから竹も千代を節める。梅は百花の先驅をなす。か云つて何れも慶賀の意を表はすに適するものである。

ところで是等の五つのものが唯單に目出度いからと云つて何の曰くも理由もなしに結びつく譯のものではない。近代一言に鶴龜松竹梅といふに至つたのは、何等かそこに由つて來るところがなければならぬ。

抑も鶴龜松竹梅の五つは決して初めから結合したものでなくて、先づ最初に鶴と龜と松とが一つとなり、それに後で松と竹と梅とをやつにした考へが加つたものと思ふ。前者即ち鶴と龜と松とを一つにした考へは所謂蓬萊山そのもので、後者即ち松と竹と梅とを一團にしたものは所謂歲寒三友である。日本文化の淵源を調べて見ると兎角に支那に基因することが多いが、この蓬萊山と歲寒三友の思想もやはり支那から傳はつて來たものである。蓬萊山はもと道教の唱へるところで畢竟理想的の神仙境をいふのである。史記といふ書物の中に、

蓬萊、方丈、瀛洲の三神山は渤海中に在り、蓋し曾て到れるもの有り。諸仙人及不死の藥あり、其物禽獸盡く白し、而して黄金白銀を宮闕と爲す。未だ至らざるに之を望めば雲の如く、到るに及び三神山反て水中に居る。之を臨めば即ち風船を引きて去る。終に能く至るなし。

と書いてある。中にも蓬萊山はこの三神山の中でも最も著れたもので、秦の始皇帝が徐福といふ者に命じて延年益壽の靈藥を索めさせたといふのもこの蓬萊山である。徐福は多くの童男童女を伴れて東南の方海に航してこの神仙境に入つたといふ説話がある。その仙境に就ては或は紀伊の熊野であるとか、或は駿河の富士であるとか、或はまた尾張の熱田であるとか、古來種々の説がある。

が固より是等のものは附會に過ぎないことで、蓬萊山を以て現在の地に當てはめやうとするのは勿論探るに足らぬ説であると思ふ。

われ淋し

丸島 稜花

淋しとも云はではたらく人々を淋しみながらわれも働く
淋しきは心より身に身よりまた心に入りてせん術もなし
貧しきに足らひてわれのあることを罪の如くに人はそしれり
われつねに淋しきゆゑにわれつねに美しきもの胸に抱けり
自らのために生れてみづからの爲に死にゆく身は淋しけれ

春五題

わが影の障子一ばいや春の宵
紫に煙る小雨や桐若葉
桃の戸や小唄交りに校の音
高浪の土手に乗る見ゆ夕柳
海一ばいに帆の廣ごりて春の風

俳句

卒業生諸君を送る

巢立鳥 祝えと小田の蛙鳴く
巢立鳥森を選みて宿るべく
春の海 希望は満ちて洋々と
春風に送られて行く帆かな
右すへく左すへく蛇穴を出て

廣瀬 葱川

大正十四年七月廿五日代々木原にて
訪歌飛行機を送る

夏の空空の勇士は消えにけり
同翌春一月十日同四勇士の
無事歸朝を祝ひて
猿曳の鳥人を持つ神宮前

海將軍を憐れむ

軍議破れ胡地に逃げ去る北の風
御降りの木質は猿の早宿り
初荷馬一つ後れて嘶けり

笹鳴きや茶の木隣りはうめもときに
笹鳴きやひたき代りて庭の木
笹鳴きや端山篁薄氷

俳句十二ヶ月

橋村 槐子

正月や支那水仙の球一つ
心んともに萌黄盛んや露の蓋
蝶々の突き當りたる小畝哉
利根川や帆船据りて砂に桑
齒朶葉うつ瀧のしぶきや時鳥
夏つけてぬくき疊や花カンナ

寝蜻蛉樹を摩りうつり盆の月
朝顔や黍の長葉に海の風
山柿にとまれる鴉八文字
時雨るるや黄葉の下の電燈
紙灰のふはりとりのりし櫓の上
松の雪なだるる時の迅さ哉

伊豆の歌より

村路 生

とあるをの子去る年身も心も落めて伊豆に遊びける折くち
すさみたる歌、年ふりしいまなかなかに思ひいだしがたし
誌すところ其の二三のみ
ぬれ雀宿かりに來よ此の軒に病後のわれは汝を友とせむ

古池のはざりに咲ける白百合の水にうつれる見らくし好しも
竹の葉のさやぎはやま山寺の裏山ごしに月出でにけり
とどろけし百尋千尋その底ゆ押しや寄せてむ今日の大波
天さかる伊豆の嶺嶺に風荒れて浪高きまふけふし暮れゆく

雨ふれば此の山寺ゆほのかにも泳ぎし海の木がくれに見ゆ
夜となれば暗き灯につどふ虫蚊帳の邊にきく山寺の夏
山峽に炭焼くけむりほそぼそと一すぢ揺れて夕さりにけり

蕭々としとどぬれけり草の花馬も通ちて夕さりにけり
破れ心こゝに沈む伊豆の海入日うつらひ波たたぬとき

懸賞文 有色人種としての日本人及將來

五B 近藤利支

我等が新聞を讀むにつけ、社會の實際を見るにつけ、其將來に付、熟慮を要すべき三つの問題がある。殖民問題、殖民地の獨立運動、社會運動、即ち之である。國と國とに於ての經濟狀態、人口問題の解決に起因して起つたのが所謂殖民問題で文明人、即ち白色人種の壓迫によつて起つた反運動が所謂殖民地獨立運動である。財貨の分配の結果として、人々の間に生ずる貧富の懸隔が餘りに甚しければ社會の安定は破壊されるのである。社會の安定を得んが爲即ち中産的社會を作らんが爲に生じた運動が所謂今日の社會運動である。此三問題は異なるが如くして而も根本は一より生じてゐるのである。それは物質文明の爲に生じた不平等と云ふ弊害と斷定されるのである。即ち科學の發達應用のため、その智識ある國民は他の國民より優越な地位を得、新大陸を發見して之に殖民し、又印度其他未開の人を壓して殖民地となしたのである。又彼等文明國(白色人種)民中でも智識階級の者は、その智識を利して利潤を得、以て資本家階級となり、反對に無智な者は、その財産さへ失つて貧民階級となつたのである。そして其程度が餘りに甚しくなつた爲、今日の如き問題を生ずるに至つたのである。

それ故殖民問題を解決するのは、即ち現今に於ける以上三大問題を解決する所以である。四海平等は之に對する唯一の方法である。若し世界全體が貧しければ何人も之に不平を言ふ者は無いであらう。世界何處も人口過剰であるならば移民問題も生じないであらう。その生ずる所以は階級の相異、土地の廣狹、民族の不平等を作らざる爲である。

顧みて各國の現状を見るに、各國益々其國境を高くし、軍備を擴張し、國と國をもつて争つてゐる。然し四百年以前マジョエラが幾年月といふ長い時日を費して世界を一週した時代とは異つてゐる。飛行機は世界を事實上一週した、やがて飛行機を以つて世界を短日月に旅行し得るのは空想にあらず、夢にあらず現實である。今や世界は時間的に距離が短縮されたのである。百年昔東

京、京都間の旅行に費した時間を以つてせばやがて倫敦にまで旅行し得るといふ時代となつたのである。斯の如き時代に於て國と國とが相對峙して互に相争ふ如きは、時代錯誤も甚しいものではないか、現代は最早世界は國に分れるべきものでない世界は一つである、世界は一體となつて互に協調平和を保ち以つて世界の幸福を増進すべきである。

故に私は今茲に殖民問題のみについて論じようとするのであるが、以上の理由により、殖民地を作ることに反對するものである。現今の朝鮮問題に於ても、朝鮮は日本の爲の朝鮮でない故に日本、本位の政策は不可にして永久に日鮮の融和を來すことは出來ないのである。濠洲が白人の濠洲と言ひ、米國が有色人種の排斥を敢行するが如きは言語同斷矛盾も甚しいものではないか。殊に世界最古の文明を有し佛教、印度教の如き偉大なる宗教を有してゐる大印度が小英國の爲に壓せられて殖民地となり悶々としてゐるのは感慨無量ではないか、其他支那然り波斯亦同じ、有色人種の國家は皆白色人種の奴隸となり祖上の魚となつてゐる。自から平等を唱へ世界の平和を叱咤する白色人種こそ人類の大敵である。世界平和の攪亂者である。吾人殊に日本人は白色人種を相手として有色人種を代表し將來世界平和の爲率先して白色人種を打破し以つて人種的差別を除かねば世界の前途は實に暗澹たるものである。思ふて茲に至る時吾等日本人の責務は重大ではないか。

吾等は此問題を論ずるに際し、最重要視すべきは、日本の將來の殖民問題である。日本の現状を通觀する時直ちに眼前に映し來るのは人口過剰問題である。從來日本は此人口過剰問題の爲に世界からは或は軍國主義或は侵略主義と懸想され、近くは米國に於ては移民禁止に遇ひ支那には怨を買ひ日貨排斥を食つたのである。歐米諸國が四百年來の彼の殖民地奪掠運動を見、尙現今も繼續されてゐる様を見、そして我國が人口過剰の爲に苦しめられつゝあることを考へる時、日本が從來執り來つた殖民問題に對する政策が果して當を得てゐたものであつたらうか、然しそれは最早過去の問題である。

共存共榮これは日本將來の爲、否世界の爲唱ふべき唯一のモットーである。諸君此問題は果して何人の手によつて解決さるべきものであらうか。それは吾々青年をおいては外にはないといふことを知らねばならない。今後の殖民は金儲の爲ではない各地に於ける、地理、人民、風俗、文化、藝術等、總てのものを研究し、一方に於ては母國の爲、他方に於ては其地に於ける民族の發展の爲に盡し、以つて共存共榮の實を全からしめねばならぬ。一種千金の夢を見て海外渡航を企つる輩は自然其門口を失すべく、眞面目なる人格高き人々こそ望ましいものである。今や世界は時間的に短縮されたにかゝはらず、尙故國に戀々としてゐる青年の多いのは誠に憾多い事ではないか。これは美しい我國民性に存する一缺點であ

ると言へよう。彼等が若し百年前の日本即ち徳川時代に生れたならば京へも、お江戸にも出ることはせず、唯其土地のウジ虫さなつて死んだことであらう。

共存共榮、これは世界の將來を左右する重大なるモットーである。

運動精神は現代の武士道なり

競技部委員 齋藤武

昔オリムピヤの野に全國的の競技會が四年毎に行はれた。そしてその競技會に於て猛烈な競争が行はれ、その競争に優勝した者は國民から賞賜せられ、また敬せられたと云ふ事である。

そもそもその目的とする所は競技に依つて國民の體格を改造しそして當時の弱肉強食の世に於て國家が勝たんとするためであつた、即ち國策の手段に競技が行はれたのである、しかるに今日の競技はスポーツの爲のスポーツにして如何に一般的に普及したとは言ひ未だ全國的の昔のオリムピック大會の如きまでは行かない。小さくはこの學校に於て見るも各競技は小數の選手にのみ委ねられてゐる有様である。これを各人がその各の個性を顧て自分に適合した種目を選び適當に行はれたならその中にスポーツマンシップも養はれるだらうし、又慰安も得られるし又自然體格も優秀になるであらふと信ずる、このスポーツによつて養成せられたる優秀なる精神並に體格を提けて國防に外交に實業に將又學究に進んだら如何に好果が得られる事は無論の事である。

競技、選手が競争に於て、最善を盡し正々堂々と戦ふのは恰も昔我が國の武士が戰場に於て、敵味方互に姓名を名のつて戦ふのによく似通つてゐる。それもあまりに勝利にのみ拘泥して自分の實力をも顧す卑怯な振舞をなすのはあまりに運動精神に悖るものと言はねばならぬ。

運動精神を發揮したよい例がある、さきにマニラに於て極東オリムピック大會が行はれた時ヒリツピン側があまりに勝利のために支配されて卑怯な行動を取つた、その時我が國の選手は斷然退去しきこまでも公正を要求したしかしその要求は容れられずしてつひに涙をのんで中止して歸國した。この場合我が國選手は優勝はしない。しかし乍ら精神的には確にはるかに彼等に優勝して居る。私は信ずる。我は想ふ、昔の武士道が變形して今日運動精神として現はれてゐると、競技の發達如何は國家の興隆に大いに關

保するものである。

長野にて (第三學年修學旅行)

第參學年A 貝塚實

しつみりとした朝霧に車窓を襲はれて、汽車の煙は廣い原野に生立つ高原性の植物の姿を或は現はし、或は消しつゝ、藪地に進んだ。夜明けのおそい此の地方の朝も、漸く明けはなれ、遠近の山々、千曲川の清流もそれと見え分たれ程なく長野に達した。

「信州信濃の新蕎麥よりも……」と人々に語はれて居る如く、長野へ着いて先づ第一に感ずる事は、蕎麥屋の多い事であつた。のみならず大通りを蕎麥道具を數個積み重ねた蕎麥屋獨特の態度が處々に見受けられた。停車場から少し曲つた所謂大門町の通りはいくらか小田原の町に似て居つた。普通ならば電車が通り、人馬の往來の激しくなければならぬ大通も案外に入通り少く只ガランとして居た。そして意外にも洋館が多く見られ、若し停車場に着いて長野の町の空氣にひたつたならば、恐らく此處が我國有名な小佛都としての長野とは思はれぬところである。北國の町に見るやうな餘り新式でない洋館が其處にも、此處にも巍然として立つて居るのを見ると只驚かざるを得なかつた。私は嘗て長野地方は寒國なる爲、瓦葺は凍り破れる憂があるので家屋は多く茅葺である、それが證據には善光寺からして立派な茅葺であると聞いたが、長野の町に行つて見るに殆んどそうした物が見當らなく、却洋館が見られるといふ事は不思議ではならなかつた。尤も昔はそうした茅葺の家があつたのかも知れぬが、今は茅葺の代りとして洋館の需用を認めるに至り多くの家が洋館であるのかも知れぬ。一體こうした街は東京の街のやうに裏から裏迄殆ど明るい賑やかな處ばかりはない。小田原の町がさうで、賑やかな處があると思ふと直に裏に入ると淋しい中には史蹟を偲ばせるやうな處がある。此の町も兩側の路次を見ると立派な表通りにも似ず、茅葺の家が見えた。又通りの傍に急に小川が流れて居たりして、町全體が繁榮してゐるといふわけにゆかぬ。昔の芝居茶屋のやうな旅館、案外流行品に富む呉服屋、銀行、荒物屋に至る迄様々な商店が勤工場の如く此大通りの兩側に並んで居るのは、一寸東京等では見られぬ有様であつた。是が長野といふ地は商工業で發展した處でなく即ち佛都として榮えて來たのだといふ事を現はして居るのかも知れぬ。

其内に善光寺の仁王門が巍然として見え出した。左に大本願あり。約一町ばかりの兩側に宿屋や土産物を賣る店が丁度淺草の仲

店邊の光景と似て居る中を通つて行く山門あり。寛延三年の再建で高さ六丈六尺といはれる二重層の大建築物である。是は弘化の大地震に倒れなかつた頑強な建物ださうで、従つて前の仁王門と比べると遙に古く細工も精密で昔くさいところがあつた。昔から數十年間遠くからはる／＼慕ひ來る數多くの參詣者の草鞋を受けた石段をわびしげに年老いた草鞋ばきのばあさんが餘念なく掃除して居る様、鳩の群が何處からともなくハタ／＼と飛んで來て山門の屋根の蔭へ消えて行く様、山門から考へると一寸法師位に見える青い衣をかけた僧侶がしず／＼山門から出で來る様や、荷物を首にかけて尻をはしよつた數人の田舎風の參詣者が我々の方をグ／＼見ながら通つて行くのを見ると、何だか昔にかへつて行つたやうな氣がした。本堂は其時改築中で、細く足場がかゝつて居たのでその蔓高く聳ゆる大伽藍をよく拜することが出来なかつた。案内者の案内により大勸進に入り説明を聞き其處で私は參拜記念スタンプを押してもらひ、横口から本堂へ入つた。うす暗い、陰氣くさいうつとをしい氣が身に迫つた。誠に廣いのと、暗いので何處に内陣があるか外陣があるか明にわからなかつた。只一種云ふべからざる靈氣に満ち、參拜の善男善女をして思はず南無の聲を發せしむる感があつた。堂を出で廣い野原を過ぐると高臺となり所謂川中島の壯景は、茫として目前にひらけて居る處である。旗、さし物が雲霧のたえ／＼の中になびき、弓矢劍刃の亂は尾花す、きよよりも激しく、夜聞える大笛小笛の音は虫の聲が風の音か、仇がふく笛か、今日は彼方に勝誇り、明日は又敵に後を見せて追はれるその戦の始を聞へば深い怨があるわけでもない。只龍が雲に乗つて天に上る如き英雄の大望がなすのである。その廣い／＼茫とした古戰場を望んだ時、各將の被褥をつけた勇ましい旗、さし物が雲霧の中にかすみ、何處までも知れず聞える太刀物の音、関の聲のした音の戦の有様を思ひ浮べずには居られなかつた。白らけ成、物見櫓の上からその戦況を見て居るやうな氣がした。其處をだら／＼下りて片側に樹木の茂つた細い路、その左には水一つ動かぬ池沼が見えた。對岸の高樓水に映じ給も支那の湖水にでも行つたやうな感じのする處、案内者は此附近がやはり上杉武田兩氏の古戰場であるやうに云はれた。其邊の叢から槍をさして陣笠をかむつた軍兵が出て來るやうな氣がした、やがてその湖が盡きると稍急な坂になり、兩側には恐ろしく林檎を賣る店多く又土産物を賣る店もあつた。その中に紫頭巾で顔を蔽ひ手桶をさげ小さい坊主を連れて居る人形を賣つて居たので、我々はその萱苜道心の萱苜堂へ志すものと思ひ、尙も上り行く。此の坂を上るに一同苦しみ頂上へ着いた時暑さと疲れは、こゝからも見える川中島のはてしなくつゞく全景になぐさめられた。坂を下つて再び本堂の横に出で山門前で解散、約一時間半自由行動になり一回は四散した。數名の者と停車場方面へ戻り一度は話の種を蕎麥を食す。

かくして、我々は旅行者の等しくきらふ數多のトンネルを越して、みすゞかる信濃路を諏訪へと向はねばならなかつた。

故郷の春に歸りて

二B 原田芳幸

中國の山と山の懷に抱かれた谿の村では軒に朝の日の光が射して來るのが遅い。南に向い左窓の下には谷川がせ、らぎの音して流れてゐる。私の窓に面した彼方の岸は崖になつてゐて、そこには二本の椿が咲いてゐる。竹があり櫻がある花にはまだ二三日間がある。崖の上を新しく切り拓かれた道が通つてゐる。それは港の町萩へ通する道になつてゐる。城山の中腹に一つの炭焼小屋がある。天氣の善い日は山頂迄見とほして、炭焼の老人が日向ほつこをしてゐるのがはつきり見へる。一日に幾人となく行人や馬を引いた人が通る。毎日見てゐるうちに馬も人も大抵同じであること氣が付いた。郵便屋は日に二回往復する。川をへだて、芝山がある。稚松の山がある、その間を狭い茶の花畑と麥畑が點綴してゐる。山を歩む人、旅人、小學校通ひの子供等が或は茶の花の間にかくれ、或は芝山の陰にかくれてしまふ。時としては思はぬ所に旅人の影を見出すこともある。犬を連れた獵師の姿が嶺の上に青空に反影してゐることもある。村にも文明の風が吹きこんで來て、役場のさなりの空地へ活動寫眞の小屋掛をしてゐる、子供等にはもう松之助はおなじみだそうだ、盛に竹を振り廻して立廻をやつてゐる。やがてその子供等も家に歸り鳥もねぐらへ急ぐ頃大山の頂が眞赤になつて此の村の一日も暮れるのである。(十三年三月)

渚に佇みて

三學年O組 濱田 勉 男

たゆたふて居た儼然たる眞紅の夕陽は、今ゆるやかな首樂の様に叫くさゞなみの音と共に薄曇のペールでつゞまれてゐる。水平線もはにかんだ少女の頬の様に、ボーツミ薄紅に染めて居る。

寄せては返す女波男波の戯むれる音に誘はれて暮れ行く霞夕浦の砂上に佇みて、過ぎた一日を思ひかへしつゞ、去らんとする夕

日を見つめてみると、忽然夕日は雲の入つた如く赫焉として燃え廣がつた。時は秒又秒刻一刻と過ぎた。雲は焼き鎖されて、或は紫色を帯びてきた。

松並木は脊を覆ふ様に暗らく、いづこからともなく頭の上から蝙蝠が飛び出した。高く或は低く飛びかふては、又頭の上をかきめるが如くに飛び去る。去つたかと思ふに又飛んで来る。こうした彼等の戯れも一段と面白い趣のあるものである。空高く飛び来る鳥も嗚へと急いで居るのか、一羽に付いて二三羽が共に穩しく仲良く去つてしまつた。

さき程まで朱黄色の匂ひを放射してゐた夕の日は、早や大湖を挟んで向ふの小高い藍色の連山の間に沈んで姿を潜めてしまつた。落日の残暈に照りがへされて燦つた空も、少しづつ、四邊は暗黒に包まれ始めた。

一日の疲勞を馬の上に休めながら煙管を唇に歸へり道の農夫は濱邊まで來ると馬を止めて、鞍をおろし、ザブン、ザブンと水の中へ歩んだ。それは馬を洗ふ爲めであるのだ。農家の女の子は皆んな各々籠を肩にして互に樂しそうに話し合つて居る。こうした平和な、偽のない、情その物の、やうな彼等は、歸へつては一家爐に集まつて、愉快に人參や午芎などを箸につまんで話し合ふのである。

此んな美しい家庭の集合は一に大自然のしからしめた偉大な寶なのであらう。

一乗寺の鐘は暮を知らせる爲か、ゴーン／＼と音波を送くつて居る。その頃、美を競ふて高くぬき出でゐた、富士も筑波も早や濃藍な淋しい景色となり、いつかはそれも暗黒に包まれてしまつた。

總ては夜界になつた。星影淡き渚はしつとりとしてしまつた。僕は濱邊の拾小舟に腰を下して沖の彼方を眺めてゐると、赤い漁火が三つ四つ波間に揺られながら、瞬いてゐるのだつた。そしてかすかに漁夫の唄聲のみ聞えるのであつた。おゝ大自然よ、隠かな波よ、僕は目を瞑つて、そして思ふ。

人よ、人生の利を忘れよ。慾を離れ、そうして天地自然にひたと合致しようではないか。ふと仰げば、數知れぬ星が下界の總てに向つてキラ／＼と瞬いてゐた。

(一九二五年八月廿五日手記より)

夕

四B 篠田芳一

弟にせき立てられて、やつと下駄をつツかけるなり外に出た。一ヶ月許り行かなかつた招魂社の境内にそれもなく歩を運ばした。黄昏に包まれた御社の姿、空高く聳ゆる鳥居……この大地も何となく異様にもの珍らしさを覺える。

「兄さん！夕焼けが……ホラ真紅でせう」

「おゝほんとだ！」真紅に／＼焼けた西空、それに反映して輝く御社の森を見つめた。

すべてが希望を表はしてゐる様に見えて、嬉しい——すうと赤は黄にそして青々と變つてゆく夕ばえの空——けれど病後かでもある様に頭のほんやりとした僕には謎の様に逝かうとする一日の、この最後の光線があまりにまぶしかつた。

僕は深い吐息と共にだん／＼うすれゆく夕空を見上げた。淡い青色の中にかすかに光る宵の明星！頬を掠めては冷い空氣の中に溶け入る微風が人生の樂しさを思はせる様な甘い香を持つてきてくれる。

瞬間、おゝその刹那、私は「生くる者の喜び」さうした事を沁々思ふのでした。

或る夜の便り

五A 齋藤武

絶えず外には風が荒れて時々脊す様に雨戸を烈しく揺る様でした。でも二人は外が凄まじければ凄まじい程お互の心は落着いて物語りました。事實、昔の時代は知りませんが、それでも現代の様に恐い中では無かつたに違ひないと常にかう思つて平安朝の世を慕ふ程私は今の世の中を恐ろしいもの不眞實なものと思つて居ります。若し現在にあのいかめしい慘酷な程の法律がなかつたら人々はどんな行爲を取るこでせう。思つても人々の荒み果てた心のさせる行爲は怖ろしいものと思ひます。それ程現代は法律に寄つて維持され乍らも、その法網の下をくぐりて憎むべき行爲を取る知識階級の人々が澤山あります。私は彼等をおもふ時彼等こそ眞の罪惡者だと叫びたいのです。彼等こそ眞實に現在獄舎の鐵窓の下に冷めたい夢を結ぶ所謂罪人より、より以上に罪深い人であり、又憎むべき偽善者であらう思ひます。それと思ふと私は全く人里離れた山奥にでも逃げて仕舞ひたい、この荒々果てた怖ろしい世間から遠ざかりたいと眞實願ふ心になります。然し考へて見ますと私はさうして一時は逃れても矢張りこの厭ひ

捨てた濁流の世間が戀しくなつて歸つて来る人間です。再び逃れる様な日が来やうと、一度は籠 出る人間です。處が彼は言ひました。「さうだ——さうだ——さうした人間なんだ。だがさうしてこの世間を厭ひ逃けるのはまだ自分を眞實化してゐないのだ」と。眞實にさうです。私達はその濁流の中に矢張り同様な生活を送り乍らも平靜な心持を持ち得るだけになれなくてはなりません。さうして自分をいとほしむ心と共に世間も又いとほしいものと思ふことが出来るのです。罪を犯す人さへもいとほしくなるのです。人間にはどんな人間にも純な心持はあります。我慾にばかり驅られて何等温情のない様な人間でも或る時!! それはどんな場合か解りませんが、或る絶對に凍着したときふと純な氣分になれるものと思ひます。今難船して船に乗り込んだ人々は最早助からぬと斷念してその生命が風前の燈火となつたとき、そのとき人々は最も嚴かに自己の生命を認めることとせう。それが純な心持ちやありませんか。私達が世間を見るとき、その多くは物質慾に惱まされて自我のみ人間に見えるのですけれども彼等にも純な心持がある以上、彼等にも時々沁々と自己の心持に涙ぐむ事があると思ひます。さうして頼り處のない恐ろしい氣分になるだらうと思ひます。思へばさうした人々は實に可愛想ではありませんか。それは彼等が物質的にのみ生きて何等眞實さいふものを持たないからです。善美を盡した邸宅に日夜歡樂に耽ける人々は表面何人にも幸福に見えてもその裏面に於てはどんなに心寂しいか知れないのでせう。

つまりはその頼り處のない寂しい心の爲に日夜歡樂に耽けるのであらうと思ひます。然し或は表面のみでなく心から歡樂に耽ける人々もあるかも知れませんが、でもふと吾に返つたその時、その歡樂にも頼りなさを覺えるときが屹度ありませう。「さあ酒だ。——酒を持つて来い。——少しもこの酒の酔を覺まして呉れるな」と、かう酒の力に頼る人!! あ、私は涙がこぼれます。私はその人々の心の寂しさを思つて抱きしめて泣きもしたく様です。そこに私達には信仰の必要が生じます。決して極樂とはせられ乍らも惱まされる事なく生きられる事を自分で悦んで居ります。私は皆様の様に香氣には出来ません。考へたら身も癩せ弱る程物質的にも苦しめられてゐるんですけれども、私は大きな眞實を究め得た人です、ある信念を握りしめて居るのです。煩はせられても憐むことなく生きて行かれます。私は人々がちつとも羨ましくないので静かな純な心持に同情を寄せる事さへ出来るまでになりました。私は本當に自分の爲に悦んで居ります。私は必々さかう言ひました。「私は思ふねえ。——あの「雪の日や彼も人の子樽拾ひ」といふ俳句があるが、あの雪の日の寒さを寒さのま、寒い心持を心に寄せる

事が出来なくなつてはなりませんね。」「さうだ——それが本當の慈善の心なんだ。人間もそこまに到着しなくちや駄目なんだ。さうしたを決して山奥に逃げ隠れしなくともいふんだ、その不眞實の渦中に同様な人間と見られる生活をしながら山奥に隠れたやうな静かな心持でゐられるのだ。本當に山奥に隠れたら静さを通り越して屹度寂しいんだ。だから又麓に下りて来て仕舞ふのだ。然し眞實を擱んでゐるさへすれば寂しいこともなく自分をいとほしむと同じ心に人々もいとほしむ心になれて濁流の世間に生きられるのだ。」

彼はかうした事を申しました。私はそれからそれへと考へさせられ乍らも此夜程しんみり眞實を究め得た自分を嬉しく且いとほしく思つた事はありませんでした。眞實——オ、オ、すべては眞實の前に降伏するのであります。

岐 路

五A 増 淵 梅 夫

一筋の路が野を走つて居る。私は今あてもなく其の路を歩いて行く。林を抜け草原を過ぎ、家に添ひ、川を横切り、路は何處までも知らぬ景色を展開して私を導いてゆく。やがて私の前に一基の石標が現はれた。石の表には三つの猿が刻んである。一つは眼をふさぎ、一つは耳を抑へ、一つは口を蔽ふて居る。路は其處で左右に岐れる。私は今其の岐路に立つて右すべきか左すべきかと心迷ふて居る。若し私に、はつきりした目的があつて、家を出たものであつたら、私は躊躇なく何れかの路を選び得るのである。然し私は漫然と此の知らぬ路を歩いて来たのだ。如何なる景色が、又如何なる難路が私の前に横つて居やうか私はそれを知ることが出来ぬ。私は思ふ。永い人生の間にはきつと幾度か、かゝる岐路に立つことがあるに違ひない。若し私に明な目的と希望があるならば、自から進路は見出され、そして前途の困難も目的の前には忍び得るに相違ない。目的なくして、希望なくして、如何なる苦痛にか堪え得やう。

私は又思ふ。私の前にも幾人の旅人が此の路を通つたであらう。そして此の岐路の前に立つて、或る者はためらはず、その一を選み、或る者は心の向ふまゝに走り過ぎ、或る者は又私のやうに幾度か躊躇した後辛ふじて一方に歩み去つたであらう。此の野路の岐路は若し自分の心に添はぬ路であつたら亦立ち戻ることも出来るのであるが、人生の岐路は一度一を選んだならば、又ちどの

岐路に歸ることは出来ないのである。一步の誤りは私の運命の上に百千里の誤りとなつて到底償ひ得ぬ悔をもたらすに違ひない。そして、その差は常に一步から始まるのだ。運命に身を任せて、勇を鼓して猪突すべきであらうか。僅な理性の判断によつて、誤りの少ない路をためらひつゝも、進むべきであらうか。

私は又思ふ。古來幾人かの偉人が此の岐路に立つて、或る者は迷ひ、或る者はためらはず路を選び、そして或る者は、十分なる己の能力を發揮する天地を見出し、或る者は空しき茫茫たる荒野の中に有爲の才を土に埋れさせてしまつたことであらう。果して己れの意志と目的とに忠實なるものが、よき路を選び得るか、又は運命の神のみが知る偶然のものなのであらうか。私達の持つ目的や希望はそれ程完全であり誤りのないものであらうか。

私は此の岐路に立つ一基の石標の表に刻まれて、三匹の猿を不可思議な運命の魔神の姿の如くふしあほぐ。月は幾度かこの表を照らし、露は幾度かこの表を洗つた。そして此の三匹の石猿は一つは問へども云はず、一つは語れど聞かず、一つは願ひども見ず、黙々として冷かに此處に踞してゐる。

靴と下駄

五B 深尾光

「東北の風曇、夕立の見込四分位、天氣は次第に悪きに向ふ。」何んだ、氣象臺が又名文を出し始めたな。どつち道傘は携帯せずばなるまいな。どと思ひながら立關に出た。空は今にもザラツと來さうな模様だ。さて靴にしようか？ それとも下駄にしようかと度々考へ直した擧句、遂に靴で行くことに決した。

いくら待つても電車が來ない。落ちついて降り出した雨がうらめしくなる。汚ない飛ばツちりを散らす貨物自動車が無性に癢にさはる。其の時一人の紳士が僕の傍に難を避けた。無意識に其の足を見るに、避難するも其の管、バリー型のびか／＼が撃め顔をして居るではないか。前を見ると、お梅黒の粹な雪駄が小さくなつて居る。道の向側には先きの尖がつた踵の細い靴が泣きさうになつて居る。皆な良い履物の持主の心理が表現されてゐると感心して居ると、突然魚屋の兄イの偉大な下駄靴が汚水をけつて動き出した。電車の來ないのに業を煮やした兄イの心が表はれて面白い。其の後から苦學生の納豆賣のいかめしい朴齒が悠々と行く。

向ふ側の車道を疾風の如く行き過ぎたのは、氣象臺の名文を信じなかつた若い衆の駒下駄だ。其の後に頭固な軍隊靴が測歩してゐるのは皮肉だ。

ガタン／＼。待ち焦れた電車はやつと來た。僕は僕のブルドック靴を引きすつて車道に出た。

或る秋の夕

五O 増田理平

風の吹く度にざわ／＼と音を立て、落ちるボプラの葉が残り少なくなつた。もう秋も耐である。

松も遠近の山も田の面も風の音も、秋の淋しきを物語つて居る。箒を倒に立てた様などでも云ひたい榛の木に群がつて居た雀が、バツと一時に飛んで稲の中に中にかくれたのを二三回も見つた頃、私達はもう水車小屋の前まで來た。

「兄ちゃん、少し休んで行かうよ。」後について來た弟が口早に云つた。「あの丘まで歩かうぢやないか、もう少しだぜ。」と自分はずんずん歩き續けた。少し無理だとは思つたけれど、稲をざわつかせながら呼道を二三町も來ると目の前には黄色くなつた芝生が私達を待つて居た。

太陽は今残りの光りを一時に田の面に放つて、城山の彼方に入らうとして居る。あたり一面は急に眩しい様に明るくなつた。自分は何とはなしに頬のほてるのを感じた。

今川の岸に立つて居る土蔵の白壁が急に赤味を帯びた。然しそれもわずかの間であつた。

太陽は全く沈んでしまつた。西の空の赤味を帯びて居るのに引かへて今まで東へ／＼と走つて居た白雲が灰色のそれと變つた。風が木の葉を落す音が、今更の様に耳に付た四邊は次第に薄暗くなつて行く。秋の悲哀が私の胸にも迫つて來る様である。晝の暖かさに引かへ、日が入ると吹く風の冷やかさが身にしむ様になつた。枯れたすすきが音もなくそよいで居るやつぱり秋は淋しいもんだなあ。弟が生意氣な事を云ふ。「全くだね。」自分も共鳴した。

何も自分に悲しい事はなくても何となく心の晴々しないものだ。それが秋の特徴であるとしても云ふのだらう……一あ、もう大分遅くなつたから急いで歸らう。今まで何氣なく空を見つめて居た私も淋しく笑つて云つた。今迄白く見えて居たが月が黄金色のや

宗盛。「手に持った儘、人間には希望なり豫定なりがあるので生活が面白いのだ。技に血の躍る位興味のある事件が具體化して来たとする。その行爲の善悪は兎も角、計畫者にとつては、其の實行程楽しいものはない。それが他愛もなく破棄されてしまった。〔ぐつと飲み乾す〕人間の心と云ふものは、一寸した事で酔へなくなるものだ。又それを知つて居ながら自分を酔に紛らさうと、尚飲むものだ。さうなつたら酒はもう味の無いものになつて仕舞ふ。〔思ひ出した様に〕お、俺は昨夜眠る時に、今夜の今頃は強者のみに許された優越権に浸り乍ら、耳の底に残る異状な騷音の快感に酔ふて居る自分を想像して居たのだ。侍女一同。〔顔見合せて無言〕

宗盛。「釣がせ乍ら」それなのに今一步と云ふ處で……〔口惜しさうな表情〕うーい〔飲む〕ふーつ。

侍女三。「意を決した様に」まあ、若殿様は、何んと云ふ御言葉で御座います。〔唾を呑み〕私には今朝の有様が未だ目の前にある様で御座います。此のお館に御一門の方々は鏡姿でお揃ひになり、諸國の御役人様は御縁に並び溢れて、礎の上に乗で控へられました。そしてもう大殿様の御命令を待つ許りで、さしも廣いお庭も只もう大變な物々しさで御座いました。するに急に今迄の混雑が水でも打つた様に静かになりました。其の時御座います!! 烏帽子に指貫を召して、静かに大殿様のお前へお通り遊ばしたのは小松内府様のお寢れ遊ばした御姿でした。〔吸泣きつ〕あ、あの血を絞る様な御諫めの御言葉は……それにも係らず……

宗盛。「苛々した様に」五月蠅!! 何を云ふかと思へば、不快な記憶を呼び起させ様とする。〔侍女三に向ひ〕酌け。人は各々遠ふ主觀を以て居るのだ。例へば、甲が善と信する事も、それが乙にとつて必ずしも善であるとは許りは定らん。小松の兄と父上と俺との關係はさう云ふ様に考へられるのだ。〔盃を半にして〕だがお前の今云つた心持は解る。〔ぐつと飲んで〕話が理に落ちて酒が愈々不味い〔盃を置き乍ら〕さ、何かやれ。

侍女二。「侍女三に向ひ」さあ、今度は貴女と一緒に合はさせて下さいませ。

侍女三。え、どうぞ〔下手より別の侍女登場〕

別の侍女。申上げます。只今筑後守様が御出でになりました。

宗盛。む、筑後か、此處へ通して呉れ。

別の侍女。はい〔行きかける〕

宗盛。「何か氣付いて」あ、待て。庭先の篝火が歸つて来た。雑仕に命じて呉れ。別の侍女。かしこまりました〔退場〕

宗盛。篝火がせめてもの慰めだ。〔無言で侍女に退場を命じる。一同一禮して退場〕

貞能。「別の侍女に導かれ登場」

宗盛。丁度よい處であつた。〔侍女退場〕

貞能。何うしたと申すのでせう。日が暮れてから大變に蒸暑くなつたでは御座いませんか。

宗盛。さうだな。今夜は少し陽氣外れの様だ。

貞能。今朝は失禮致しました。實は〔辨解的に〕あれから内府様のお第に伺ひました。至急集まれとの御命令でしたので。そして種々御訓示が御座いましたが、要するに、度の事について、内府様は全然御反對と云ふ御意見なので御座います。實の所私は希望も致しませんでした。内府様の御意も豫期されてをりましたから……

〔此の言葉の中頃雑仕二名篝籠に薪を入れ一禮退場〕

宗盛。「不快らしく」うむ。

貞能。そして悪い時には悪いもので内府様からお館へ、父の家貞と二人でお使を承つた次第で御座います。餘り芳しい御用でもありませんから、入道様の御許へは、父一人に任せまして、私は御立關から此方へ御訪ね致した譯で御座います。……で入道様の御用の趣は……

宗盛。「それを遮つて」いや、それは聞かない。改めて聞けば俺の氣持が又苛立つ。

〔其の時侍女三、手に銚子を持つて登場一禮〕

宗盛。さそれより一つどうだ。〔遠ふ盃を渡す〕

貞能。結構で御座います。〔酌がせ一口飲んで、ふと氣付き〕若殿様はまだ鑑下をお召しですね。ではあれから續けて御酒宴で御座いますか。

宗盛。「前に置いた盃を持ち酌がせ乍ら」うむ、あの騒で今日一日腹の虫が治まらぬ。〔ぐつと大きく呷つて〕腹の虫め、如何して俺を酔はせて呉れないのだ。

貞能。「盃を乾して」いや、御尤で御座います（以下侍女三に酌がせ乍ら語る）

宗盛。だがなあ、筑後、思ひ出し度くもない今朝の事だが「間、小松の兄貴の囊香気な姿に腹が立つたので文句を云つたら、（自嘲的に）は、却つて遣り込められてしまったな。それで、云ふ譯ではないが（酒飲み獨特のくどい調子になる）いゝか、筑後。俺は兄貴が父上に何かじめく泣き言を並べてる時、外の室で飲んで居たのだ。うゝい。するゝ暫らくたつて兄貴が歸つたと聞いて、せめて勢揃ひでもして解散させ様さ、出て見るとどうだ。あの広い庭に旗竿一本轉つて居ないのだ。いゝか筑後俺は狐につま、れた様な心持がしたぞ。聞いて見れば何の事だ。泣言を云つた揚句、何んとか巧い言葉で一同を連れ歸つた云ふ事だ。それで何が君子だ。

貞能。「や、酔が出て来る」では御座いますが、條理を盡した内府様の今日の御言葉は、私も同意を餘儀なくされました。

宗盛。何だ？（皮肉に）貴様も小松の兄貴の看板道徳に感はされたな。今度の計畫に對して貴様も主戦論者の一人ではないか？

貞能。いかにもさうで御座いました。併し私の主戦論は利害關係そのものよりも十二分に勝算のあるのを豫期しましたので、勝利者の一人として、その快感を味ひたかつた丈です。私にとつては、内府様の此のお使も實に有難迷惑を感じてゐるのです。

宗盛。「や、意を得た様」ふゝむ

貞能。併し何んと申しましたも内府様の此度の御心配は、並大抵では御座いますまい。

宗盛。心配？（嘲笑的に）何が。あの偽善者。「道徳」が何だ。それは彼が賣名手段の一つではないか。彼の云ふ大義名分や道徳それは彼の利己主義の別名に過ぎないのだ。俺は今迄彼を信じ過ぎてゐた。俺がさうでない丈に。彼の道徳家的態度に尊敬を拂つて居た。だがそれは餘り高く買ひかぶつて居た。「人間は内容が豊富であればよい。「位は財實は空虚なものだ」と口癖の様に云つて置き乍ら、先年内近衛大將を強請した時の魚鱗り方はどうだ。大義名分を口にする者の態度か。あれば人格を説く道徳家の態度か。

貞能。まあ、さう仰有ればさうなりますが……内府様のあゝした御心持は、何か餘程深い所存があつての上だと、私はさう云ふ噂を聞きませんでした。

宗盛。何が「冷笑的に」世間の奴等は悪人の眞理に耳を藉さず、偽善者の詭辯には直ぐ乗るものだ。道徳と云ふ保護色に感はされるからな

貞能。「話頭を轉じやうとして」時に只今此處へ参る途中に、物々しき警戒の裡に五六人のものが檢非違使廳へ護送されて行くのに遭ひましたが。未だ鹿ヶ谷の連累者が居ると見えますな。

宗盛。うむ、鹿谷の事か。あの判決は確か明後日だな。

貞能。はい、さうで御座います。成親殿はどう決る事です。

宗盛。勿論一番の重罪だ。何しろ事件の發頭人だからな。小松の兄貴の命乞さへ無ければ既に斬られた西光と同じ運命なのだ。動かぬ所先づ島流しだらう。それより重くとも軽くはあるまい。併しそれだてあの父上の性質では長い生命ではなからう。

貞能。噂によりますと内府様は毎日六巻づゝ經を唱へて成親殿の罪の輕減を祈つて居られるとの事です。

宗盛。だがもう斯うなれば全權は父上の意志にあるのだ。經など唱む丈無駄な事だ。信仰が何んだ。奇蹟が何んだ。未來が何んだ。此の世界は現實の世界だ。此の世界は争鬭の世界だ。權力ある者のみの自由の世界だ、（愉快さうに）なあ筑後、さぞ偽善者が平和論を悔いて居ようぞ。

貞能。はい、まことに……（後を何か云はうとする）

侍女四。申上げます（貞能に向ひ）家貞様が御待で御座います。

貞能。「あはて、あゝさやうか。では失禮致します。

宗盛。「未だ多少の昂奮の様子で」うむ、「侍女三に」送つてやれ。

侍女三。「かしこまりました」（貞能侍女三、四、退場）

宗盛。「立ち上る」うゝい。「縁に出る。かなり酩酊、無言」（地震起る。軒の釣燈揺れ始む。次第に強し。屋根瓦二三落つ。宗盛次第にうろたへ。最後の一搖れ、眞の恐怖の表情）

（ほとと邊りを見る。醜體の思ひ返へし、安緒との錯綜した苦笑が口邊に浮む）

宗盛。「柱より離れて」大きい地震だつたな。「自分に辯解する様に低く」だが怖いものは矢張り怖いものだ。

音なく……幕

短歌

四A 森 島 壽

我が家は廻り廻つて森越えて風ささかかに吹く道の脇
山の手の灰空低くひびき行く汽車の汽笛や夏の夜の雨
たづね来る君を待つまに秋風の窓より入りて心地よきかな
秋の夜の我が獨り居の淋しさにふみを出して讀みにけるかも
或時は過ぎにし言葉砂に書き消しては書きぬ悔しいふ文字

四A 花 岡 勝 夫

枯れ蘆の生ゆる藻沼にたたずめば蘆の枯葉に秋聞けにけり
群生ひの蘆の枯葉にそくそくと秋風わたり水の面波立つ
逝く秋の日差もさびし湖の蘆の枯葉に風のわたりて

俳句

通學の路

野 口 操

薄もやを分けて下れり八景坂
霜の路ふみくだきつ、獨り行く

140

五〇 植 原 眞 記

夕暮れていまだも消えぬ山火事を遠目に見つ、戸をとさすか
(故郷にて)

はのぼの霧たちこめてあかつきの港せはしく船出てにけり
(同 前)

澄みわたる朝の港に舟とまり荷物を揚ぐる聲のよろしさ
(神戸にて)

夕ばへの空をながめて灯の町の君おもいつ、丘をさまよふ
(故郷にて)

霜風の走るがまゝ、の雜木林
紙屑の散らばる街や朝寒し
増田 理 平

青嵐沖に白帆や二つ三つ
宵月や朧々として海に浮き

川狩や笠より笠へ糸とんぼ
水濁る大井川原や雨後の朝
網打つや手答もあり白き腹
四A 森 島 壽

水無月の晴れ渡りたる空の色
鶯の鳴きける聲や朝まだき
夜の雨晴れてひかるや月見草
元日に若水つかふ親父哉
武蔵野の風寒し初日の出
五A 澁川三千雄

老杉の影もさやかに五十鈴川(河水清)
大利根を上る荷舟や初日影
松の葉に艶もつ朝や寒の入り
梅の花咲く山里に薄日さす
桃の咲く村まで近き小川かな
川幅も廣うなりけり水ぬるむ
武蔵野をはてからはてへ春の雨

修學旅行吟句

五〇 鎌 田 修

伊勢大廟にて

廟見えす遙かに拜す秋の森

文 苑

五十鈴川いよ／＼澄みて秋深し
杉木立小暗らくなりて秋の宮
碧空に杉の色濃し秋の廟
しはぶきの響き渡りぬ秋の廟
奈良にて

秋の森社の水の落ちる音
小春日やつき来る鹿に又遊ぶ
大佛の堂冷や、かや石畳
二月堂秋風よけし丸柱
我つきし音きく奈良の秋の鐘
春日神社にて

燈籠の樹の間をもる、秋夕日
京都にて

音も色も澄みて靜かや京の町
やはらかき裕姿や京の町
七條橋にて

先頭の人ほのかなり霧の橋
桃山御陵にて

曇るます如し御陵の秋の雲
三井寺にて

瞰して見る琵琶湖の果や秋の山
金閣寺にて

一四一

秋の池日月の長さ懐ひけり

詩

親に勘當裸島 四A 上田與兵衛

年新人心若 山頂戴白雪

山景浮水画 河水涼々清

天下聞名景之 群島巖々登青松

親に勘當裸島

親に勘當裸島 四A 上田與兵衛

數多の島嶼 緑の衣を着てゐるが

唯二つ着てゐない

黒髪裸島

親に勘當裸島

かけ聲に馬よく走る雲かな

雲降るや土葱をむく鹿か

木の葉はみんな散りつくし

裸で海の真中に

親に勘當裸島

何を言つても黙つて

裸で海の真中に

北風吹いても

雲雀

五A 吉川 東雲

ピトチコピトチ可愛い雲雀

また飛び出した元氣な雲雀

揚れ揚れもつともつと揚れ

あゝ、帆船！

漁村の夕暮、孤兒は

双手をあけて呼ぶ

幸福を積みて

来ぬと思へば……

あゝなれど、日は暮れぬ

帆船の灯は遠に見えず

孤兒の身をち

押し包む雨の故にか！

幻影、幻影

波浪に消えしは幻影船か

あゝ、まことかや！

幸福も——幻影とは。

砂濱の夜の悲劇

櫻貝と星のひめごと

あゝ今宵

遂に星は消えぬ。

空はお前の自由なお家

其處で人里見下して

ピトチコピトチ元氣な聲で

歌へ歌へもつともつと歌へ

宵闇 (三つからなる組曲)

五〇 池田 均

1 幻影船

幻か、夢か、

あゝ、岩島の影に

大いなる

帆船は浮ぶ。

夕なりき

踏砂はもつさり

濡れそぼち

夕なりき

今し蒲潮に

さんざめく波浪をあふ

岩島の彼方

愛情と執着を秘めて
水平線のあなた速く
美しき慧星は
あゝ遂に消えぬ。

獨り可憐の櫻貝は
潮に濡る、夜の砂濱に
いたくしくも傷つきし
生をかこつよ。

魂の砂時計は
黙々と唯黙々と
時をきざみぬ。

いつしかに紅あせし
かの櫻貝は一塊の
砂に化しぬ。

その夜再び
慧星は水平線を
逆に流れぬ。

なれど

進むにはあらざりき
大いなるものの影より
あはれ
逃れんとあせる様はも。

3 追ふによしなし

歸らばや
幻を捨て
歸らばや

あゝ傷つきし白鳩は
春麗夜のねやにゐて
白き胸毛に頂垂れぬ。

年まだ若き僧ひとり
流る、星の行衛をば
追ふて微に吹きぬ。

星の如くに
幻を
追へるものは。

學校作文日

春之山野

一A 鈴木 精次

今まで草木は眠つてゐたが、風がそよ／＼と吹き初めて柔かい陽の光は隈なく満ちて、野も山も一面に薄霜の幕が拂引いてゐる。田圃の小路からは陽炎がゆら／＼と燃え上る。

菜の花は今を盛りに咲きほこつて、さながら黄金の世界を展開したやう……………。

蝶は愉快そ／＼にひら／＼と花から花へ飛び廻る。

花は飛ぶ。

小川の水は笹舟を漂はせながら野中を過ぎて被方へ行く。

雲雀は楽しそうに囀りながら天界を飛び廻る。

青々とした中に山姫の粧ひそのまゝの櫻。

「チーチク／＼」と何鳥かわからないが、此天地を我物顔に何處かで啼き囀つてゐる。

突然けた、ましい音が山の奥の奥、谷の底の底に浸み込んで行く。その後は何の音も聞へぬ。

春の山野はほんまに長閑な柔い世界である。

夏休日記

一A 相馬 六郎

七月廿三日、晴れ試験を終へて楽しい水に親しむ夏休みの日となつた。此の喜びの日にそれは悲しい渡邊君の死の通知を受けた。君と僕は小學一年の悪戯時代からの親友であつた。光陰は矢の如し。とはよく云つたものだ。同じ窓の下に机を列べてから六年は経つた。あの「あふけば尊し我が師の恩」と、唱つて楽しい同窓の日にて再會の日を約しつゝ、あの誓を持った庭園の櫻の木の下

で、お互に身體を大切に別れたことを思ひ出せば、仲間の我等の第一の犠牲にたつた彼！それは呪はしい／＼悪魔は遂に渡邊君の命を取り去つたのであつた。あのみのしりとした體格の持主の渡邊君、斯渡邊君は終に過去の人となつてしまつたのだ。「よし記録は俺が破つてやるぞ。」とニコウ。「ドシヤン。」投げた砲丸はレコードより一尺五六寸前へ出た。「素敵だ／＼」即ち聲援は續いた。投げた人は渡邊君であつた。渡邊君は僕等が卒業する時までの砲丸レコードの保持者であつた。それから間もない或日に彼の痛ましい死を聞いたその晩のことだ。僕は萩野君と共に渡邊君の家を訪ふた。「今晚は。」僕は胸のつまるのを思ひ切つて言つた。線香の煙け室一杯に満されてゐた。やがての事に私達は佛前に案内された。白布を以て蔽はれたあの棺の中には亡き渡邊君の姿がと思ふと氣がほつととしてしまつた。

僕達は靈前に正座して、線香に火をつけそして恭しく拝めた。熱い涙は思はず知らず僕の頬を流れた。歸る時だつた。伯父さんが「くれ／＼も活動寫眞館等で、ラムネなどを飲んではいけませんよ」と云つた。たつた一人の男の子を亡つ伯父さんの目には、早や云ひ知れぬ悲しみの涙が宿つて居た。

歸途に僕は思つた。獨りつ子を失つた伯父さんはどうだらう。どんな心持がするだらう。月は青白い光を地上に投げて居た。どこからともなくナイトホームのハーモニカの音が聞こえて來た。高く或は低く！ 淋しい夜の情景は尙一層淋しく感ぜられた。「渡邊君はハーモニカが上手だつたがなあ。」月は思ひ出した様に、淋しい晩の中に獨り淡く輝く。(終り)

元 日

一年〇 戸ヶ崎 政雄

陰にこもつた淺草の天神山の鐘、時は十二時を過ぎた。ぼん／＼と百八つを撞くといふ、商人達は夜を明かすのである。東の空は薄赤らいで行く。大正十五年の扉は靜かに開かれてゆくのである。あゝ僕は最早十四歳ではない十五歳になつたのである。着物は美しく、帽子は新しい、下駄は麗いのに加へてお雑煮も祝へない人を思ふに何となく物淋しい氣持になる。

元 日

一年〇 大 林 茂

大正十五年一月一日朝七時頃起き出でたり。今年元日は、いつも長閑なる天氣なり。

とそを飲み、雑煮餅を祝ひて、新調の外套を着て、學校におもむけば、皆愉快に集り居れり。

式を終りて歸れば附近の人は羽根をつきなどして樂しげに遊び居れり。

家につけば我れ宛に來たる年賀狀ありて實に嬉しかりき。

それより父の代理として年始におもむけり。

歸りて羽根をつき、夜は歌留多をとりてふけゆくを知らざりき。

その樂しみを明日に殘して、臥床に入りよき初夢見むといねたり。

靖 國 神 社

一〇 仲 村 政 敏

靖國神社は、九段の上にある。、づ、坂を上ると、正面に大鳥居を見、それをくぐつて行くと、見上げる程の大村益次郎の銅像が立つて居る。それより先へ進んで社殿に参拜する。其の社殿には帝國の爲戦死したり、其他國家の爲命を捨てた人々を祀つてあるのであるから、我々は、其の事をよく心の底までしみこませて参拜しなければならぬのである。又我々もよく君の爲國の爲によく盡さなければならぬ。

國 語 の 目 的

國語の目的は、國語の知識を身に付け、國語の運用能力を養成することである。國語の知識を身に付けることは、國語の運用能力を養成することである。國語の運用能力を養成することは、國語の知識を身に付けることである。

國語の目的と問はれると言葉が、つまつて一寸言ひにくいやうな感じがしますが、よく考へれば、何の事はありません。先づ、國語の目的は國民にまつて重大な學問であつて、吾々に智識才能を興へるものであります。國語を本統に學んで、始めて國民としての道を知りそして他人より輕蔑される様なこともなくなるのであります。漢語に、一書を讀まざれば、道を知る事能はずとありますが全くさうです。書は則ち國語です。國語を知らざれば、則ち人としての道はわかりませぬ。

是れ則ち忠良なる人民、我が大日本帝國とは言はれますまい。我等は一心に國語を研究して以て忠良なるそして大日本帝國の國民たるの資格を得なければなりません。

霜

一D 宇野 宇

多さいへば、寒く、寒いといへばすぐに多を、思ひ出すだらう。〇いつしか春も過ぎ、夏も過ぎ、既に秋を越して、冬の領分に入らんとする。地上の、凡ての物が、冷却に伴はれてゆく。雨さへも、雪と化し、霜と成る。霜々さうだ、あれは厚くも積らす、餘り薄くも置かない。冬の閑な時分の朝など底冷えのする、體を縁側に、運びながら、眠い目をこすり、天氣如何と戸の引手に手を掛けてさつと開けば、其の途端に、落つる物干竿の霜、戸を開けた振動の爲に、落ちたのであらう。縁側につるしてある物干竿をかけるひもを引くと、再び縁は淋しく地上に散る。學校の支度をして、行つて参りますといつて、家の前の泥溝板の上の霜をふみ、靴が白くなる事もある。

終り。

入學を知らせる手紙

一E 田中正雄

伊藤君、しばらく御無沙汰致しました。

君と別れてもう一年になりますね。あの校庭で君が商業學校に入る事も、僕が中學校に入る事も話し合ひましたね。又僕が東京で震災にあつた話も随分しましたね。

君も商業學校に入りましたか、僕も此の度日本大學中學云ふ學校へ入りました。僕にまつては此の上もない喜びでした。未だ學校の事は何事もよくわかりませんが、校舎は三階建てで鐵筋コンクリートで出来て居ます。そして別に講堂があります。其處で柔道剣道をするのです職員生徒合せて一千餘名、校長先生は荒川五郎と云ふ方です。そして私の感じたことは、一組々々に受持の先生があつても各科目、一時間々々其の先生が進ふことです。之は僕にとつてははじめての経験でした。今では級友の名もやゝわかり、五六人の友達さへ出来ました。そして毎日々々仲よく勉強し、仲よく遊んで居ります。それからついでがありましたら吉村君にもよろしくおつたへ下さい。それでは左様なら。御機嫌よう。

四月二十八日

田中より

伊藤一男君へ

弟の死

一E 川名正一

僕の愛してゐる弟は遂に黄泉國の客となつた。名は友三部、年は三才であつた。

可愛い顔をしてゐて、少し言葉も片言まじりに言へて、よろしくと歩く可愛盛りの子であつた。

僕がすわつてゐると後から、「ぶんぶ」「ぶんぶ」とおぶさりたがつた。又足をもちあげて、「あんよあんよちやちやて」と、言つた事を思ひ出すと僕は胸をかきむしられる様な氣がする。

死ぬ日の朝、お父様におぶさつた時、如何にも嬉しうな顔をした。又死ぬ間際に、「お父ちゃん」「お母ちゃん」と、言つた事がまざり、耳に残つてゐる。

文苑

僕は「友ちゃん」が無事に、極楽浄土に行く事を祈つてゐる。

私の母

二五 土方 兼雄

おぎや／＼赤坊の泣聲がしきりにする。

母はぬれた手をふき／＼あやしなうながら奥の方にだつて行つた。其んな様子を見る度に、いつもなつかしいお母さんが目の前に浮んで来る。

思ひ出せば大正六平の頃であつた。

幼稚園を終へて愈々小学校一年生にあつた。外は風や羽子板の音で賑やかである。時々萬藏が奇妙な身振をして家の門を過ぎて行く。

外の賑かさにひきかへ家の中はしんとして、只悲しいすゝり泣きの聲が時々するだけであつた。

十四日の晩、母の病が頓に重つて、夜明け方遂に黄泉に旅立つてしまつた。光陰は矢の如く僕は今年十四の年を迎へし名残ある中學の學の道にいそしんで居る。

其してやさしい、なつかしい母は冷たい／＼墓の下でさぞかし僕が成人するのを待つてゐる事であらう。(完)

秋 (秋の朝)

二五 川 畑 安 頼

ぶう——ぶう——五時をつける工場の汽笛、僕はやつと目をさました。

ぶう——ぶう——又汽笛が鳴る。僕は耳うるさくなつて布団の上で起きなほつた。

朝風がはださむく障子の間から吹きこむ。

僕は内の前に立つて一つ大きなあくびをした。

朝霧がしつとり降つて向ふの法恩寺様の屋根がかすかにほうつとうすく見える。

あちら此ちら見まわしてゐると、突然がた／＼と何處かで車の音、霧の中から豆粥賣のらつばの音が、餘韻かすかにながくひいて聞える。

都の朝朝はだ／＼とにぎやかになつて来る。

さあ／＼、又しても風が過ぎて行く、僕はしづかにあるき出した。

秋の伊香保

二五 加藤 正 巳

午前八時伊香保の旅館を出發して昨日のつかれのなほりきらない足を引づりながら榛名湖へ向つた。

川をへだて、向ふの山を見れば赤色黄色とり／＼にまるで山全體が錦の衣をきたように見える。足のつかれもど／＼かへ行つてたゞもう秋らしい気分になつて進んで行つた。しかし猿轡橋を渡りそして其の次の橋を渡れば、すぐ僕のきらいな坂がうね／＼と頂上へ／＼と連なつて居る。然しこの坂を上らなければ頂上へは行かれない。

僕はもう秋らしい気分なんかどこへか行つて、一生懸命になつて上つて居つた。

頂上へ上りついた時のうれしさは忘れない。多平苦心をして事業に成功した時のうれしさもかくやと思はれた。

そして少し下り坂の様な道を右手に、秋の榛名富士を見ながらまた、秋の気分になり足のつかれも忘れて榛名湖畔へと長く／＼連なつて居る道を進んで行つた。

夏季休暇中に於る感想

二六 吉岡 武 男

今年の夏季休暇は大騒ぎで期待した割に、餘り楽しくも面白くもなかつた。煩雜な學問と暫く離れると云ふ嬉しさだけに止まつた様だつた。それは或は三十幾日から長い日數を、激暑の東京で單調な生活を繰りかへした爲か知れぬ。休暇の半ば頃になると不意に學校が堪らなく戀しくなつたり、各自の故郷で楽しく暮らして居る友の事等を思ふと、羨望に堪へられなくなつたりするのて有つた。兎に角、今迄にない平凡な没趣味な、夏季休暇で有つた。それでも三十幾日間中、多少變化は有るにはあつた。「興津の生活」「弟の上京」それ等て有る。

鯛の浦遊覽

短い思へば短し、長いと思へば長くも思はれる、興津十二日間の合宿生活を終局に近い或一日で有る。

例に依つて例の如く、眞先にと言ひたいが、一等ビリから意氣揚々と起き出でた僕は、今日の小湊行き的事等昨夜の夢に奇麗に潜けさせて、更に念頭がない。

お天道様は早や東天高くにやり／＼と、この朝寝坊めをあざ笑つて御座らつしやる様。どんな人並足らぬ僕と雖も、火事場の様な四邊の唯ならぬ有様に、或程と合點するが道理で有る。突然起上つて飛行機のプロペラの如く、大車輪の活躍を始める。顔を洗ふ。飯を食ふ。承らく椽側の隅つこに虐待して置いたボロ服を引つ張り出す。それ等を何分かの短時間に片づけてしまつたので有る。

前進。ほこりが飛び上る。山道を二里餘、びよこり／＼愚痴だら／＼で行く。途中おせん轉しとやら、おせん餅でも轉つて居るかと思ふ、奇妙奇天烈な名前の、奇景とか絶景とかを賞めたりけなしたり、いつとはなし目的地小湊に到着。すぐ様、打揃つて鯛の浦遊覽船に乗り込だ。

「エツサ、ホイッ」ねち鉢巻、ふんさし一つの仁王様は、赤銅作の嚴丈な身體を動かしながら、威勢のよい掛聲と共に、舟は波を蹴立てつ、沖へ沖へと突進する。やがて舟脚がびつたり止る。さあ之からが、愈々大鯛の出現で有る、あはよくば土産につかみ捕らん許りの勢で水中をじつと覗みつける。この邊は小山の様な岩がすく／＼と海上に矗立して居る。船頭は餌を一つかみ海中に投じた。一秒。三秒。餌が沈むで行く。碧色の海水が渦巻き始める。泡立つ。途端五六尾、怪物の様な大鯛がさつと躍り出る。さ見る間に各々その餌をくわへて引む。思はず美しいと思ふが、又神秘的な恐怖、物凄さを感じる。僕はいつか、ほかんと大口を開けて居た。

弟の上京

弟の上京は僕を可成面喰らせたので有つた。弟は祖母を唯三人須磨に住んで居た。僕が東京に来てからと云ふもの、凡そ一年餘は音信だにしなかつた。又さして會ひたいと云ふ欲望もなかつた。もつとも懐しく思ふのが當然だが、時々我ながら不思議に思ふ事すら有つた。それでも路傍等で何氣なく、弟と同年配位の子供を見ると急に懐しくなつて、どんなに變つてゐるかしら等と思ふ事が有つた。その弟が東京に来ると云ふ事は、殆んど思ひ掛けぬ事だつた。

丁度、興津から歸京して我が家に入つた利那だつた不圖見馴れぬ子供の下駄が目映つた。「おや」と不審を抱きながら、奥へ入ると十一二の子供が行儀よく座つて居た。よく見ると、間違ひもなく弟で有る。僕の歸つたのを見ると、一寸はにかむ様だ、にこりと笑つて稽いた。宿題でもして居るらしかつた。僕は餘り突發的なので、ぼんやりして一緒に來た祖母に挨拶するのち忘れて居た。二人は絶えず沈黙を守つた。不思議な位。僕は弟が一年餘の中著しく變つて居るのに氣附いた。まだ弟と一緒に居た時、それはもう、朝から晩まで相手嫌はずしやべる弟だつたが、今は黙つて居る。無口になつて居る。僕も強ひて話かけはしなかつた。祖母はさもなく不思議をうに二人を交互に眺めて「男の兄弟つてこんなものかなあ」とを呟いた。祖母は二人が互に抱き合つて健康を祝し合ふ。この劇的な情景を想像して居たらしかつた。

弟は夏休み中居つて歸つた。

運動會の記

山口金之助

明くれば十月十五日、僕等健兒の意氣振る運動會の日は來た。天高く馬肥ゆ、其れは丁度僕等の樂しき運動會を期待するかの様に、初秋の空は清く澄んでゐた。此の天空此の大自然の下に、此の盛大なグラウンドに於て僕等は競ふのである。僕等は競ふのである。フレイア等日大健兒、腕を振ふは此の時ぞ。全校生徒の應援歌は天をもゆるがせなるばかりであつた。午前九時を期して全校生徒の體操が行はれた。ドーンと銃聲が秋空高く響いた、百米競走が始つたのであらう。僕は急いで洋服を脱いだ。とき／＼する胸をおさへて、スタートに出た。オンユアマーク、まるで其の聲は裁判官が死刑の宣告をする様に僕には思はれた。そし

て思はずかたづを呑んだ。どんと鉄鑿は響いた。僕はベストを盡して走つた、然し一等は取れなかつた。晝の知らせに僕は二三人の友と一語に土手の草の繁つた所で辨當を食べた。運動をした爲か、辨當が大層美味かつた。此度食料の時には何等も此に來て食事をしやうじやないかなどと愉快に笑ひながら辨當を食べた。食事が終つた、此度は僕等の兎競走である。感心にも僕はビリから一着の榮を冠得た。又五年生の教練の野外演習は實に戦争の實況を目前に見るやうな氣がした。

殊に面白かつたのは假裝行列であつた。僕は腹を抱へて大笑した。新しく午後五時頃遂に意義ある運動會は閉會された。今しも西山に没せんとする太陽は、諸君大いに御苦勞であると言つてゐるかのやうに淡い光を地上に投げてゐた。

初秋のたより

三A 貝塚 實

其後お變りなく、業務に御勉勵の事と思ひます。

東京にも秋は來ました。私が此の手紙を書いて居る時に、外を見れば二三日降つた雨上りで空はよく晴れ渡つて、赤さんほ、つくばに雲もなかりけり」といつたやうな氣分です。私の近所に御承知の明治座の跡が廣場になつて居るので、區劃整理も案外はかどつて、以前とはすつかり變つてしまひました。一年中にたつた一つしか無い好氣節の秋を靜かに面白く感じやうと思つて居りましたら、近所がかういふわけゴタ／＼して何となく落ちつきません。けれども例年の如く何も知らない虫共は、秋狩顔はバラツクの蔭でないて居ります。聲の力は恐いもので、その虫の聲がひびき渡るところ、それを聞いて居る人の心は何事も忘れてそれがどんなきいたところであつても、きれいなところであつても、ゆかしい氣分が満ちて來て、自然の樂天地へも行つたやうです。秋の夜長になきくらす虫の聲が何處ともなく、聞えて來るのも又趣あるものですが、まして我家の縁の下や又は庭等でその聲をきく時はなほ更の事です。私の家でも裏の路で一夜ないたこほろぎがあつたのです。私は非常にうれしく思ひましたが、其翌日からはその聲が絶えました。昔某俳諧師が或夜庭で松虫のなく音を聞いて非常によろこびましたが、その翌晩からどうしても聞えませんが、そんな事もあるべき事であると感ぜました。

くだらない事を書きならべましてお忙しい所をお邪魔致しました。是からは禮下親しむべき頃ですから、お互に勤勉しこの季節を有益に過しませう。秋口にかけておからだを御大切に、

大阪にある親しき友へ。

晩 秋

三A 貝塚 實

「どてら着て一人書讀む夜寒かな」秋の夜長に心樂しく聞く虫の聲もいつしかとぎれて、彼等は此の秋を己の天地として思ふ存分鳴きとほして草木の露と消えていつた事だらう。虫の聲を聞かぬ今日此頃、夜寒を感じる時である。私の家は祖末なバラツタばかり、勿論庭もない、それに此頃は土地整理の爲に、何となく空氣が落ちついてゐないので、落葉のさゝやき、木枯の音等聞きたく聞もかれぬ有様なので、うらめしくも晩秋は何の印象もなく過ぎていつて、しまふ事だらう。私はそこで七八年前一ヶ月もひたつた鹽原の秋を追憶する。その頃は丁度晩秋で、箒川の清流をへだてた對岸の木々は今迄秋のいたづら者のペインターの爲に、毎日／＼その色彩が變つていつたのがその頃となつては、一樣に黄色な屏風となつてしまつた。昨日は縁に見えた所が今日は稍赤くなつたり、赤くなつてゐた所が黄色になつたりしたまばらな谷はもうその變化を止めて、遠い山々には最早雪が見え出した。けれどその箒川の清流を極めた流れは私の居る間少しも變らなかつた。宿屋を出て附近の公園に行くとガサ／＼といふ落葉の中にどんぐりの實とは色が明に違つて居た。私はそれを拾つてコマを作つて遊んだ。それも直ぐ一週間程たつとその實は、刺目がついてゐた。又朝等温泉を導く煙が上つて居る竹筒の上に霜がまこころ／＼かゝつて居た事もあつた。私はその頃の事がいつも晩秋になると思ひ出され、小さいながらもその頃の自分に今一度なりたいやうな氣がする。

晩 秋

三A 阿佐美 元三 郎

秋は悪戯者である。あるつたけの繪具を其カンヴァス、大なるこの自然の上に何もかまはずにぶちまける。而も其色は澤山の色を用ひもしない。たゞ二色、赤と黄とだけである。そして其ははでな色彩で人間どもの心をこらへて色々様々な歌、詩等を作らせて置いて而もまもなくあらち走り廻つて木々をゆすぶり、せつかくの色どりを落してしまふ、そして冬の番にゆづる。

とつひこの間私は或る英國の作家の文を譯してもらつたことがある。私は、今その秋が走り廻り木々の葉を葉し初めてゐる晩秋の時に直面してゐる。けれど私としてはまるで秋の暮れ行くのを氣付いてゐない。なるほど朝夕には寒いと言つてよい位の時もある。木々の葉の紅葉して、かきりと音をたて、落ちたのも見た。空の青く高いのも、そして舞臺等で暮れ行く秋を歌じた詩等も讀んだ。けれど私は秋を嘆くのはあまりに若すぎる、又元氣すぎる。私は今もたゞもくもくとこの暮行く秋の空氣の中に筆を取つてゐる。無關心で晩秋の其事についてして居る。

初秋の便り

君は正月の午後、雨中を突き破つて吾等の郷園を出た時は早や八月の過去となつた。秋涼の氣は吾々の身に沁み、山も野も正に淡紅の錦を飾る季節となつた。むしあつて帝都も今は悪病の驕きと化して居る。人心競々としてこの悪病の豫防に焦せつて居るのだ。この病魔は昔日吾が郷に一大悪病として流行し、内地の人々を驚倒せしめた彼のコレラなのだ。彼は今この帝都に魔手を出してコレラ病を流行せしめたのである。

三A 郭 華 洲

併し魔鬼の力は人間の力に及ばぬこと、見え、さほぎの獨りダンスをすることも難しいのであらう。

承はれば我が郷は寒や暑氣去らず、太陽は毎日天然の力を發揮して、郷の人々の頭上に強烈な直射をほしいまゝにして居ること、けれども帝都には早や秋が来て、往來の人々の服装にも何となく秋らしい色が見える。人々の笑ふ聲も、話すまも何となく秋らしく感ぜられる。殊に陽光の正に没せんとする時に、樹上の蟬のリズムを聞く、旅人は更に初秋の味を味ふことゝ出來る。常夏を誇つて居る我が郷では蟬聲をきくと盛夏の味がするけれど内地の旅人となれば直ちに初秋だを感ぜられるのだ。これは内地に來たことのない人には分らない氣持かもしれない。

昨日の新聞に依れば我が郷には大暴風雨起り浸水せる家数多あつたこと。貴家は如何？ 謹んで御伺ひ申し上げる。

時候は漸々と變じて行く。涼氣は増すとも減じはせぬ。お互ひに自重自愛致しませう。

「秋燈親しむべて」の言を忘れないで居よう。

夏休中の一日

三A 岩 本 喜 一

曇つた朝だ。丁度冬の鉛の様に、灰色に低く雲が蔽ひかぶさつて居る。此の儘でゆけば登山には樂な日である。所が八王子近くに汽車が走つて居る頃ボツリ／＼とやつて來た、そして淺川で降りた時は、シト／＼と春雨の様に細く降つて居た。仕方が無いので僕等一行——母と弟——は驛前に居つた乗合自動車で高尾山の麓へ進んだ。降りて見ると都合好く雨は霧の様に降つて居るだけだつた。

山門をくゞつて僕等は、轟々と立ち並んだ杉の木の間を山路を辿つた。路は急に成つたり、ゆるやかに成つたりして居て、餘り疲勞を覚えさせなかつた。弟は今年六歳だが、餘りつかれぬと見えて——否初めてなので好奇心で一パイなのだらう——どん／＼先に向つて登つて行く。麓から一合目二合目と書いた杭が三〇〇米づつを隔て、立つて居た。相變らず雨は霧の様に降る。そして驛上につき出て居る樹木からは、絶えずボタリ／＼と、が落ちる。七合目位迄くると、はや服は霧でしつとりとして居る。然し汗ほんだ體に心地好かた。見張らし臺があつたが霧が深い爲に、足下の樹木がぼかし模様の様に見えるだけだつた。

チリン／＼と鈴の音も床しく六根清淨の者達が、金剛杖片手に登つて來るのに幾度も會つた。中には弟を強いと云つてほめて行く者が、多くあつた。遂に九合目を經て石段を登りきると最早頂上即ち十合目だつた。

海拔五六五米突と涼ぶ杭か立つて居た。僕等は此處迄來ると登山ならでは味へぬ、喜びを感じて下を見下した。先づ本殿へと参拜してお札を受け、段下のお茶屋で休息した。そして落付いて周囲を見廻した。天を摩す様に聳ゆる老杉、霧立ちそめた景色等自ら俗界を離れた心地がする。觀堂の幽しさ、自づと頭が下る様だ。本當に深山幽谷に遊ぶの感ありである。もう

汗も引込んで、冷気を感じて来た。此の外界に暑さに苦しむ處がある様には思はれぬ。僕等は尊厳な心を抱いて山を下つた。

出 水

三B 原 田 芳 幸

今夜はツナミが来ると云ふうわさを銭湯の中で聞いた。夕餉の席に集つた一家の者の話題は皆水の事ばかりであつた。用意して寝に就く前に、雨戸を開いて外を見た。車軸を流すが如き雨はどうとうと音して降つてゐた。溝の水は一ぱいになつて外へ溢れてゐる。蠟燭を用意し一家皆不安な床に著いた。自分はどうしても寝着くことが出来ない。色々な事を想像した。荒川の堤防が切れたら皆どうするだらう、何あんな堅固の堤は決して崩れることは無いと思つたが夫張り不安であつた。のんきな父や兄は大きないびきをかいて、寝てしまつた。いつも騒ぐ鼠も今夜ばかりはコトリともしない。恐いのだらう。雨は間断なく降つてゐる、時計は十時を打つた、不安な夜は段々更けて行く、……「大變だ」と云ふ大きな聲に驚いて飛起きた。ツナミでも来たのかと階下へ行つて見ると、ツナミでは無いが土間の中へ水が一ぱい入つて壘がぬれそうに成つてゐたので早速壘を上げた、水はどんどん進入して来る。然し餘り危険も無さそうなので母や弟を二階へ上げて寝がした。兄も自分が二人で番をすることにした、そして積かさねた壘の上で交代に休んだ。時計を見ると二時半であつた。僕は三時間餘寝たらしい。電燈の影がぼんやり水にうつつてゆらくと動いた。何處かで一番雞が元氣善くないた、もう安心だと思つたのでまたごろりと横になつた。其内に夜が明のだらう。終り

友 へ の 手 紙 (學窓近況)

三B 瀧 一 郎

君!! 久しく御便りを上げなかつたね。許してくれ給へ。此の前は身の廻りの事だけ御知らせしたんだね。今度は「學窓近況」といふやうな題で御話しやう。

まづ校舎の方からしやう。校舎は此の前も一寸話したと思ふが、鐵筋コンクリートの三階立て屋上などの上つて見ると、本所淺草の町々が一目に見下せるよ。其の時の氣持つたら何んとも言へない、まるで自分が大臣、大將になつた様で。校庭は君のように廣々とした田舎の中學校から見ると、まるで子供の遊場の様だが、此頃は植木もまわりにつつと植り、鐵棒なども出来一寸したものに成つた。

それから運動の方なんか大したものだよ。君も新聞で御覽になつたかしら無いが、彼の全國中等學校京濱驛傳競走に参加し、二等に迄こぎつけたよ。選手諸君は來年こそはと氣張つて居るから、來年は随分見物だらう。それから近い内に全國中等學校陸上競技大會があるはずだよ。勿論、優勝旗は此方の物だと思ふがね。

随分外の方の事ばかり書きちやつたね。今度は學課の方を書かう。なにしろ先生が都下で有名な方ばかりなんだもの、僕達も一懸命やらないと追ひついて行けないんだよ。其れに三年に成つたものだから、幾何・化學なんて今までに未だ匂ひもかいだ事もない様な學課が、揃つて首を出して來たんだもの。いゝかけんいやになつてしまふ。

是れだけの手紙を書くんでも氣が氣ぢや無いんだよ。何故つて今日出された代數の宿題を未だやづてないんだもの。ぢや是で失敬するよ。いづれ又。

人 生 の 行 路

四A 永 山 秀 雄

生は死への通路である。吾人が呱呱の聲を揚けた時は既に死に直面した時なのである。然し死そのものが、前途を脅かして居らぬとすれば、吾人は生てふ有難味をそれ程感じ得ないわけなのである。

尊き人生を無意義に終るも、有意義に終るも、思へば吾等の力如何に依るのである。或る者は大臣大將となり、或者は社會の落伍者となる。中には如何程努力しても何等報いられる處はなく、世を果敢なみ、人を呪ひ、遂には自暴自棄となり、奈落のどん底

へ陥ちる者も少くはないであらう。それ等は果して社會の罪か彼自身の罪か。

自分は是に於てその罪は彼等自身に在ると信ずるのである。如何になれば彼等は既に出發點に於て誤つて居ると思ふ。彼等は必ずや此の人生を無味單調なるものと考へたに違ひない。人生の行路は吾人が考へる様なそんな平坦なものではない。其處には幾多の障害が有り、幾多の困難が有る。然してそれ等に屈せず撓まず勇往邁進してこそ、眞の成功者となり月桂冠は得らるゝのである。故に失意不遇を云々して社會の實相を呪ふ彼等には、意氣と根氣とが足らぬのでは有るまいか。即ち死して後已む覺悟がないのである。

死に直面して人生の行路を進む吾人は臆病であつてはならぬ。意氣地がなくては困る。吾人は吾人が與へられたる生の有らん限りは一步も後へ戻らぬ意氣地がなければならぬと思ふ。絶えず努めよ然らば汝は安全なるべし。

吾人の將來

四A 山 田 知 男

北條早雲が未だ一介の法衣で當時の血生臭い社會に何等の波紋を呼び起すに足らぬ一青年の時、或る日箱根の山に登つた。そして際涯を知らぬ太平洋を眺めた時青年早雲の胸は感激に躍つたのであつた。

彼は海の雄大な相、その浩湯として悠久な態、底深くして計り難きに心魂を奪はれたのである。「男子は須らく此の如くならざるべからず。」と、叫んだ。是れ即ち早雲の視た青年の夢であつたのである。實に後年此の夢の主は關八州を従へるに至つたのであつた。感激は青年の獨占物である。彼は益々人生の森深く分け入り遂に關八州を従へるに至つた。

今や我々同胞を憐れして居るのは第一に貿易問題にして、毎年輸入は超過し、日本帝國の金は益々外國に飛んで行くのである。第二は我々國民を苦しめて居る不景氣なるものであつて、是は云ふまでもなくあらゆる階級に暴威を逞しうして居る。之を以て之を考ふる時に我々は悚然として憂慮を禁ずること能はざると同時に大いに自重しなければならぬのである。來らんとする新しき社會は今日の若き青年の獨占到歸するのである。そして、その時には大いなる活社會に立つて活躍し以て帝

國の危期を救ふのが我々青年の本務と云はなければならぬ。

之は要するに青年早雲の見たる如く、我々は今の内に何か或物を捕へなければならぬ。或る曙光を見出して、其れに向つて努力し、以て我々同胞のために一身を捧げそして君恩の萬分の一なりとも報いなければならぬ。

我々が耳をすまます時、何處からともなく聞えて來るものがある。之が我々の奮勵を促へてやまぬものである。我々が机の前に靜坐默想する時必ず我々をあるものに導かんとするものがある。

吾人は一刻も早くこれに眼覺め意氣發洩として自己の行路に向つて、君國のため自由の行動を試みなければならぬ。

失意の友を慰むる手紙

四B 郭 少 三

友よ、君は雄々しい戦士である。勝つても敗けても君は雄々しい戦士である。勝つ事があつても敗ける事は絶対に無い。君には實力がある、君には到る處に敵が無い筈だ。

かくまで君を信じて居た僕が君の失敗の報に接した時、どんなに驚いたであらうか。僕は或は試験官の誤りでは無いかとまで疑つたのである。

併し友よ、君は決して悲觀するには及ばぬ。只一回の失敗で吾人の才能人物が知られるものではない。世の中には君の如き學才を有して居ながらも、而も失敗するものが到る處に有るのである。而し彼等の中には夫の好運なる成功者の知らざる暗黒面を見せつけられ、體驗せしめられ、そしてその刺戟によつて尙一層勉勵し、將來此の活社會に大雄飛大發展せんとする原動力を涵養して遂に一大光明の彼岸に達し、月桂冠を得る事が出來たものも少からずである。實に吾々は只一回の失敗によりて左右せらるゝに非ざる事、また言をまたさう次第である。峨々たるアルプスも不撓不屈なナポレオンの前には全く一つの小丘に過ぎなかつたではないか。吾々は吾々の決心と努力とによつて如何なる事をもなし得るのである。勿論その間には、或は一二回の蹉躓が生ずる事もあるであらうが。

嗚呼友よ、君は失敗した。而し失敗した君は決して世の落伍者だとは云へぬ。どうか自重して呉れ。そしてもう一年我慢して呉

れ。來年にはきつと會稽の恥を雪いで呉れ。そして彼等倅僥によつて成功した徒輩を恥しめて呉れ。來年、來年からは君の天下で
す。池中の蛟龍よ、何卒自重して呉れ。では體を大切に、さようなら。

吾が故郷

四B 百瀬 泰男

峻嶺重りて全土山嶽をなせるが吾が故郷長野縣である。

日本アルプスの連峯は四季白雪を戴いて莊嚴雄大なる姿は毎夏帝都の學生を招來せしめて居る。樹木鬱蒼たる木層の密林は良材に富み未だ斧鉞を加へられざる場所も無數にある。其の密林山嶽の間を縫うて清流は信濃川をなし、木屑、千曲、天龍の諸川を形成して縣民を清淨に導いて居る。大自然の極美は常に其處に住むものをして無垢純真ならしめる。吾が長野縣は自然の極美に全土は抱擁されると云ふも決して過言でない。清淨に活き無垢純真に活動するものは正義を愛し又努力を愛好する。けに長野は舊關に滿ち努力に漲つて居る。其れは最近に於ける長野の大發展を來たした。試に見よ、教育と云ひ、産業と云ひ、他縣に其の頭角を表はして居るではないか。

普通教育の如き東京を除けば他に及ぶものはない。教育の發達は其の民の向上進歩を助長せしめて生糸の生産高にせよ、將た又酒、味噌に至るまで實に見上げたものである。長野が鉞を入れる平野少きに關はらず主食米の自給自足をなして居られるのは一つに農業に科學を利用して生産を大ならしむるに苦心したからである。懐古せば偉人佐久間象山は此處に生れ此處に育つた。其して古來如何に多くの俊傑が此の國、此の山、此の水に育まれた事であらう。自分は故郷として此の偉大なる縣を有するを誇とする。

我が故郷

四C 深谷 一夫

春去り夏來り秋になつて冬が來る、此の四季の變遷につれて故郷に對しての懐かしさがある。又其の懐かしさは遠ければ益々其の

度を増し、時経れば益々其の多きを増すものである。まして他國にあるものは尙更のこころである。私等は同じ日本の國に於て數十里隔つてさへ、此の汚れた空氣の充ちた四季の眺めを思ふに任せない東京と對照して、故郷に對し一段の懐しさを感ずるのである。春になれば緑の廣い野に、蝶が舞ひ鳥が唄ひ花が笑ふ。其處で楽しく遊んだ事を思ひ、秋になれば廣い稻田が一齊に黄色に變つて群雀の飛ぶのに、時々銃聲が聞えたりする。夜になればあたりはしんみりと夜のまばりに閉されて、遠くの灯が見えかくれする其の折々につれて種々の事柄があり、ミ隅裡に書き出されて來て何とも云へぬ戀しい感じがする。

私の故郷は筑波山下の北條と云ふ町ですが、町とは云ふもの、甚だ小さい、そして一家の如くに楽しく町の人々は日々を送るこ
とが出来て、其處には父母があり兄弟がある。又遠き祖先代々の靈もそこに宿つて居る。町の人々は皆私を知つて居り私は又町の
人々を知つて居る。古い友達はその處に何時でも私等の歸省を歓迎して呉る。全く其處は全世界に二つと無い私の家であり、樂園で
ある。

秋雨

五A 福島 宣三

春雨の山は静かだつた

私の焦慮を満たして、

私の心も静かだつた

「愁しや秋雨 烟を消して……」

いつ晴れるのか知れない 山のこの霧

それでも、

それでも降る雨が

私はそれで満足してゐた。

なほ 心いらだてる この日頃

山は燃えてゐる紅葉の烟に

燃えて、沸るに まかさうか。

増埒は沸つて居る まつかに

文 苑

一六五

或る一日

五B 岸本久康

お茶で名高い宇治へついて今日で一週間になる。宇治川の游泳や規取りにも倦きて持てあました自分の體を横にしてつまらぬ事を考へて居ると、従弟が誘ひ出すので散歩に行く氣になる。

何處へ行くのか分らないが、兎に角尾いて行くに、宇治から京阪電車に乗り八幡を下りる。始めて男山八幡へ行くのだなど云ふ事が解る。既に日は傾きかけてゐる頃であつたが、阪でもない階段でもない九十九折の道を登つて行くのは容易でない。社の前まで来ると「皇族下乗」を書いた制札が立てられてあるのを見て恐縮する。思つたよりも眺めが良い。極みない曠野の中に、近くは伏見の御陵の邊を望み、遠くは比叡の峰がおぼろげな姿を現はして居る。

やがて眺めに飽いて降つて麓の茶屋に憩ふ。名物の餅をつまむ折、仁和寺にありける法師の逸話も思ひ出されてをかしかつたが自分には先達のあつた事を喜ぶ。

夕陽

五〇 最上修二

朝陽は我々に活動的な赫々たる光明を與へそして刺戟するならば、夕陽は實に莊嚴なる靜寂さがある。

僕の祖母は神佛の信仰家であつたと同様に、お日様の信仰家であつた。朝食前には必らずお線香や蠟燭などを灯されて神佛とおてんとう様（祖母はかう呼んだ）を拜まれた。我々はおてんとう様のお蔭で生活してゐる事が出来るのだ。世の中で何が有難いと云つて、天子様とおてんとう様程有難いものは無いと云つて居た。それだから夕食前にも神佛は勿論夕陽も拜んでからでなければ飯は食べなかつた。殊に夕陽には佛の御來光と云つて有難がつて所謂隨喜の涙を流して何か口にもじ／＼云はれた。朝にはその日の無事息災を祈り夕にはその御禮の爲だと幼な心に記憶してゐる。

日足の早い晩秋のその暮方は、殊にせはしく迫つて来る。祖母死してから数年になるが、今も尙祖母の拜んだ夕陽はあの莊嚴な光を我等に投ずる。祖母と二人でお縁側からよく拜んだものだ。クル／＼と日の廻轉が見える様な氣がした。紫となりうす赤みを帯びて赤となり――ぢつと見つめて居るのは堪えられなかつた。

夕陽の映える代々木の原を散歩して、神宮の森の彼方に迫る夕闇と共に冷氣が身にしみる晩秋初冬の原に佇んで枯れた芝生に映える夕陽、ふと足下を見れば其處には霜の爲めにいためられた羽の赤い蜻蛉がバタ／＼してゐた。よく幼年時代にした様に兩手の中に入れて息を吹きかけた。そして空に放つた。それでも蜻蛉は飛べなかつた。そして地上に落ちた。餘りのいぢらしさに、僕は又蜻蛉を捕へた。前よりも一層生氣を失つて居た。僕は蜻蛉に對してすまない事をしたと思つた。彼はまさに斷末魔の苦にあつた。ふと見ると森の彼方に最早日は没せん／＼してゐる。祖母を憶ひ出した。そして夕陽を拜んだ。僕は茫然として蜻蛉の屍を持つたまま夕闇せまる原の中に立ち竦んだ。

小雀と穹窿

五〇 池田均

秋さびて、樹々の病葉がほごりほとり寂滅の夕を呼ぶ頃、私は黒マントの影を引いて、生垣の細い小徑を俯向き膝ちに歩いて居た。眞紅な眞紅な秋の落陽をからだ一杯にあびながら。

小徑の兩側に虐けられた枯草も、小石も、唯靜かに沈黙して、冬と云ふ一時的な死の環境への不遠慮な行路を、まじまじと凝視して居る。内心、感病な心細さに顫えながら。しかし今私はそれ處では無い。デリケートな自然のセンチメンタリズムに心を引かれる程、私は落ち着いては居られないのだ。

十五と云ふ年が大部分の少年に取つての心の激變期である様に、私に取つては此の秋が、此の一日が、いゝえ此の夕のひと時が私の心に消すことの出来ない大きな焼印を落してしまつたのだ。

それは今朝の話、晴れた日曜の朝、陽はもう中天に登つて、私の部屋の小さな窓は早く口を開いて、朝の空氣を吸ひたがつて居た。早々に玻璃戸を開けると、これは又驚くぢやあないか。一羽の小雀がバサ／＼とテーブルの上に轉けこんで来たのだ。見ると

日大便り

第一回卒業生 権 門 子

中學校が江東の新天地にあの高層樓の新築と共に移り行つてから、早くも二ヶ年は過ぎてしまひました。

三崎町の假校舎に、輝かしい希望を抱き、華かな理想を夢み致々として研學の道にいそしんでゐる我々の大學生活、その一端をなりとお知らせしたひと筆を執ることに致しました。

朝霜のまだ白々と陽に輝いてゐる午前八時から、風の吹き荒む夜の十時頃まで、晝夜を通しての大學園に通ふ一萬の學徒の中、本學普通部たる日大中よりえり拔きの學生がざつと五百人はゐることでありませう。

護國寺の大學豫科、駿河臺の醫科齒科を除いた三崎町の本部だけでも二三百人は確かにゐる筈です。

然しその總べての人々の一々の消息は、到底調べられもしませんし、書き切れもしませんから、極く代表的な先輩諸兄の活躍を紹介して、日大生活の大體を窺知して戴きたいと思ひます。

日大の各學生集會に殆んどその雷合(?)を轟かして、誰知らぬ者ない迄の人氣者市ちやんで通る三井市太郎君も、今年で目出度く御卒業の上商學士様になられる筈です。目下新聞學會を

初め多くの各團體の爲に最後の活躍を試みてゐられます。

同じく今年卒業される學士連に、進藤内男君や奥田信雄君、中學校の諸君にはおなじみ深い人達があることは特筆大書すべきことであります。

山羊髯の小父さん然たる百々美之助君も、今年は多分法科を卒業される筈です。相撲部の藤齋永明君も新聞學會の詩人林君も卒業されてしまひます。

卒業される先輩諸兄はまだ多く多いのですが、この位にして後に残る元氣一杯の少壯連には、端艇部の小山君、新州學會の船崎(舊姓星)君、法科の友成君商科の井上君、それに櫻友會の中堅を控えてゐます。

都としての活躍に、いつも我々同窓がその中堅となつてゐることは前記新聞學會に於ても知られる通りであります。其他雄辯會の大上義人君、相撲部の齋藤永明君など、何れも一騎當千の士であります。

又映畫會や劇研究會も既記の人々を中心に盛況を極めてゐることは勿論で、各方面に私達は知友の發展を見ることが出来るのであります。

かうして私共の恵まれた大學生活は續けられてゐるのであります。更によろこばしき事實で最近私共を包んでくれます。

それは、三崎町の本館築が花の四月頃落成すると云ふことであります。

今年卒業されて行く先輩には理想的な設備の遺憾ない新校舎で學習出来なくて小々お氣の毒ではあります。あの寒風の漏る、假學舎で何等不平もなく、たゞ々々學究の爲に忍んで下さつたことに對して、私共は心より敬意を表さねばなりません。終りに臨んで日大中より日大への同窓生は、日大櫻友會と云ふものを作り、結束した運動を爲しつゝあるもので、櫻友會員たるものが即ち日大中の出身者であることを語る標準にまで完成したいと私共は努力してゐることを申上げて置きます。

(大正一五、一、二〇)

豫科、醫科、齒科の通信編輯締切日までに間に合はなかつた爲本誌に掲載出来なかつたことをお詫びします。編輯者

中大だより

第四回卒業生 中田秀治郎

私は去る拾一月八日母校に開かれた同窓會に出席し諸先生先輩並びに同窓の諸君と親睦を圖る事の出来たことを深く感謝するものであります。席上恩師萩原先生より卒業生は近況を報告せよとの御話を伺ひました。

私は目下中央大學商學部に在學してゐるものであります。が、簡単に中央大學の現状を御報告致したいと思ひます。我中央大

學は古い歴史を有し堅固な基の下に立つて既に多數の人材を社會に出してゐるのであります。同大學は明治十八年の創立に係り、爾來四十年質實剛健を以て根本精神とし、往年大學令の公布されますや、直ちに同令に依る大學となり、法律學經濟學商學の三學科綜合制で三年の大學豫科を附設し更に大學院を設けて居ります。其の授業科目は其の取捨配置等實に現代の最善を盡し、卒業生中から年々多數の國家試験合格者を出し、私學中に於て一頭地を抽いて居ります。圖書館は工學博士阿部美樹志氏の設計に依り、而震防火の設備をした鐵筋コンクリート三百余坪のもので、大震災の猛火の中にあつても依然として残存したのであります。同圖書館には本邦の書籍を始めは勿論英米佛獨各國に亘つて法律經濟商業に關する書籍を網羅し、奥田文庫、末松文庫、菊地文庫、高橋文庫等内外古今の書籍三萬余巻を蔵すといふ。

尙米國富豪カーネギー財團から其の出版に係す書籍全部の寄贈をうけ、その内容は一層充實してゐる。

出身者は行政官三百三十余名、司法官三百七十余名其他多數の辯護士實業家あり、創立以來出身者一萬人を超え、花井卓藏(法博)林頼三郎(法博)青木信光(貴議)故横田千之助、河野秀男、太田黒英(檢事)、執行軌正、卜部喜太郎(辯護士)、堀江專一郎(法博)、高窪喜八郎(法博)田中文藏(實業家)、森本邦次郎、二神駿吉(日本肥料専務)、指田義雄(商業會議所會頭)、若尾璋

八(實業家)、等名聲錚々たる士多し。幹部としては學長岡野敬治郎博士を始め、理事として馬場憲治博士、馬場鉄一博士、佐藤正之氏あり、監事として花井卓藏博士があり、何れも當代の偉才である。

法學部は現在英法學部と獨法學部とに分れてゐる。教授講師も他大學に類稀なる斯界の大家を網羅してゐる。昨年度高等試験委員にして法學部に講ぜらるゝ教授講師は民法の穂積博士、二上博士、刑法の泉二博士國際法の渡藤博士、財政學の土が博士、刑訴の小野學士或は美濃部博士、牧野博士、吾孫子博士等の多きに上つて居り、ドクトル・ステルンベルヒ氏が三年に法理學を講ぜられ、法律思想家としての權威牧野博士が(最近の法律思想)を、又我國勞働法の研究者としての令名高き孫田氏の勞働法、昨秋獨逸伯林大學及ゲツチンゲン大學に民法と法理學とを研鑽されて歸朝された柴田教授の「自然法に就て」等の科外講義もある。商學部は創立後日尙淺く、大正元年第一回卒業生を出し、未だ充分な設備を整へるに至らないが、主なる教授講師を擧ぐれば憲法を美濃部博士、行政法を鳥村他三郎氏、保險論の商學博士石川文吾氏、三浦博士、工業通論の松浦工學博士、商工經營學の馬場、橋本先生、商業地理の田中子爵、商業實務の橋本、太田、和田、柳樂、川村、生田の諸先生、財政學を馬場鉄一博士、商業政策を山内、橋崎先生、農業政策を八木澤、宮川先生、民法を御川、及川、齋藤、吉田の諸先生、商

業英語は生出、高谷先生、英語及獨逸語は千葉、長崎、横村、岡倉熊野の諸先生、支那語を宮越先生、其他日本銀行調査課長堀越鐵藏氏の「本邦の金融」大館氏の「歐米の財政と金融」山内先生「經濟時事問題」大館氏の「會計法」等の科外講義もある。尙昨多商科第一回實學生松浦教授を歐洲に送りました。吾商學部の最も特徴とする所は研究科を設け各學生は専門的知識と經驗を得るため自由に研究題目を撰擇して太田、橋本、松浦、大塚、和田諸教授擔當指導の下に各自の研究を練磨して毎時その報告を提出するのである。

各教授は該博なる學識と豐富なる經驗を以て、理論と實際を授けられつゝあります。此制度こそ、他に語るべき特徴の一つであつて、學生はこれに依つて確實なる自分の行く先々指示され競争場裡に立つて勝利の榮冠を獲捕し得るのである。現在の商學部學生は人数の少ないために眞に和氣藪々の裡に學業を勵んで居ります。既に法律萬能時代の過ぎ去つた今日吾商學部の異常の發達は大いに吾々を喜悅させ意を強うせしめるものである。

次に吾中央大學學友會内部の概要を記せば學藝部長は花井博士で法學會政治學會經濟學會商學會英語學會辯論會(辯論機關)あり體育部長は馬場鉄一博士にして庭球會競走會水泳會柔道會劍道會角力會蹴球會乗馬會等あり尙此の外に雜誌部あり編輯長は堀竹雄先生で各級から一名宛の雜誌部委員を選出し學友

一千の學友によす

在高一 竹ノ家 進

母校を去りて既に四星霜、其一步を江東に運ぶ事密ならずと雖、懐想の情豈疎ならんや。

若問偶々櫻花の縁繞せる校徽を戴く青年に會せば、屋島の愛久しき事弟妹に對するが如し。

今や母校居を江東にトし、輪奐の美成り、三層樓巍々乎とし聲ゆ、蓋し屋宇大鵬を容るゝに恥しからざるを感ず。其の外形に於て壯麗を極むと雖、其の内容に於て果して如何。

夫れ病は安んずるに革り事は愈るに敗る。

居治不寧亂は武士の規矩たり、我邦維新創業以來泰平五十年風俗漸く頹廢し、道義將に地を掃はんとし、殊に近來學生間に於て其の徳操甚だ淺薄、放縱、横肆徒らに惰眠を貪る者多し。

しかも思想界は滔々乎として未だ歸結する處計り知るべからず新舊思想の鬭争日に酣となり、改造の聲隨所に叫ばれ、社會各種の新運動正に上下を通じて勃發する事未だ此時より劇甚なるはなし。而して浮薄の徒之が追従を是れ事とし、西歐文明謳歌を以て己れの痼疾と自負す。

エマーソン曰く「模倣は自殺なり」と。然り模倣を専らとする者に於て焉ぞん人に先進するを得んや。

會雜誌を年二回發行して居ります。私も今年雜誌部委員となり來る十二月に雜誌を發行致します。柔道部は古き歴史を榮譽ある過去を有し現在四段四名三段十名二段十名初段二十余名總て有段者實に五十余名の勇士を網羅し斯道に其覇を唱へて参りました。又競走部は主將に岡本喜作君(法學部一年)マネージャー湯本幸一君(商學部三年)で、選手としては岡本喜作君(ジャンプ)田代菊之助君(長距離)高橋清二君(長距離)湯本幸一君(同)平野太郎七君(同)宮本源太郎君(同)津島仙太郎君(中距離)の諸君で去る二月二十二日の東京日々新聞社後援の都下大學内濠五週驛傳競走には、大降雪中に九段坂上でスタートし吾大學チームは最初よりトップをきり二着三隔段の差を以て優勝しました。一時間五十九分五秒。又四月十一日に舉行された關東陸上競技選手權大會兼關東選手權競技大會第一會豫選會に於て田代菊之助君は五千米一着となり十六分十秒の日本新記録を作りました。

以上は私の在學して居る學校の近況の一端を茲に披瀝し御報告した次第であります。若し御参考になる點がありますならば大いに光榮とする所でありませう。終に母校の隆盛と發展を祝福して擲筆致します。

雖然余輩は從らに泰西文化を卑下し、排斥するものにあらずその長所を取りて己れの短所を補ふは賢者の道なり。現狀果して然るか。余輩淺學未だ之を肯定する事象を見聞せず。斯くの如き狀態にして朱髯碧眼の異人と輪贏を決せんとする。正に木に縁りて魚を求むるに異る所以のもの幾ど希なり。

否幼冲と嘲けらるるに至らん。其の不面目や以て比喩すべきものなからん。諸君にして斯の如き鄙陋の地に甘んぜんとするや。若し國家將來を雙肩に擔ふべき諸君にして然りとせば、焉んぞ木鐸の任を何人に委するを得んや。

而も三千年咲き匂へる我國粹の精華を汚辱し長くも先帝の吾人に賜はれる教育勅語に悖る事大なり。

其の罪や斷じて許容すべからず。故に今にして心を致し此の怒濤狂亂を既倒に回さずんば悔を千載に貽すに至らん。

蓋し一高夙に之を憂ひ自治制を敷くもの故なきにあらず。夫れ世界を治めんを欲するものは先づ國を治む。國を始めんと欲するものに先づ己れを治むるに初まる。自治精神即ち之にしてその精神は人をして自重獨立の念を起し自ら智徳を練磨し精神を修養し身軀を鍛練せしむる謂にして、其の目的は品性の陶冶人格の確立に在り。換言せば各自能く其の自己に屬する萬般の事務を自己に依り處理し以て各自眞に國士たるの素養を築くに在り。

蓋し陽春の候百花一時に發し各自の千紫萬紅を競ひ人をして

眩耀恍惚たらしむると雖、されど記せよ。

斯の花は實に秋霜冬雪の間に養ひ得たるものたるを。されば世の混沌愛ふるに足らず。否寧ろこは吾人の活動を最も價値あらしむるものたらん。

此の中において自治精神に自覺し、砥礪徳義を進修し誓以て力を制し、慧以て虚に乗じて先後相拯ひ、左右相助けば其の果や如何。

風を起すか、雲を呼ぶか。斯の如くんば世論に徒らに附和することなく能く西歐文明を醇化し、新日本文明の光彩を萬里の城に輝かし我邦をして炳こして日星の如く千百載、率として抜く所なからしむるに至らん。

是れ上は聖旨に奉答し得る所、下は門閥に倚り吾人の成業の日を待つ父母の恩愛に報ひ得る所なり。

諸君自ら治むるに意なきか。

敢て一文を草し諸君の考察を煩はさん。

(大正十五年一月五日稿)

受験準備の諸君へ

松本高等學校 富岡 博

私は一昨年二月四年修了の身を以て静岡高等學校に受験し

した。然し見事敗戦の憂を見ました。其當時は豫想點も四七〇點近くあるから決して落ち様とは思つて居なかつたので、餘計に失望の程を増し、一ヶ月位と云ふものは家の者ども碌に口をきかなかつたのです。其結果は唯先生の採點の不當を怒つて居ました。然し私は今考へて見ると、余り淺薄な自分の考へを自ら笑はざるを得ないので。去年は豫想點が五八〇點、之も實に危いものですが、兎に角一人前白線を附ける事が出来たのです。

過去二ヶ年間の自分の經驗に依つて御注意迄に少しばかり述べさせて頂きたい。元來我が日大中は高校へ入學するのには余り良い成績でない事は既に充分御承知の事と思ひます。毎年多數の受験生の内其十分の一位とは、實に凶念至極な事ではありませんか。入學率の悪いのは學校の教育の仕方にも依るが、受験生の緊張に大いに原因する事は勿論なのであります。日大中の生命は今諸君の掌中に固く握られて居る事を自覺して、確實に一步一步進んで頂きたい。

試験も眼前に迫つて居る以上、一分一秒たりとも貴い時間の空費は許されぬ。如何に此の短時間を利用するか云ふ事が最も大切な急務であります。既に諸君は全科目を一回充分に終へられた事でせう。暗記物の未だ終らぬ人は、之から専心にやる必要がある、その方法としては總て教科書に依り一通り終つ

たならば、學校の先生に全般に五つて問題を作つて貰ひ、それに依り一度復習する事がよいと思ふ。

又既に全科目を一通り終へられた人は之からは一日一科目平均に全部復習するのが大切である。例へば數學に於ては、「因數分解の重要公式、分數方程式の要項、無理方程式の要項、實數虚數、無理數の性質、根と係數との關係、極大極小、級數の公式、指數定理の擴張」など今一度自分の信じた参考書に依り、理解を確かにして置く事が殊に必要である。

よく受験雜誌等に試験前一週間は少食であり、書物は余り讀まぬ方がよいと云つて居るが、少食である事は試験前一週間位ではだめである。日頃から心掛けて居なければならぬが、余り讀むなと云ふのは既に充分準備の出来た人の事で、未だそれ程に行かぬ人は必ずしもそんな事をする必要はない。度を過ぎぬ様に頑張つてよいと思ふ。唯それだけの頑張りで頭がふらふらして受験出来ぬと云ふ様な貧弱な頭の持主は思ひ止まつたが寧ろ得策だらうと思はれる。

愈々試験前日となつたら朝は六時頃起きて、朝食前一時間、食後二時間、それが終つたら丁度十二時になる様に、間に休みを入れたならば理想的であらう。午後は一時から三時一時間休一四時から夕食迄、夕食後は一時間半位の散歩をしてエネルギーを蓄へればよい。散歩の場所にはなるべく閑靜な處を選ぶ事は勿論である。又氣を落附けるには大聲で詩でも吟じるの

が最も効果がある。故、後は二時間位で早く寝ることにし、床の中では一切本を讀まぬ様にしなければならぬ。寝る前に必づ鉛筆を一打位削つて置く事である。試験場で落附く事の出来ない人は五分の損をしなければならぬ。此の激しい競争試験に五分も損をしたらとてもバツスしさうにもない。だから日頃から場所馴れて置く事が最も必要である。それには四年の人も、「自分は未だ四年なんだからまあ……」なんぞ云はずに進んで受けて見る。勿論這入うなんかと思つて受けるのではない。そんな大きい望を持たず「うまくいつたら這入れるかな」位でたぐさん。そうすれば落ちても猫イラズのお世話になる必要はない。又模擬試験を受けるのもよい。

- 私の讀んだ参考書中よと思ふものは、
- 小野圭次郎 最新研究英文の解釋
- 通信社 受験英語講座
- 日進社 英文和譯模範問題集
- 藤森 良藏 代數考へ方上下
- 吉岡 平松 幾何學重要問題の解法新研究
- 松村定次郎 代數難問集
- 塚本 哲三 漢文考へ方解き方
- 同右 國文考へ方解き方
- 淡中 濟 廣觀數學問題集
- 川邊要之助 新選物理學提要 上

- 同右 新選化學提要 下
- 杉山助之進 受験參考東洋史
- 諏訪徳太郎 最も要領を得たる外國地理
- 板澤 武雄 修平日本歴史受験の研究
- 以上

桐生高工だより

桐生高工 長尾 次郎

拜啓
その後久しく御無音に打過ぎました。秋の名残りも次第々々その影を消して参る様な氣が致します。その後諸先生には相變らず御精勵の事と御察し致します。我が敬愛する後輩諸君も夫々高等學校に人學準備の爲さぞかし忙しい事と御察し致します。先生誠に借越がましい事では御座いますが來年は我が桐生高工に志す者の多い様御進め下さい。本校は元來あまり——近頃は追ひ々々世の所謂識者間には存在を認められる様になりましたが——世間に知られて居りませんのでした。それは所在地が東京高工の精力範圍つまりその圈内から出てるない爲だと思ひます。然し校長初め諸教授の御高説に據れば決して他校に劣る點は

無いと信じます。

情實的にも——時折上級學校には此の事實が入學志願者の頭を悩まします——本校校長は全國高工校長會議の委員長たる事七年、又高工校長中博士號所有は本校と東京、大阪兩高工の三校長に過ぎないのであります。且先般確定された高工入學試験改正案も實に本校教授會議の協議致した議案が通過したものであります。斯く内容實質に於て充實せる校の様子を一寸述べて見たいと思ひます。本校の主眼と致します點は元來染織の二方面でありましたが先般の歐洲大戰と近代我國情とに鑑み、大正八年應用化學科を設けて在來の桐生高等染織學校を桐生高等工業學校と改正致し翌々年應用化學科を油脂科及び纖維素科とに分科致し、前者に於ては燃料方面を、後者に於ては製紙及び人絹製造に心を用ひて居る次第で御座います。此の實際的方面に於て即ち工業技術者を養成せしめんとする點に於ては全く他に比を見ぬ所であります。近來斯くの如く異狀の發展を來した本校は大正十六年には新たに機械科を創設する次第となりました。先生あまり我田引水のな宣傳となりました。今や世界の大勢は工業方面に動きましました。曰く燃料問題、曰く工業智識普及問題と。

此の特色ある本校に來年こそは續々後輩諸君の御受験下さる事を御願ひ申します。色々妄言を述べました。御貴重な時間を空費せしめた罪の重大なるを呉れども御詫び致します。

舊職員一覽 (退職順)

退職年	就職年	職名	受持學科	原籍	姓名
大正四年	大正四年	書記	國漢	秋田	藤丸 茂
二、一	二、四	教諭	國漢	東京	本田 退庵
三、三	二、四	同	博物	福岡	吉田 貞雄
三、三	二、四	同	地歴	徳島	新居 次郎
三、三	二、四	同	英語	青森	葛西 又次郎
三、六	三、四	同	地歴	岐阜	金子 安善之助
五、五	三、四	同	數學	埼玉	黒須 康之助
五、八	五、四	同	英語	埼玉	黒須 康之助
五、九	五、四	講師	英語	英國	ヒューズ
五、一二	五、四	教諭	博物	群馬	中澤 吉之助
六、三	五、九	講師	英語	群馬	中澤 吉之助
六、三	四、九	教諭	國漢	靜岡	長倉 正次郎
六、五	二、四	同	習英	兵庫	鈴木 勉藏
六、八	二、四	同	博物	福岡	本多 彦九郎

九	九	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	七	七	七	七	六	六	六	
二	一	〇	九	九	八	八	七	六	六	四	三	三	三	二	九	四	三	一	九	
四	五	八	五	七	六	七	五	二	八	六	三	二	六	六	五	六	五	二	四	二
四	九	九	六	四	四	四	九	四	二	四	五	四	四	四	九	九	四	四	〇	四
教諭	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
英語	英語	博物	地歴	數學	英語	博物	物理	國語	國語	國語	英語	數學	國語	國語	國語	博物	博物	國語	國語	國語
岩	印	山	長	千	廣	岩	岡	島	東	新	岡	山	口	木	新	愛	兵	和	島	東
手	度	梨	野	葉	島	手	山	根	京	鴻	山	口	梅	貢	吉	今	駒	石	石	東
大	島	ミ	石	今	仁	陶	山	佐	廣	合	石	田	中	地	星	貫	完	田	田	京
島	隆	ス	原	井	科	山	亮	藤	平	志	田	吉	寬	慎	一	一	道	兵	幸	東
隆	吉	ホ	初	登	重	亮	公	左	左	志	吉	一	一	一	一	一	一	五	太	東
吉	吉	チ	太	志	喜	男	務	郎	平	惠	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一

一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	九	九	九	九	九	九	九	
二	二	一	〇	八	五	五	四	三	三	三	三	三	二	一	〇	五	四	三	三	
一	〇	八	〇	六	四	四	九	八	七	七	四	七	六	八	三	四	二	八	八	
四	一	〇	四	四	一	九	〇	九	九	九	四	九	六	九	四	四	四	四	五	
同	教諭	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
數學	博物	數學	國語	歷史	修身	英語	數學	歷史	漢文	數學	國語	國語	習字	體操	數學	英語	漢文	國語	國語	
東	取	網	沖	東	東	德	長	野	長	野	長	山	山	山	新	東	大	愛	神	島
京	中	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
鈴	中	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
木	路	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
益	正	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
太	義	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野
郎	義	網	津	京	京	島	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野	野

現職員現住所

(大正十四年十二月現在)

二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
體操	化學	博物	博物	博物	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語
本	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
今	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝	朝
福	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島	島
吉	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮
三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

小石川區西原町一ノ三	市外東鴨町一ノ二四	市外代々木初臺四九三	市外代々木中山谷一六八	市外中野町谷戸二四三八(小田方)	牛込區北町三七	本郷區眞砂町三六ノ一七號	小石川區戸崎町六五	川越市二番町	市外西巢鴨町池袋一、一二五	小石川區原町一〇	牛込區餘丁町八八	栃木縣足利郡筑波村	小石川區大塚仲町四一	小石川區原町一六	市外東大久保一八七	市外蒲田町新宿六〇〇	市外中野町谷戸二四六五	市外代々木初臺五七七	市外西巢鴨町宮仲二六三三五甲
校長 荒川 五郎	幹事 加納 金助	山内 計作	西村 廣次郎	堀内 平治郎	萩原 太平治	平澤 文吉	佐々木 英夫	波島 長五郎	足利 徹運	永井 正一	新井 利一	保坂 三郎	廣瀬 渡	橋村 憲五郎	浦野 繁一	櫻井 純孝	酒井 歌彦	丸山 仲	

現職員現住所

市外西巢鴨町新田八七七
四谷区内藤町一番地六六號
四谷区内藤町一番地四七號
千葉縣市川町真間下一三二
千葉縣市川町砂河原九〇六
市外西巢鴨町池袋四八四
本郷區駒込林町一五二
千葉縣船橋町二丁目
日本橋區本石町二ノ一
市外蒲田町新宿五一五
牛込區新小川町二ノ四
千葉縣八幡町菅野市坪
横濱市根岸町柏葉橋前
四谷區新宿三ノ一七
市外西巢鴨町池袋一〇六〇
本郷區坂下町二二〇

陸軍騎兵大尉
(劍道)
(柔道)

林 義雄
原 顯一
武内 猛夫
中村 清吉
生明 梅三郎
田 中長男
吉 田 博
田 中 準
葛 田 子之三
加 川 滿篤
加 藤 貞次郎
海 鹽 錦衛
呼 森 速
富 田 光公
白 土 留彦
伊 藤 四男

第五學年生徒氏名

A組 高津 常吉 八木原光治 吉川 東雲
増淵 梅夫 仙石 良郎 藤 秋七

(大正十五年一月現在) (順序不同)

林 博
道明 敏雄
山田 三郎
野口 武雄
門田 義春
大森直次郎
下村 義郎
林 貞雄
根本 剛
大島 嶺一
竹森 清隆
赤松 立達
關谷 薫
村山 涌秋
足立 英雄
鈴木 安世
八巻 山強
齋藤 武

新田 英司
松平 勝敏
松本英八郎
戸塚 孝之
矢野 實
平沼 正治
福島 宣三
棚田 太吉
岩倉 幹夫
飯高 健夫
菱木 三郎
江中 健三
沼間 富彦
齋藤 東伍
都築 利衛
深澤 太郎
安部 忠
江田 善作

菅原 精一
鈴木 二郎
板倉長一郎
山本 正雄
皆川 四郎
清水 正之
菅 政 雄
杉山 榮一
澁川三千雄
川瀬榮之進
谷山 浩三
志村政太郎
橋本 哲郎
栗生 昌直
武市 靜一
森 勇彦
武藤 貞夫

B組

飯田 博 山口 瀧尾 光
野田 靜雄 吉田 彌雄
櫻井平八郎 佐藤 秀雄
鹽澤 照信 中村治三郎
中村 米人 梅宮 甫
三宅 英夫 岩本 久康
水堤 勇一 大久保一夫
宮田 弘 池田 重雄
伊藤 信義 福富 八郎
高橋 高三 上代 修三
中村 朝樹 大島 正安
中村 美雄 浮谷 次郎
文松本 良雄 水谷平八郎
水谷 文彦 元山 重次郎
三浦 虎雄 戸村 貞雄
澤野 俊一 鷹見 嶺夫
波瀨 信武 望月 安雄
飯田 真次郎 山内三喜雄
佐藤 幸正 大竹信一郎
大手 篤 豊田 穰

岡野 登喜一
齋藤 久治
山腰 久道
福士 清
吉井 泰嗣
有賀 勝次
河野源一郎
原澤 雅雄
保 忠男
木村 隆三
岡部 巖夫
中村 魁

O組

野村 幹
末藤郡四郎
澁谷 亮一
佐藤三良太
加藤知八郎
七字 清英
板葉 吉松
島崎 重樹
荒澤 鉄二郎
増田 理平
長島三三雄
田中 正二
最上 修二
久保田宜男
黒瀬 潤二
板野 猛雄
鎌田 修
鈴木龜太郎
澤部 茂吉

淺野 武男
門脇 重雄
三好 晋
田口 傳藏
小田島信一
加納 次郎
池田 均
井上 八郎
太田 修一
三橋 靜雄
木村 晋
植原 眞記
寺田 熊助
佐 間勝博
篠原 友夫
植田 喜夫
野村 小二男
山根 松夫
谷 義夫

高崎 三郎
名倉喜久夫
日比谷 進
西山傳二郎
荒井 藤一
谷 信春
杉浦庫之助
若林 鐵中
原田 文雄
坂井 勝男
山田 一雄
三重野次郎
峰崎 新次
川崎 茂
岡澤 隆
吉川 慶篤
松下 鏡吉
小松 龜雄
北村 一郎

編輯部より

川田 敏雄 服部信二郎 小川 道郎
須藤 豊治 大野 耕三

大手 編輯部より

楽しみも苦しみも纏てを包んで一年が過ぎ去らうとして
思出探り神田の校舎をすてすてに、今年、此の側に長足の進
歩をなした各都の活気ある記事を満載してここに第十一巻を發
行するに至つた。

文藝は一十年の努力にもかかわらず、あまり振はない、實
際期待の三分の一にもならなかつた。
來年はぜひもつと盛んにしてみたいと思ふ。
諸先生の玉稿に對して厚く感謝いたします。
表紙の改良、内容の充實は毎年の計畫で、そして、毎年失
敗に終つてゐた。

本年は大分改良されたがまだ五十歩百歩である。
終りに委員各自の絶大なる御盡力を感謝いたします。
部長 荻原 八呼 藤先生
委員 福島 宣三、 山腰 久道、 宮中 村 魁、 島崎 重樹、
 藤井 雅均、 松崎 幸吉、 花岡 勝夫、 相島 彦彦、
 後田 俊田 芳一、 堂寺 利文、 具塚 實、 井川 正、
 松丸 貞雄、 山口 彌 一郎、

荒川校長は全國私立中等學校高等女學校の聯
盟たる全國中等學校聯合會幹事長に推薦せられ
たが、次いで又先きに開かれたる全國私立中等
學校の恩給財團たる協會の評議員會で於て、滿
場一致を以て、其の理事長に當選せられた。之
が亦本校の名譽である。
先頃浦郷先生が火災に罹られた。職員一同は
早速お見舞を差上げたが、生徒一同はそれを聞
き傳へて各組卒先の上、總額金九拾貳八圓餘錢
の獻金をして之を御見舞として差上げた。斯弟
の情まことに美しいことである。

大正十五年三月二日印刷
大正十五年三月五日發行
(非賣品)
東京外巢鴨町一ノ二四 加納 金助
東京市麹町區麹町四丁目廿一 塚原 豊
東京市麹町區麹町四丁目廿一 春陽印刷所
發行所 日本大學中學校校友會

川田 敏雄

服部信二郎

小川 道郎

須藤 豊治

大野 耕三

編輯部より

楽しみも苦しみも纏てを包んで一年が過ぎ去らうとしている。

思出深い神田の校舎をすててすでに二ヶ年、此の間に長足の進歩をなした各都の活氣ある記事を満載してここに第十一巻を發行するに至つた。

文藝は一ヶ年の努力にもかかわらず、あまり振はない、實際期待の三分の一にもならなかつた。

來年はぜひもつと盛んにしてみたいと思ふ。

諸先生の玉稿に對して厚く感謝いたします。

表紙の改良、内容の充實之は毎年の計畫で、そして、毎年失敗に終つてゐた。

本年は大分改良されたがまだ五十歩百歩である。

終りに委員各自の絶大なる御盡力を感謝いたします。

部長 荻原、畔蒜先生

委員 福島宣三、山腰久道、中村 魁、島崎重樹、

池田 均、松崎幸吉、花岡勝夫、相島雅彦、

後田芳一、堂寺利文、貝塚 實、井川 正、

松丸久雄、山口彌一郎、

荒川校長は全國私立中等學校高等女學校の聯盟たる全國中等學校聯合會幹事長に推薦せられたが、次いで又先きに開かれたる全國私立中等學校の恩給財團たる協會の評議員會で於て、滿場一致を以て、其の理事長に當選せられた。之が亦我校の名譽である。

先頃浦郷先生が火災に罹られた。職員一同は早速お見舞を差上げたが、生徒一同はそれを聞き傳へて各組卒先の上、總額金九拾貳八圓拾錢の贈金をして之を御見舞として差上げた。師弟の情まことに美しいことである。

大正十五年三月二日印刷
大正十五年三月五日發行

(非賣品)

編纂者

東京外巢鴨町一ノ二四 加納 金助

印刷人

東京市麹町區麹町四丁目廿一 塚原 豊

印刷所

東京市麹町區麹町四丁目廿一 春陽印刷所

發行所

日本大學中學校校友會

終

